

# 2024 入間市鳥類分布調査報告書

2024 年実施

2025年9月

入間市鳥類分布調査 調査会

入間市環境経済部農業振興課

## はじめに

柳澤紀夫

人と鳥の関係はとても密接です。野生の鳥を狩るということに始まり、それを食料にする時代が永く続きました。この関係は今も続けており、その途中からは鳥を飼育・改良して食料にしてきました。ニワトリ、アヒル、ガチョウ、ハトなどです。

人が進化するにつれて食料以外にも利用することになり、鳥の羽毛を衣類や装飾品にしてみましたし、渡り鳥の行き来には、季節の到来として農耕の作業の目安にしてみました。小鳥の囀りは、聞く人の気持ちを明るくし、古くから文学や音楽の世界に豊かな情緒を育んできました。愛らしい姿は美術工芸品の中に多数登場していますし、愛玩動物として人の心をなぐさめてきています。鳥類の分類・研究も始まっています。

そして何よりも空を飛ぶことに対して、人はずっとうらやましさと憧れを続けて来、最近になってようやく飛行機を発達させてきました。

「最近キジが少なくなっている」、「カッコウの声を聞かれなくなっている」、「オオバンが増えている」などいろいろな声が聞こえてきます。子供のころに慣れ親しんだ鳥と現今の様子が違っていることを感じている方も多いでしょう。

人の生活のすぐ近くに棲んでいる動物の代表としての「鳥」を見ていると、その増減や消長にいろいろな背景が見えてきます。鳥は、嘴、足、翼などが効率的に使える場所を選んで生活しています。この環境選択は明確です。鳥の増減や消長を知ることは、私たちが住んでいる人間市がどのような環境の街なのか、どのような自然環境を持っているのか、を知ることでもあります。これは「香り豊かな緑の文化都市」を目標にうたっている人間市としては大切な一面です。

人の住む地域と自然を切り離して存在させることは難しいことではありませんし、現在の日本ではこの方向で進んでいます。ここは人が使うので、鳥はあっちに行ってくればよ

い、とする開発側の発想ばかりで、自然を圧迫している現状は、間違っただけに行っているでしょう。自然は遠くにおいて置くものではなく、自身に手の届く範囲に、豊かに存在しているものが、人の生活にとってはとても大切なことなのです。自然を造り出しているシステム（生態系）の中で、自然の生き物を食べている等、やっと暮らしを立てている動物たちだからです。

最近の地球上に現れている温暖化問題は、現在の地球の生態系では処理しきれないほど、人の便利さのために石油を使い過ぎた結果であり、その延長線上には人の生活を脅かすまでになっている大事件なのです。そのための第一歩が、自然を知ることであり、自然をしっかりと把握していくことです。

「入間市鳥類分布調査」（第1回は1984年に行われている）の意味はこの点にあり、市民の方々に知っていただきたいと思っています。

この本には、1984年、1994年、2004年、2014年、2024年と10年毎に市内の調査を行ってきた記録で、5月下旬から6月末の時期に行われています。日本という位置から考えると、繁殖が行われている時期で、その場にいる鳥類が移動しないことも知られています。500m四方といった細かい区画で調査することに気付き、継続して調査しているのは他では例がないことでの、すばらしいことと考えています。

この号は1984年から5回の実際の調査をやってきた池谷文夫氏が書いてくれました。調査の実行者と文章の作者も次代が出来ていることを嬉しく思っています。

この調査のことについては、市農業振興課の方々に、市内の大きな土地を持っている企業への使用、調査の集まりなど、努力をいただきました。お礼申し上げます。

2025年3月31日

昔の記録を読みながら

# 目 次

はじめに

I	2024 入間市鳥類分布調査	1
1	調査の目的	1
2	調査期間	1
3	調査地域	2
4	調査方法	3
	1) 鳥類の種類・個体数の調査	3
	2) 環境写真の確保	5
5	調査員	6
6	調査結果の集計	6
II	調査結果	7
1	総説	7
	1) 出現種	8
	2) 出現区画	10
	3) 主な種の出現個体数変化	11
	4) 優占度	15
2	各説・目次	19
	図4 - 種類数、図5 - 個体数、 No.1 ヨシガモ ～ No.91 アヒル	
3	調査地の環境写真	114
	まとめにかえて	145

参考文献

# I 2024 入間市鳥類分布調査

## 1 調査の目的

入間市全域における鳥類の繁殖期の種類の分布や個体数についての概況を知ることが目的としている。

また、市内 205 地点の環境写真を確保することも目的とした。

## 2 調査期間

調査は 2024 年 5 月 20 日から 6 月 30 日までに実施した。この時期は、日本を含む北半球の温帯、東アジアにおいては、鳥類の主要な繁殖期であり、縄張りを持ち、巣を造って定着しているものが多く、最も移動が行われにくい時期であるからである。また、囀りが盛んで遠くからでも鳥の存在を知ることのできる利点もある。

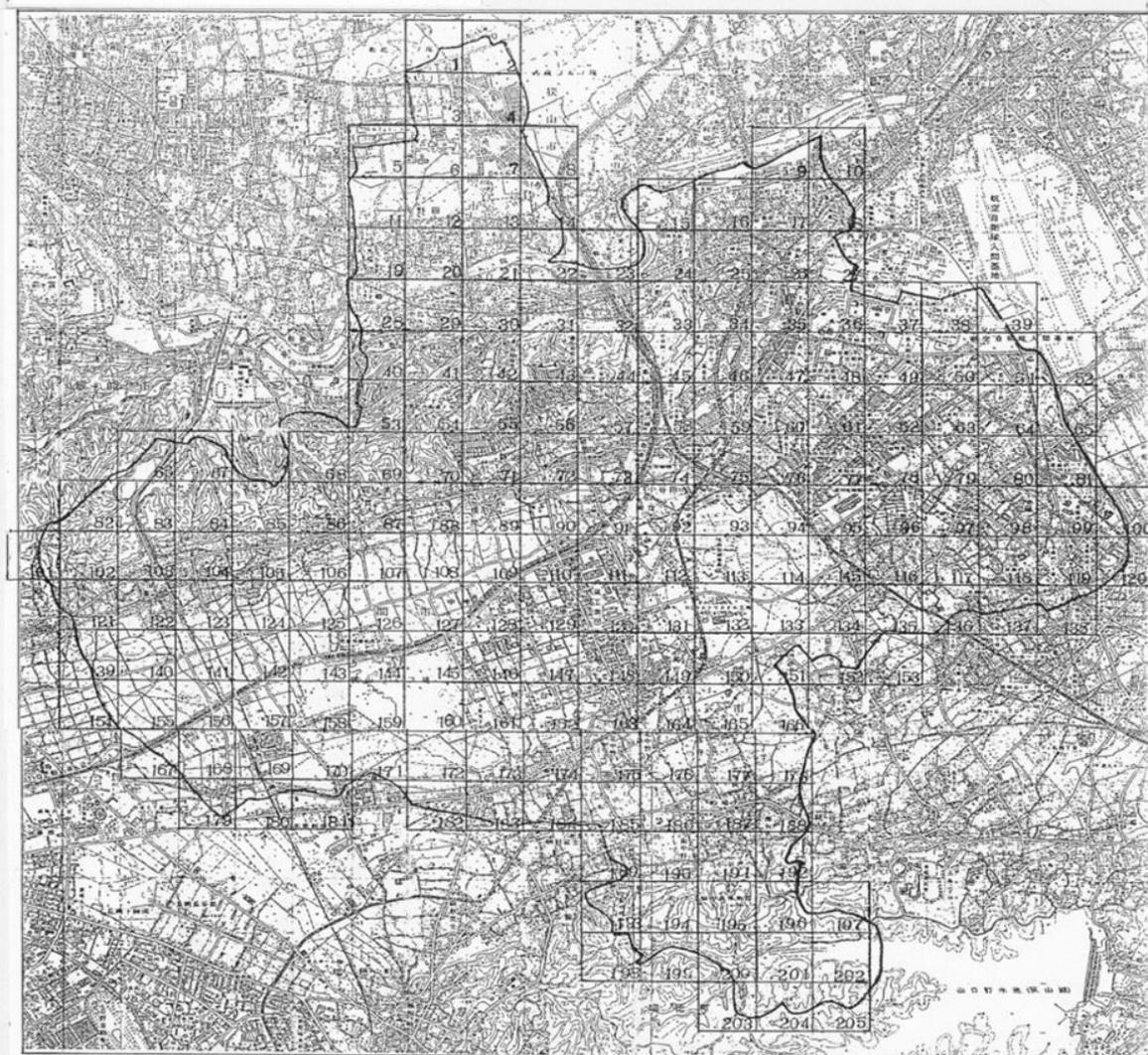


### 3 調査地域

調査は市内全域（図1）で行った。市内全域を500m四方の正方形に区画した。区画作成の基準点は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図4枚（青梅・所沢・飯能・川越南部）の接点、北緯30度50分、東経139度22分30秒である。

市境では、4分の1程度市域を含んでいれば、1区画とした。その結果、計205区画となった。区画には1から205の番号を付けた（図2）。

図2 入間市205区画図



## 4 調査方法

### 1) 鳥類の種類・個体数の調査

- 各調査区画（500m四方）を確定するために、2,500分の1の地形図を用いて、調査用の地図205区画分を作成した。（図3）



- 調査用地図には、その区画の中心点を通る約1 kmの調査ラインを示した。その場合は、なるべく多種類の環境をチェックできるように配慮した。  
 なお、今回は5回目の調査なので、前回（2014年）の調査ラインを踏襲した。
- 調査員は、あらかじめ示されている調査ラインに沿って、時速2 km程度のスピードで歩きながら鳥を探し、記録した。
- 調査ラインを歩きながら、調査区域内で見つけた鳥は、全て地図上にその位置を順番に数字で示し、記録用紙に順番に種名、個体数、声で見つけたか、姿で見つけたかの区別、その他飛行中のものかなど確認方法、その他行動を記録した。

- ・ 図示されている調査ライン以外を歩いた場合は、歩いたラインを地図に図示した。
- ・ 隣接で記録した鳥が、のちほどその区画（隣接区画）を調査した場合に記録されないこともあるので、隣接の区画に出現していることを示して記録しておいた。結果は、○印で囲んだ数字で示してある。
- ・ できる限り晴天日の、日の出から午前 10 時頃までに調査を実施した。

○ラインセンサス調査の記入（記録は調査用紙の地図と表を併用し記入）

- ・ 出現した鳥は、観察された個体（群）の順に一連番号とし、地図上には①、②で表示し表のナンバーと一致させる。
- ・ 単独でも複数の場合でも、同位置で確認した場合は同じ番号を使用する。混群など数種類確認されても同様とする。
- ・ 移動した場合は、矢印で移動経路を表示すること。上空通過の場合も同様とする。

調査用紙A記入例

調査日 6月15日	調査時間 6:14~6:49	
調査員 入間 ひばり	天候 晴れ	風力 なし

天候の目安	雲量	風力	風力の目安
快晴	0 / 10 ~ 2 / 10	0	無風（なし）
晴れ	3 / 10 ~ 7 / 10	1	煙がなびくので風有りと分かる
曇り	8 / 10 ~ 10 / 10	2	顔に風を感じ、木の葉が動く
		3	木の葉や細かい小枝がたえず動く
		4	砂ぼこり、紙片が舞い小枝が動く
		5	葉のある灌木がゆれる
		6	大枝が動き、電線が鳴る

調査用紙B記入例（調査用紙Aで書ききれなかったとき）

調査用紙Aを1とした通しNo.

調査日 6月15日	調査用紙No. 2
調査地No. 173	調査員 入間 ひばり

○ 表で使用する記号 ※その他は文字で記入

項目	摘要	記号	項目	摘要	記号
羽数	何羽以上	+	備考	雄	♂
	何羽以下	-		雌	♀
観察	目撃	○		成鳥	A
鳴声	さえずり	S		幼鳥	J
	地鳴など	C		上空通過	F

## 2) 環境写真の確保

- ・各調査区画の中心点において、環境写真を撮影した。
- ・環境写真は、調査区画の番号、撮影年月日を記した調査用紙を撮影した後に、東・南・西・北の順番で撮影した。方位は磁石で確認した。
- ・中心点に行けない場合は、撮影地点を図示した。今回は5回目の調査なので、前回の撮影地点をできるだけ踏襲した。
- ・撮影用カメラはデジタルカメラ又はスマートフォンを使用した。デジタルカメラの場合、レンズは35mm判レンズとして50mm-55mmとし、スマートフォンの場合は、画面を横長4：3とした。

## 5 調査員

調査は、市内あるいは近隣市町村に居住する、鳥類の野外識別の知識を持つ 25 名の協力により実施した。以下にその名を記して謝意を表する。（五十音順）

青野倫行 池谷文夫 荻野勝 荻野豊 重昆達也 神戸宇孝 神谷ひな子  
佐藤政明 篠原丈弥 須賀聡 関口浩 対馬良一 津守秀明 津森義則  
名執修二 西久保勝巳 西久保秀子 長谷川勝 前迫大也 宮崎豊  
村山俊彰 村山優子 柳澤紀夫 柳澤かほる 山岸洋樹

## 6 調査結果の集計

- ・現地調査によって得られた記録は、調査区画毎に集計した。集計表には、調査区画番号、調査距離、種類毎の個体数、合計個体数、合計種類数を記入した。記入に際しての配列は、日本鳥類目録 改訂第 8 版（日本鳥学会 2024）によった。
- ・調査区画毎に調査距離を地図上で測定し、種類毎の個体数を調査距離で除し、1 km 毎の個体数に換算した。そして小数点以下を切り上げて整数とした。
- ・この整数を、種類毎に調査区画面に記入した。
- ・これら 2024 年の結果を、前 4 回分の調査結果と比較して、総合的に検討する。
- ・環境写真は前 4 回分の結果と比較して、その変遷を知る。

## II 調査結果

### 1 総説

この調査は、2024年5月20日から6月30日に、計25名の協力により実施された。その結果、市内全域で計63種、9,522羽が記録された。

区画毎の「種類数」は図4(21頁)の2024年、「個体数」は図5(22頁)の2024年のとおりである。平均すると10.9種、46.4羽になっている。

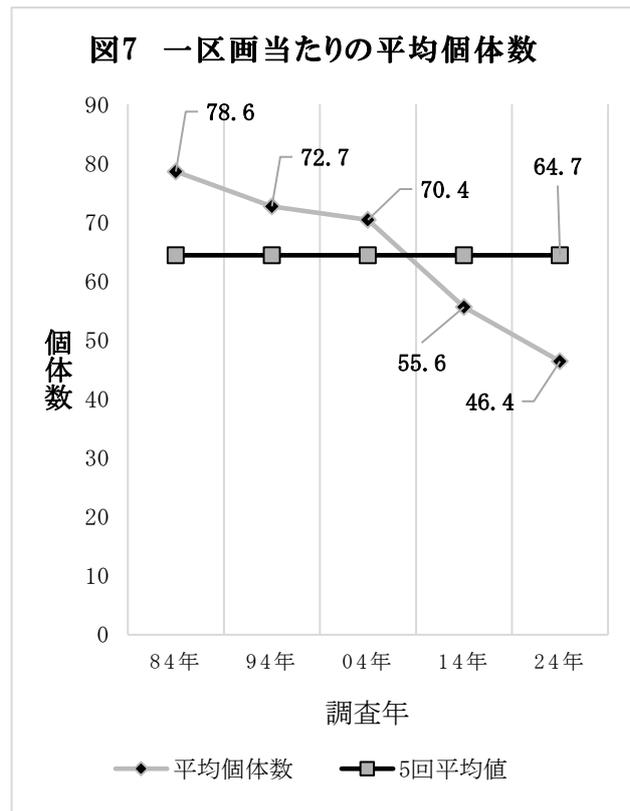
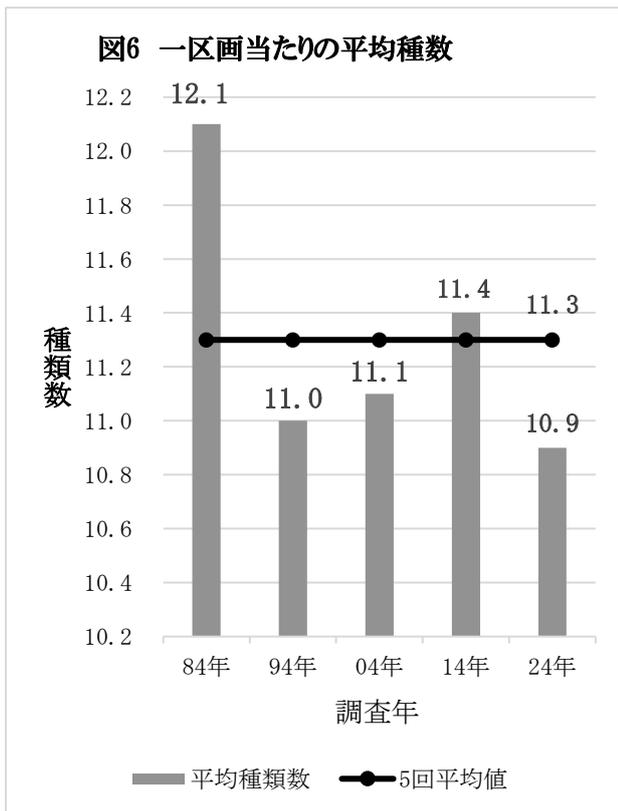
区画毎の「種類数」では、最大19種・最小5種であった。いろいろな環境(例えば林・草原・住宅地・川など)を含んでいるメッシュでは種類数が多い傾向があり、市街地や茶畑のみが広がっているといった単純な環境ばかりの区画では少ない傾向にある。区画毎の「個体数」では、最大151羽、最小12羽であった。

調査年	出現種数	総出現個体数	一区画当りの 平均出現種数	一区画当りの 平均個体数
2024年	63種	9,522羽	10.9種	46.4羽
2014年	62種	11,392羽	11.4種	55.6羽
2004年	64種	14,426羽	11.1種	70.4羽
1994年	60種	14,895羽	11.0種	72.7羽
1984年	66種	16,122羽	12.1種	78.6羽
5回平均	63.0種	13,271羽	11.3種	64.7羽

今回を含めた5回の調査の中で、今回の調査結果は区画毎の平均種類数、平均個体数とも一番少なかった(図6、図7)。5回の調査結果の平均値に比べ、平均種類数は0.4種、平均個体数では18.3羽も減少している。1984年に比較すれば平均種類数では1.2種減少しており、平均個体数では32.2羽もの減少になっている。

市内の鳥は、種類数、個体数が減少し続けており、特に2004年からは個体数を急激に減らしている。

なお、この分布調査による「個体数」は区画内の全数ではなく、区画内の一部を調査した結果この数値を得られたわけで、「他の調査年との比較、他の区画との比較材料としての数値」と考えていただきたい。



## 1) 出現種

今回 2024 年の調査で出現したのは 63 種であった。

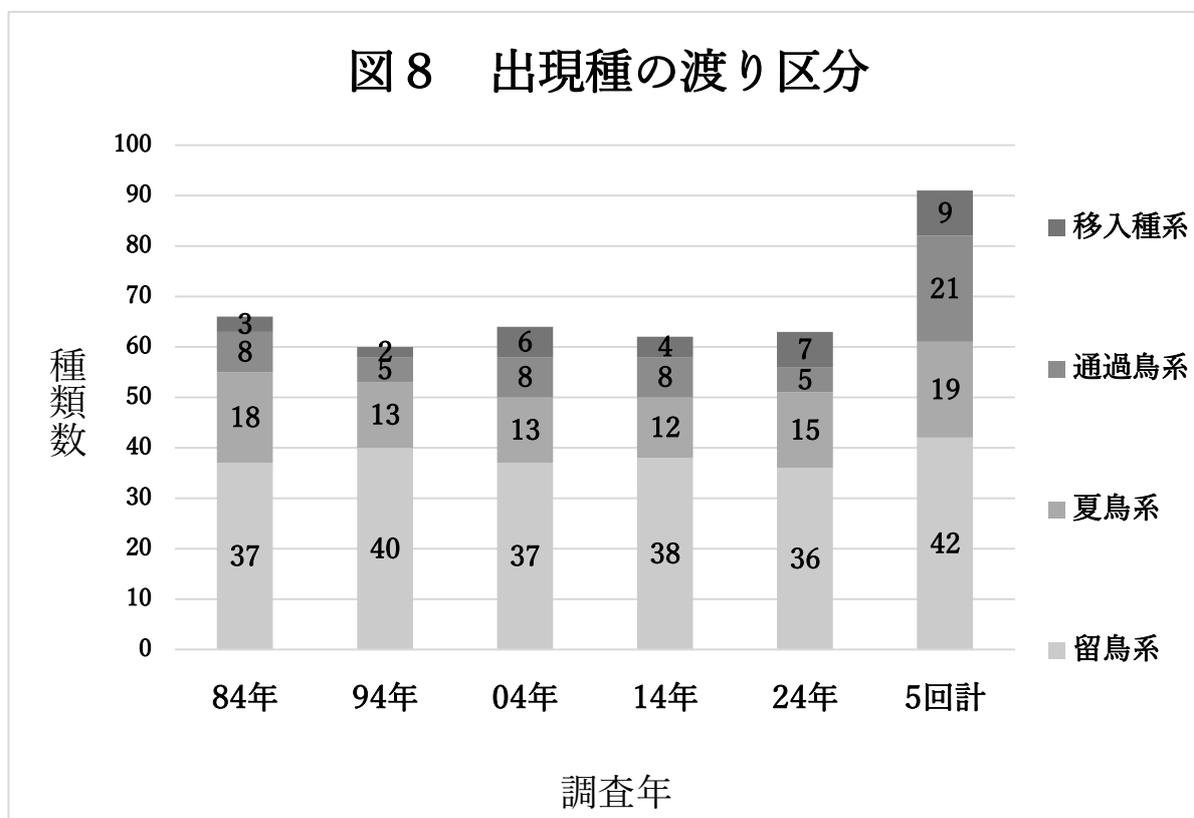
2014 年は 62 種、2004 年は 64 種、1994 年は 60 種、1984 年は 66 種で、この 5 回分を合  
せると計 91 種になる。

この 91 種を繁殖と渡りの習性から、以下に記した四つに区分し各調査年毎の種類数構成  
を見た。

### 出現種の渡り区分

- ・「留鳥系」過去を含め当地又は近隣で周年見られ、繁殖又はその可能性が高い種
- ・「夏鳥系」夏季に飛来し、当地又は近隣で過去に繁殖例がある種
- ・「通過鳥系」移動途中などで一時的に記録されたと考えられる種
- ・「移入種系」外来種（帰化鳥・野生種の籠脱け）や人工移入種（家禽・雑種）など

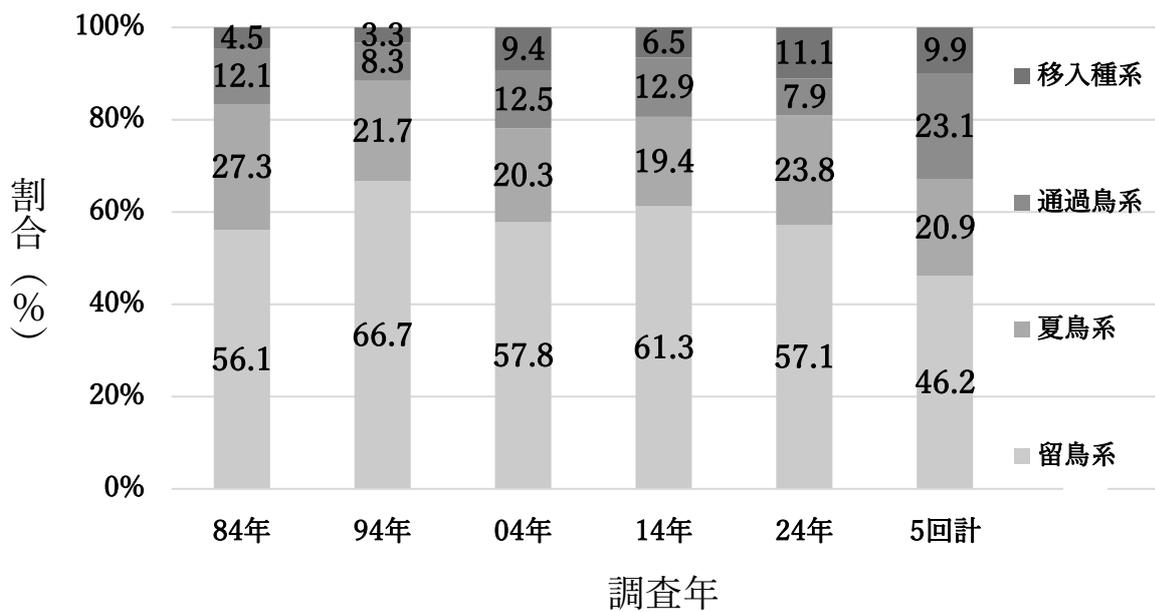
5回の調査で記録した91種を四つに区分すると、留鳥系は42種、夏鳥系は19種、通過鳥系は21種、移入種系は9種であった。同様に2024年に記録した63種を区分すると、留鳥系は36種、夏鳥系は15種、通過鳥系は5種、移入種系は7種であった。



91種の四区分を割合(%)で見ると、留鳥系が46.2%、夏鳥系が20.9%、通過鳥系が23.1%、移入種系が9.9%となるが、2024年は、留鳥系が57.1%、夏鳥系が23.8%、通過鳥系が7.9%、移入種系が11.1%となり、5回の調査の平均値は留鳥系が59.8%、夏鳥系が22.5%、通過鳥系が10.7%、移入種系が7.0%であった。

1984年から2024年までの40年間を通してみると、繁殖の可能性が高い留鳥系、夏鳥系にやや減少傾向が、移入種系にやや増加傾向が見られた。留鳥系はイカルチドリ、イソシギ、ゴイサギ、コサギ、セッカ、イカルなどが見られなくなっており、夏鳥系ではチゴモズ、アカモズ、コサメビタキなどが見られなくなっている。逆に増加傾向だったのがガビチョウ、アヒルなどの移入種系であった。

図9 出現種の渡り区分（割合%）



## 2) 出現区画

今回の調査(2024年)で、入間市全 205 区画の半数を超える 103 区画以上に出現した種は、①スズメ 179、②ヒヨドリ 170、③ムクドリ 168、④ハシブトガラス 161、⑤シジュウカラ 158、⑥キジバト 153、⑦ツバメ 135 の7種であった。

2014年は、①スズメ 190、②ヒヨドリ 189、③ハシブトガラス 164、④ムクドリ 164、⑤シジュウカラと⑥ツバメが 154、⑦キジバト 151、⑧カワラヒワ 103 の8種。

2004年は、①スズメ 188、②ヒヨドリ 182、③ツバメ 161、④ハシブトガラス 158、⑤シジュウカラ 156、⑥ムクドリ 154、⑦キジバト 147 の7種。

1994年は、①ヒヨドリ 193、②スズメ 191、③キジバト 165、④ムクドリ 165、⑤ツバメ 149、⑥ハシブトガラス 132、⑦シジュウカラと⑧カワラヒワ 125、⑨ホオジロ 117 の9種。

1984年は、①スズメ 194、②ムクドリ 180、③ヒヨドリ 174、④ツバメ 158、⑤キジバト 157、⑥シジュウカラ 147、⑦ホオジロ 138、⑧カワラヒワ 124 の8種であった。

これらの種は、市内に広く分布していると言える。市内における環境として広いのは、住宅地、畑・茶畑などのため、このような環境を好む種が多いほか、環境選択の幅が広い種のことも多い。

1984年に比較してその後の2024年に出現区画が明瞭に減少していた（分布域が狭くなったと考えられる）種は、以下の25種（3タイプ）であった。

2024年に出現した区画が無かったのは①イソシギ、②ゴイサギ、③コサギ、④チゴモズ、⑤アカモズ、⑥セッカ、⑦イカルの7種。

1～3区画しか出現しなかったのは、①カッコウ、②ササゴイ、③サンショウクイ、④オオヨシキリ、⑤キセキレイの5種。

1984年の出現区画数が2024年でほぼ半減していたのは、①キジ、②サンコウチョウ、③オナガ、④ヒバリ、⑤ヒヨドリ、⑥ツバメ、⑦イワツバメ、⑧スズメ、⑨セグロセキレイ、⑩カワラヒワ、⑪ホオジロ、⑫コジュケイ、⑬ドバトの13種である。

一方、1984年に比較してその後の2024年に分布を広げていたのは、①ハシボソガラス、②ウグイス、③メジロ、④キビタキ、⑤ガビチョウの5種であった。

この他に、2004年または2014年頃までは出現区画を増加してきたが、2024年では維持または減少に転じた種として、①カルガモ、②ホトトギス、③カワウ、④アオサギ、⑤オオタカ、⑥コゲラ、⑦アオゲラ、⑧チョウゲンボウ、⑨ハシブトガラス、⑩ヤマガラ、⑪ヤブサメ、⑫ハクセキレイの12種があげられる。

5回の調査で、分布の様子があまり変らなかった種は、①キジバト、②シジュウカラ、③ムクドリであった。

### 3) 主な種の出現個体数変化

全個体数は、1984年(16,112羽)に比べ1994年(14,895羽)は92.4%、2004年(14,426羽)は89.5%、2014年(11,392羽)は70.7%、2024年(9,522羽)は59.1%と年を追うごとに減少し続けている。特に2004年以降の減少は急激で、2024年に記録した全個体数は1万羽以下となってしまった。

今回までの5回の調査結果をみていると、種によって出現個体数が減少傾向、増加傾向、変化の少ない種など、様々な変化がみられた。

ここでは留鳥系、夏鳥系と外来種・移入種系の一部の種を基に、出現羽数の増加、減少の状況を五つの型に分けまとめた。

## ① 見られなくなった種

本調査を開始した1984年時点では増加傾向だったゴイサギ、コサギ。個体数は少ないが繁殖していたチゴモズやアカモズ。個体数がある程度多かったイカルなどである。高度成長期前のいわゆる里地里山では普通に見られていたが、2024年調査では確認できなかった。

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
イソシギ	8	2	1	1	0
ゴイサギ	44	33	21	0	0
コサギ	48	21	1	1	0
チゴモズ	6	0	0	0	0
アカモズ	9	2	0	0	0
セッカ	8	1	5	1	0
イカル	100	35	21	5	0

## ② 減少傾向の種

本調査を開始した1984年から現在の2024年まで、減少し続けている種をまとめた。樹木がある住宅地、公園、農地などで普通見みられてきた種が多い。キジバト、ツバメなどもともと個体数が多い種。カッコウ、キセキレイなど、1984年時点では100羽以上記録していたが、近い将来には見られなくなりそうな種。もともと個体数が少ないカイツブリ、オオヨシキリ。移入種系のコジュケイ、ドバトなどである。

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
カッコウ	113	45	14	1	2
キジバト	703	683	551	480	458
カイツブリ	12	4	7	6	1
オナガ	367	229	117	125	71
ヒバリ	387	309	125	75	63
ツバメ	1172	842	904	727	646
イワツバメ	389	86	83	29	21
オオヨシキリ	21	11	12	6	4
キセキレイ	107	42	30	12	4
セグロセキレイ	154	117	33	22	23
カワラヒワ	436	490	316	269	217
ホオジロ	529	370	305	268	206
コジュケイ	129	52	29	23	39
ドバト	461	297	241	160	124

### ③ 1984年から増加したが2024年までに減少した種

調査を開始した1984年から一旦増加したが、2024年までに減少がみられた種をまとめた。もともと個体数が多いハシブトガラス、ヒヨドリ、スズメ。ある程度個体数が多く普通に見られてきたカルガモ、コゲラ、ハクセキレイ。二次林である雑木林が放置され、林床が繁茂、森林の成熟化などで増加したと思われるオオタカ、アオゲラ、ヤブサメ。1984年時点ではまだ記録されていなかったアオバト、カワウ、アオサギ、ヤマガラなどを含む。

主な種の出現個体数変化（1984年から増加したが2024年までに減少した種）（羽）

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
カルガモ	117	187	182	132	60
アオバト	0	2	4	4	1
カワウ	0	4	34	17	19
アオサギ	0	1	101	61	31
オオタカ	4	10	15	18	2
コゲラ	159	137	197	196	151
アオゲラ	20	34	33	24	24
ハシブトガラス	440	748	1381	959	659
ヤマガラ	0	25	126	64	66
ヒヨドリ	1079	1211	1008	866	560
ヤブサメ	13	26	26	13	10
スズメ	5233	5514	4425	3362	2110
ハクセキレイ	14	73	238	143	119

### ④ 1984年から減少したが2024年までに増加した種

本調査を開始した1984年から一旦減少したが、2024年までに増加がみられた種。種数は少ない。夏鳥系のホトトギスは托卵の仮親となるウグイスの増加に伴った増加と考えられる。モズは、「①見られなくなった種」で取り上げたチゴモズ、アカモズと共に1984年以降減少を続けてきたが、2024年に増加に転じた。モズ類はオオヨシキリと共にカッコウが托卵する仮親としても重要な役割を果たしている種である。ハシボソガラスは1994年に減少したが、現在は増加傾向とみられる。これには近似種であるハシブトガラスが、1990年代から急増しその後減少傾向に転じた事との関連が考えられる。個体数が多いムクドリも2014年まで減少してきたが、2024年に増加に転じた。

主な種の出現個体数変化（1984年から減少したが2024年までに増加した種）（羽）

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
ホトトギス	23	9	15	49	36
モズ	67	41	37	35	48
ハシボソガラス	175	80	128	126	218
ムクドリ	2396	2072	1771	1544	1818

### ⑤ 増加傾向の種

本調査を開始した1984年から2024年現在も増加傾向が見られる種。種数は少ない。ウグイス、メジロ、キビタキなどは、薪炭林であった雑木林が放置され、アズマネザサなどの繁茂、常緑樹の進出、落葉広葉樹林が成長した森林を形成してきたことなどにより、増加しているものと考えられる。

イソヒヨドリは日本では沿岸部に棲息するものが多かったが、1990年代に入り関東でも内陸部に進出して繁殖するものが増えている種で、市域でも今後増加が予想される。移入種系のガビチョウは、市域では1990年代から見られるようになり、2004年から急激に増加している。

主な種の出現個体数変化（増加傾向の種）（羽）

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
ウグイス	38	41	64	118	195
メジロ	49	258	380	277	367
キビタキ	2	14	34	95	114
イソヒヨドリ	0	0	0	0	10
ガビチョウ	0	0	46	131	201

#### 4) 優占度

上位15種の個体数と優占度の変化

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
全個体数(羽)	16,122	14,895	14,426	11,392	9,522
上位15種の個体数(羽)	14,627	13,884	13,032	10,147	8,539
上位15種の合計優占度(%)	90.7	93.2	90.3	89.1	89.7

調査年毎に全個体数、上位15種の合計個体数、種類毎の出現個体数が全個体数の中で占める割合を優占度とし、その上位15種の合計優占度を上の表に現わした。

また、下の表は2024年の上位15の種を基準とし、各調査年のその種の優占度の変遷を示してある。スズメ、ドバトなどは調査の度に優占度が下がり続けてきたが、メジロ、ウグイスなどは上がり続けてきた。シジュウカラ、ヒヨドリ・カワラヒワなどは上下している。

優占度の高い種(2024年基準)の変遷(調査年の全個体数に対する比率) 単位：%

No.	種名	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
1	スズメ	32.5	37.0	30.7	29.5	22.1
2	ムクドリ	14.9	13.9	12.3	13.3	19.1
3	ハシブトガラス	2.7	5.0	9.6	8.4	6.9
4	ツバメ	7.3	5.7	6.3	6.4	6.8
5	シジュウカラ	4.3	3.6	6.0	5.9	6.4
6	ヒヨドリ	6.7	8.1	7.0	7.6	5.9
7	キジバト	4.4	4.6	3.8	4.2	4.8
8	メジロ	0.3	1.7	2.6	2.4	3.9
9	ハシボソガラス	1.1	0.5	0.9	1.1	2.3
10	カワラヒワ	2.7	3.3	2.2	2.4	2.3
11	ホオジロ	3.3	2.5	2.1	2.4	2.2
12	ガビチョウ	—	—	0.3	1.1	2.1
13	ウグイス	0.1	0.3	0.4	1.7	2.0
14	コゲラ	1.0	0.9	1.4	1.7	1.6
15	ドバト	2.9	2.0	1.7	1.4	1.3

以下に各調査年毎の出現区画数、出現個体数が多かった上位 15 種を表に現わした。2024 年は 15 種で 8,539 羽、全個体数の 89.7%になっている。2014 年は 15 種 10,147 羽で 89.1%、2004 年は 15 種 13,032 羽で 90.3%、1994 年は 15 種 13,884 羽で 93.2%、1984 年は 15 種 14,627 羽で 90.7%である。

#### 2024年出現区画数が多かった上位15種

No.	種 名	区画数 (区画)	区画割合(%)
1	スズメ	179	86.8
2	ヒヨドリ	170	82.9
3	ムクドリ	168	82.0
4	ハシブトガラス	161	78.5
5	シジュウカラ	158	77.1
6	キジバト	153	74.6
7	ツバメ	135	65.9
8	メジロ	99	48.3
9	ハシボソガラス	94	45.9
10	カワラヒワ	87	42.4
11	ガビチョウ	85	41.5
12	ウグイス	80	39.0
13	ホオジロ	73	35.6
14	ハクセキレイ	67	32.7
15	コゲラ	65	31.7

#### 2024年出現個体数が多かった上位15種

No.	種 名	個体数 (羽)	優先度(%)
1	スズメ	2,110	22.2
2	ムクドリ	1,818	19.1
3	ハシブトガラス	659	6.9
4	ツバメ	646	6.8
5	シジュウカラ	608	6.4
6	ヒヨドリ	561	5.9
7	キジバト	458	4.8
8	メジロ	367	3.9
9	ハシボソガラス	218	2.3
10	カワラヒワ	217	2.3
11	ホオジロ	206	2.2
12	ガビチョウ	201	2.1
13	ウグイス	195	2.0
14	コゲラ	151	1.6
15	ドバト	124	1.3

合 計 8,539 89.7

全種数：63種、全区画数：205区画、全個体数：9,522羽

2014年の出現区画数、出現個体数が多かった上位15種を表に現わした

2014年出現区画数が多かった上位15種

No.	種名	区画数(区画)	区画割合(%)
1	スズメ	190	92.7
2	ヒヨドリ	189	92.2
3	ハシブトガラス	164	80.0
4	ムクドリ	164	80.0
5	シジュウカラ	154	75.1
6	ツバメ	154	75.1
7	キジバト	151	73.7
8	カワラヒワ	103	50.2
9	ホオジロ	93	45.4
10	メジロ	89	43.4
11	コゲラ	83	40.5
12	ハクセキレイ	72	35.1
13	キジ	61	29.8
14	ガビチョウ	60	29.3
15	ハシボソガラス	59	28.8

2014年出現個体数が多かった上位15種

No.	種名	個体数(羽)	優先度(%)
1	スズメ	3,362	29.5
2	ムクドリ	1,514	13.3
3	ハシブトガラス	959	8.4
4	ヒヨドリ	866	7.6
5	ツバメ	727	6.4
6	シジュウカラ	670	5.9
7	キジバト	473	4.2
8	メジロ	277	2.4
9	カワラヒワ	269	2.4
10	ホオジロ	268	2.4
11	コゲラ	196	1.7
12	ドバト	160	1.4
13	ハクセキレイ	143	1.3
14	カルガモ	132	1.2
15	ガビチョウ	131	1.1

合計 10,147 89.1

全種数：62種、全区画数：205区画、全個体数：11,392羽

2004年の出現区画数、出現個体数が多かった上位15種を表に現わした

2004年出現区画数が多かった上位15種

No.	種名	区画数(区画)	区画割合(%)
1	スズメ	188	91.7
2	ヒヨドリ	182	88.8
3	ツバメ	161	78.5
4	ハシブトガラス	158	77.1
5	シジュウカラ	156	76.1
6	ムクドリ	154	75.1
7	キジバト	147	71.7
8	ホオジロ	97	47.3
9	カワラヒワ	93	45.4
10	ハクセキレイ	91	44.4
11	コゲラ	77	37.6
12	メジロ	65	31.7
13	カルガモ	56	27.3
14	ヒバリ	46	22.4
15	オナガ	44	21.5

2004年出現個体数が多かった上位15種

No.	種名	個体数(羽)	優先度(%)
1	スズメ	4,425	30.7
2	ムクドリ	1,771	12.3
3	ハシブトガラス	1,381	9.6
4	ヒヨドリ	1,008	7.0
5	ツバメ	904	6.3
6	シジュウカラ	867	6.0
7	キジバト	551	3.8
8	メジロ	380	2.6
9	カワラヒワ	316	2.2
10	ホオジロ	305	2.1
11	エナガ	266	1.8
12	ドバト	241	1.7
13	ハクセキレイ	238	1.7
14	コゲラ	197	1.4
15	カルガモ	182	1.3

合計 13,032 90.3

全種数：64種、全区画数：205区画、全個体数：14,426羽

1994年の出現区画数、出現個体数が多かった上位15種を表に現わした

1994年出現区画数が多かった上位15種

No.	種名	区画数(区画)	区画割合(%)
1	ヒヨドリ	193	94.1
2	スズメ	191	93.2
3	キジバト	165	80.5
4	ムクドリ	161	78.5
5	ツバメ	149	72.7
6	ハシブトガラス	132	64.4
7	シジュウカラ	125	61.0
8	カワラヒワ	125	61.0
9	ホオジロ	117	57.1
10	コゲラ	79	38.5
11	オナガ	78	38.0
12	ヒバリ	77	37.6
13	メジロ	63	30.7
14	セグロセキレイ	59	28.8
15	カルガモ	46	22.4

1994年出現個体数が多かった上位15種

No.	種名	個体数(羽)	優先度(%)
1	スズメ	5,514	37.0
2	ムクドリ	2,072	13.9
3	ヒヨドリ	1,211	8.1
4	ツバメ	842	5.7
5	ハシブトガラス	748	5.0
6	キジバト	685	4.3
7	シジュウカラ	535	3.6
8	カワラヒワ	490	3.3
9	ホオジロ	370	2.5
10	ヒバリ	309	2.1
11	ドバト	297	2.0
12	メジロ	258	1.7
13	オナガ	229	1.5
14	カルガモ	187	1.3
15	コゲラ	137	0.9

合計 13,884 93.2

全種数：60種、全区画数：205区画、全個体数：14,895羽

1984年の出現区画数、出現個体数が多かった上位15種を表に現わした

1984年出現区画数が多かった上位15種

No.	種名	区画数(区画)	区画割合(%)
1	スズメ	194	94.6
2	ムクドリ	180	87.8
3	ヒヨドリ	174	84.9
4	ツバメ	158	77.1
5	キジバト	157	76.6
6	シジュウカラ	147	71.7
7	ホオジロ	138	67.3
8	カワラヒワ	124	60.5
9	オナガ	99	48.3
10	ハシブトガラス	95	46.3
11	ヒバリ	90	43.9
12	カッコウ	66	32.2
13	コジュケイ	66	32.2
14	コゲラ	64	31.2
15	セグロセキレイ	62	30.2

1984年出現個体数が多かった上位15種

No.	種名	個体数(羽)	優先度(%)
1	スズメ	5233	32.5
2	ムクドリ	2396	14.9
3	ツバメ	1172	7.3
4	ヒヨドリ	1079	6.7
5	キジバト	703	4.4
6	シジュウカラ	701	4.3
7	ホオジロ	529	3.3
8	ドバト	461	2.9
9	ハシブトガラス	440	2.7
10	カワラヒワ	436	2.7
11	イワツバメ	389	2.4
12	ヒバリ	387	2.4
13	オナガ	367	2.3
14	ハシボソガラス	175	1.1
15	コゲラ	159	1.0

合計 14,627 90.7

全種数：66種、全区画数：205区画、全個体数：16,122羽

## 2 各説・目次

(種類数はp21、個体数はp22、各鳥種はp23～p113)

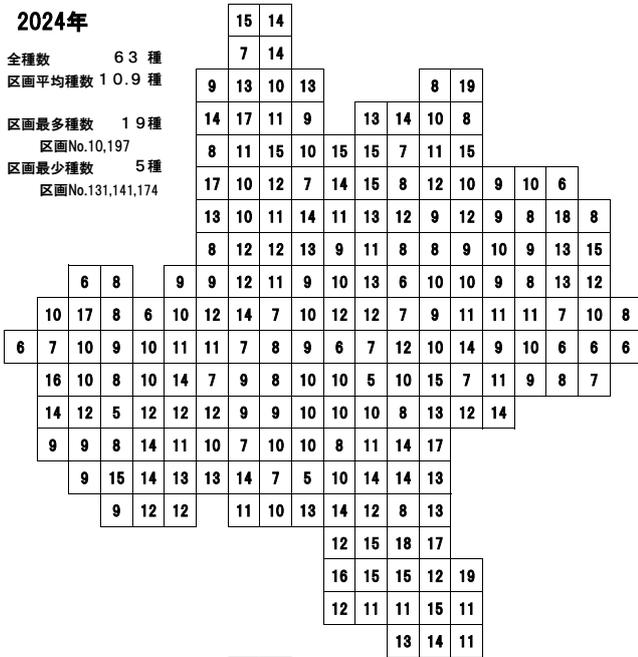
No.	目	科	種名	繁殖と渡りの習性による区分				頁
				留鳥系	夏鳥系	通過鳥系	移入種系	
1	カモ	カモ	ヨシガモ			○		23
2			カルガモ	●				24
3			マガモ			●		25
4	キジ	キジ	キジ	●				26
5	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ			○		27
6			ヒメアマツバメ	●				28
7	カッコウ	カッコウ	ホトトギス		●			29
8			ツツドリ			○		30
9			カッコウ		●			31
10	ハト	ハト	キジバト	●				32
11			アオバト			●		33
12	ツル	クイナ	クイナ			●		34
13			ヒクイナ		●			35
14	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	●				36
15	チドリ	チドリ	イカルチドリ	●				37
16			コチドリ		●			38
17		シギ	イソシギ	○				39
18			クサシギ			○		40
19	カツオドリ	ウ	カワウ	●				41
20	ペリカン	サギ	ゴイサギ	○				42
21			ササゴイ		●			43
22			アマサギ			○		44
23			アオサギ	●				45
24			ダイサギ		●			46
25			チュウサギ			○		47
26			コサギ	○				48
27	タカ	タカ	ハチクマ		○			49
28			ツミ	●				50
29			オオタカ	●				51
30			トビ	●				52
31			ノスリ	●				53
32	フクロウ	フクロウ	フクロウ	○				54
33	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン			○		55
34			カワセミ	●				56
35	キツツキ	キツツキ	コゲラ	●				57
36			アカゲラ			○		58
37			アオゲラ	●				59
38	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	●				60
39	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ		●			61
40		カササギヒタキ	サンコウチョウ		●			62
41		モズ	チゴモズ		○			63
42			アカモズ		○			64
43			モズ	●				65
44		カラス	カケス	●				66
45			オナガ	●				67
46			ハシボソガラス	●				68

鳥種名は、日本鳥学会「日本鳥類目録改訂第8版 2024年」の順に従った

No.	目	科	種名	繁殖と渡りの習性による区分				頁
				留鳥系	夏鳥系	通過鳥系	移入種系	
47	スズメ	カラス	ハシブトガラス	●				69
48		シジュウカラ	ヒガラ			○		70
49			ヤマガラ	●				71
50			コガラ			○		72
51			シジュウカラ	●				73
52		ヒバリ	ヒバリ	●				74
53		ヒヨドリ	ヒヨドリ	●				75
54		ツバメ	ツバメ		●			76
55			イワツバメ		●			77
56		ウグイス	ウグイス	●				78
57			ヤブサメ		●			79
58		エナガ	エナガ	●				80
59		ムシクイ	センダイムシクイ			○		81
60			メボソムシクイ			○		82
61		ヨシキリ	オオヨシキリ		●			83
62		セッカ	セッカ	○				84
63		メジロ	メジロ	●				85
64		ミソサザイ	ミソサザイ			●		86
65		ムクドリ	ムクドリ	●				87
66			コムクドリ			○		88
67		ツグミ	トラツグミ			●		89
68			マミジロ			○		90
69			クロツグミ		●			91
70		ヒタキ	コサメビタキ		○			92
71			オオルリ		●			93
72			キビタキ		●			94
73			イソヒヨドリ	●				95
74		スズメ	スズメ	●				96
75		セキレイ	キセキレイ	●				97
76			ハクセキレイ	●				98
77			セグロセキレイ	●				99
78		アトリ	シメ			○		100
79			イカル	○				101
80			カワラヒワ	●				102
81		ホオジロ	ホオジロ	●				103
82			アオジ			○		104
83	キジ	キジ	コジュケイ				●	105
84	ハト	ハト	ドバト				●	106
85	インコ	インコ	ホンセイインコ				●	107
86			セキセイインコ				○	108
87	スズメ	ソウシチョウ	ソウシチョウ				●	109
88			ガビチョウ				●	110
89	カモ	カモ	バリケン				○	111
90			マルガモ (雑種)				●	112
91			アヒル				●	113
		○確認種	5回調査の合計	42種	19種	21種	9種	計91種
		●2024年確認種	2024年調査の合計	36種	15種	5種	7種	計63種

**2024年**

全種数 63種  
 区画平均種数 10.9種  
 区画最多種数 19種  
 区画No.10,197  
 区画最少種数 5種  
 区画No.131,141,174



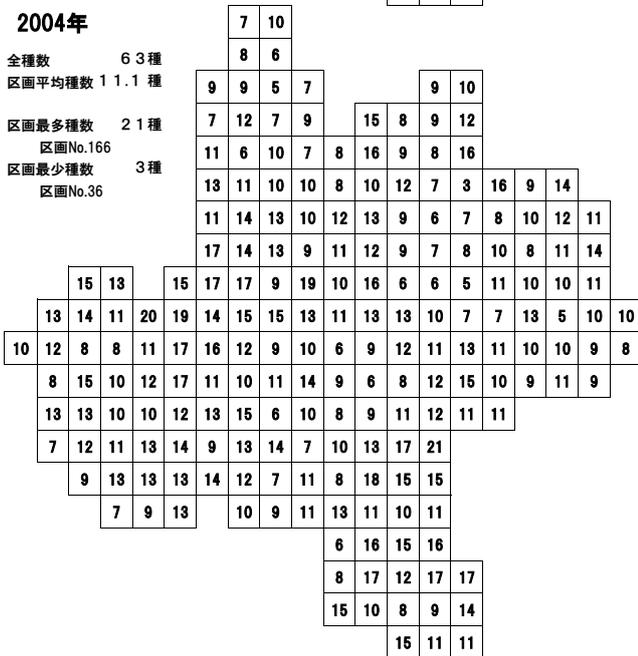
**2014年**

全種数 62種  
 区画平均種数 13.4種  
 区画最多種数 19種  
 区画No.10  
 区画最少種数 4種  
 区画No.138



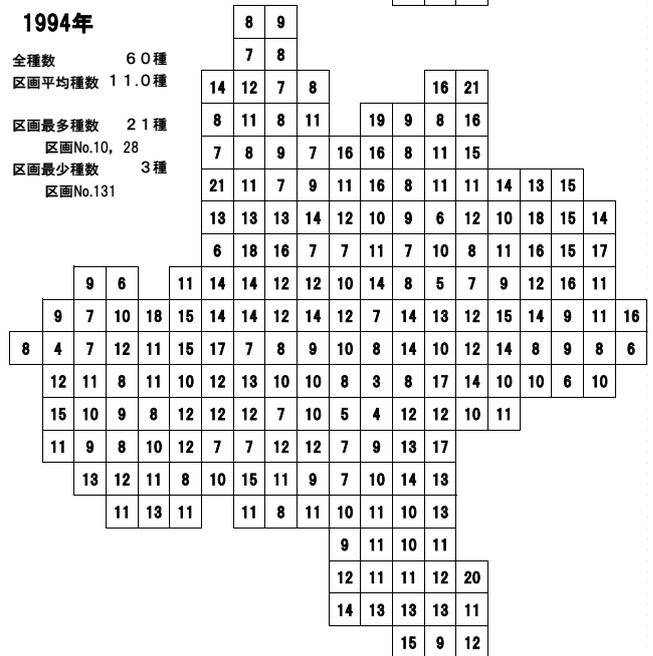
**2004年**

全種数 63種  
 区画平均種数 11.1種  
 区画最多種数 21種  
 区画No.166  
 区画最少種数 3種  
 区画No.36



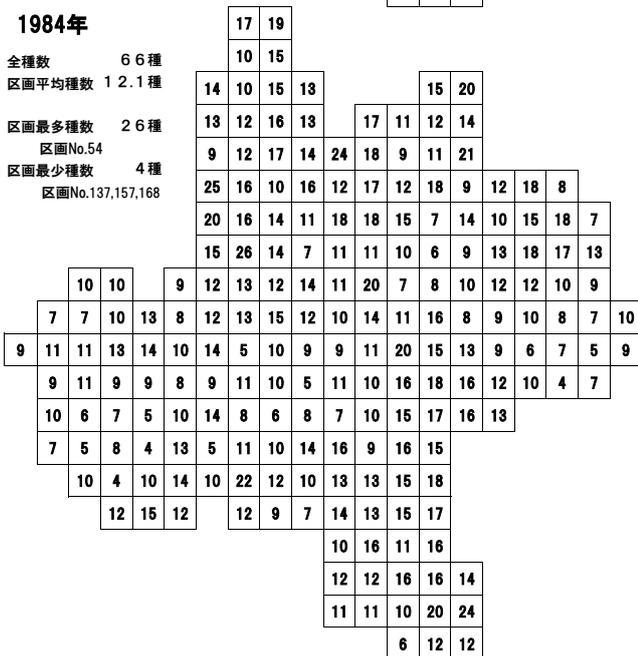
**1994年**

全種数 60種  
 区画平均種数 11.0種  
 区画最多種数 21種  
 区画No.10, 28  
 区画最少種数 3種  
 区画No.131



**1984年**

全種数 66種  
 区画平均種数 12.1種  
 区画最多種数 26種  
 区画No.54  
 区画最少種数 4種  
 区画No.137,157,168



**図4 種類数**

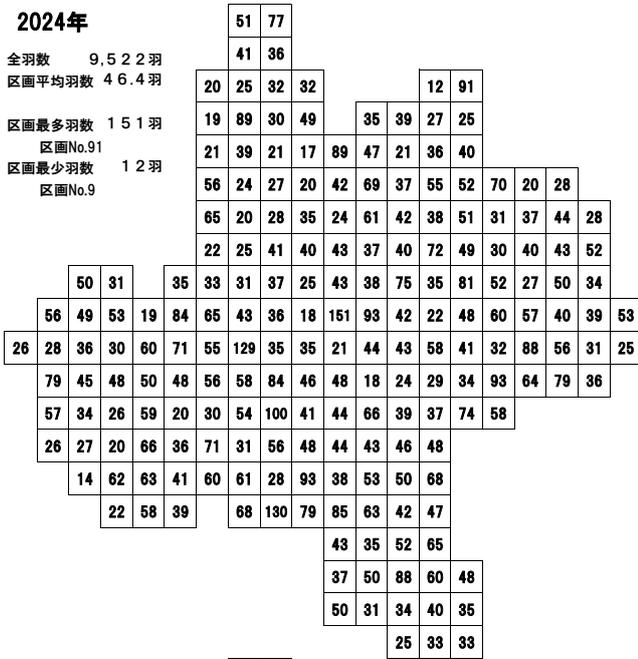
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
種類数	66	60	64	62	63
一区画平均種類数	12.1	11.0	11.1	11.4	10.9
一区画最多種類数	26(1区画)	21(2区画)	21(1区画)	19(1区画)	19(2区画)
一区画最少種類数	4(3区画)	3(1区画)	3(1区画)	4(1区画)	5(3区画)

今回24年は63種を記録し、一区画当たりの平均種数は10.9種であった。5回の調査を合わせると91種、平均は63種であった。一区画当たりの平均種類数の平均は11.3種である。

本調査5回の出現種、91種を繁殖と渡りの習性から区分※すると、留鳥系は41種、夏鳥系は19種、通過鳥系は22種、移入種系は9種であった。同様に24年に記録した63種を区分すると、留鳥系は35種、夏鳥系は15種、通過鳥系は6種、移入種系は7種であった。※区分に関しては8頁「出現種の渡り区分」に記載

2024年

全羽数 9,522羽  
 区画平均羽数 46.4羽  
 区画最多羽数 151羽  
 区画No.91  
 区画最少羽数 12羽  
 区画No.9



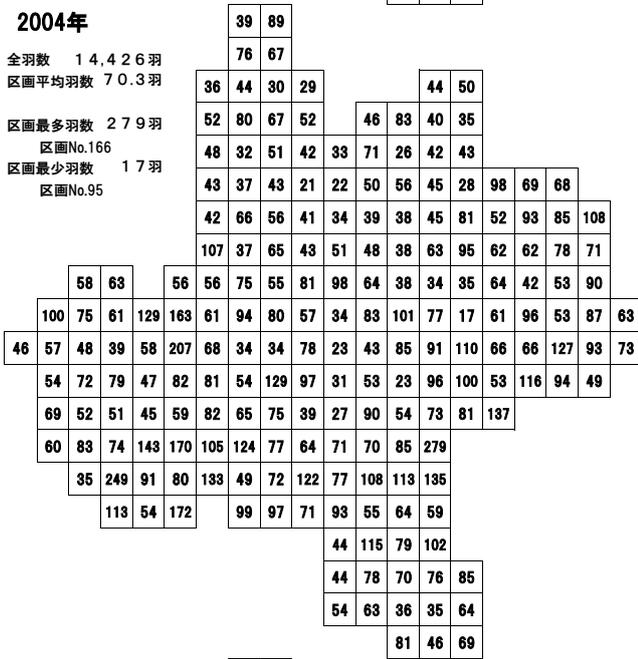
2014年

全羽数 11,393羽  
 区画平均羽数 55.6羽  
 区画最多羽数 131羽  
 区画No.152  
 区画最少羽数 17羽  
 区画No.25



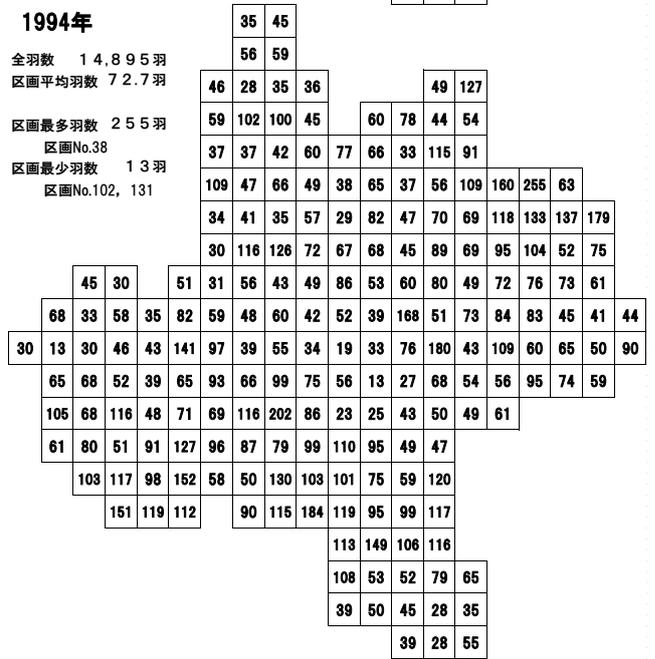
2004年

全羽数 14,426羽  
 区画平均羽数 70.3羽  
 区画最多羽数 279羽  
 区画No.166  
 区画最少羽数 17羽  
 区画No.95



1994年

全羽数 14,895羽  
 区画平均羽数 72.7羽  
 区画最多羽数 255羽  
 区画No.38  
 区画最少羽数 13羽  
 区画No.102, 131



1984年

全羽数 16,112羽  
 区画平均羽数 78.6羽  
 区画最多羽数 257羽  
 区画No.28  
 区画最少羽数 17羽  
 区画No.39

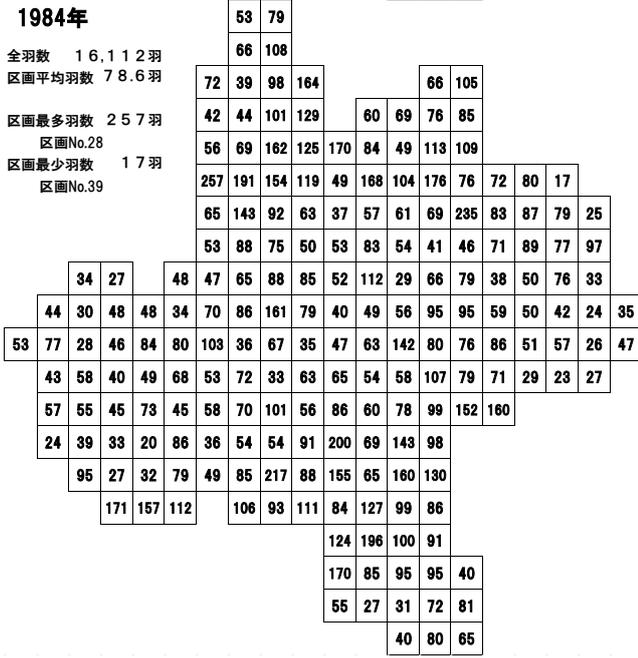


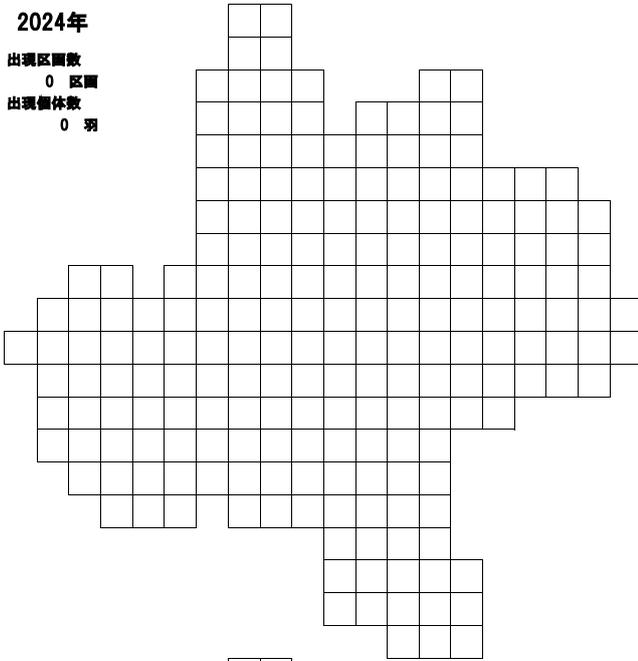
図5 個体数

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
全個体数	16,122	14,895	14,426	11,392	9,522
一区画平均個体数	78.6	72.7	70.4	55.6	46.4
一区画最多個体数	257	255	279	131	151
一区画最少個体数	17	13(2区画)	17	17	12

今回24年は9,522羽を記録した。84年と24年と比較すると40.9%も減少している。全個体数の増減を大きく左右するのは、優占度の高い種である。スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ツバメ、ヒヨドリ、キジバト、カワラヒワ、ホオジロなど、優占度は高くても減少している種は多く、これらの種は、農耕地、住宅地、公園などに棲息するのが多かった。一方、種数は少ないが森林を棲息地とするウグイス、メジロ、ガビチョウなど、優占度が高く増加している種もいた。

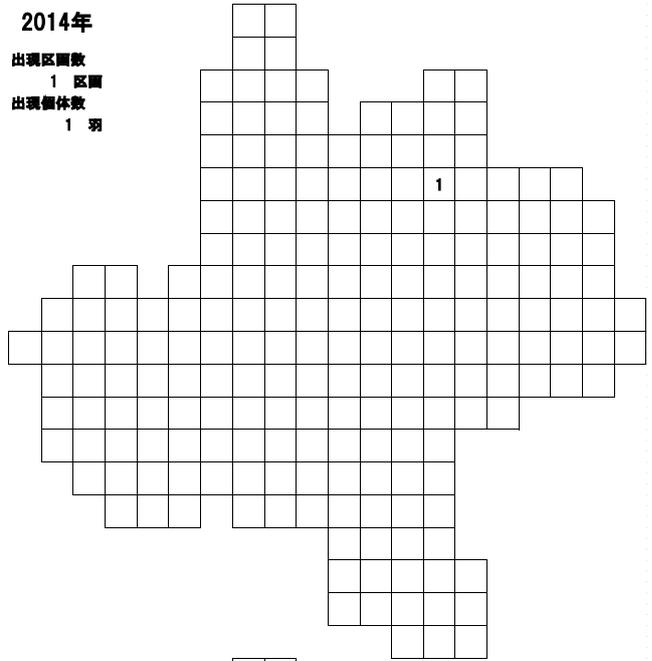
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



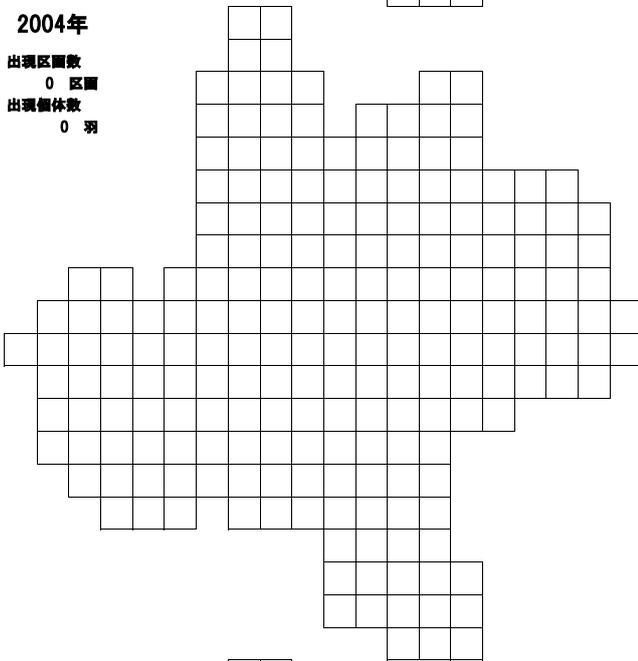
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



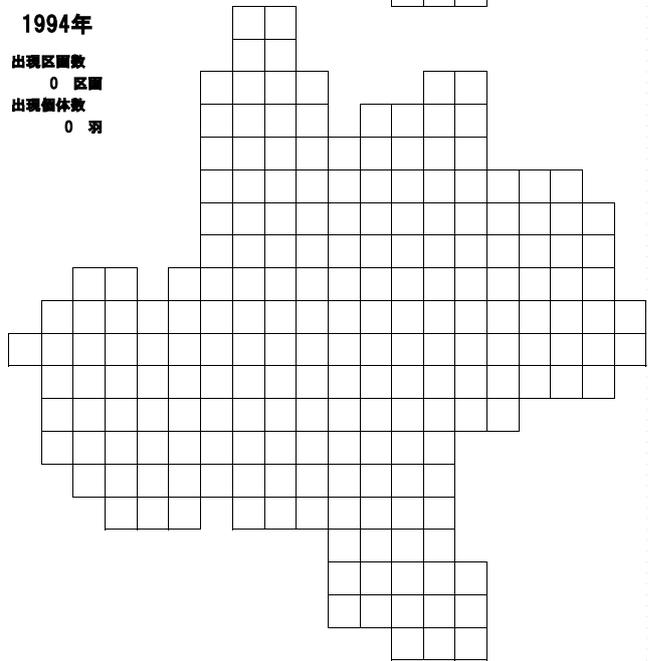
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



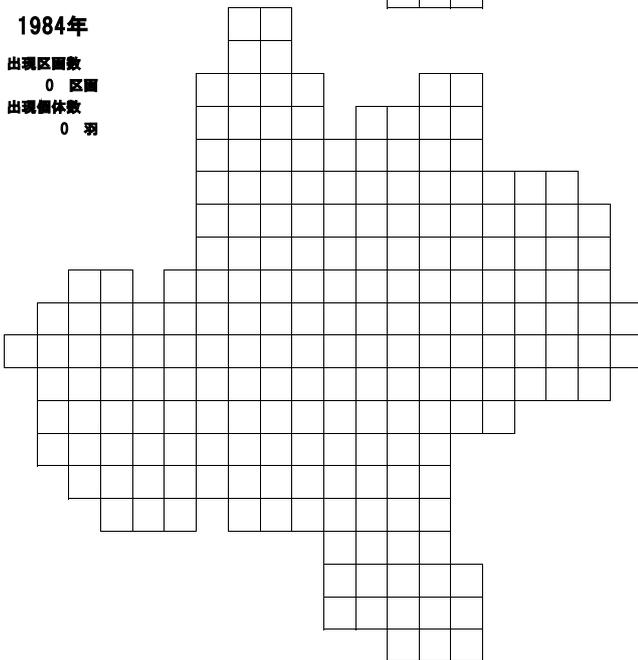
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 1. ヨシガモ *Mareco falcata*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	1	0
出現区画数	0	0	0	1	0
出現一区画当たりの平均羽数	—	—	—	1.0	—

84年、94年、04年と記録が無く、14年に1で区画1羽を記録したが、24年は記録がなかった。

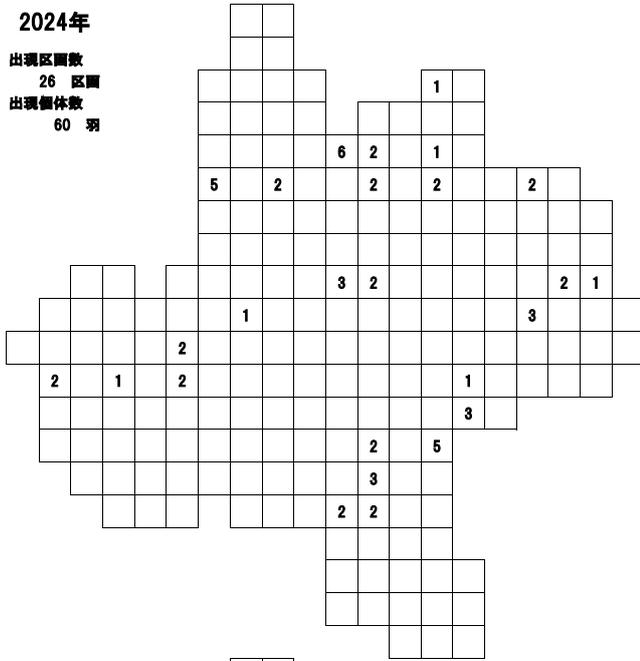
本種は北海道以北で繁殖し、市内では10月から4月まで冬鳥として狭山湖や入間川などに少数が渡来するのみである。

14年の記録は霞川で記録されたもので、何かの理由で渡り去れなかったものが残留していたものと思われる。

通過鳥系として区分。

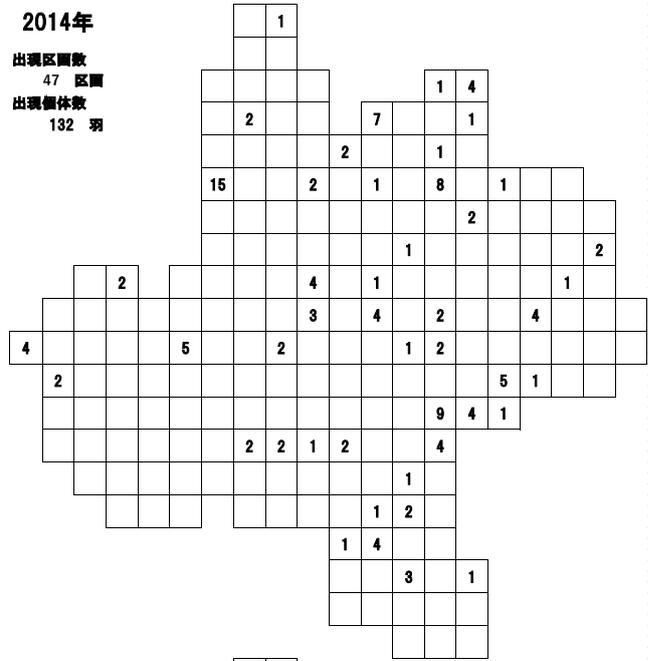
2024年

出現区画数  
26 区画  
出現個体数  
60 羽



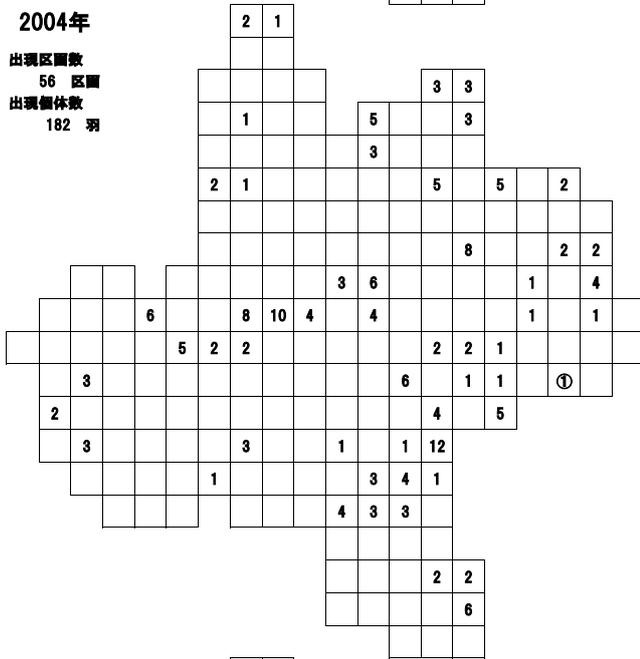
2014年

出現区画数  
47 区画  
出現個体数  
132 羽



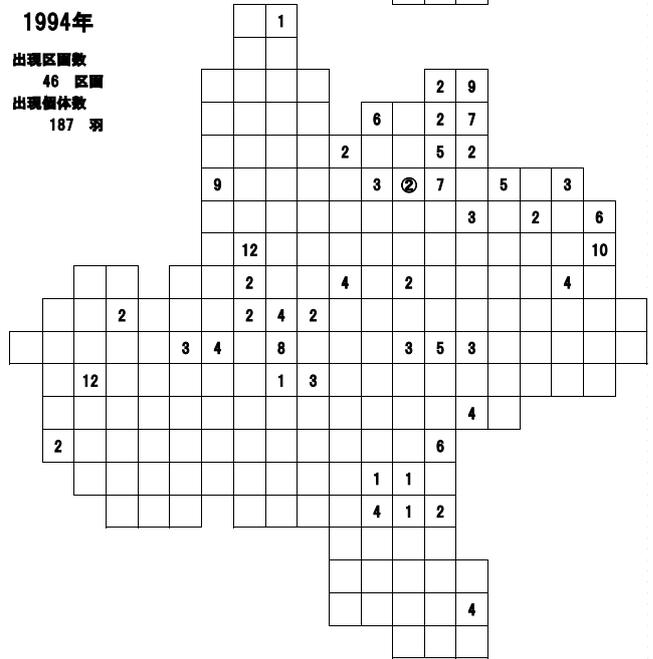
2004年

出現区画数  
56 区画  
出現個体数  
182 羽



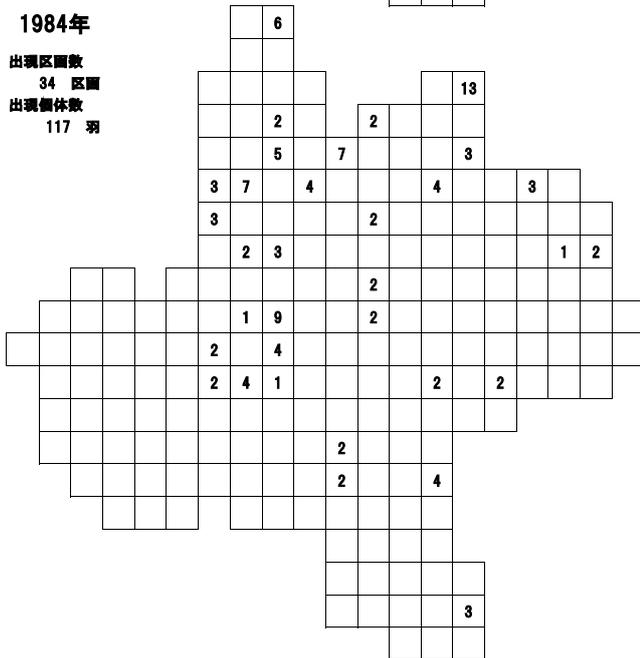
1994年

出現区画数  
46 区画  
出現個体数  
187 羽



1984年

出現区画数  
34 区画  
出現個体数  
117 羽



2. カルガモ *Anas zonorhyncha*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	117	187	182	132	60
出現区画数	34	46	56	47	26
出現一区画当たりの平均個体数	3.4	4.1	3.3	2.8	2.3

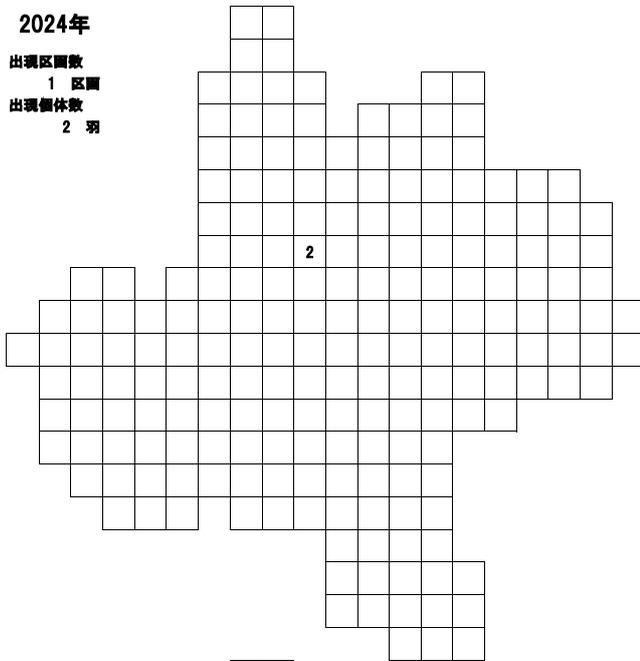
24年は26区画で60羽を記録した。

総個体数は、94年を頂点に以降減少傾向で、14年から24年は出現区画数と共に急減している。ハシブトガラスのほか、水辺近くに営巣するためアライグマによる食害などが考えられるが、原因は不明。一区画当たりの平均個体数も減少が続いており、総個体数は84年に比較し24年では48.7%も減少している。

区画図を見ると入間川や霞川沿いばかりでなく、不老川・林など小河川に、さらに大森調整池よりも小面積の公園の池などでも記録されている。留鳥系として区分。

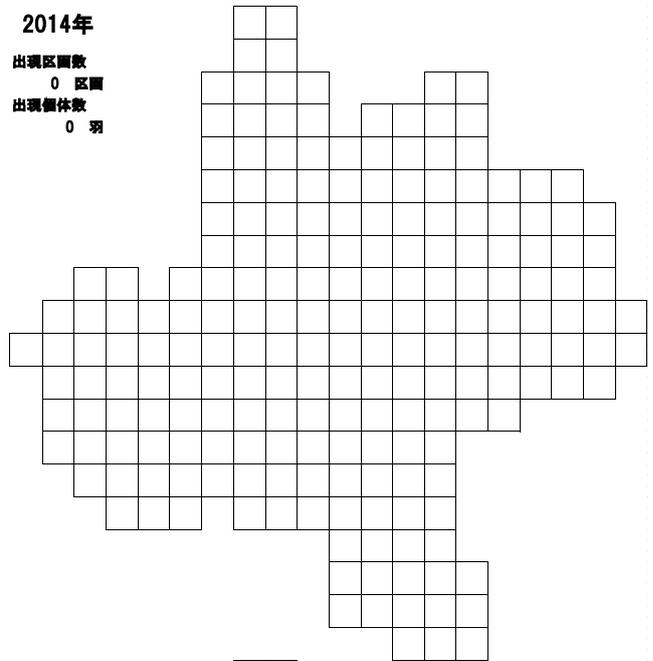
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



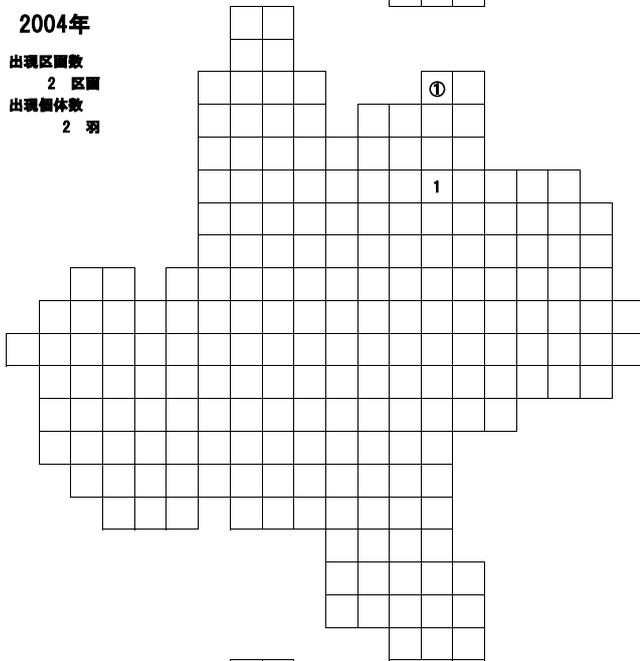
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



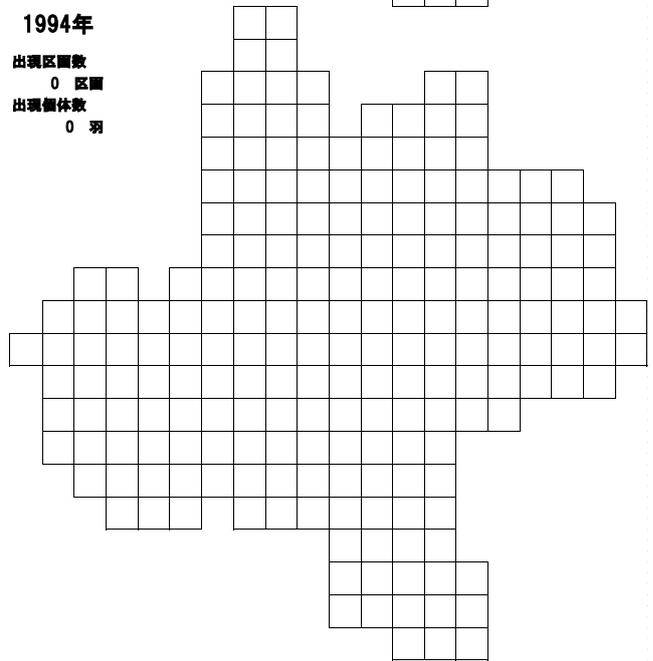
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



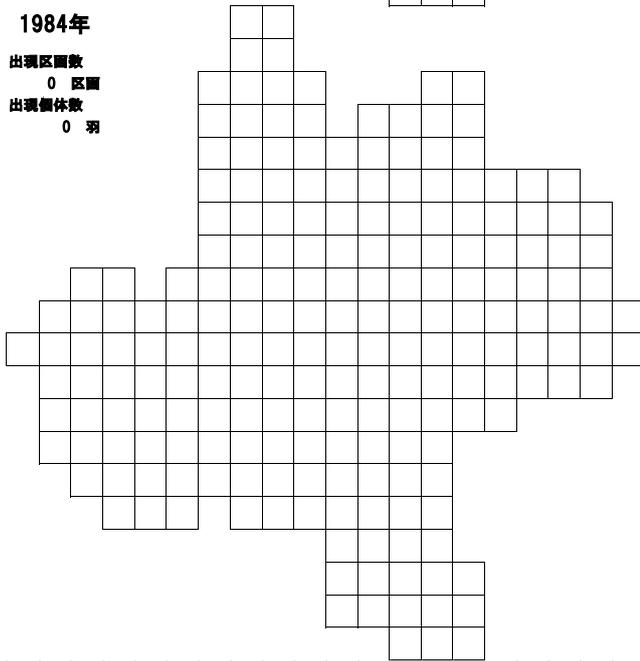
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 3. マガモ *Anas platyrhynchos*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	2	0	2
出現区画数	0	0	2	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	1.0	—	2.0

84年と94年は記録が無く、04年には2区画で2羽を記録したが14年は記録がなかった。24年は1区画で2羽を記録した。

本種は冬なら市域で普通にみられる種だが、関東地方で夏も見られるのは、日光など標高の高い地域に限られている。

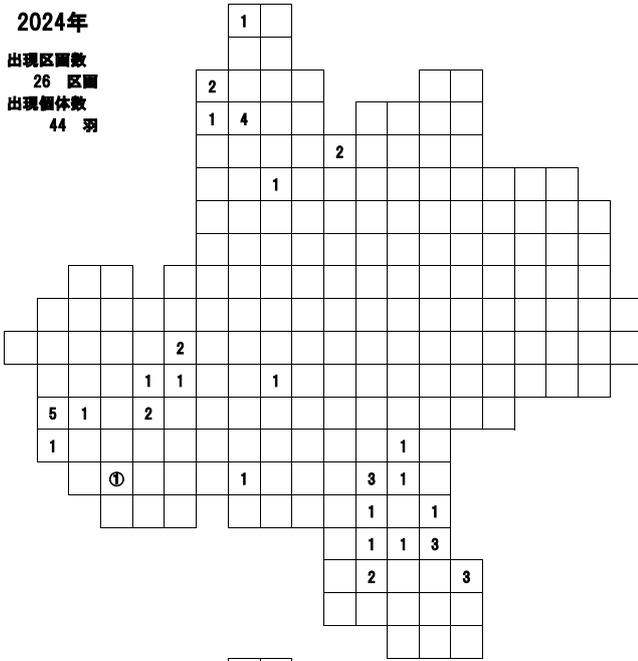
04年の記録は入間川と霞川、24年の記録は小谷田八津池公園での記録だが、これは、野外に放し飼いされていたアヒルが繁殖し、その中で生き残ったものの可能性もある。

通過鳥系として区分。

※No.83マルガモ、No.85アヒル参照

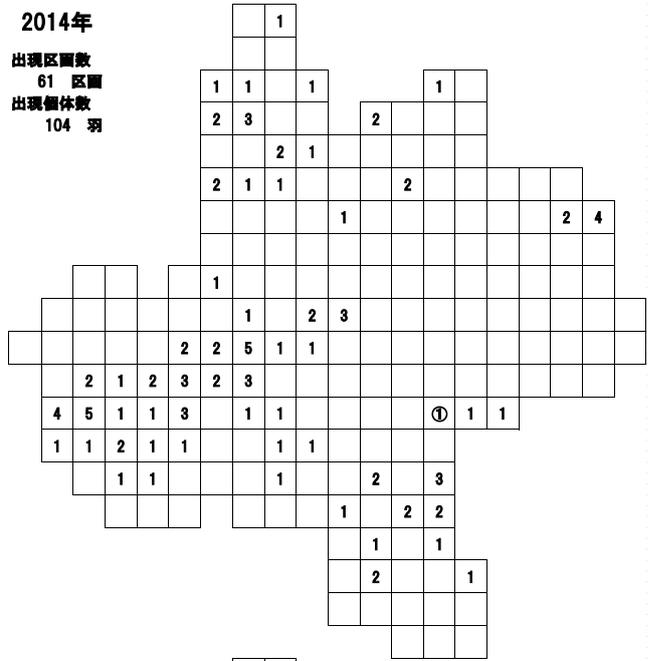
2024年

出現区画数  
26 区画  
出現個体数  
44 羽



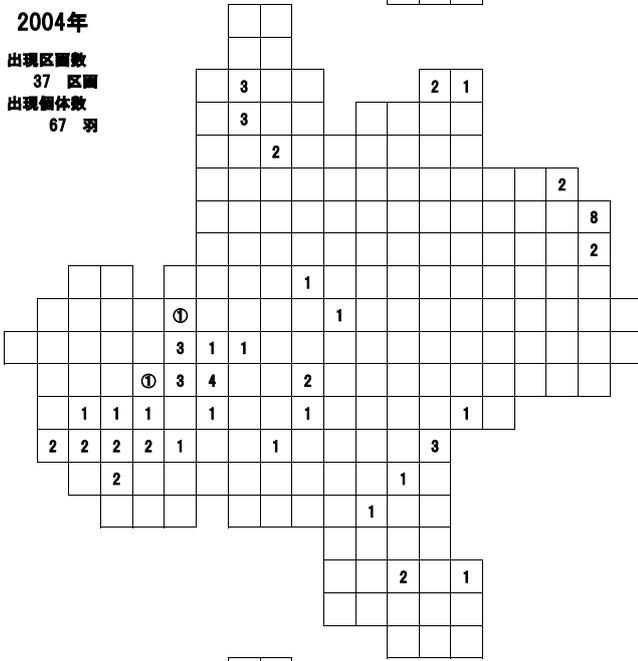
2014年

出現区画数  
61 区画  
出現個体数  
104 羽



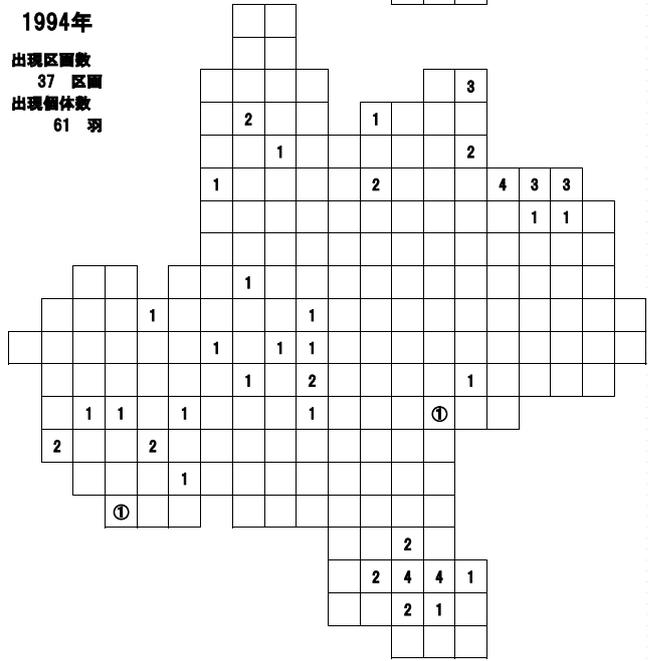
2004年

出現区画数  
37 区画  
出現個体数  
67 羽



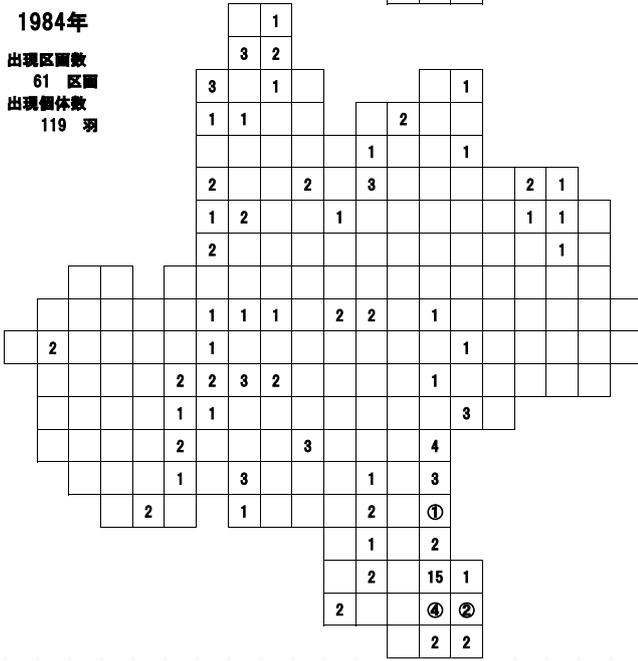
1994年

出現区画数  
37 区画  
出現個体数  
61 羽



1984年

出現区画数  
61 区画  
出現個体数  
119 羽



#### 4. キジ *Phasianus versicolor*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	119	61	67	104	44
出現区画数	61	37	37	61	26
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	1.6	1.8	1.7	1.7

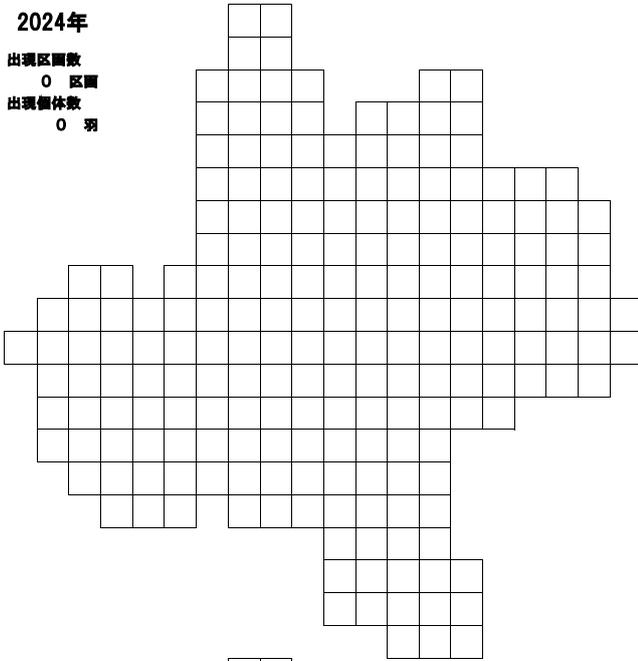
24年は26区画で44羽を記録。

萩野(1980)によると狭山丘陵で初めて本種を確認したのは1970年6月という。総個体数、出現区画数とも増減の変動が激しく、84年、14年に多く、翌年は二回とも半減している。これは放鳥による影響かもしれない(埼玉県では県内10ヵ所年間200羽放鳥している)。

本種は、疎林、農耕地、河川敷の草地など広がりのある環境に棲息している。丘陵地での減少は、明るい雑木林から暗い森林へと遷移したことによるものと思われる。留鳥系として区分。※No.83コジュケイ参照

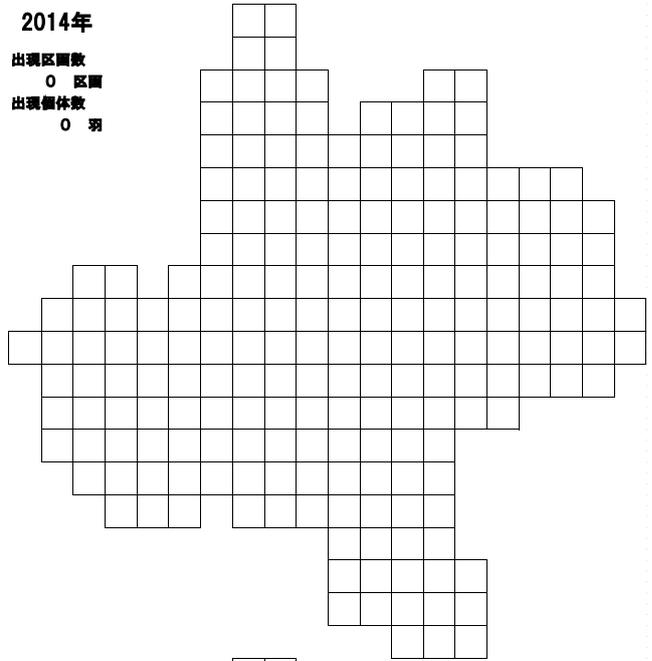
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



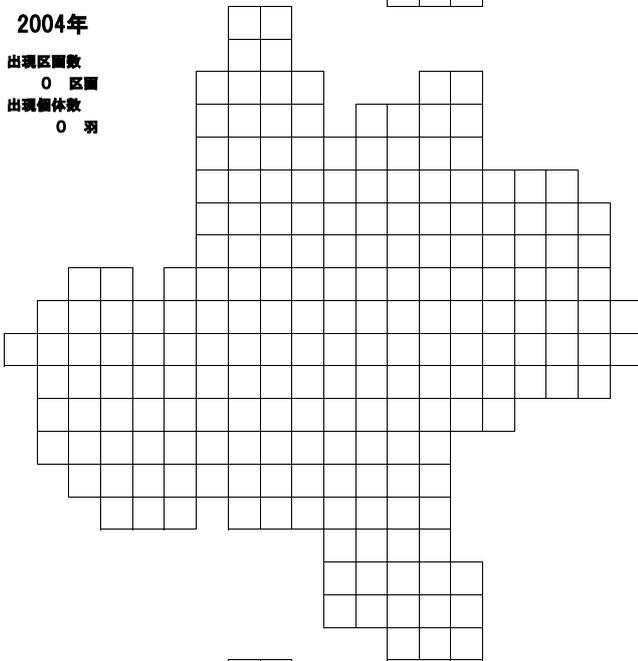
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



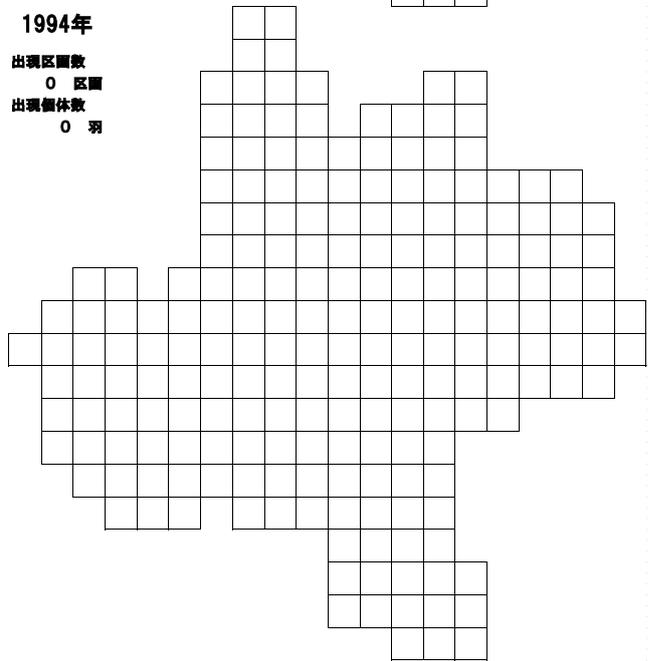
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



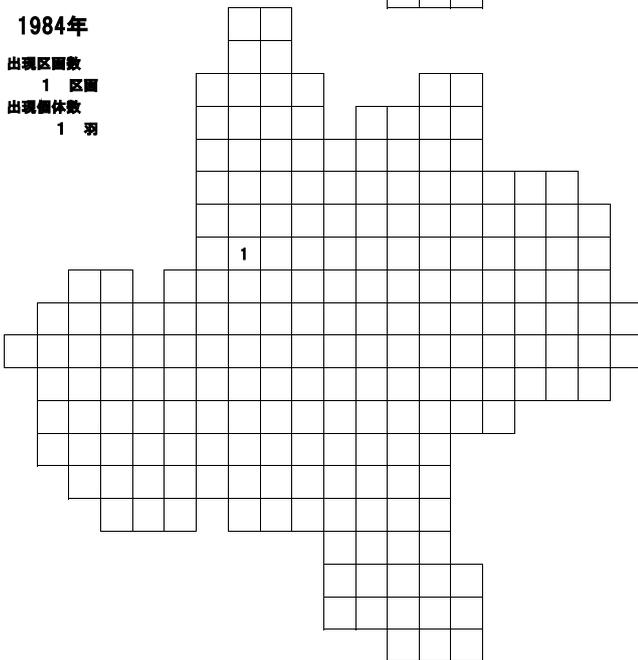
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



### 5. アマツバメ *Apus pacificus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	1	0	0	0	0
出現区画数	1	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	—	—	—	—

85年に1区画で1羽記録したが、94年以降24年まで、本調査では4回続けて記録されなかった。

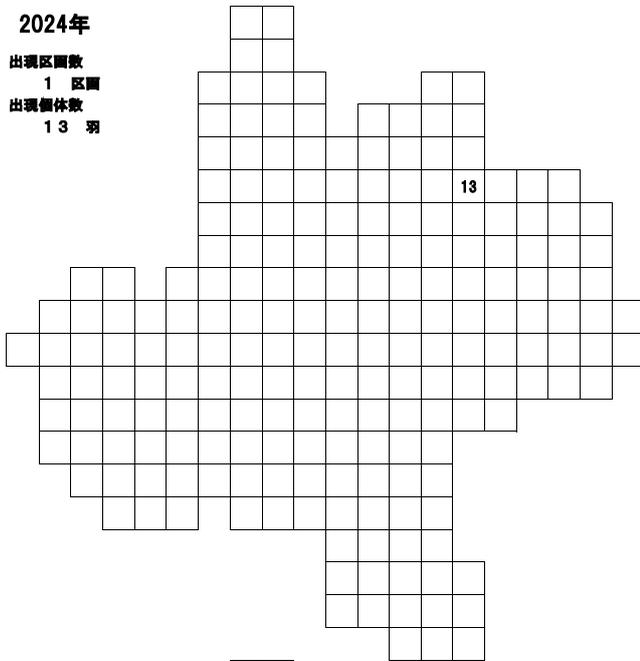
本種は日本に夏鳥として渡来し、海岸の崖地、山岳などの岩の割れ目に営巣する。

市域では4~6月の春、8~10月の秋の渡りの季節に上空を通過する姿を見られるが、本市及び周辺にも繁殖地は無いため、84年の記録は迷行記録と思われる。

通過鳥系として区分。

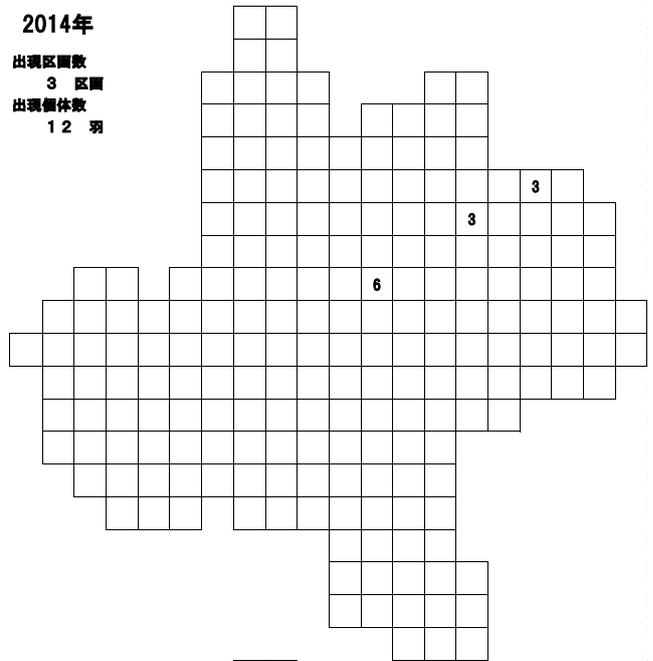
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
13 羽



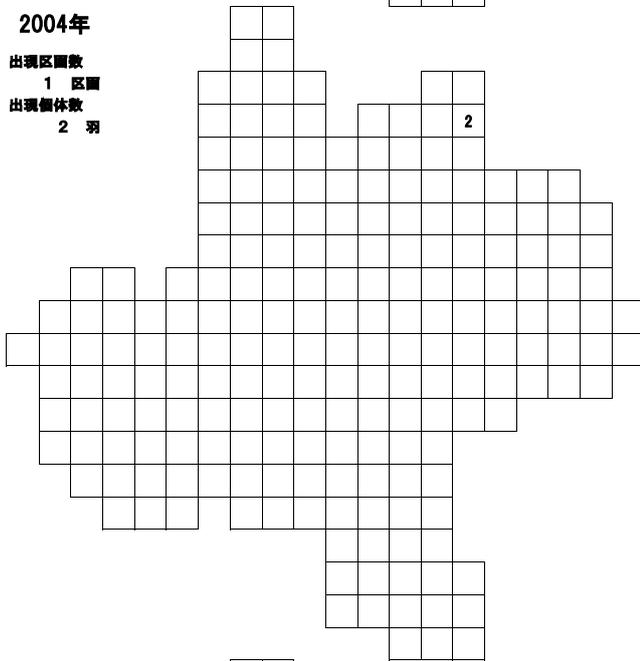
2014年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
12 羽



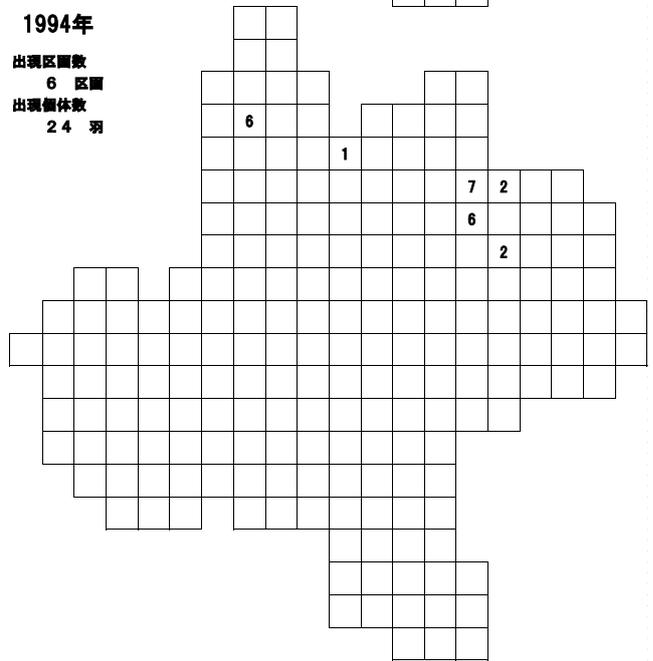
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



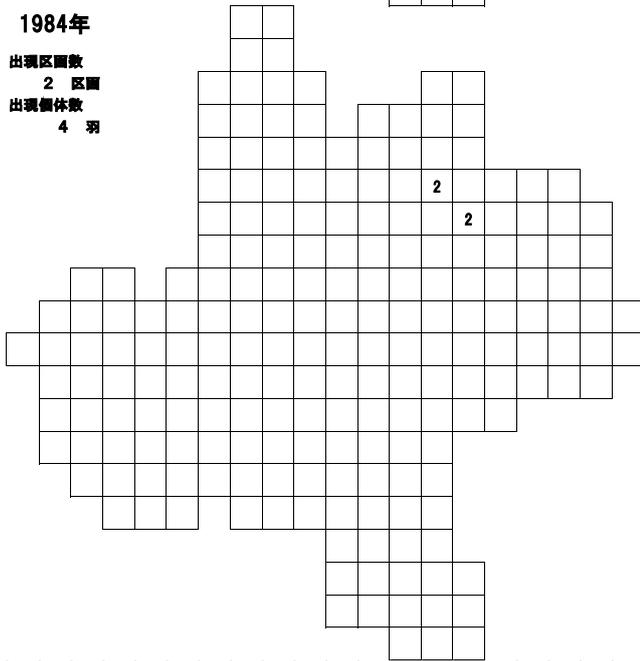
1994年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
24 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



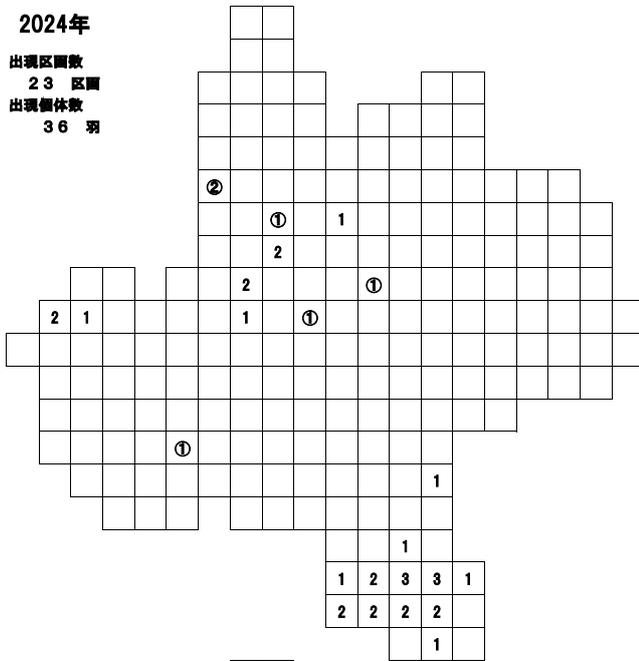
## 6. ヒメアマツバメ *Apus nipalensis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	4	24	2	12	13
出現区画数	2	6	1	3	1
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	4.0	2.0	4.0	13.0

24年は1区画で13羽を記録した。  
本調査歴代の報告書では、市役所庁舎のヒメアマツバメの数を発見時の79年12月31日が8羽、94年は80羽程度、04年8月12日は40羽以上と記載している。越冬するものもいて周年見られる。14年の調査では、市役所庁舎以外に霞川橋梁の天井で繁殖するものを記録した。記録個体数が少ないのは、本調査時刻が多数が見られる埦入りの時刻とずれているためと思われる。1980年代、本市のヒメアマツバメは、日本での最北の繁殖地として知られていた。留鳥系として区分。

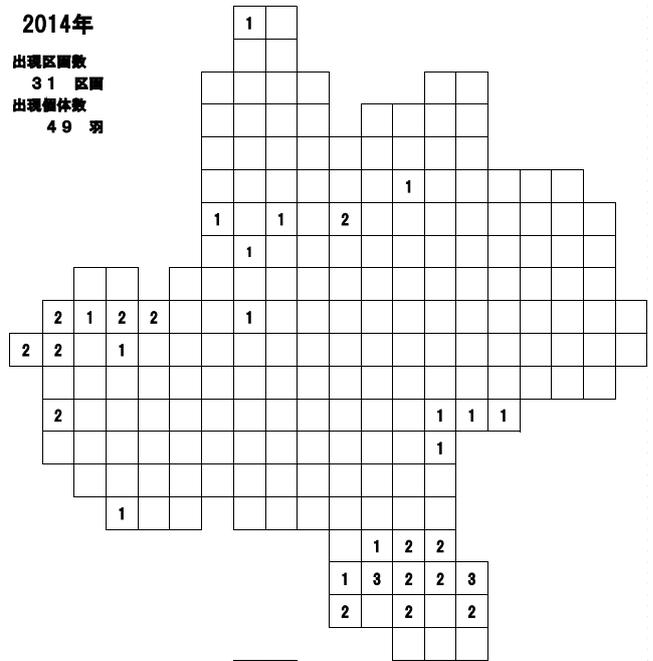
2024年

出現区画数  
23 区画  
出現個体数  
36 羽



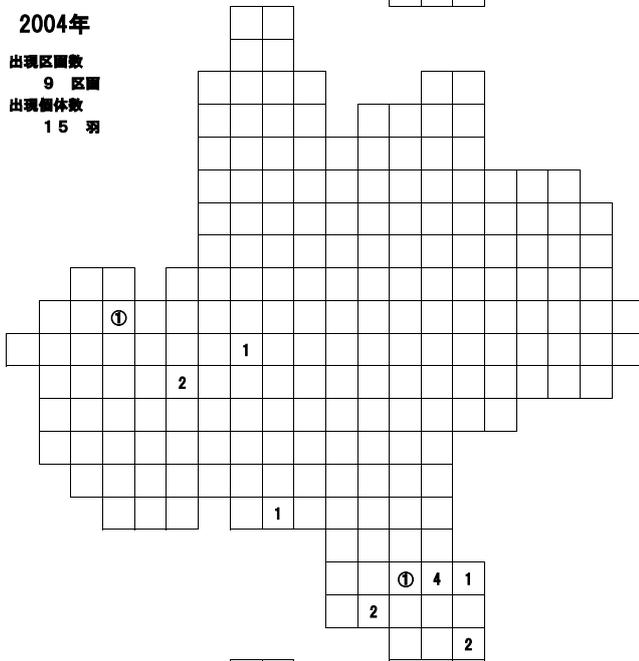
2014年

出現区画数  
31 区画  
出現個体数  
49 羽



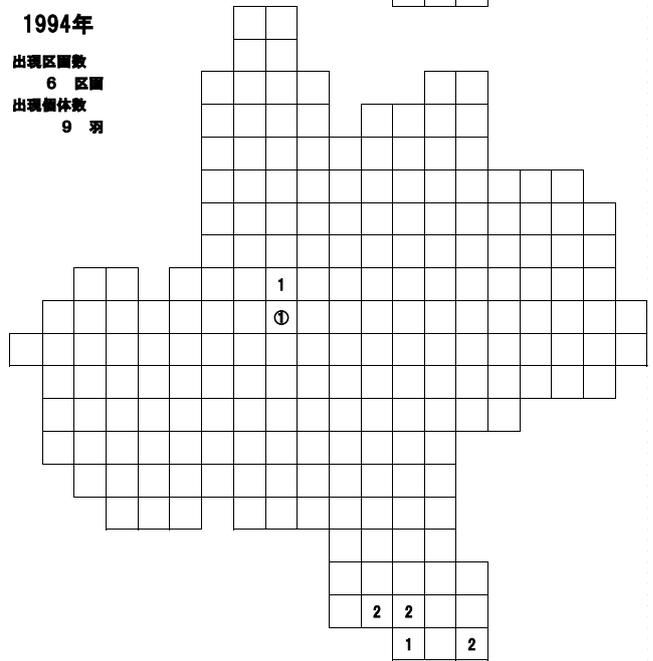
2004年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
15 羽



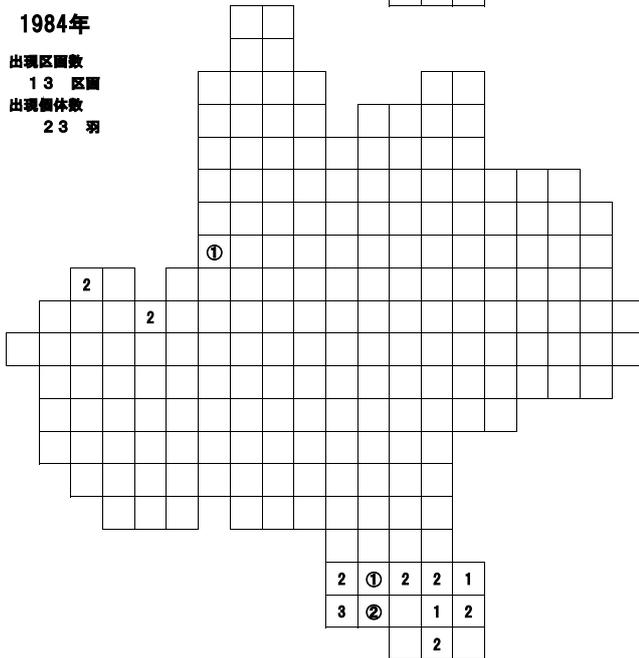
1994年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
9 羽



1984年

出現区画数  
13 区画  
出現個体数  
23 羽



## 7. ホトトギス *Cuculus poliocephalus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	23	9	15	49	36
出現区画数	13	6	9	31	23
出現一区画当たりの平均個体数	1.8	1.5	1.7	1.6	1.6

24年は23区画で36羽を記録した。

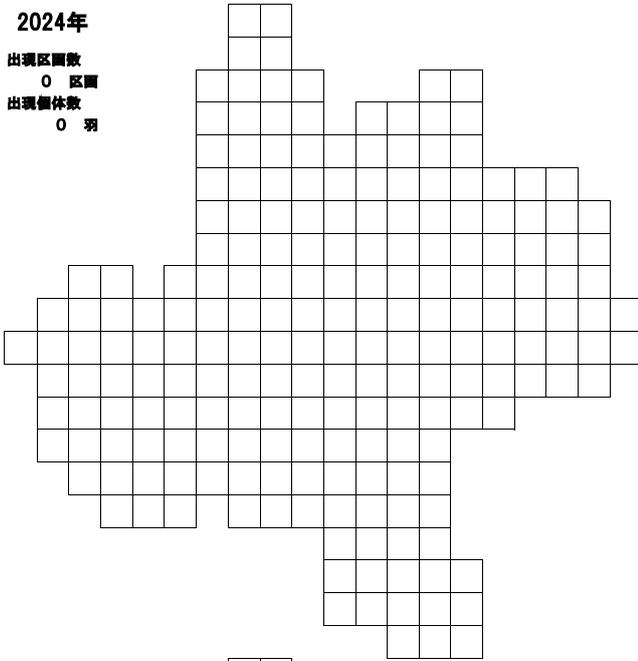
総個体数、出現区画数共に94年に減少、以降14年まで増加したが24年は減少した。

本種は托卵で繁殖するため、宿主であるウグイスの個体数が大きな影響をもつ。ウグイスは24年調査では平地にも進出し増加中であつたため、当面の本種の棲息環境は維持できるものと思われる。しかし、本種の主な生息地である丘陵の森林が、ナラ枯れで大きく変容していることには、注視する必要がある。

夏鳥系として区分。※No.56ウグイス参照。

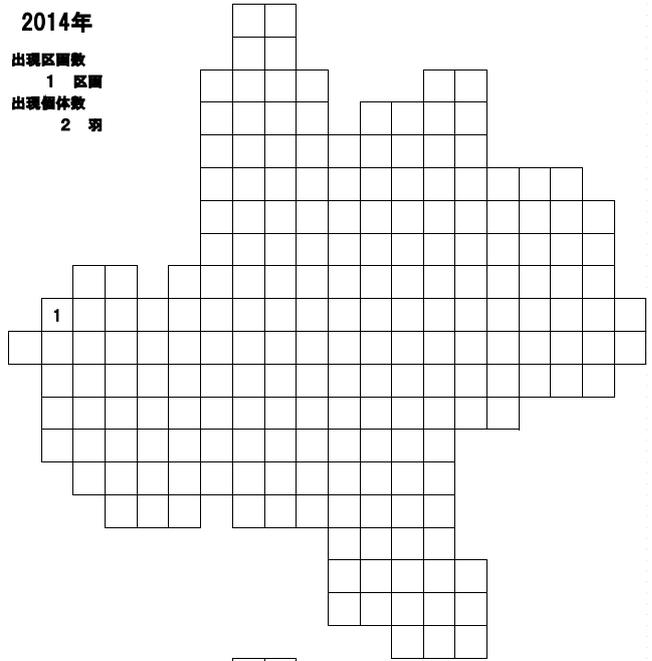
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



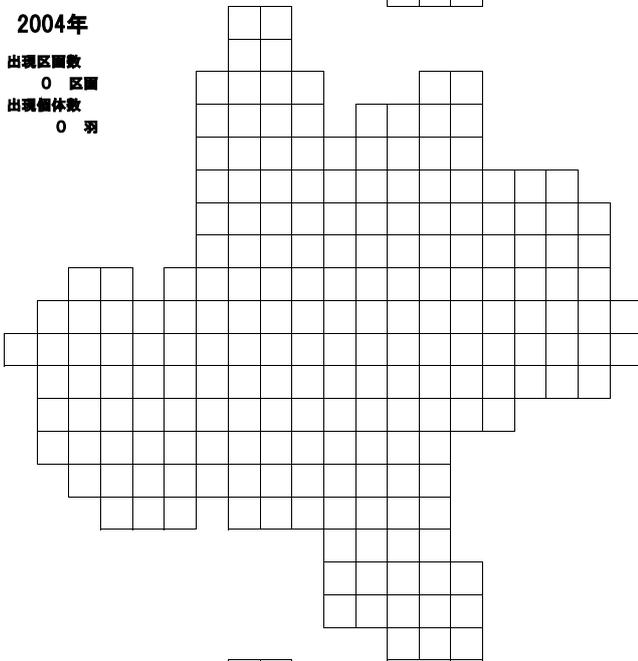
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



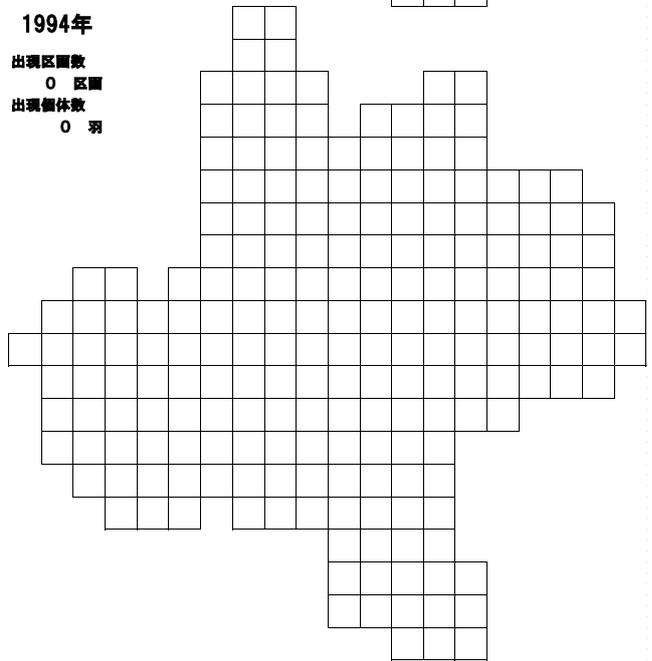
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



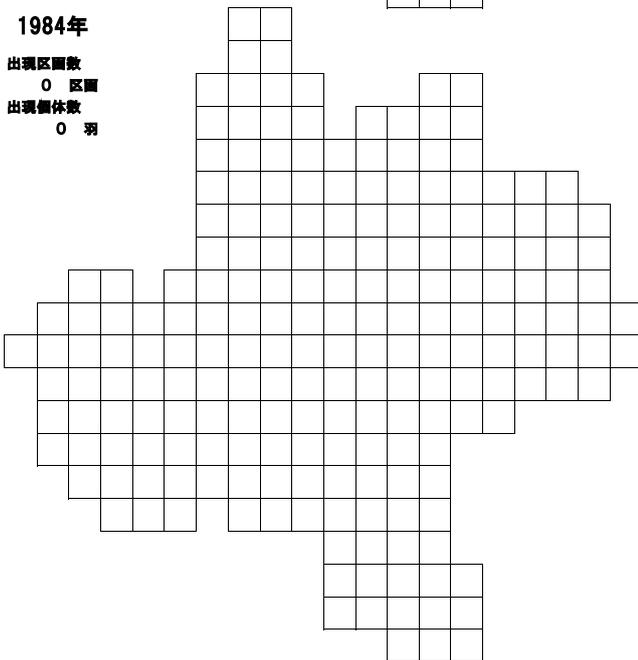
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 8. ツツドリ *Cuculus optatus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	2	0
出現区画数	0	0	0	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	2.0	—

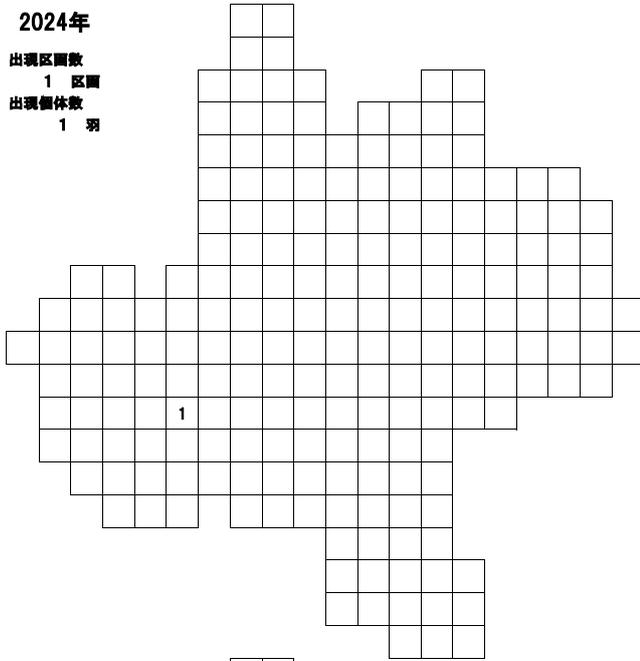
84年、94年、04年と記録されず14年に初めて1区画で2羽が記録され、24年は記録されなかった。

夏鳥として全国に渡来し、市域では春・秋の渡り時期に通過するものが少数見られている。本州では主にセンダイムシクイに托卵する。当地には本種が托卵するセンダイムシクイが棲息していないので、繁殖は考えられない。14年の記録は渡り途中の個体が記録されたものと思われる。

通過鳥系として区分。

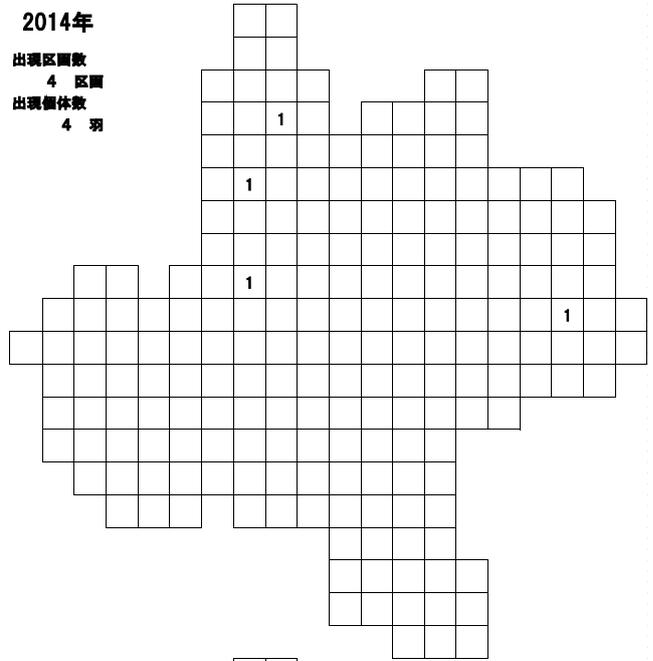
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



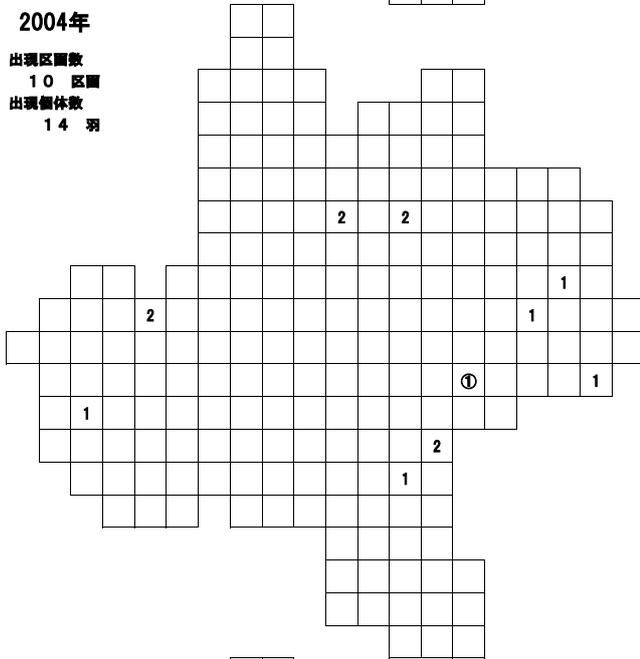
2014年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
4 羽



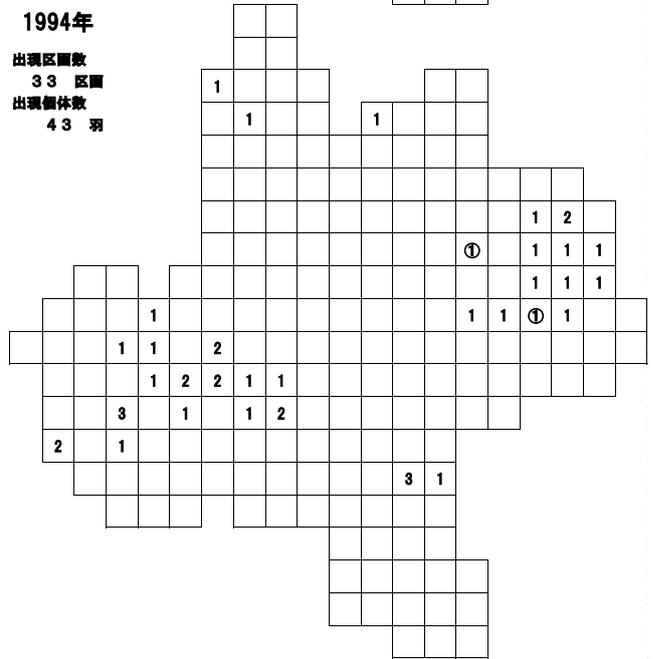
2004年

出現区画数  
10 区画  
出現個体数  
14 羽



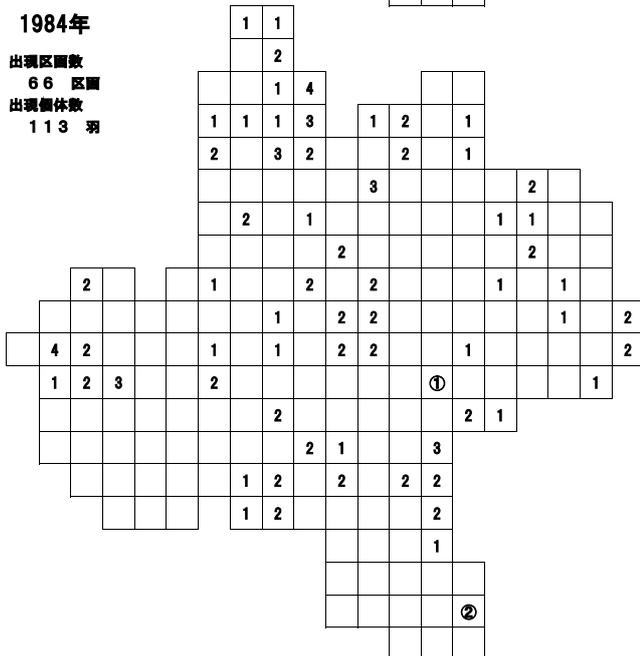
1994年

出現区画数  
33 区画  
出現個体数  
43 羽



1984年

出現区画数  
66 区画  
出現個体数  
113 羽



### 9. カッコウ *Cuculus canorus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	113	43	14	4	1
出現区画数	66	33	10	4	1
出現一区画当たりの平均個体数	1.7	1.3	1.4	1.0	1.0

24年は1区画で1羽を記録した。

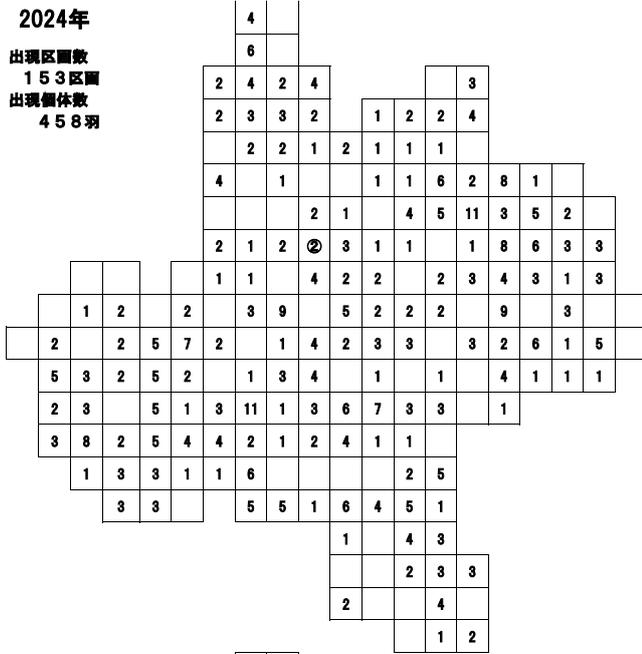
総個体数、出現区画数、一区画当たりの平均個体数とも84年を頂点に減少を続け、24年は1羽となった。

本種はモズ類、オオヨシキリ、ホオジロなどに托卵する。これら仮親になる種は、1980年、1990年代頃から個体数がたいへん減少している。そのことが本種の減少に大きく影響したものと考えられる。24年の記録は狭山ゴルフ場。

夏鳥系として区分。※No.43モズ、No.61オオヨシキリ、No.81.ホオジロ参照

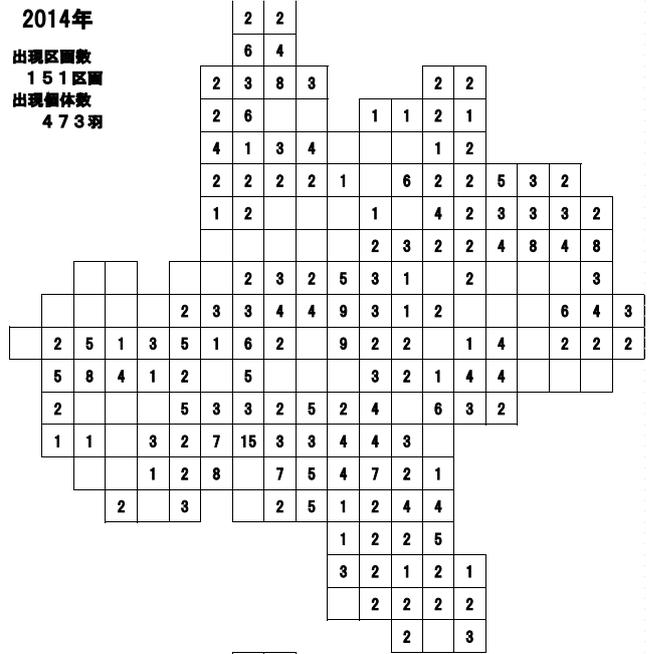
2024年

出現区画数  
153区画  
出現個体数  
458羽



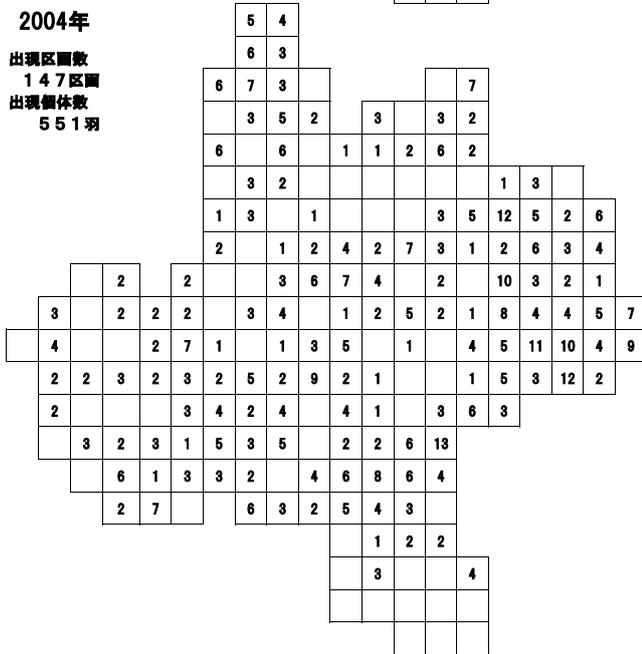
2014年

出現区画数  
151区画  
出現個体数  
473羽



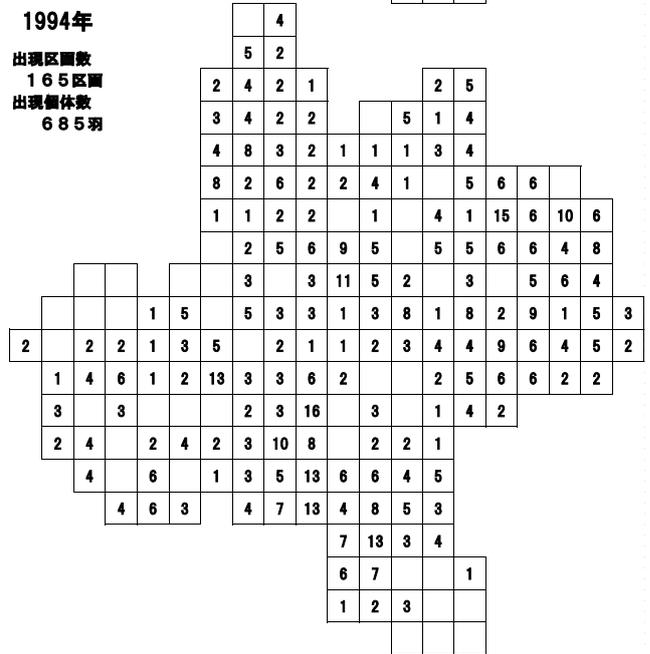
2004年

出現区画数  
147区画  
出現個体数  
551羽



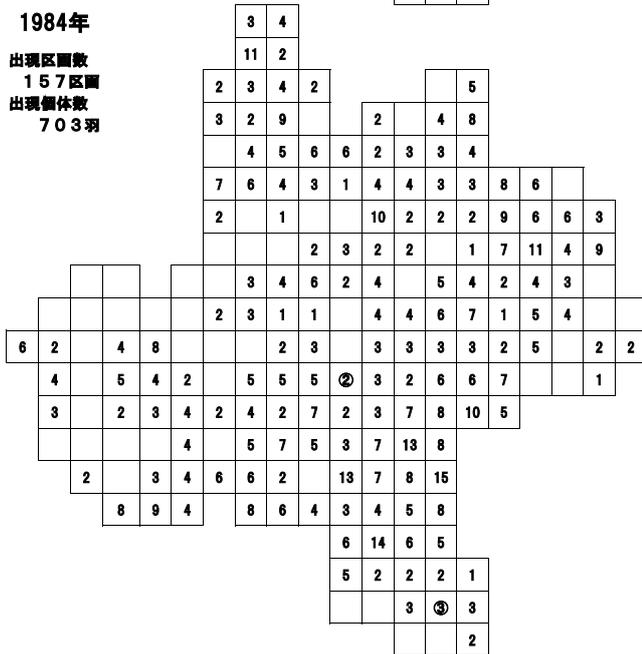
1994年

出現区画数  
165区画  
出現個体数  
685羽



1984年

出現区画数  
157区画  
出現個体数  
703羽



## 10. キジバト *Streptopelia orientalis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	703	685	551	473	458
出現区画数	157	165	147	151	153
出現一区画当たりの平均個体数	4.5	4.2	3.7	3.1	3.0

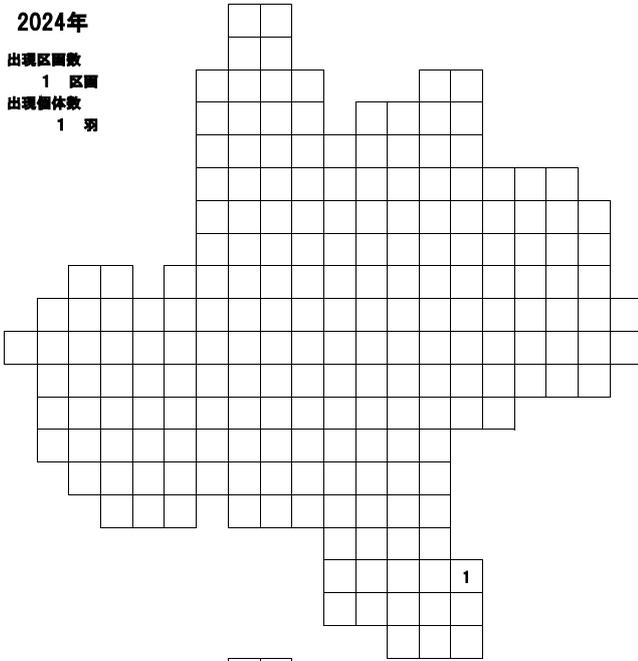
24年は153区画で458羽を記録。

市域のほぼ全体に分布し、205区画の4分の3程の区画で出現している。丘陵地の林よりも公園・住宅・街路樹などに多い。

総個体数は84年を頂点に減少を続け、24年には34.9%減少している。一区画当たりの平均個体数も同様な傾向で、84年比較し24年には33.3%減少している。一方、出現区画数は、84年から24年までほぼ安定していることから、総個体数減少の要因は、一区画当たりの平均個体数(生息密度)の低下が影響したものと考えられる。留鳥系として区分。

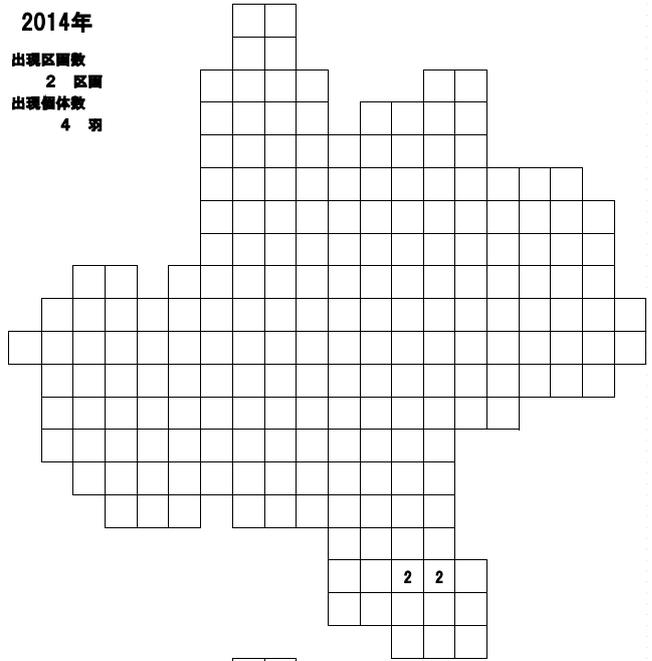
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



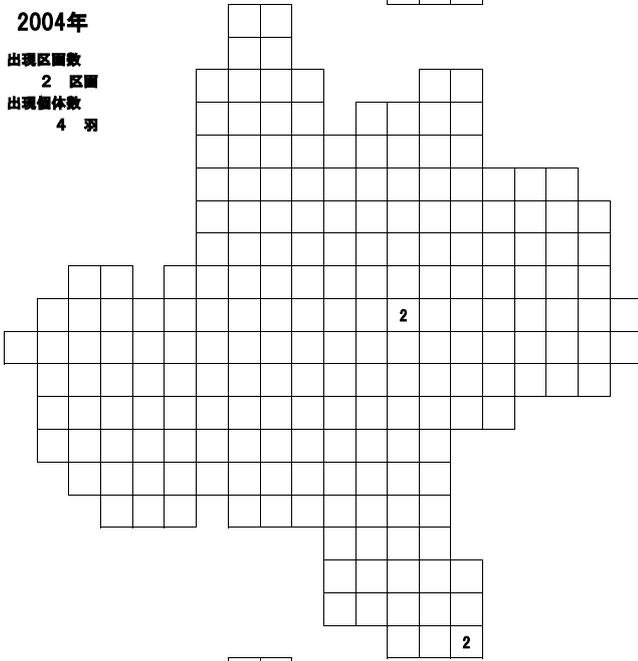
2014年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



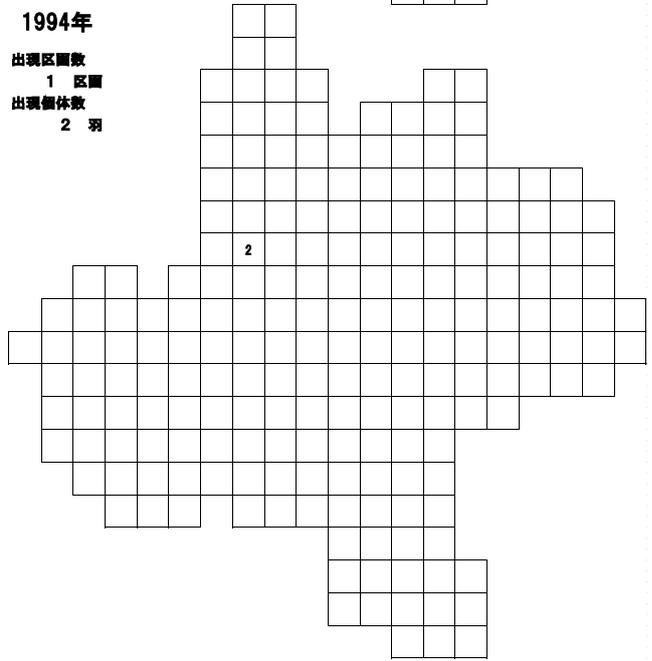
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



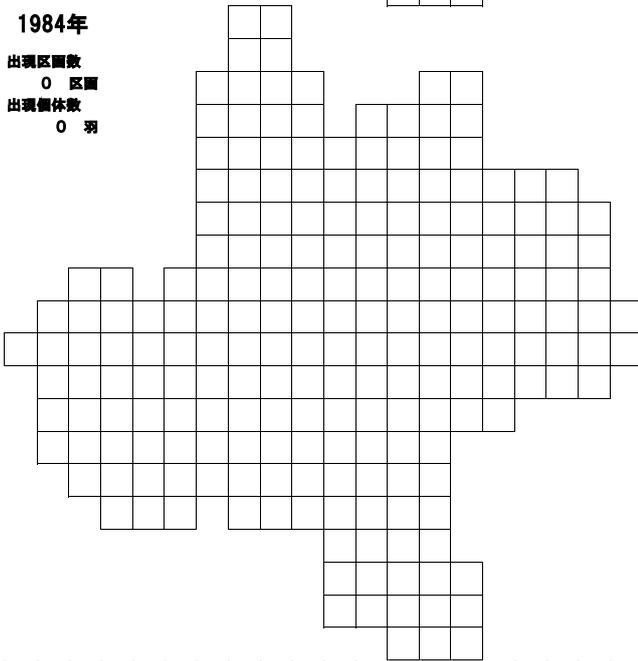
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 11. アオバト *Treron sieboldii*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	2	4	4	1
出現区画数	0	1	2	2	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	2.0	2.0	2.0	1.0

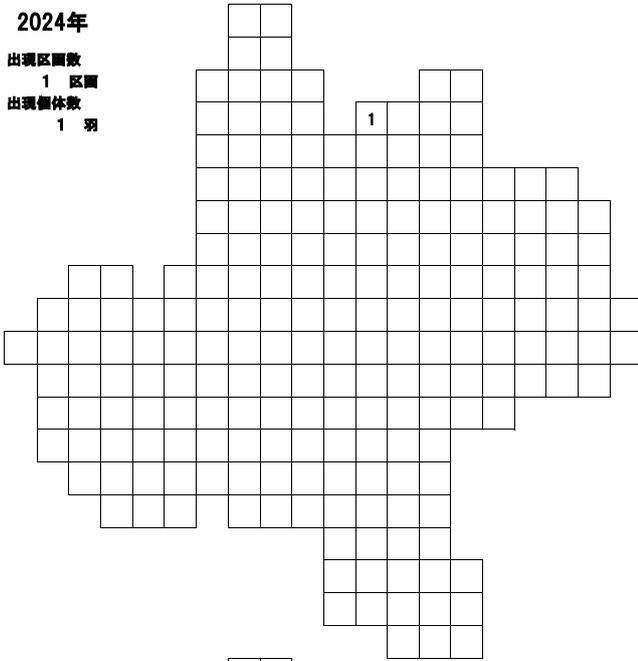
94年から少数が記録されるようになった。24年は1区画で1羽を記録した。

丘陵地の雑木林が50年以上放置され、大木のある広葉樹林に成長してきたため記録されるようになったものと思われる。しかし、近年その大木が、ナラ枯れ（カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌によっておこる）によって倒れ、そのまま放置された面積が広がっている。鳥類にとっても何らかの影響があるものと思われる。今後注視していく必要がある。

通過鳥系として区分。

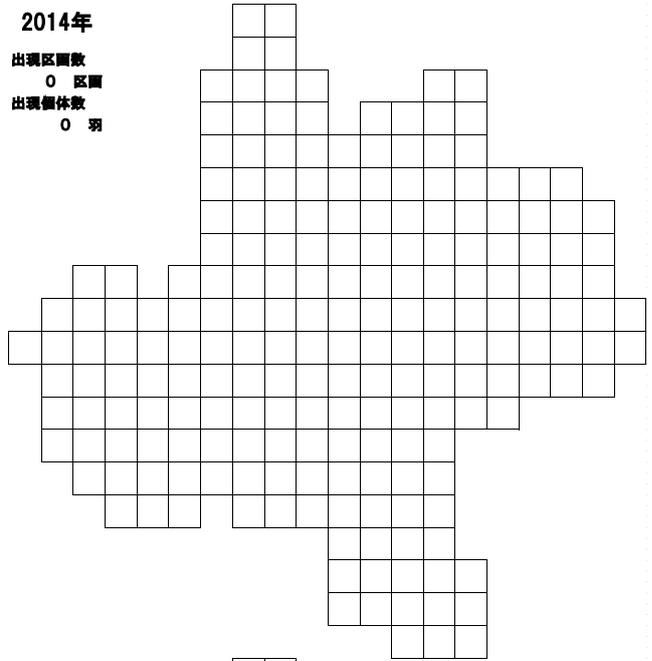
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



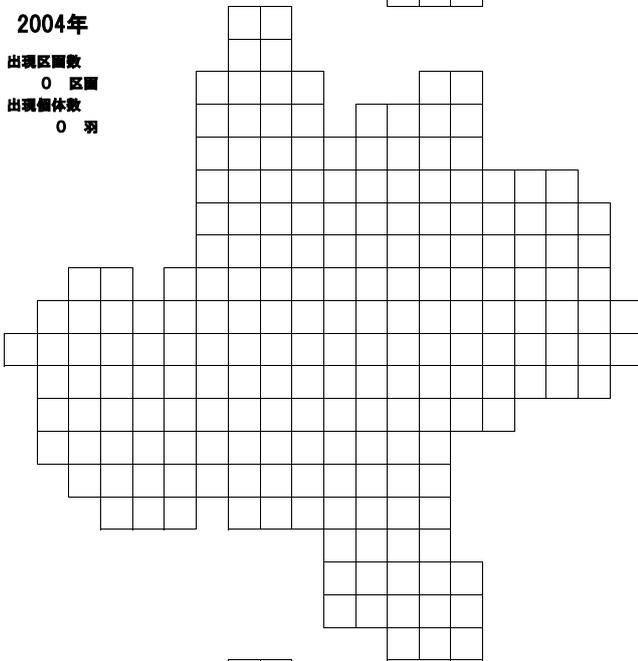
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



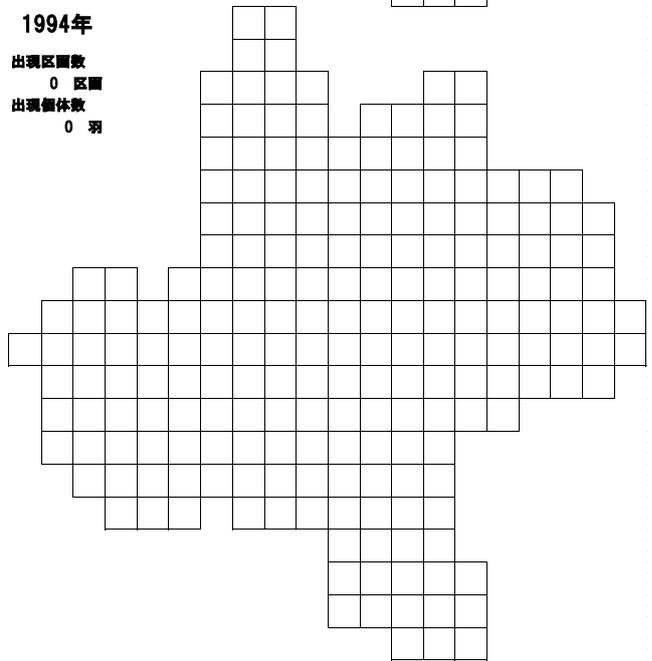
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



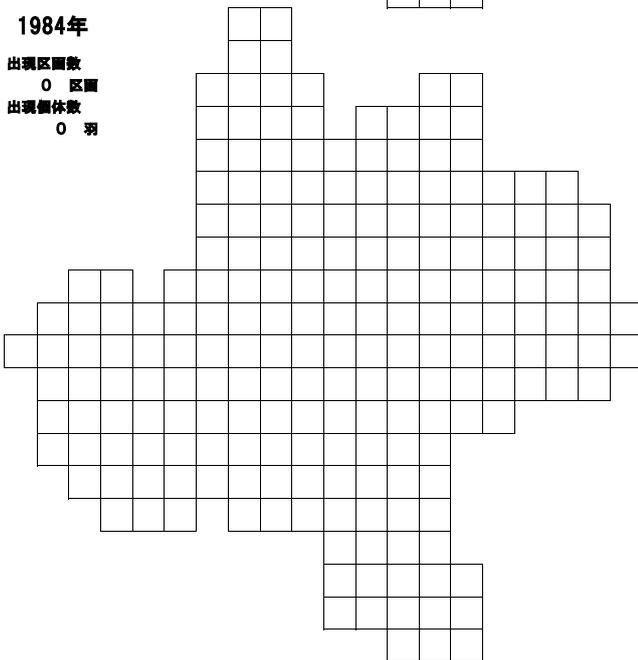
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



## 12. クイナ *Rallus indicus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	0	1
出現区画数	0	0	0	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	1.0

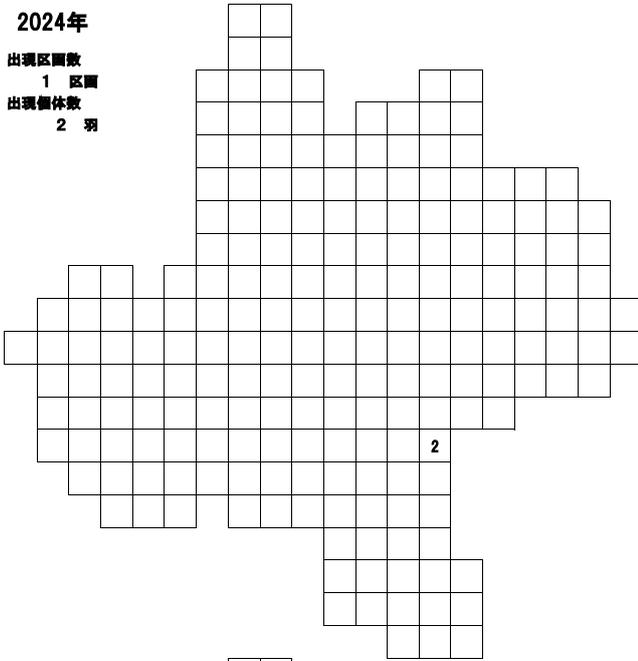
24年に初めて1区画で1羽を記録した。本種は冬鳥として日本に渡来する。日本では北海道や本州北部では繁殖するものもいる。

市域では、冬に入間川や狭山丘陵で少数の記録があるが、繁殖の可能性はないことから、稀な記録と思われる。24年の記録は、入間川河川敷。

通過鳥系として区分。

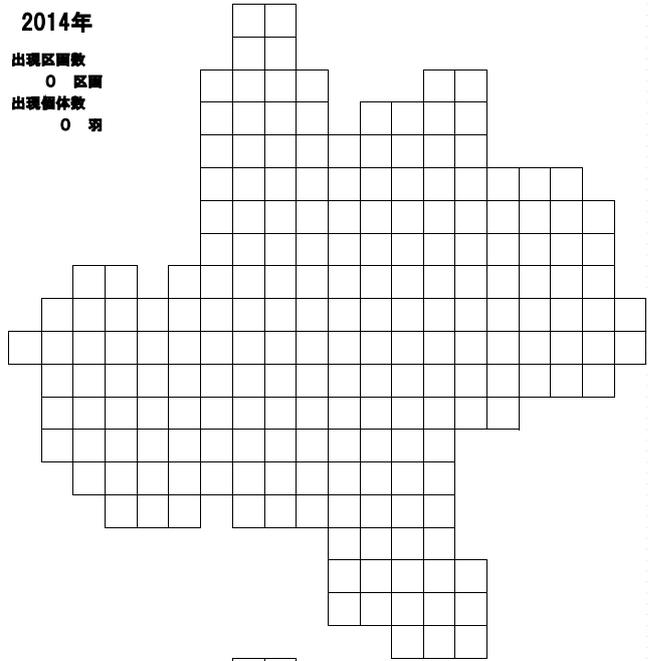
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



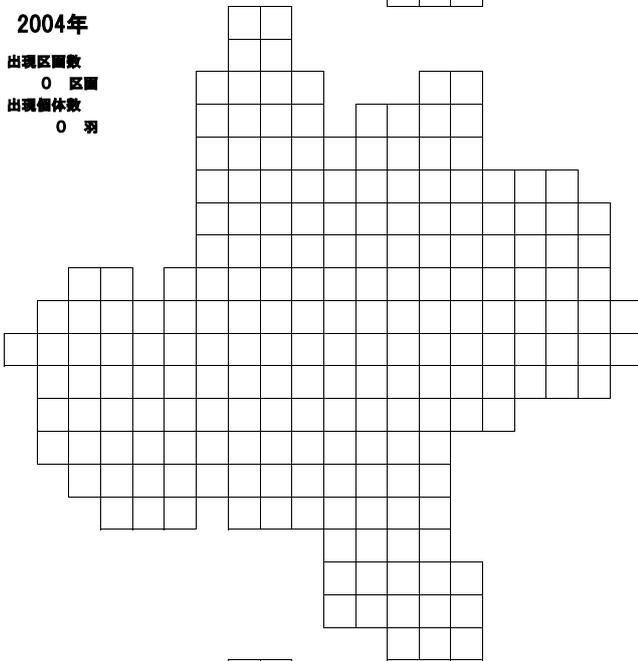
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



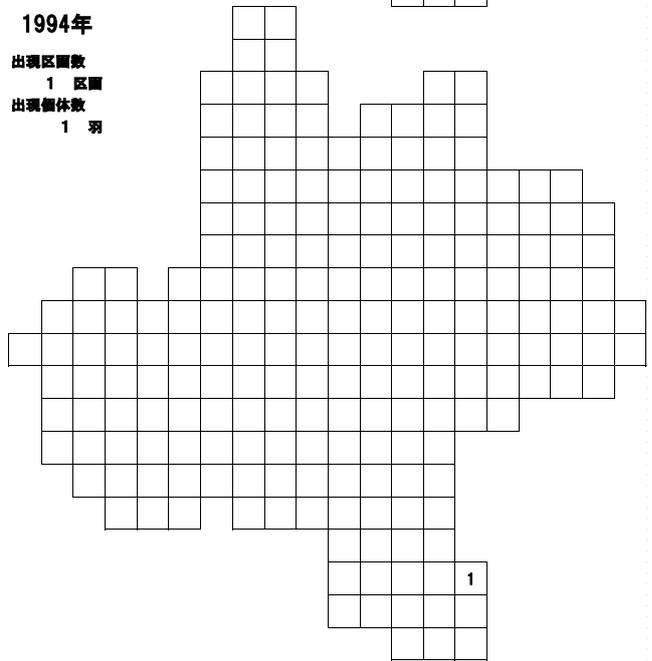
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



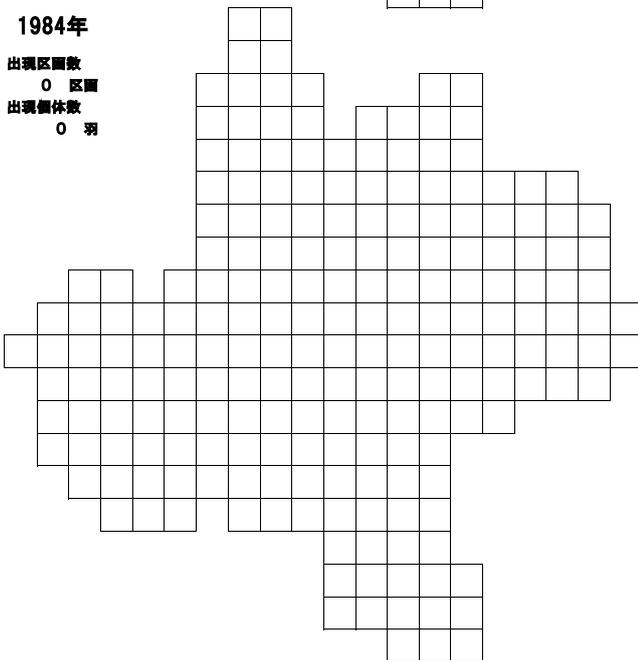
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 13. ヒクイナ *Zapornia fusca*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	1	0	0	2
出現区画数	0	1	0	0	1
出現一区画当たりの平均羽数	—	1.0	—	—	2.0

94年に1区画で1羽の記録、84年、04年、14年には記録が無く、24年は1区画2羽を記録した。

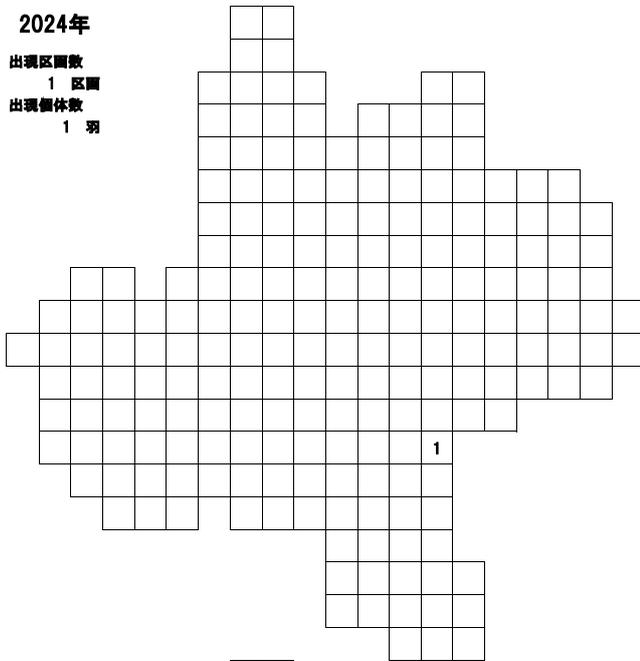
本種は、夏鳥として日本に渡来し、ほぼ全国で繁殖している。

市域には浅い水辺がほとんどない(例：水田が無い)ことから、稀な記録と思われるが、入間川、狭山丘陵、大森調整池などに少数の記録がある。24年の記録は、大森調整池。

夏鳥系として区分。

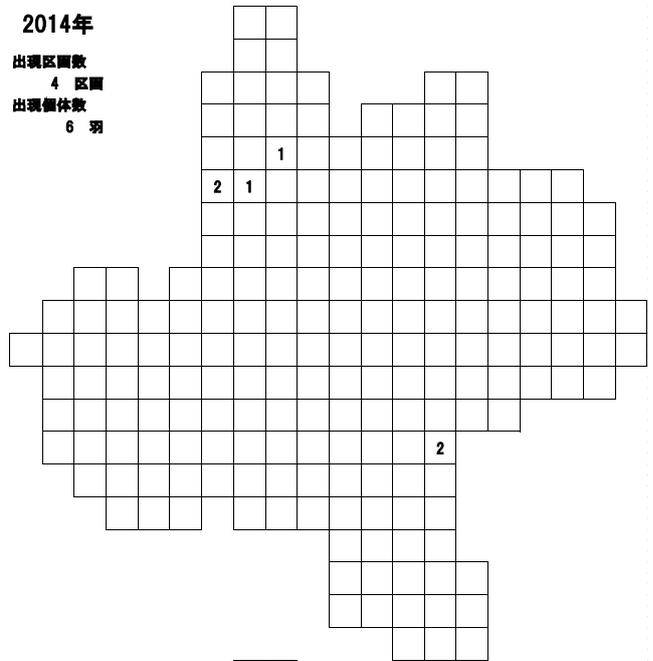
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



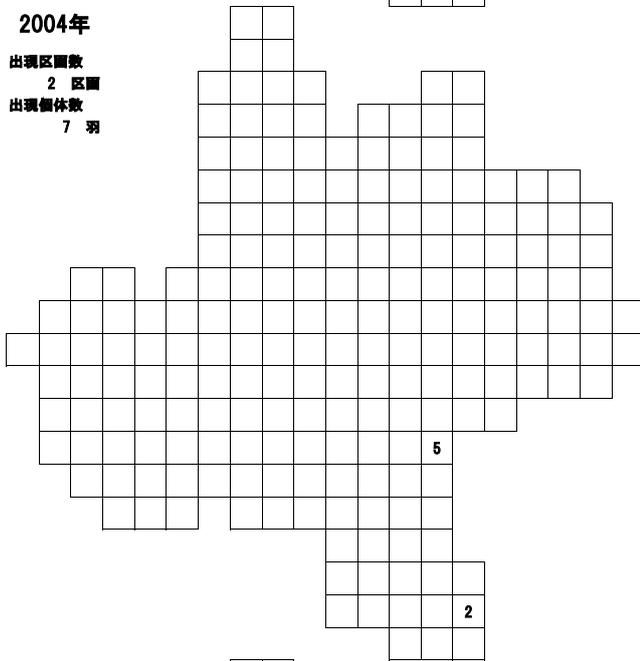
2014年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
6 羽



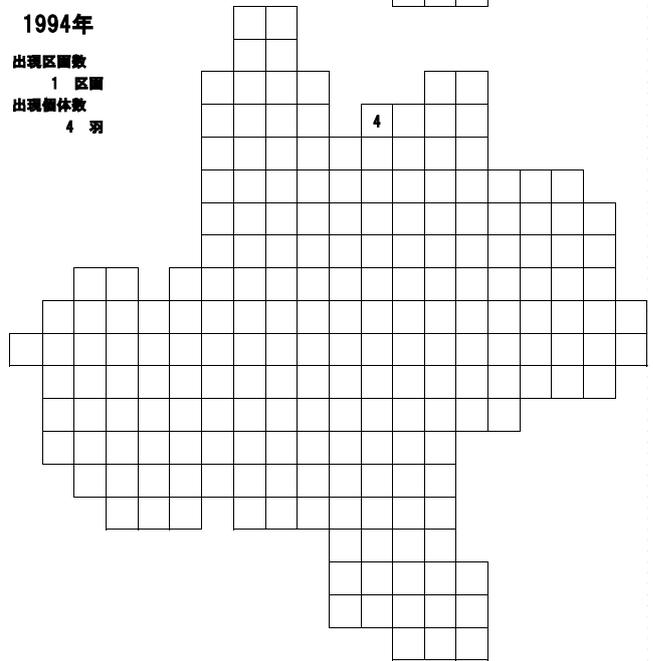
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
7 羽



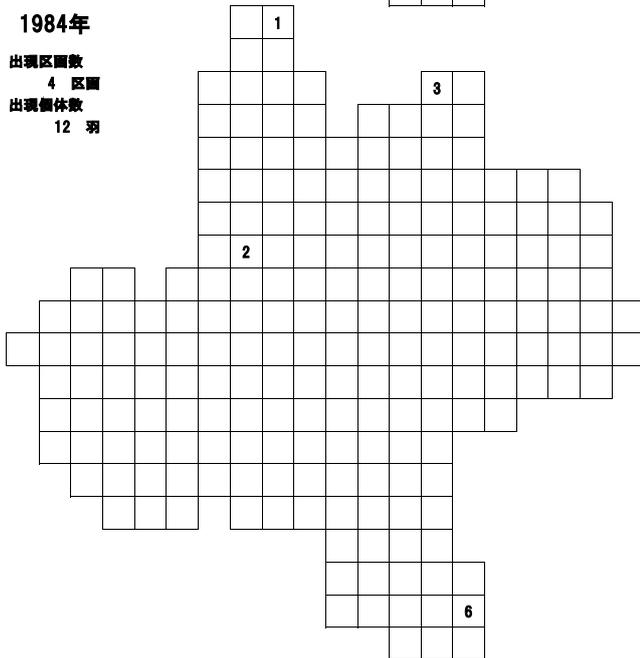
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
4 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
12 羽



#### 14. カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	12	4	7	6	1
出現区画数	4	1	2	4	1
出現一区画当たりの平均個体数	3.0	4.0	3.5	1.5	1.0

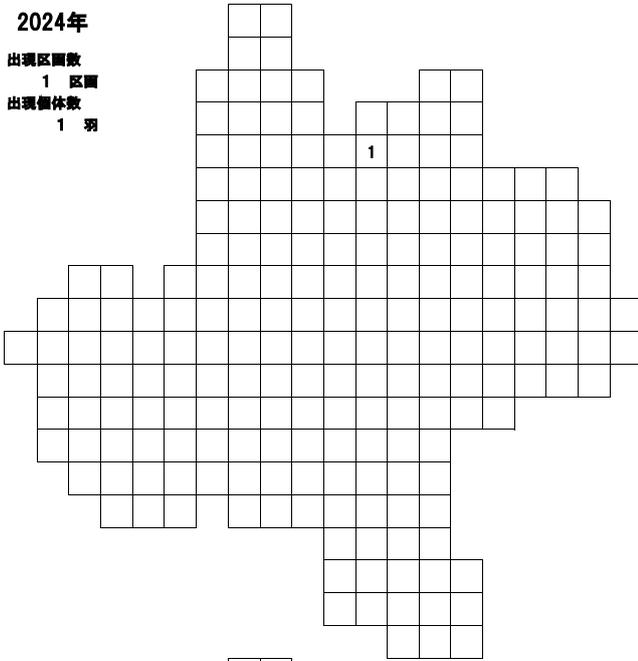
24年は1区画で1羽を記録した。

本種は流れが無く水草が繁茂した池沼で営巣する。市域では過去に入間川や狭山湖、大森調整池などで繁殖例があり、他に入間川放水橋上流や笹井ダム上流などでも周年見られてきた。しかし、24年の記録は大森調整池一か所のみとなっている。

94年からの個体数減少の原因は、棲息環境の減少だけでなく、1980年代頃からのコサギやゴイサギ、2000年代頃からのアオサギやカワウなどの魚食性鳥類の増加の影響も考えられる。留鳥系として区分。

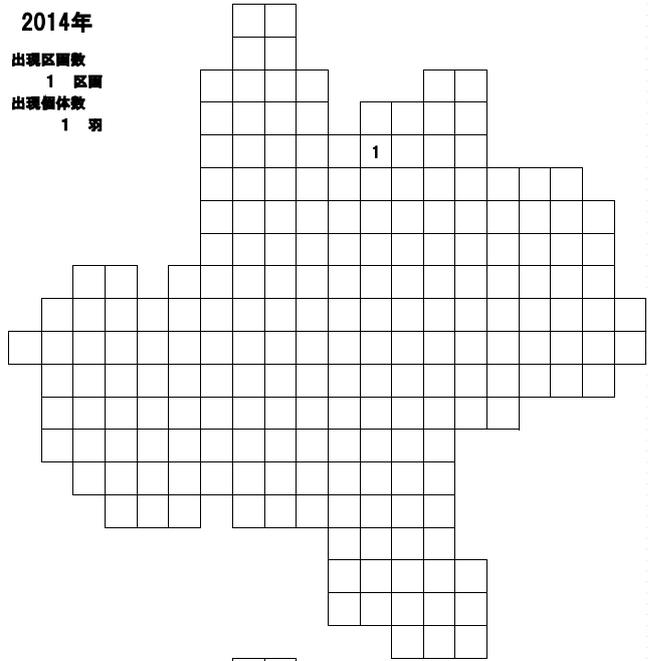
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



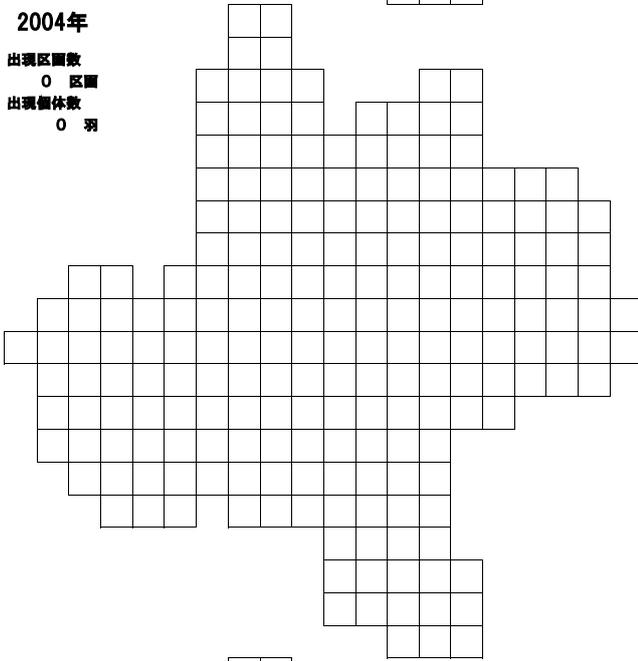
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



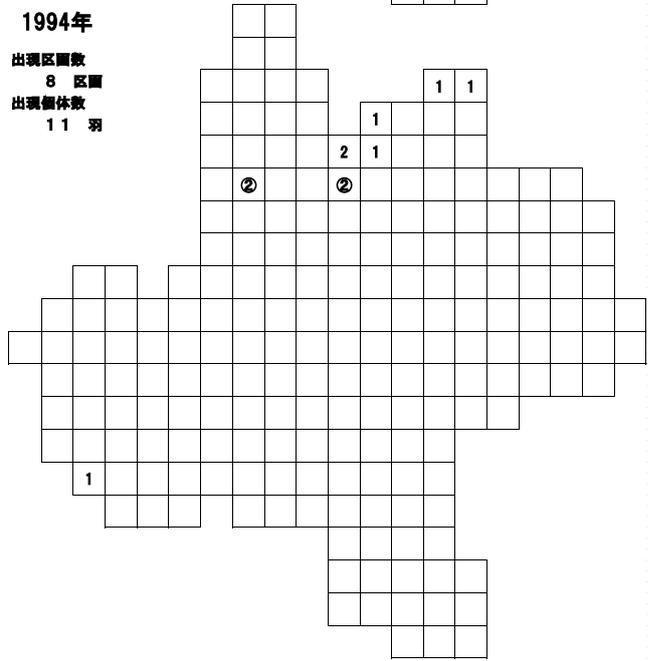
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



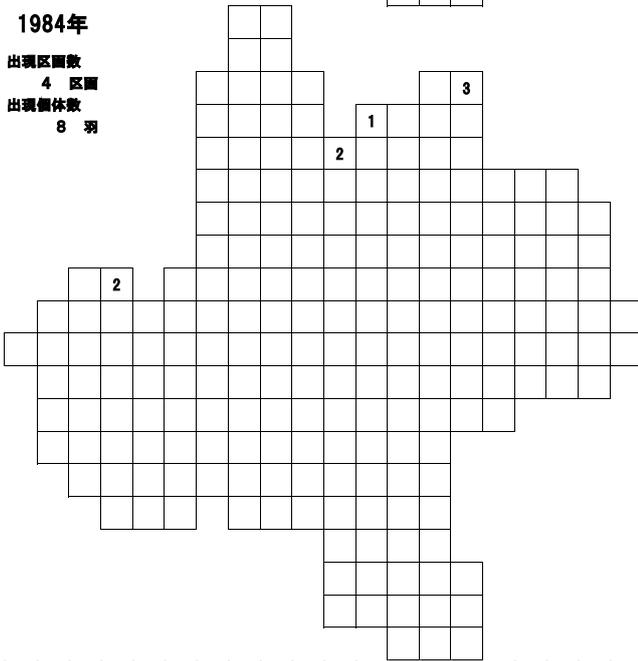
1994年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
11 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
8 羽



### 15. イカルチドリ *Charadrius placidus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	8	11	0	1	1
出現区画数	4	8	0	1	1
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	1.4	—	1.0	1.0

24年は1区画で1羽を記録した。

これまでの記録の大半は入間川の河川敷。本種は台風などの増水によって植生が剥ぎ取られ、砂利が広く露出した場所に営巣する。川幅が狭く河川敷のない霞川は、好まれていないものと思われる。

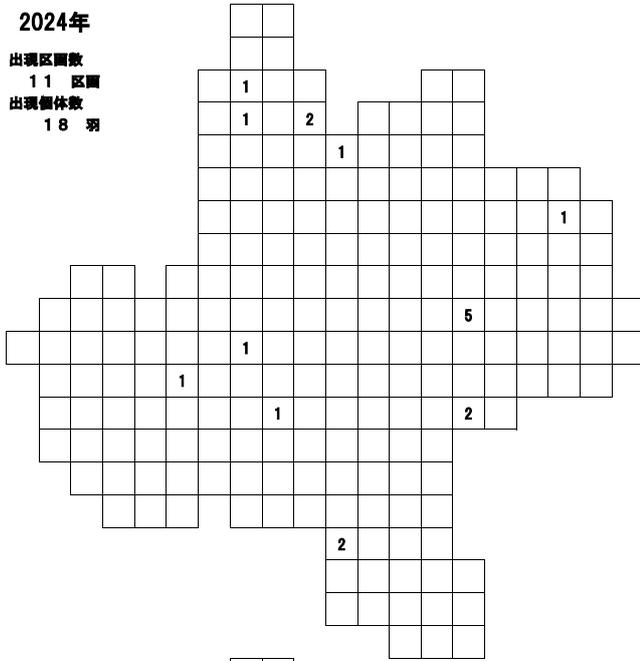
河川から離れた陸地（工場敷地や荒地など）にも進出したコチドリと違い、水辺からは離れて棲息していない。

留鳥系として区分。

※No.16コチドリ参照

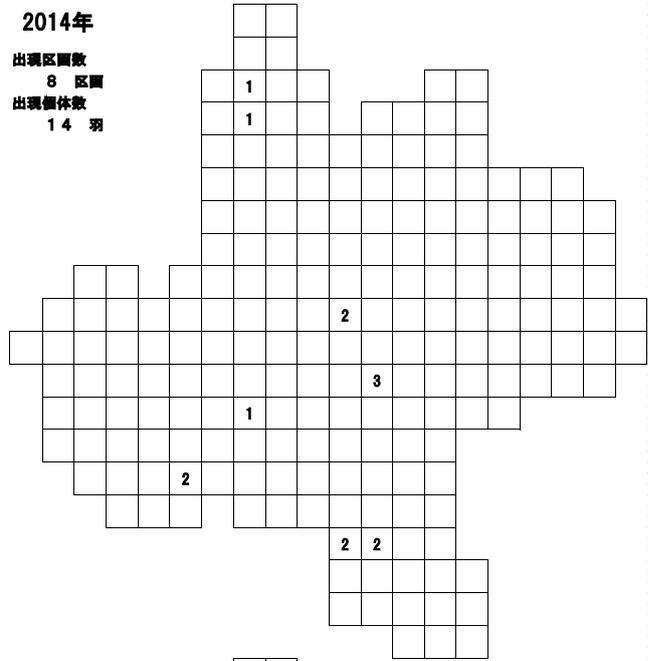
2024年

出現区画数  
11 区画  
出現個体数  
18 羽



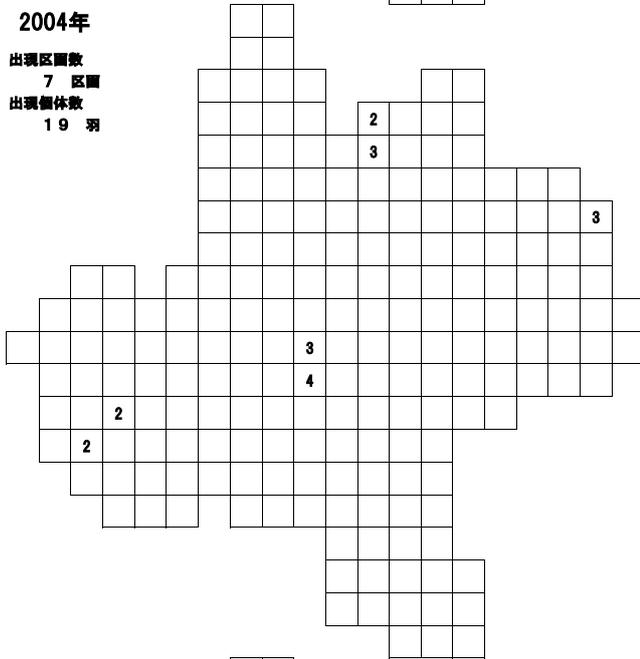
2014年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
14 羽



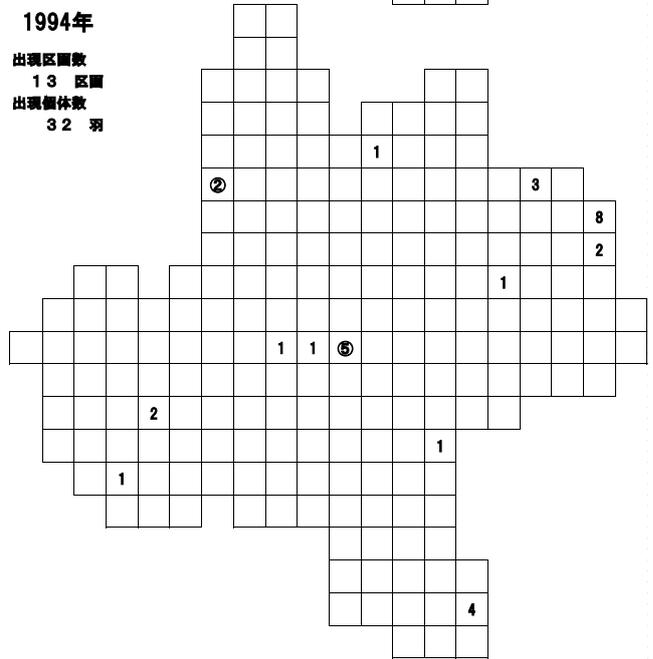
2004年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
19 羽



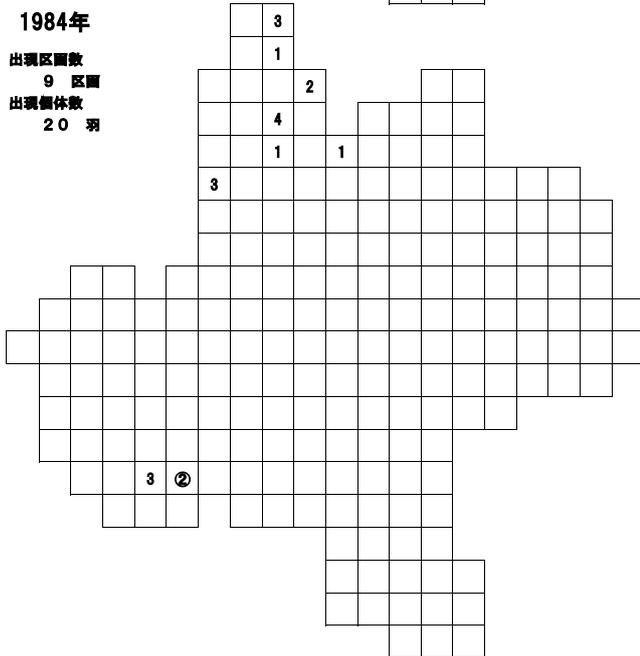
1994年

出現区画数  
13 区画  
出現個体数  
32 羽



1984年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
20 羽



## 16. コチドリ *Charadrius dubius*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	20	32	19	14	18
出現区画数	9	13	7	8	11
出現一区画当たりの平均個体数	2.2	2.5	2.7	1.8	1.6

24年は11区画で18羽を記録。

総個体数は、94年の32羽を頂点に山型の推移。現在は減少傾向が緩やかになっている。

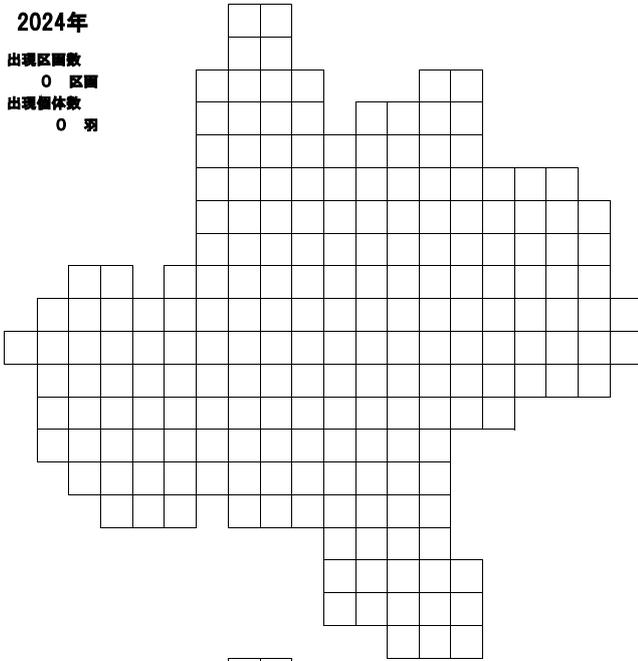
24年の記録は、入間川河川敷1羽、工場敷地6羽、入間基地内1羽、グラウンド2羽、農耕地（内にある荒れ地など）8羽で、イカルチドリとは対照的な河川を離れた陸地が圧倒的に多かった。このような土地は、本種の恒久的な棲息地として保全されていないので、今後も注視していく必要がある。

夏鳥系として区分。

※No.15イカルチドリ参照

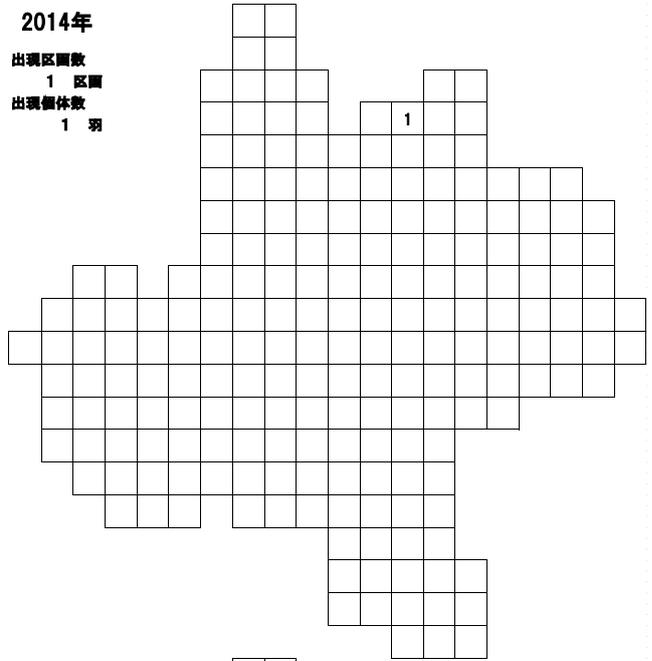
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



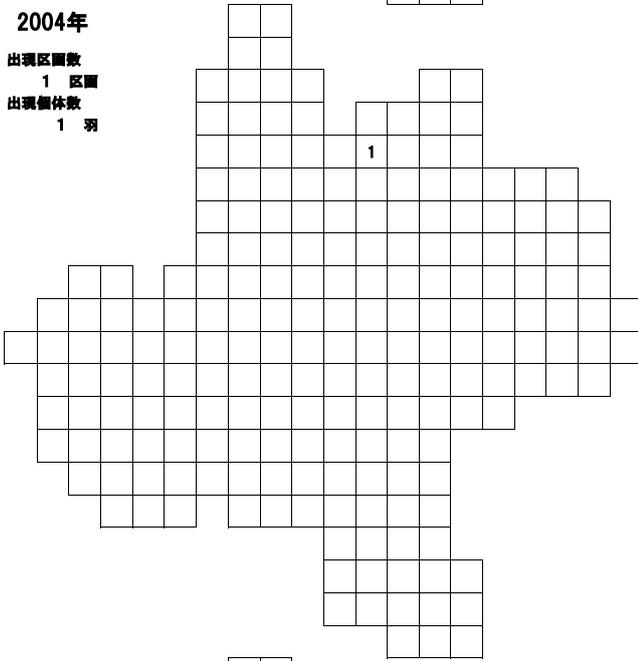
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



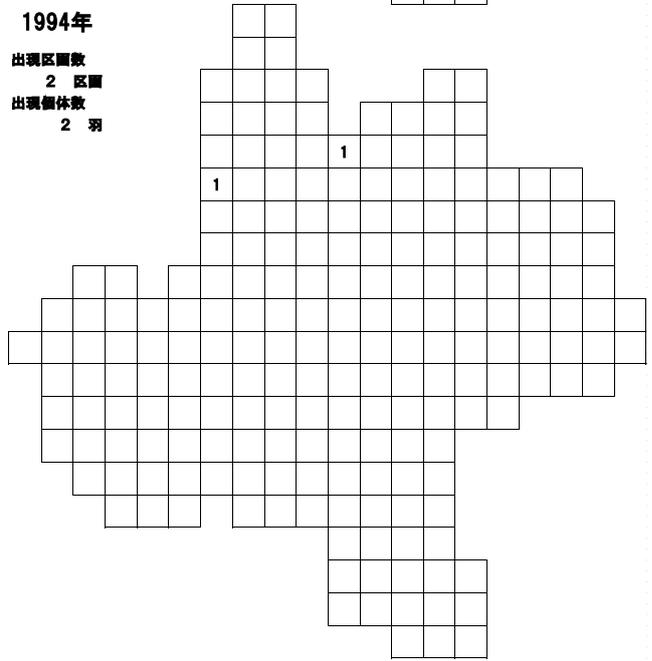
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



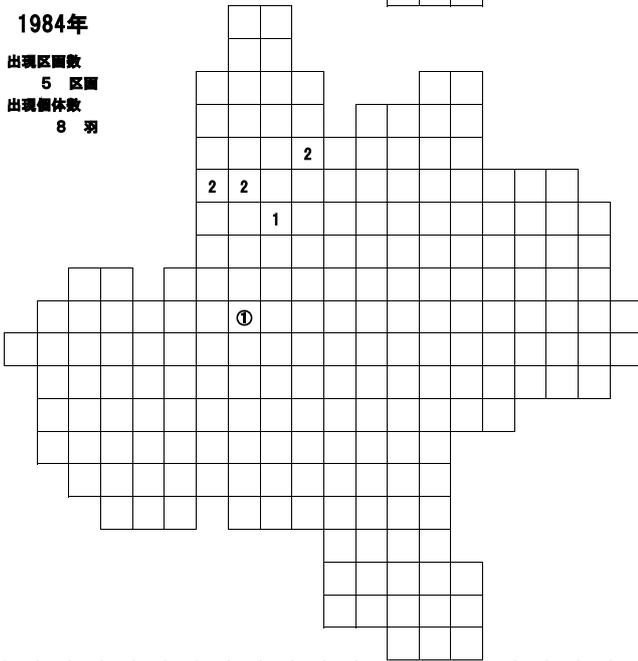
1994年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
5 区画  
出現個体数  
8 羽



### 17. イソシギ *Actitis hypoleucos*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	8	2	1	1	0
出現区画数	5	2	1	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.6	1.0	1.0	1.0	—

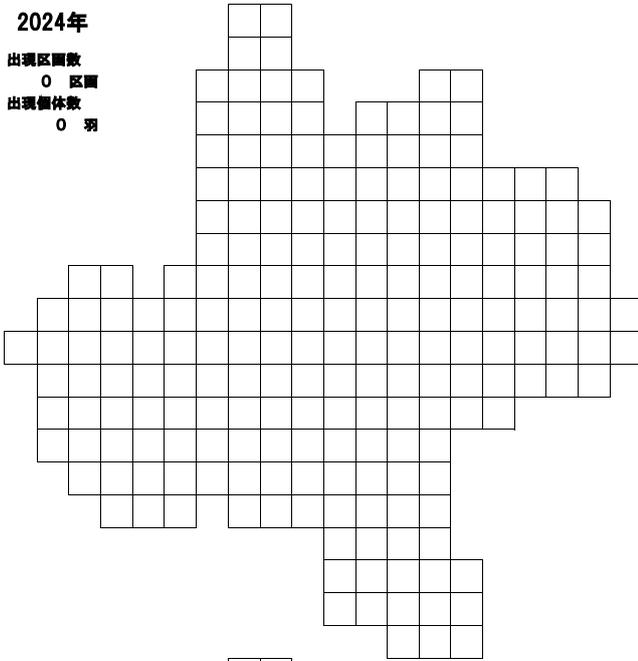
84年から減少傾向で、14年まで記録されていたが、24年は記録が無かった。

少数だが市内では一年中みられ、入間川の河川敷で繁殖も認められていた。しかし、河川敷が草で覆われた面積が増えたり、護岸の整備などで繁殖適地が減少したことで個体数が減少したと思われる。

留鳥系として区分。

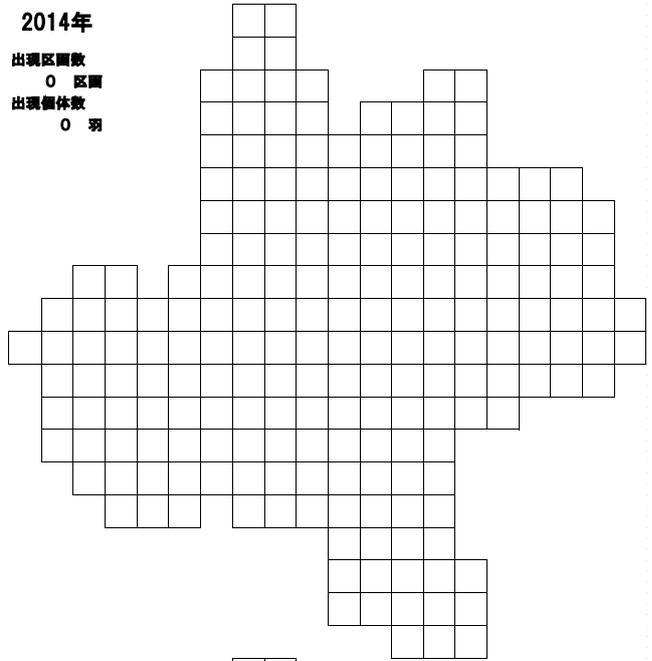
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



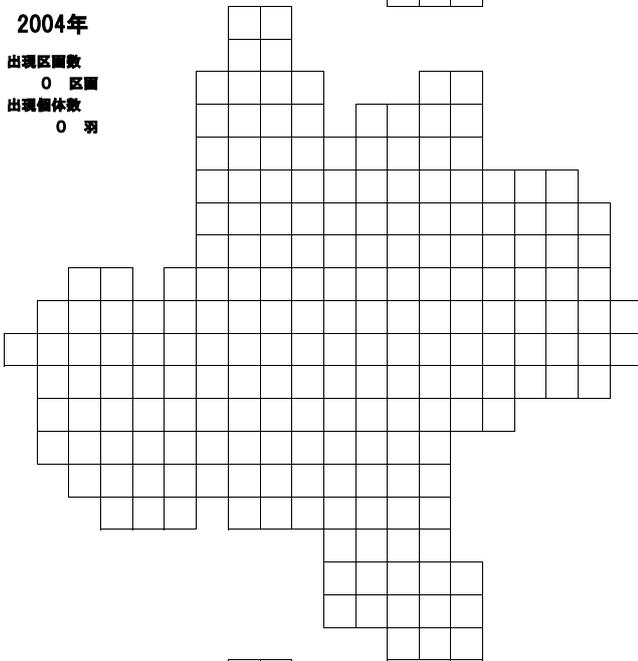
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



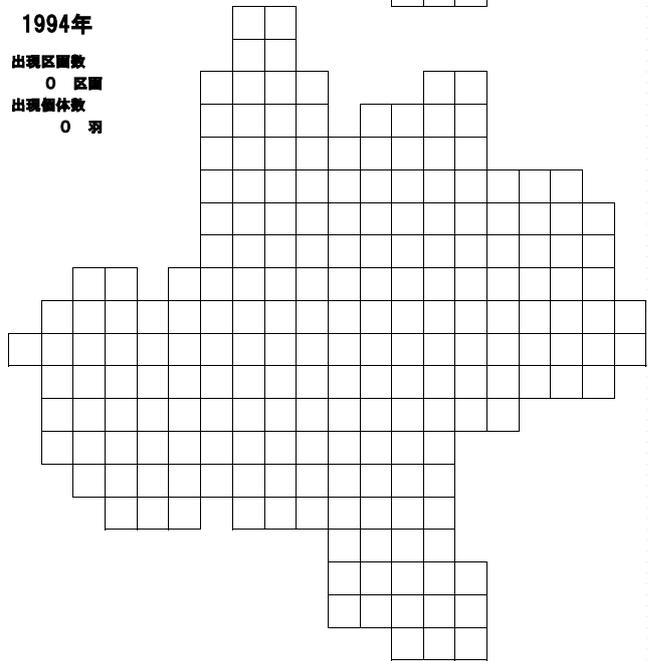
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



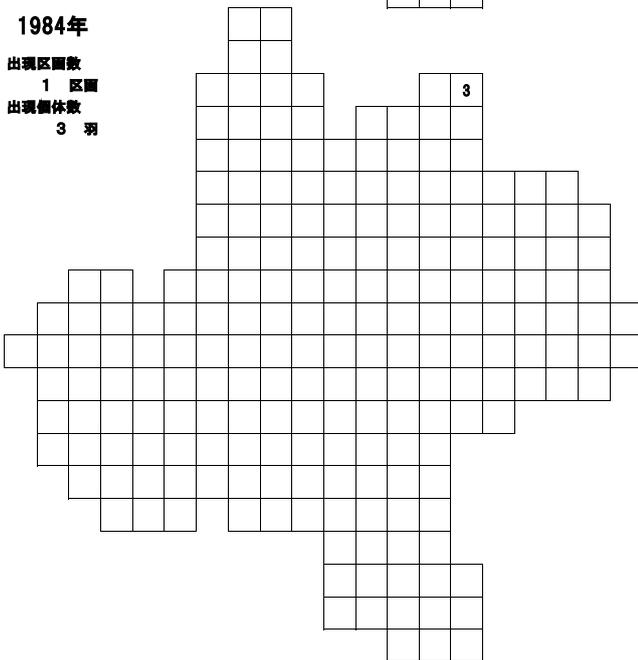
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
3 羽



### 18. クサシギ *Tringa ochropus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	3	0	0	0	0
出現区画数	1	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	3.0	—	—	—	—

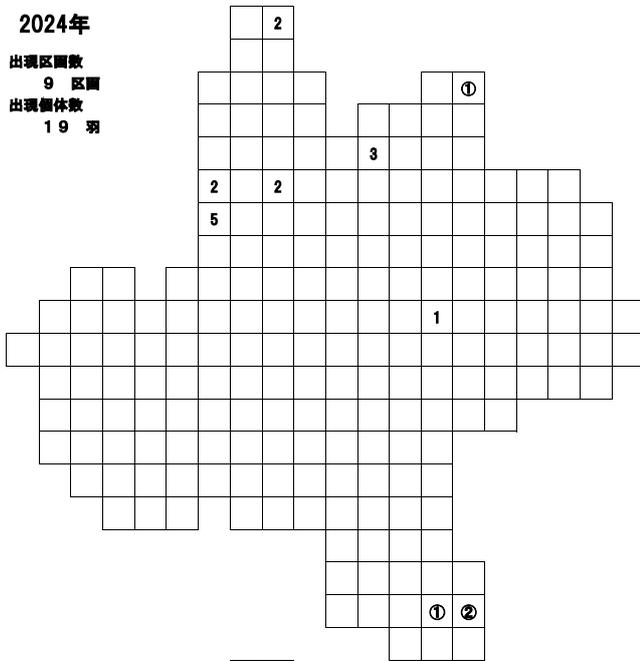
84年に1区画で3羽を記録したが、94年以降24年まで記録がない。

市域では8月から5月にかけて、入間川、霞川、不老川、狭山湖、大森調整池などで少数が見られるが、日本では繁殖していないので、84年の記録は移動途中のものが記録されたものと思われる。

通過鳥系として区分。

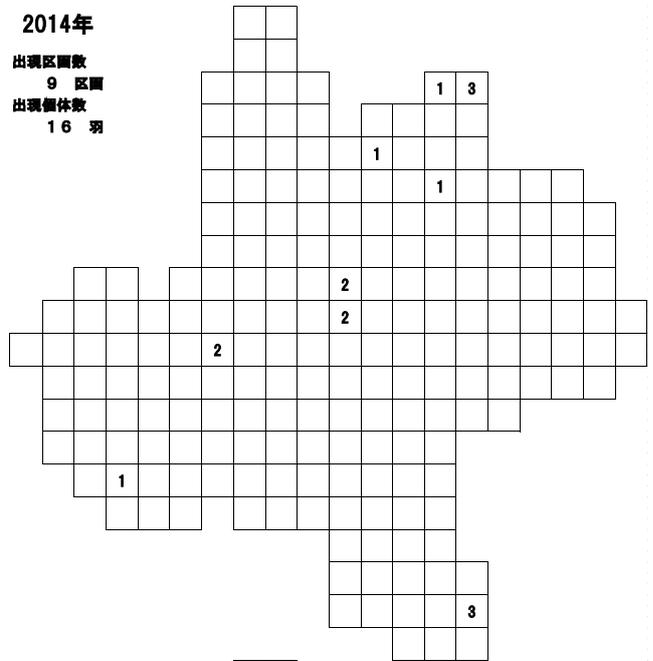
2024年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
19 羽



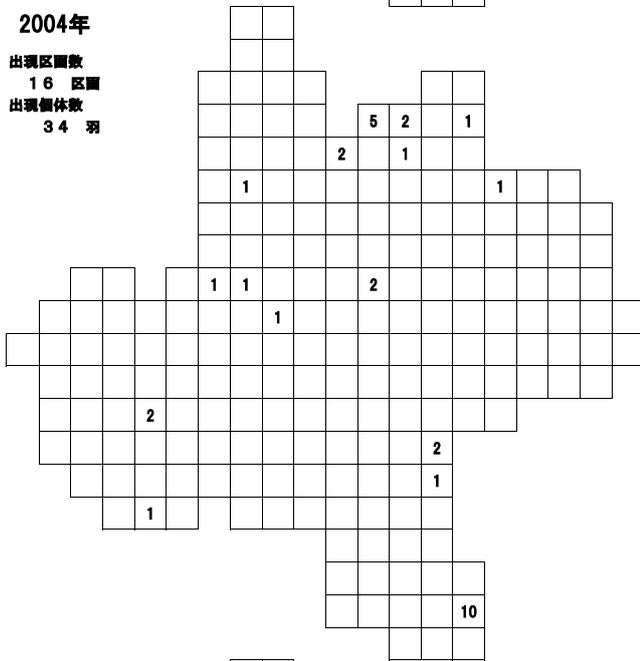
2014年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
16 羽



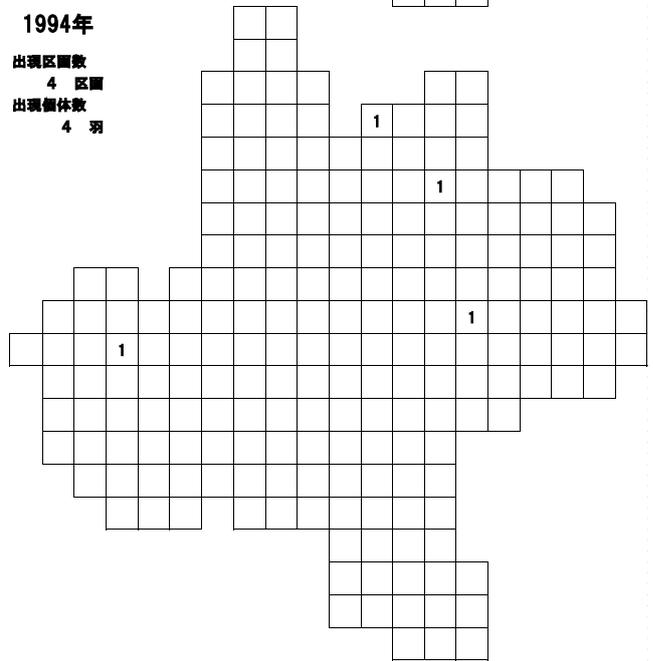
2004年

出現区画数  
16 区画  
出現個体数  
34 羽



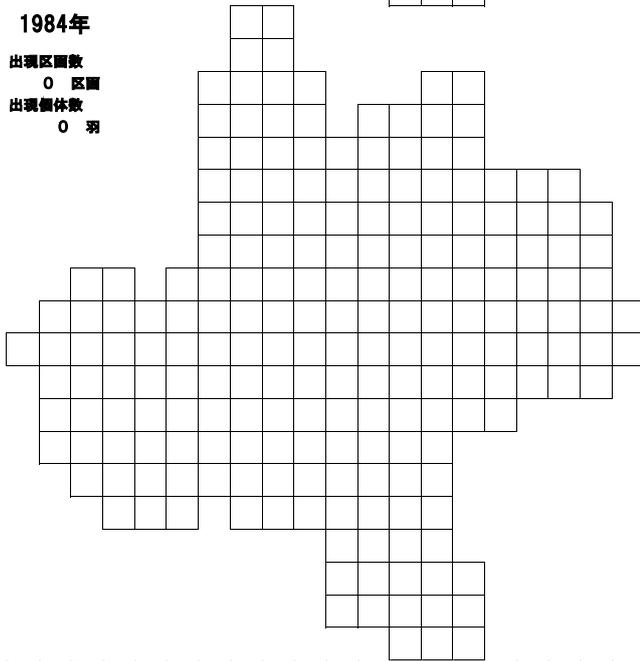
1994年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
4 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



## 19. カワウ *Phalacrocorax carbo*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	4	34	16	19
出現区画数	0	4	16	9	9
出現一区画当たりの平均個体数	—	1.0	2.1	1.8	2.1

24年は9区画で19羽を記録。

総個体数、出現区画数とも04年を頂点に、14年、24年には半減している。

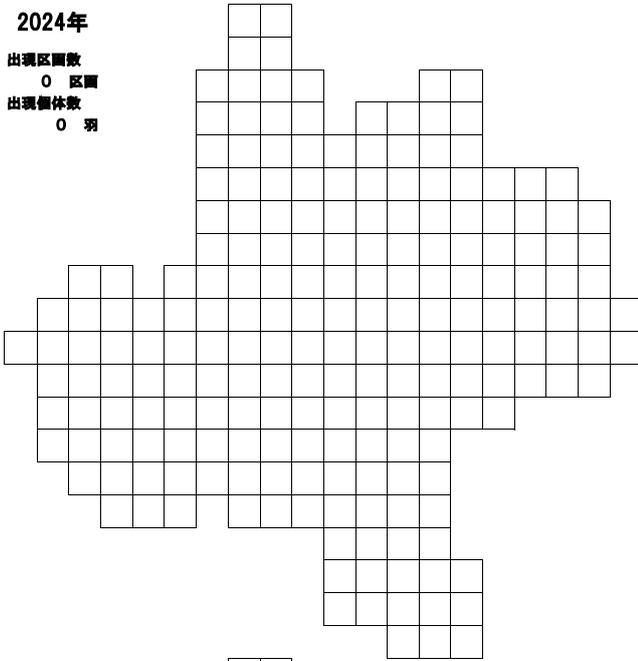
本種は1980年頃から全国的に増加傾向となり、市域では入間川で1990年代に入り見られるようになった。その後2000年代に急増し、入間川、霞川、狭山湖、大森調整池などへも分布を広げたが、現在は少数で安定している。繁殖例はないが周年見られる。

2004年10月には入間川笹井堰で250羽±の一群が記録されている。

留鳥系として区分。

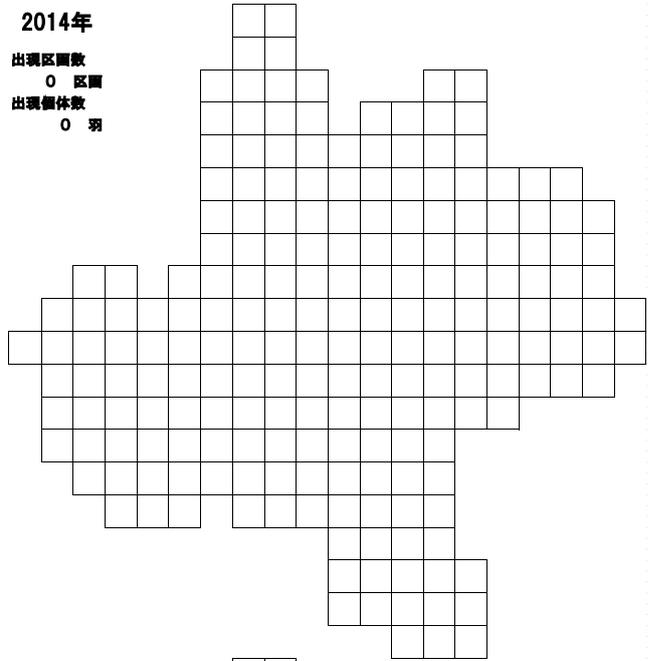
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



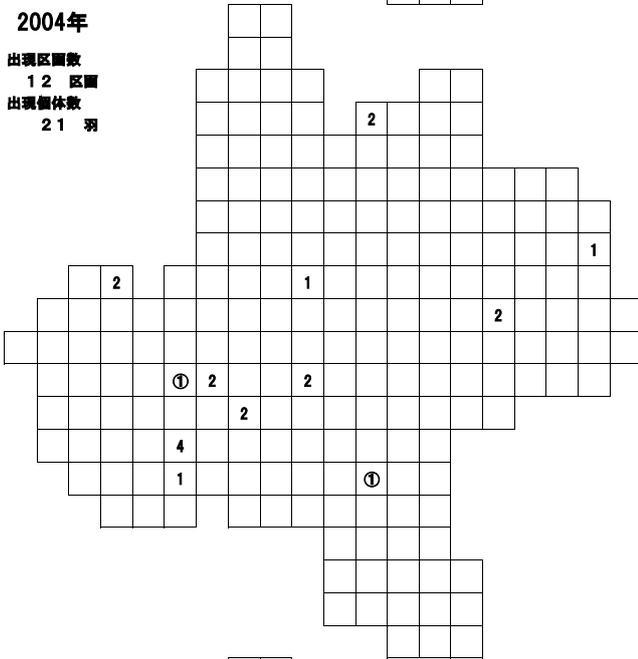
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



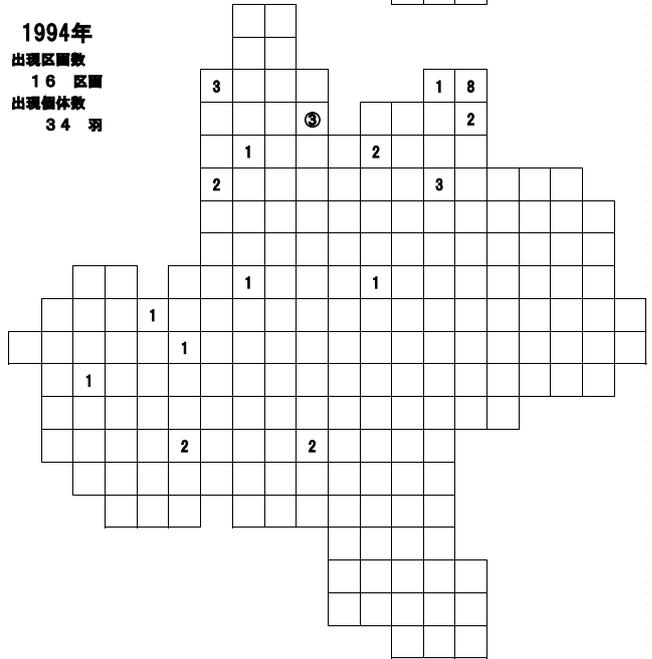
2004年

出現区画数  
12 区画  
出現個体数  
21 羽



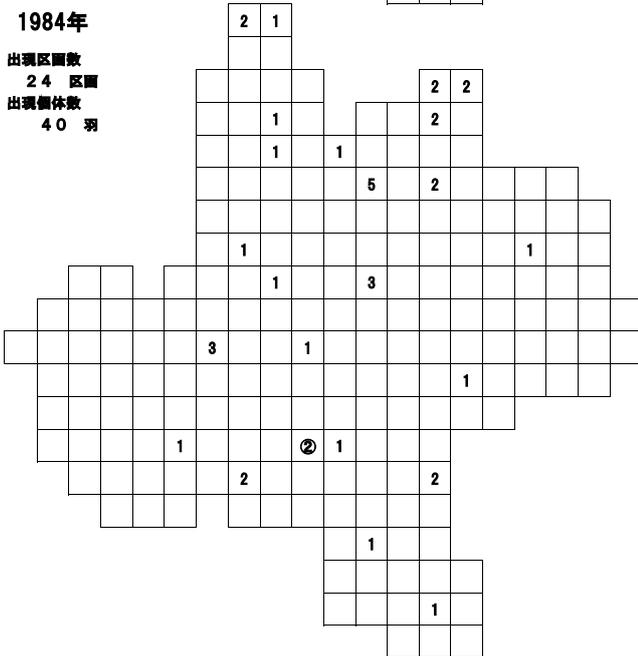
1994年

出現区画数  
16 区画  
出現個体数  
34 羽



1984年

出現区画数  
24 区画  
出現個体数  
40 羽



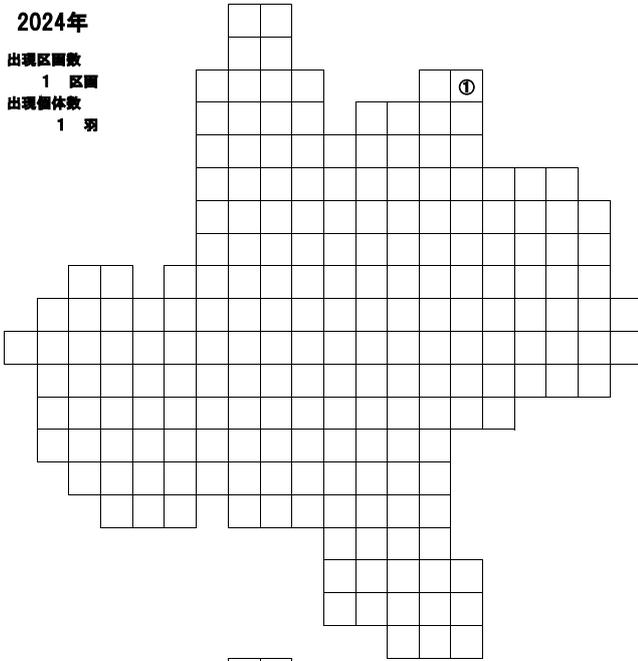
## 20. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	40	34	21	0	0
出現区画数	24	16	12	0	0
出現一區画当たりの平均個体数	1.7	2.1	1.8	—	—

14年、24年と連続して記録が無かった。夜行性の本種は、本調査の時間では記録されにくいのだが、入間川、霞川などの河川のほか、上空を飛ぶ姿が記録されてきた。高度成長期後、1970年代後期から河川の水質改善が進み、魚類が増加した頃から魚食性鳥類が増えてきた。84年、94年には市域近隣で本種が、2002年には市内でアオサギと本種30~40巣と一緒に集団繁殖しているのが確認されている。しかし、現在本種は全国的に減少しており、それが本調査結果にも現われたものと思われる。留鳥系として区分。

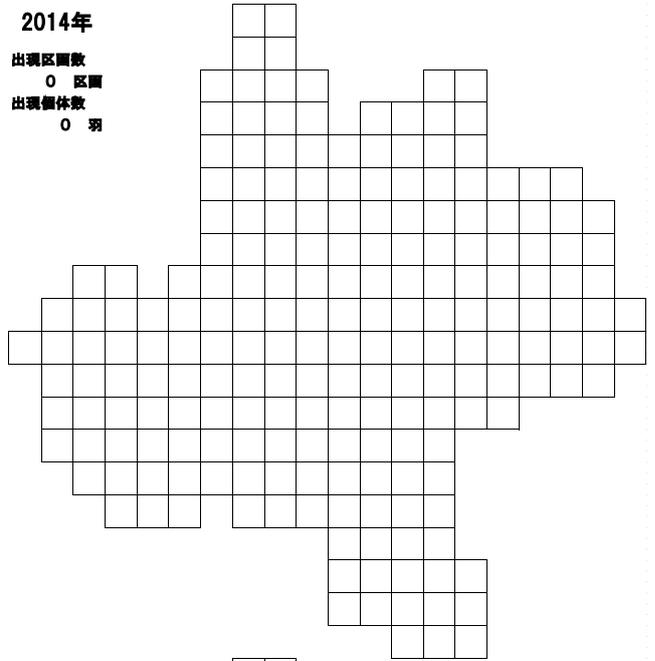
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



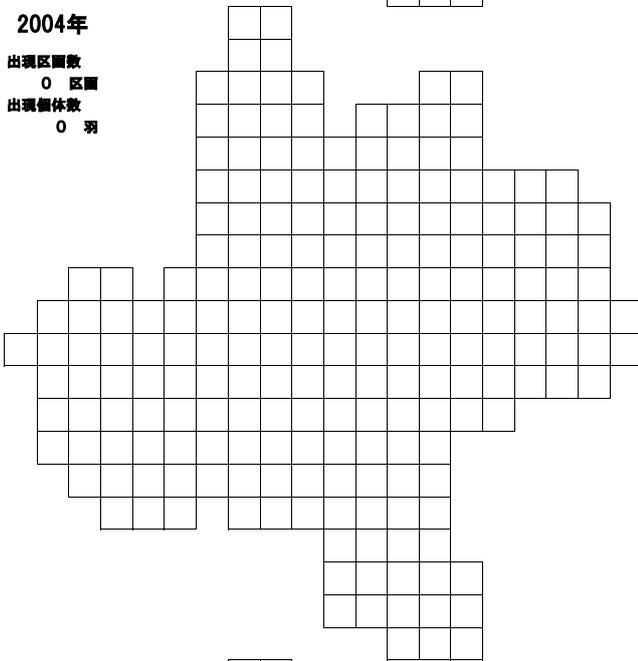
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



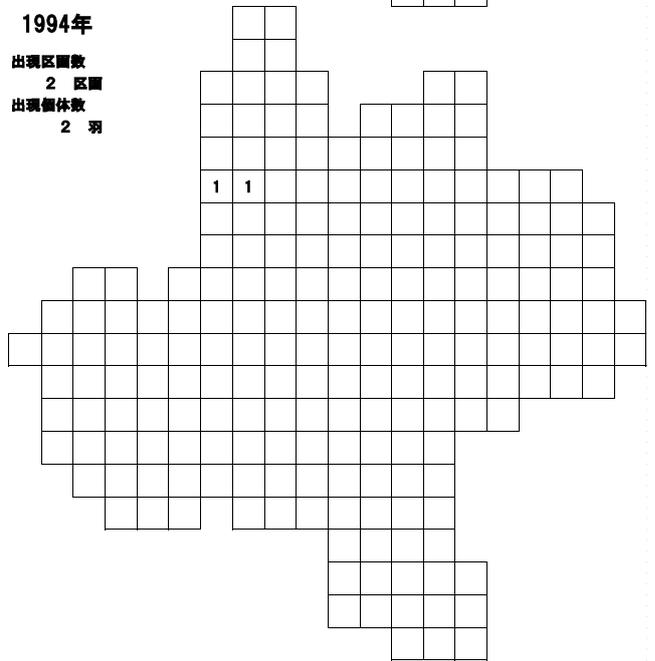
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



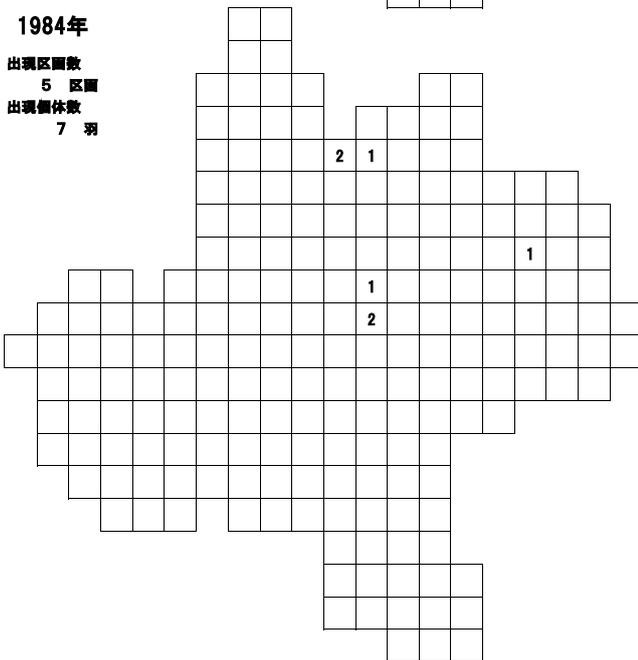
1994年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
5 区画  
出現個体数  
7 羽



## 21. ササゴイ *Butorides striata*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	7	2	0	0	1
出現区画数	5	2	0	0	1
出現一区画当たりの平均羽数	1.4	1.0	—	—	1.0

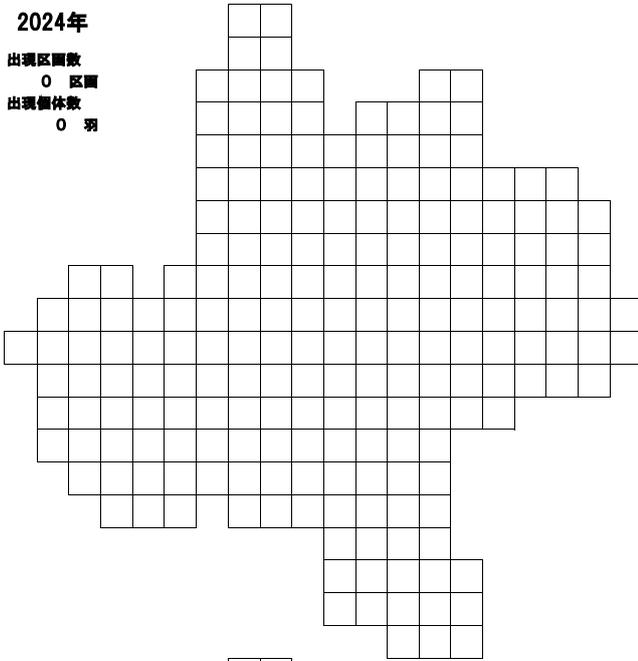
24年は1区画で11羽を記録した。

主に入間川と霞川で記録されてきた。24年の記録は入間川に合流する地点の霞川。

隣接の狭山市では本種の繁殖が知られている。市内では1970年代に豊岡・愛宕神社のスギやイチョウの木で集団繁殖していた記録があるが、79年の火災で焼失して以来繁殖していない。04年には黒須・蓮華院で巣立ち雛2羽が観察された。本種の減少の一因として、2000年代に増加した魚食性鳥類のアオサギやカワウとの競合が考えられる。近年は全国的にも減少している種。夏鳥系として区分。

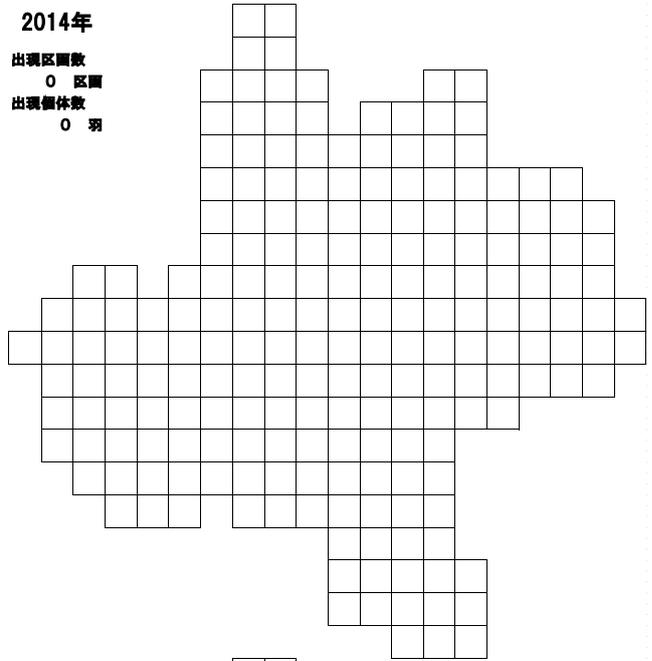
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



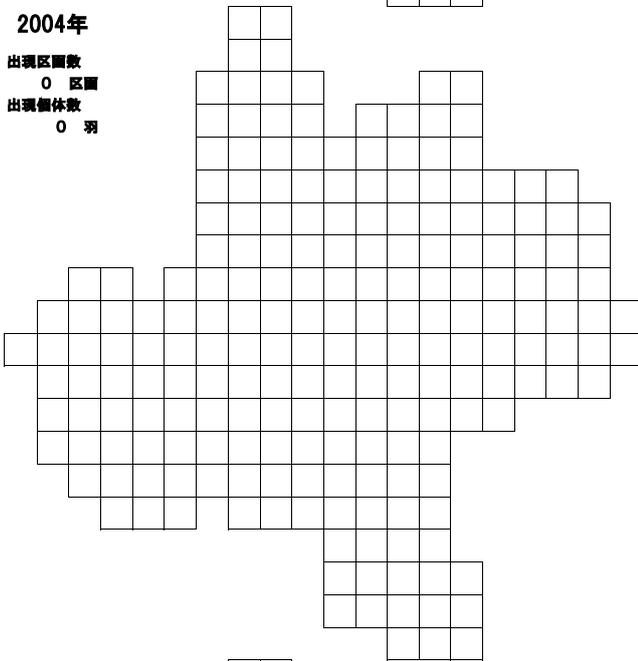
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



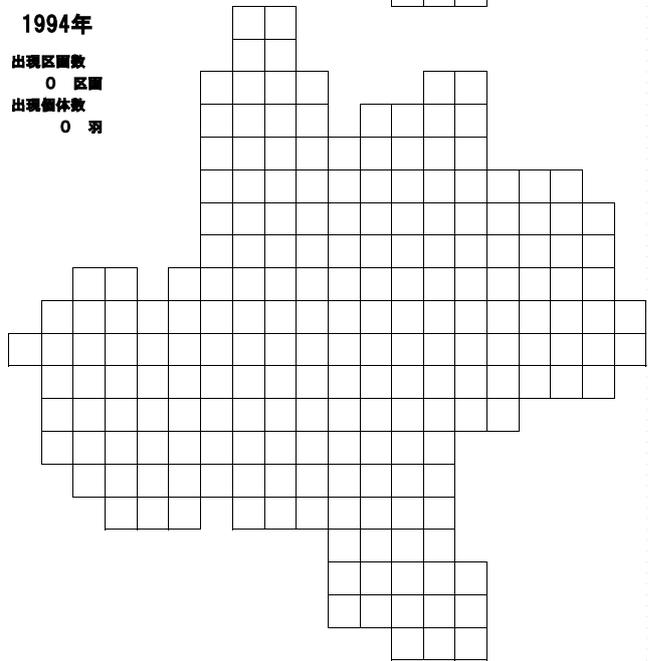
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



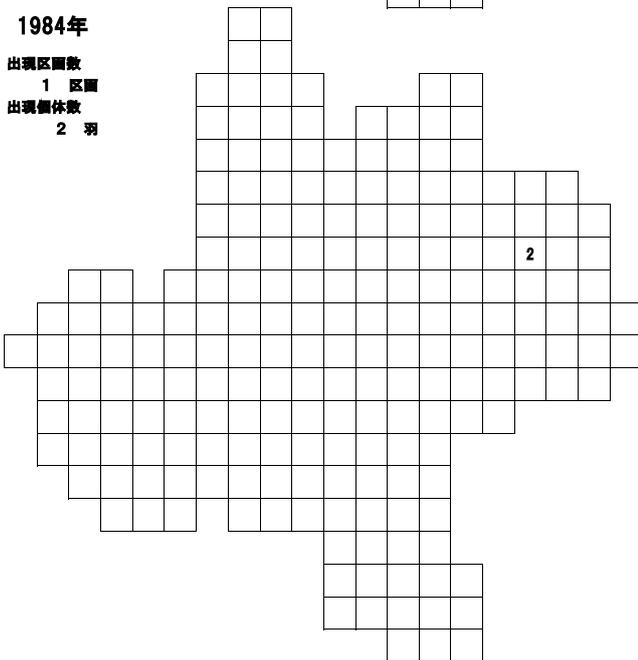
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



## 22. アマサギ *Bubulus ibis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	0	0	0
出現区画数	1	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	—	—	—	—

84年に1区画で2羽を記録し、94年以降24年も記録が無い。

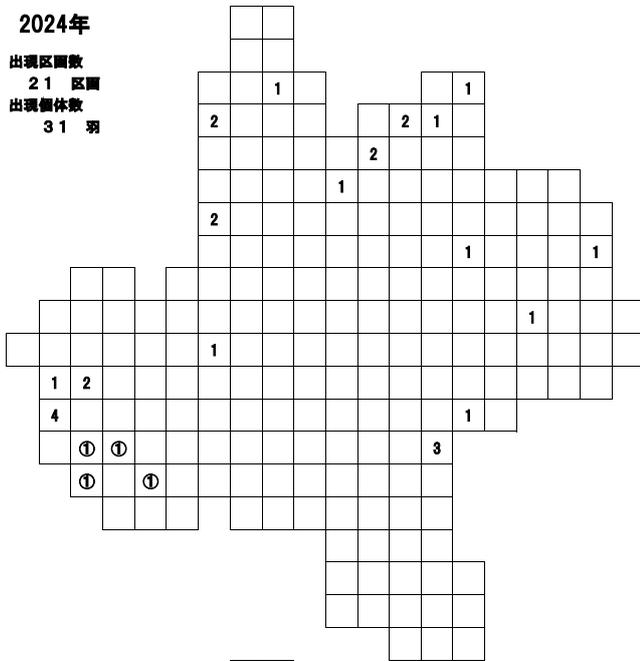
夏鳥として飛来し、水田で餌をとることが多いが、市域には水田がほとんどないため、見ることは少ない。

84年には狭山市に繁殖地があったが現在は失われている。全国的には1990年代以降減少傾向と言われている種で、本調査の結果はその一端を表しているものと思われる。

通過鳥系として区分。

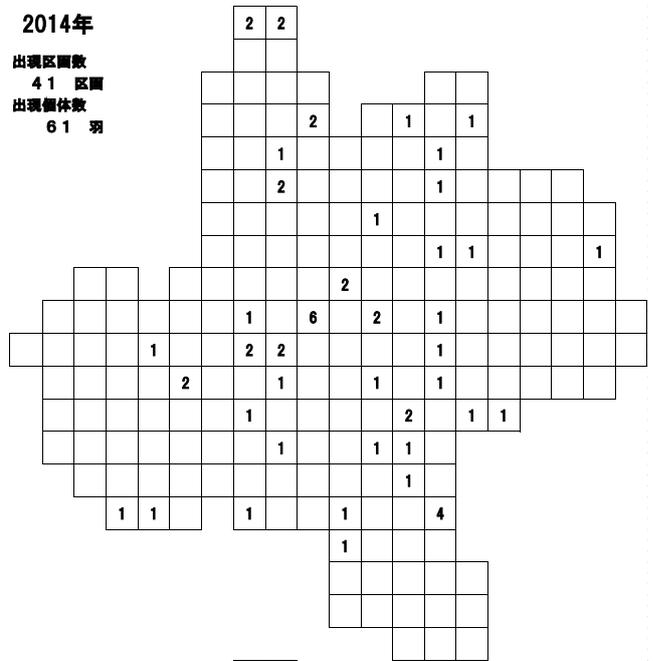
2024年

出現区画数  
21 区画  
出現個体数  
31 羽



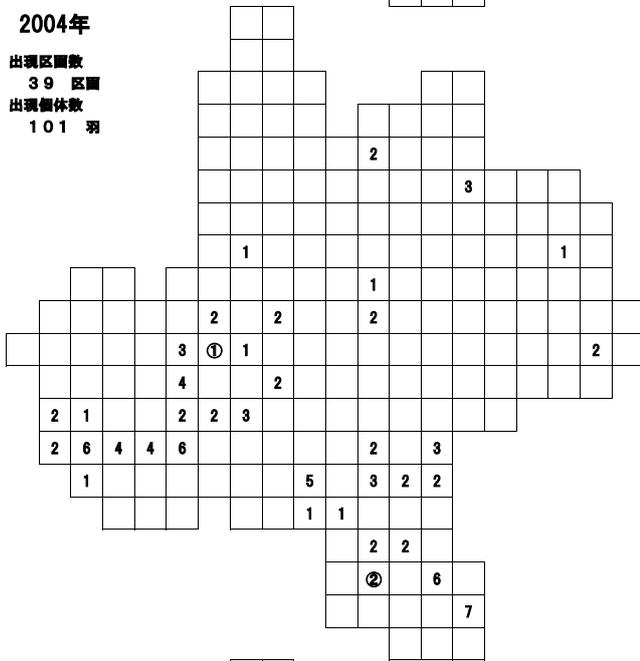
2014年

出現区画数  
41 区画  
出現個体数  
61 羽



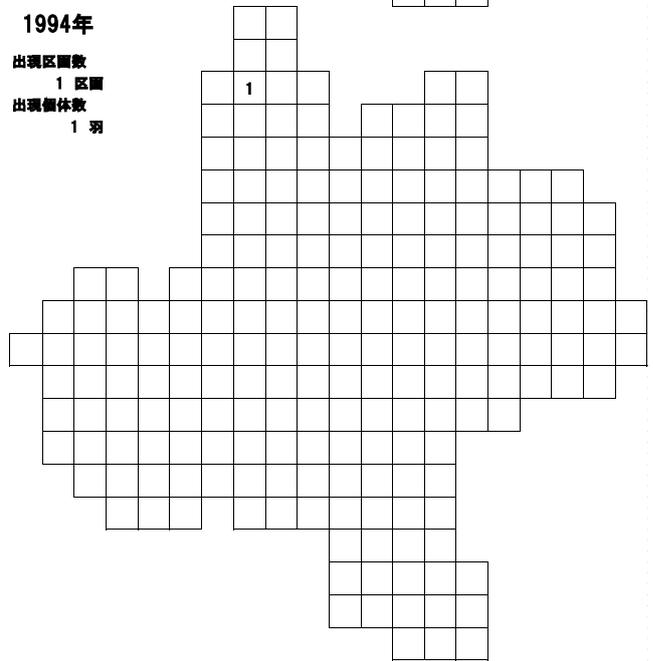
2004年

出現区画数  
39 区画  
出現個体数  
101 羽



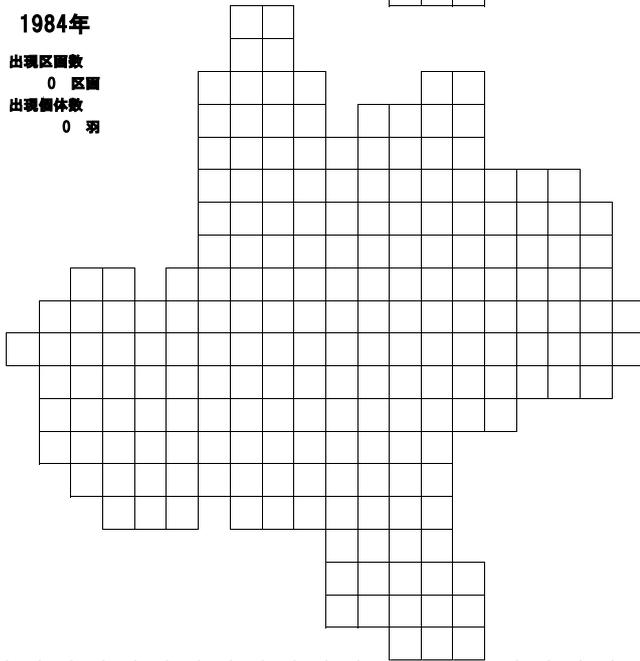
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 23. アオサギ *Ardea cinerea*

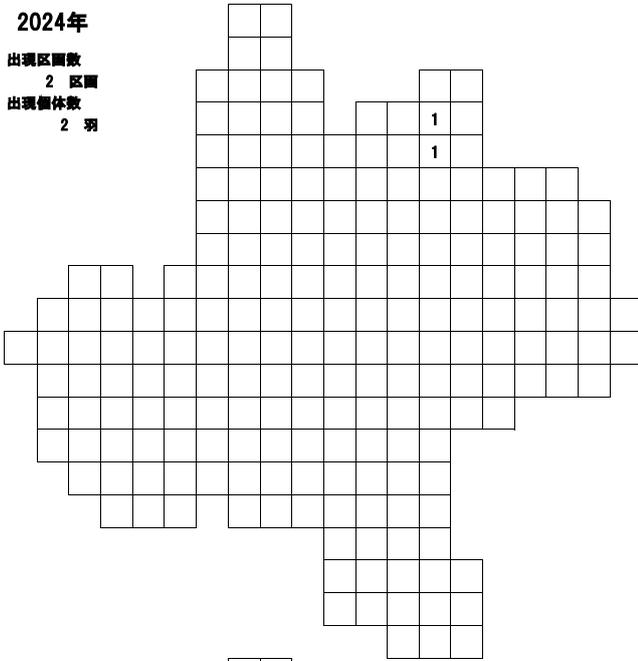
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	1	101	61	31
出現区画数	0	1	39	41	21
出現一区画当たりの平均個体数	—	1.0	2.6	1.5	1.5

24年は21区画で31羽を記録した。入間川や霞川、狭山湖や大森調整池などのほか、上空を飛行する姿もよく見られる。1980年代は冬に見られる程度であったが、1999年に二本木で繁殖地が見つかり、2002年にはゴイサギ、コサギと共に複数の繁殖巣が確認され、増加していた。しかし、現在は消失し減少傾向にある。魚食性鳥類という共通点で、コサギに20年程遅れた増加、減少を見せている。

留鳥系として区分。※No.26コサギ参照

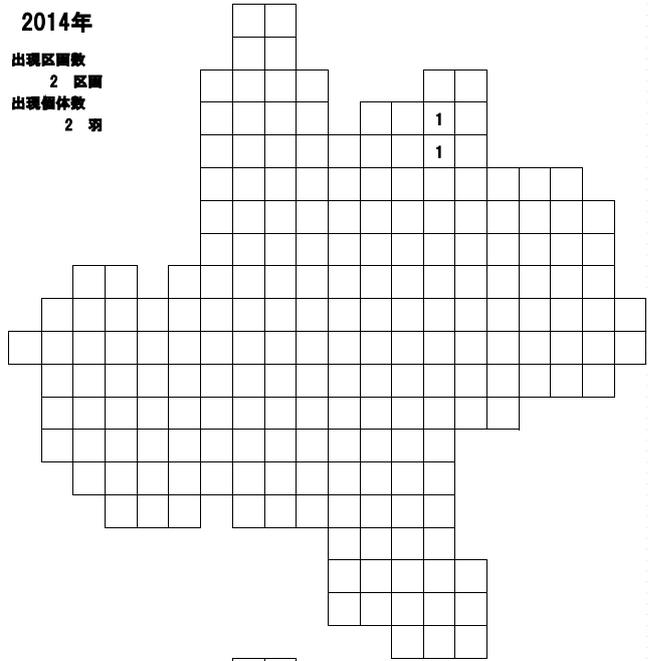
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



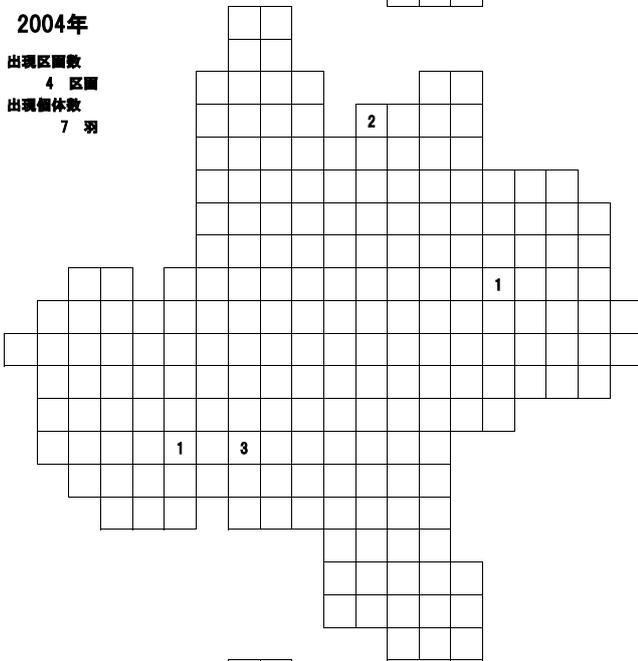
2014年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



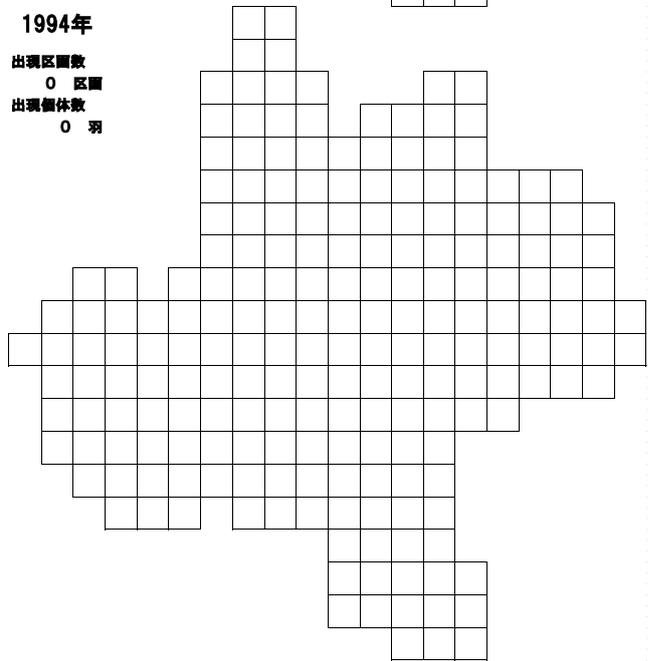
2004年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
7 羽



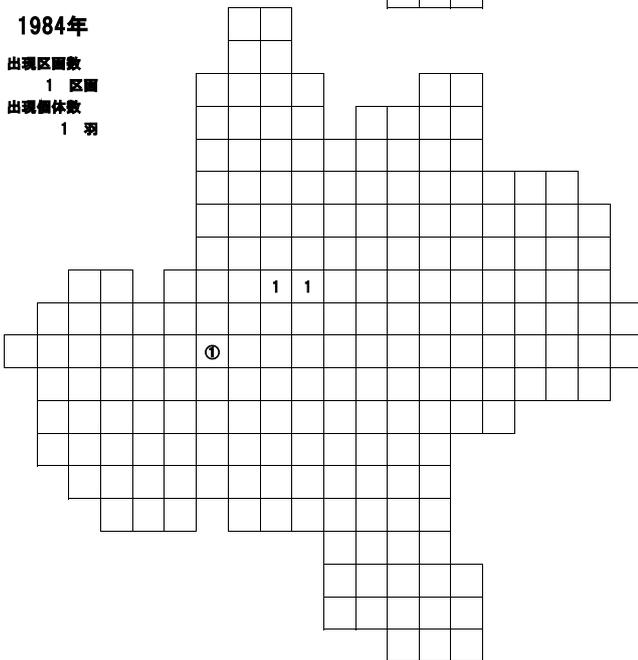
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



## 24. ダイサギ *Ardea alba*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	1	0	7	2	2
出現区画数	1	0	4	2	2
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	—	1.8	1.0	1.0

24年は14年と同数の2区画で2羽を記録した。

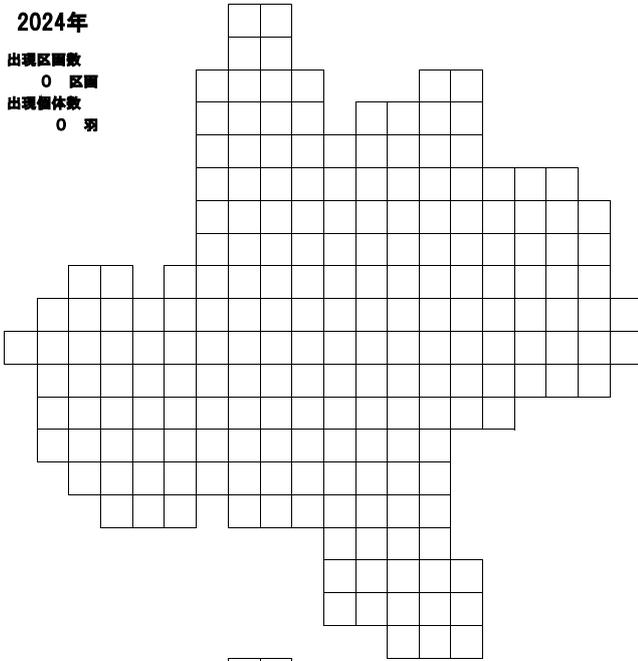
市域では、1970年代は冬鳥、又は、通過鳥として見られてきたが、1980年代に入り、夏にもみられるようになってきた鳥。数は多くない。

2000年代に二本木のアオサギ繁殖地で少数が一緒に繁殖していた。04年までは増加傾向がみられたが、現在はその繁殖地が失われており、市域・近郊にも繁殖地は無い。その傾向が表れているものと思われる。

夏鳥系として区分。

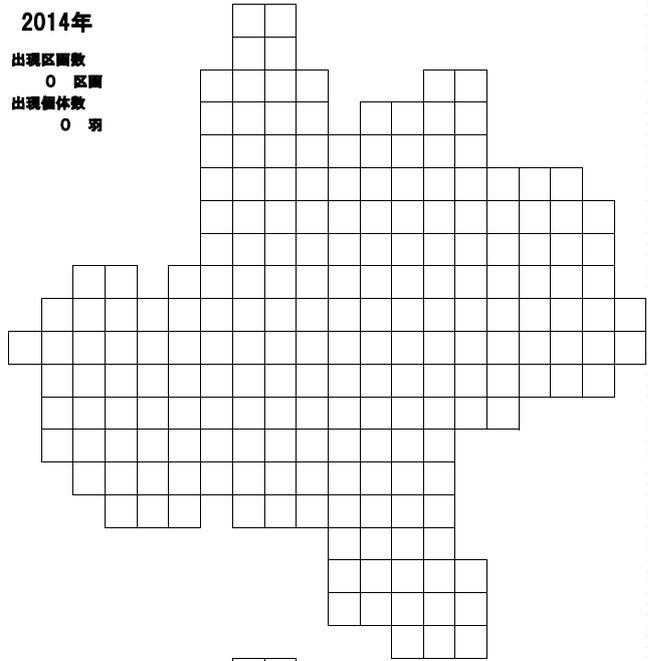
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



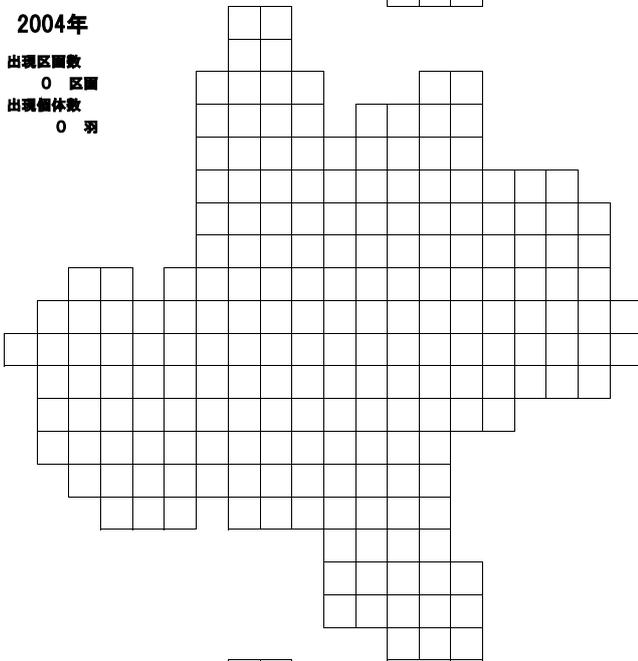
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



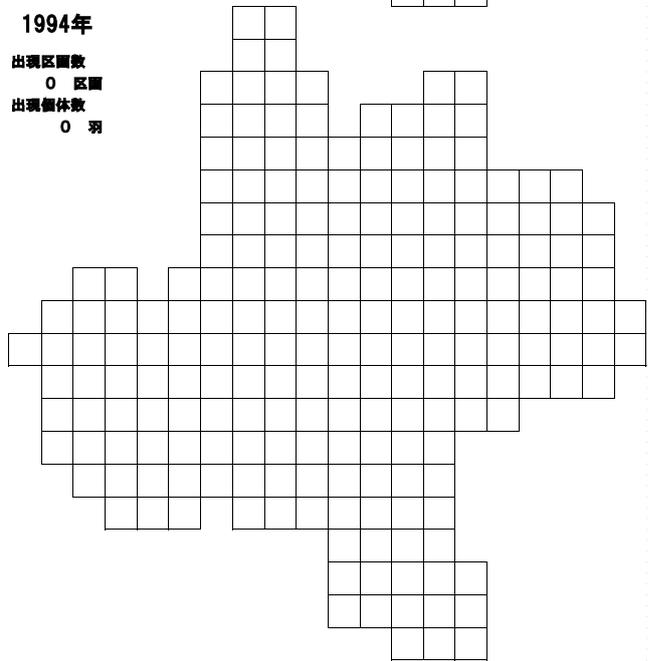
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



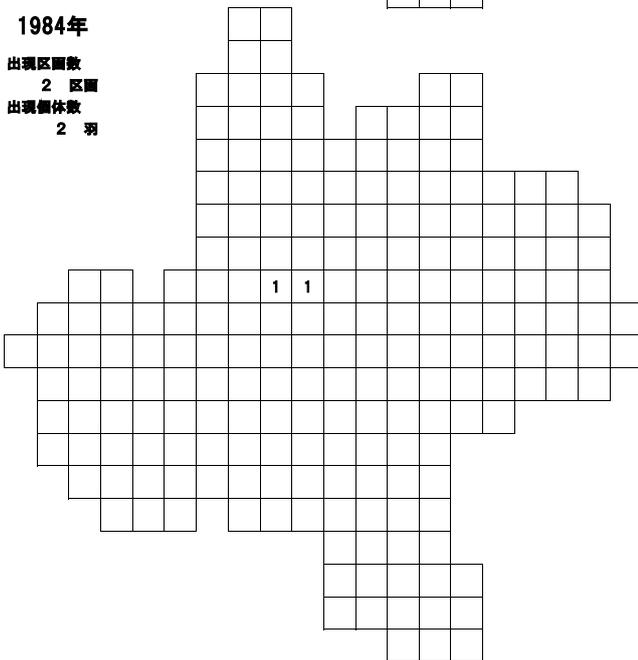
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



## 25. チュウサギ *Ardea intermedia*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	0	0	0
出現区画数	2	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	—	—	—	—

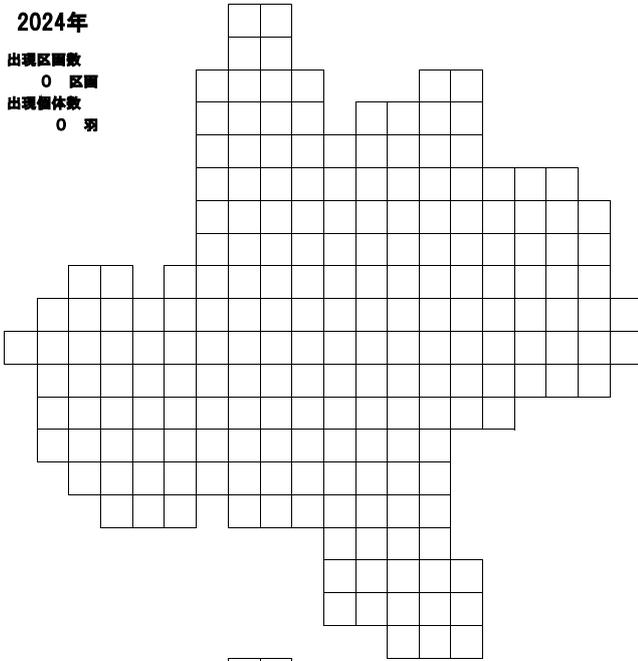
84年に2区画2羽を記録したが、94年以降24年も記録が無い。

過去に入間川、狭山湖、大森調整池などの観察記録はあるが、少数である。市域・近隣に繁殖地は知られておらず、移動途中の個体が記録されたものと思われる。

通過鳥系として区分。

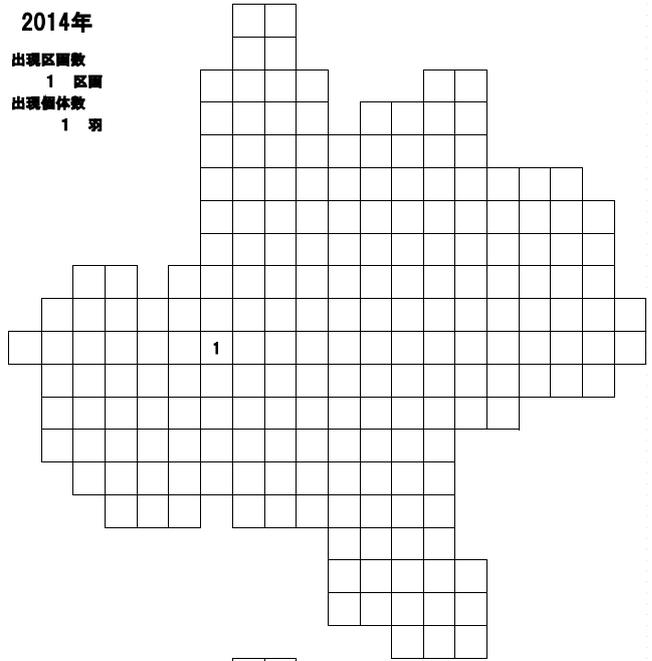
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



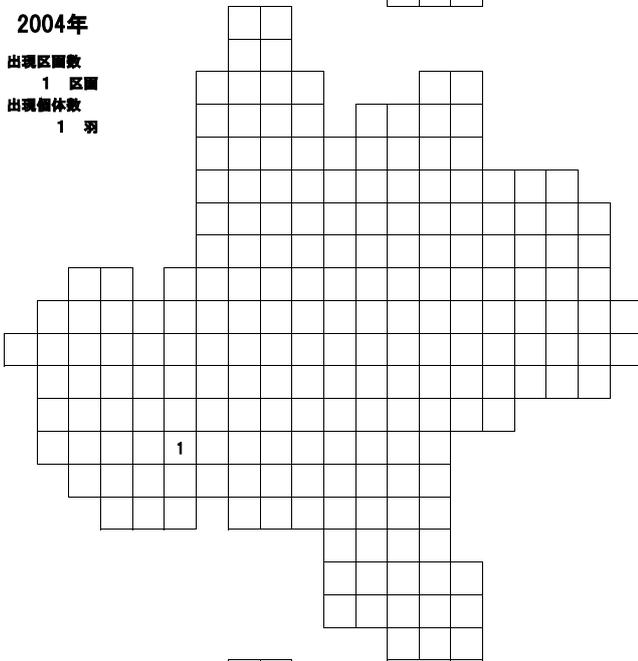
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



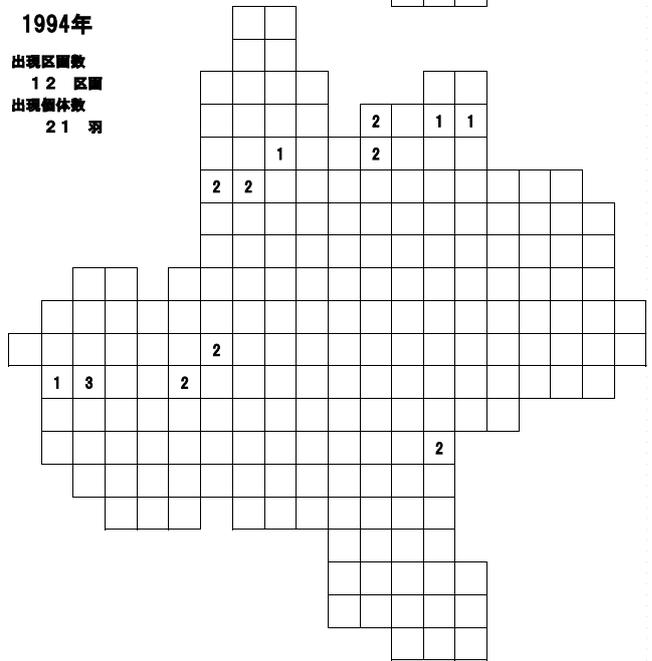
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



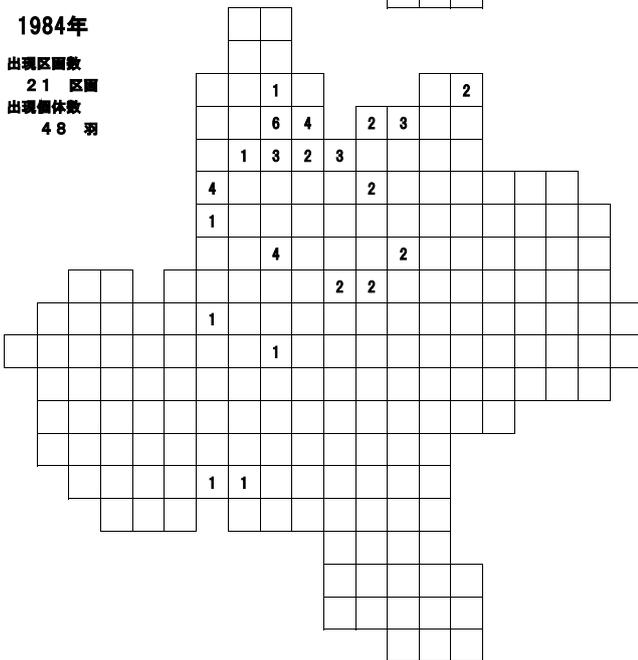
1994年

出現区画数  
12 区画  
出現個体数  
21 羽



1984年

出現区画数  
21 区画  
出現個体数  
48 羽



## 26. コサギ *Egretta garzetta*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	48	21	1	1	0
出現区画数	21	12	1	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.3	1.8	1.0	1.0	—

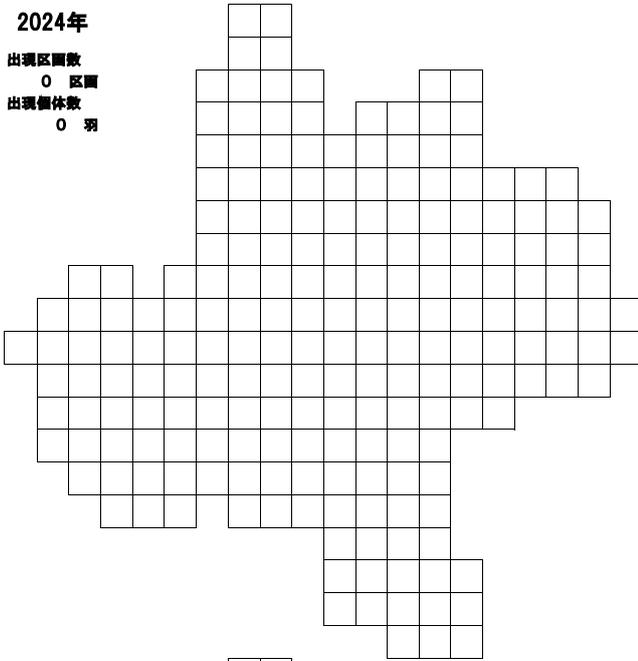
24年は記録が無かった。

1970年代後半から入間市や近隣の河川、狭山湖などの池沼で見る数や機会が増え、市内では周年見られていた。

84年に狭山市内に集団繁殖地があったが、94年頃には失われている。入間市では、2002年に二本木のアオサギ繁殖地にコサギの巣一つが確認されている。その後市域周辺に本種の繁殖地は無く、本調査の結果はそのような背景を現わしたものと思われる。全国的にも同様な増加、減少をみせており、近年は希少な種となっている。留鳥系として区分。

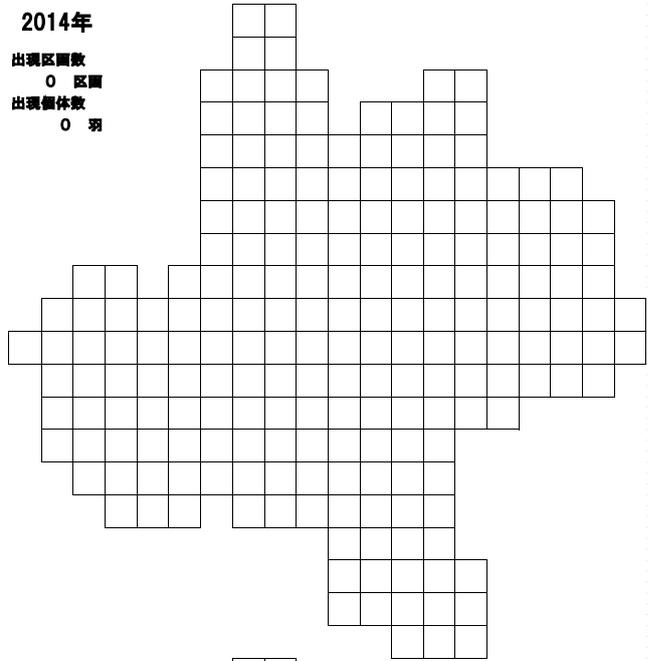
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



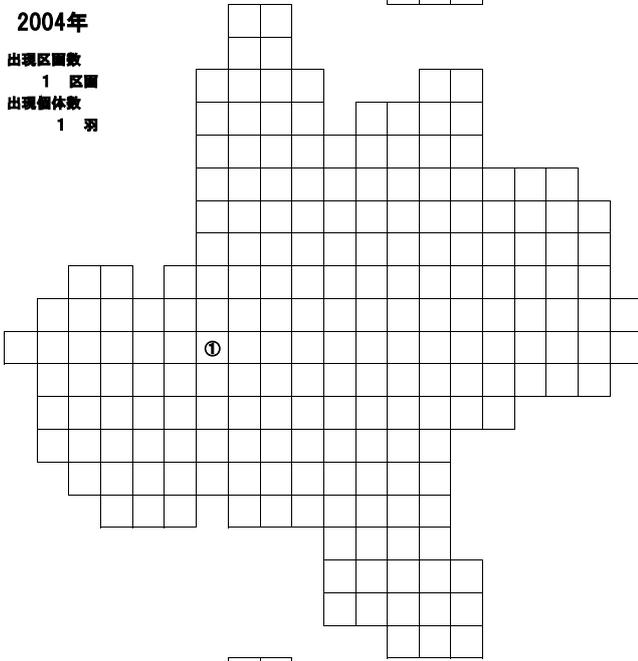
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



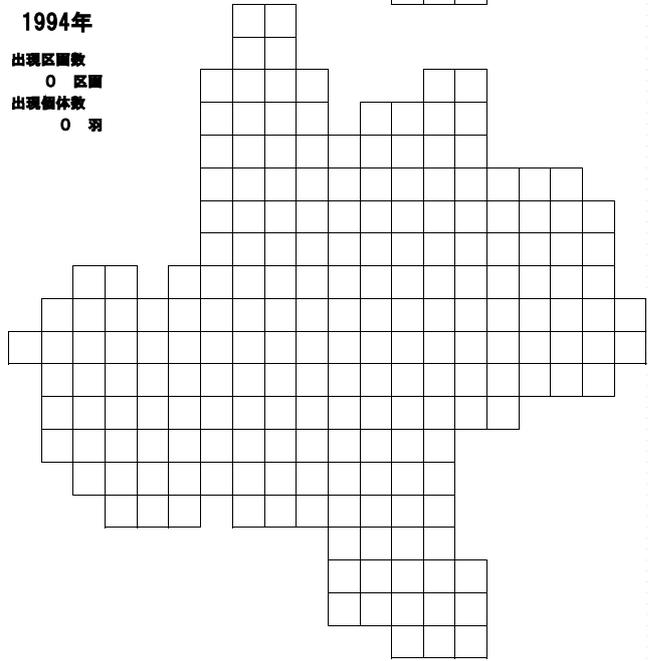
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



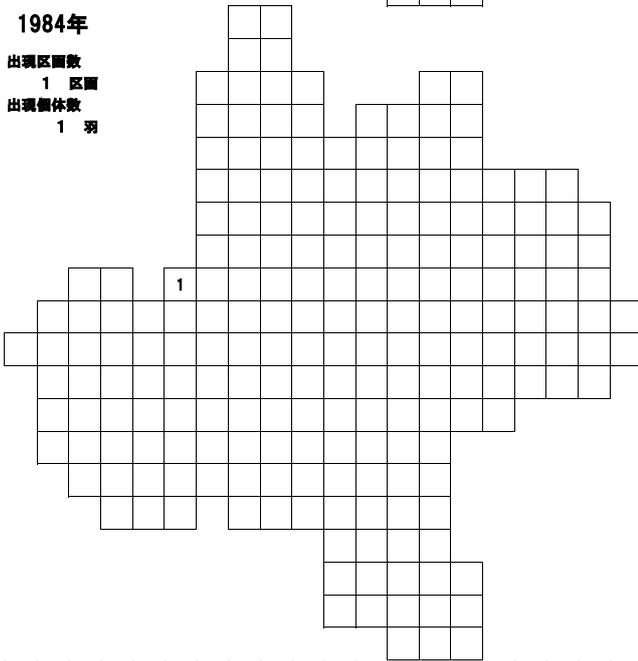
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



## 27. ハチクマ *Pernis ptilorhynchus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総羽数	1	0	1	0	0
出現区画数	1	0	1	0	0
出現一区画当たりの平均羽数	1.0	—	1.0	—	—

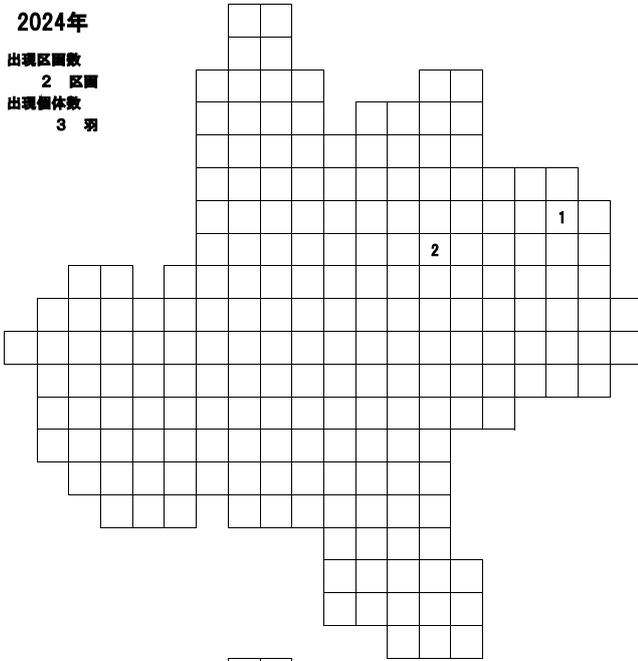
24年は記録が無かった。

狭山丘陵では1970年代に夏期の目撃が多く、繁殖の可能性が高かったようだが、現在は春、秋の渡り時期には確認されるものの、繁殖期には見られない鳥となっており、繁殖の可能性はない。

加治丘陵については、1991年の加治丘陵自然環境調査報告書で、「繁殖期間を通じ丘陵中～西部で上空を飛行するペアがたびたび観察されており、繁殖の可能性はある」としている。しかし、現在では加治丘陵でも見られなくなっている。夏鳥系として区分。

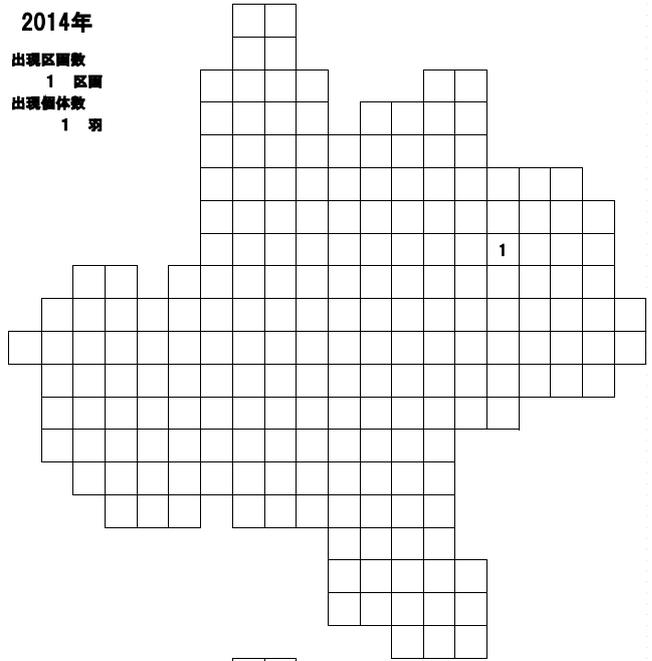
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



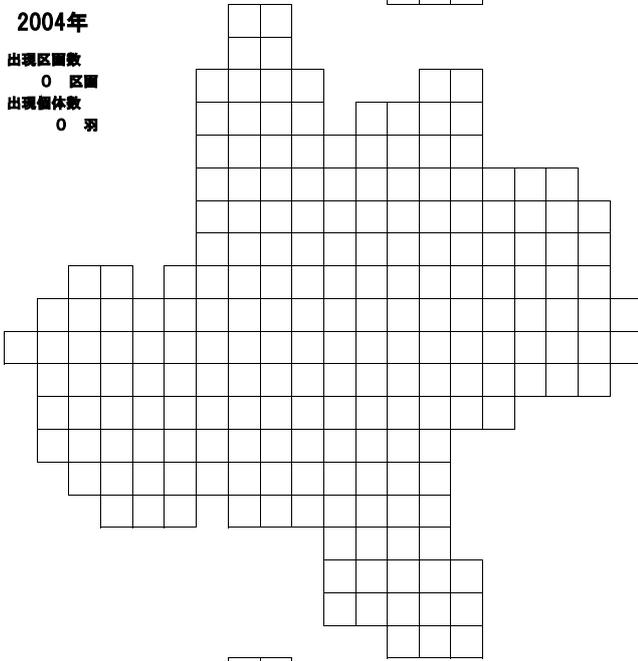
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



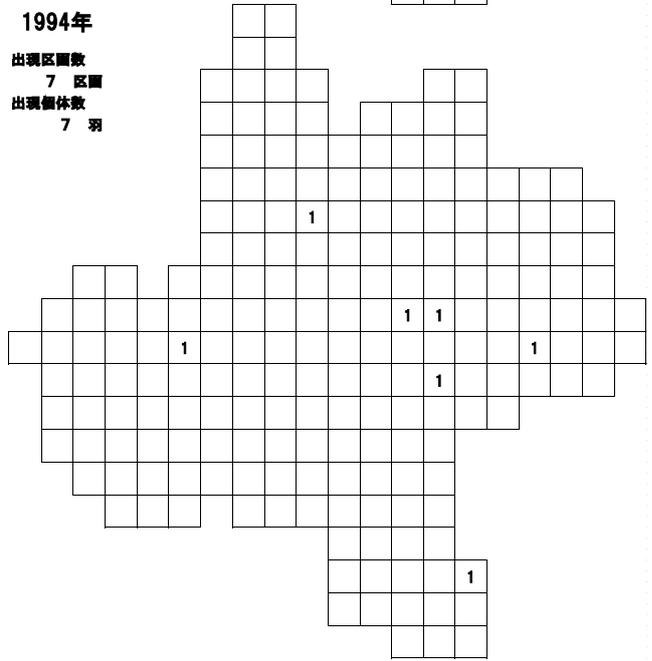
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



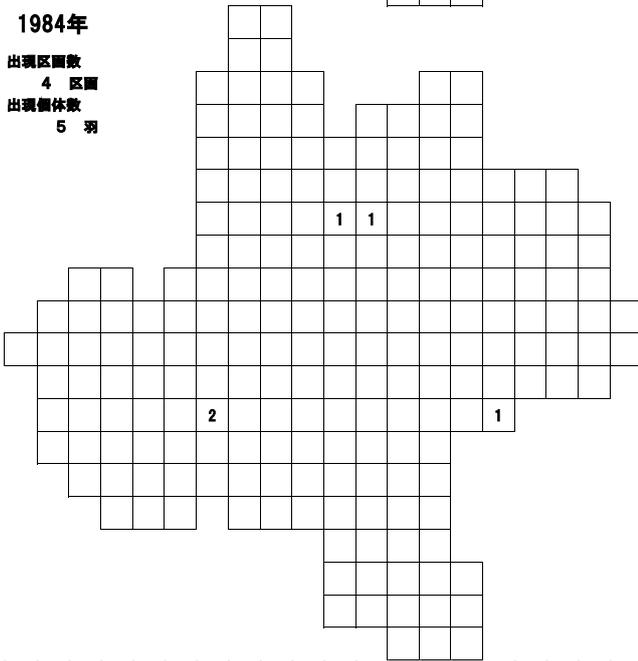
1994年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
7 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
5 羽



## 28. ツミ *Accipiter gularis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	5	7	0	1	3
出現区画数	4	7	0	1	2
出現一区画当たりの平均個体数	1.3	1.0	—	1.0	1.5

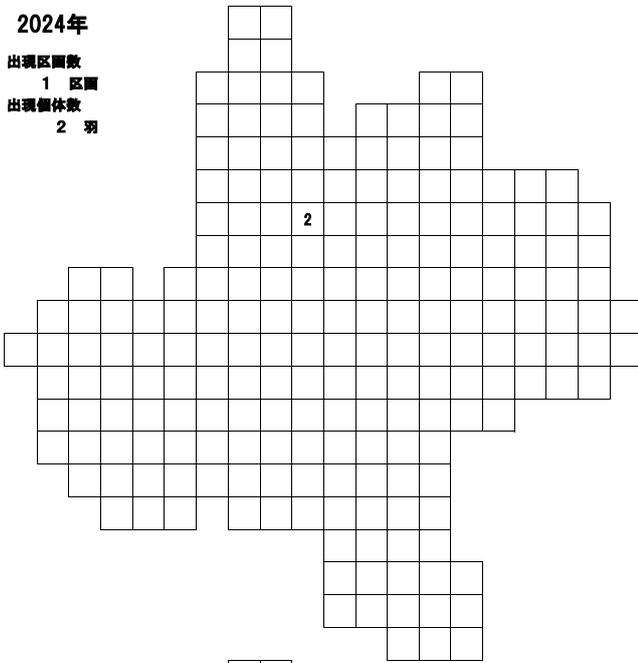
24年は2区画で3羽を記録した。

1970年代は見ることも稀であったが、1980年代に入り見ることが増えてきた鳥。オオタカを避けてか、加治丘陵や狭山丘陵よりも平地林や社寺林、公園などの記録が多い。

04年に記録が無いのは、猛禽類はもともと個体数が少ないことによるものと思われる。しかし、84年、94年に比較して2000年以降の個体数は減少傾向にあるものと思われる。なお、本調査終了後、「8月23日市内で巣立ちした3羽のツミを確認」の報告を受けている。留鳥系として区分。

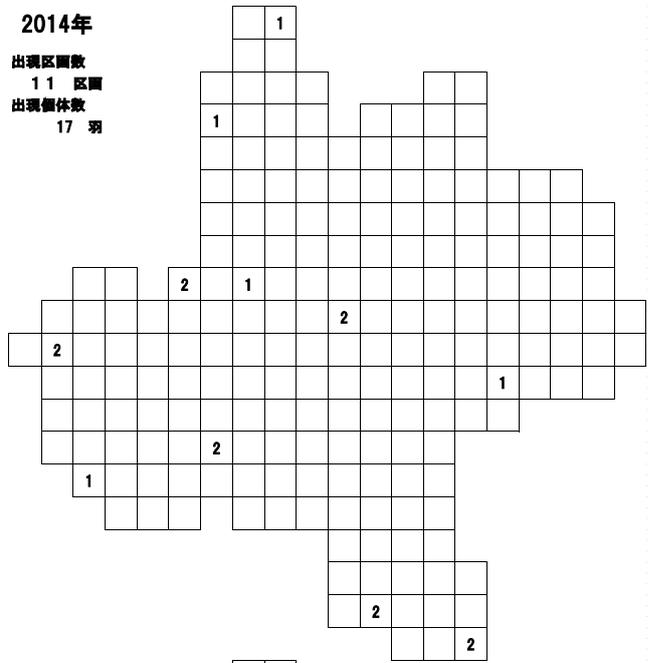
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



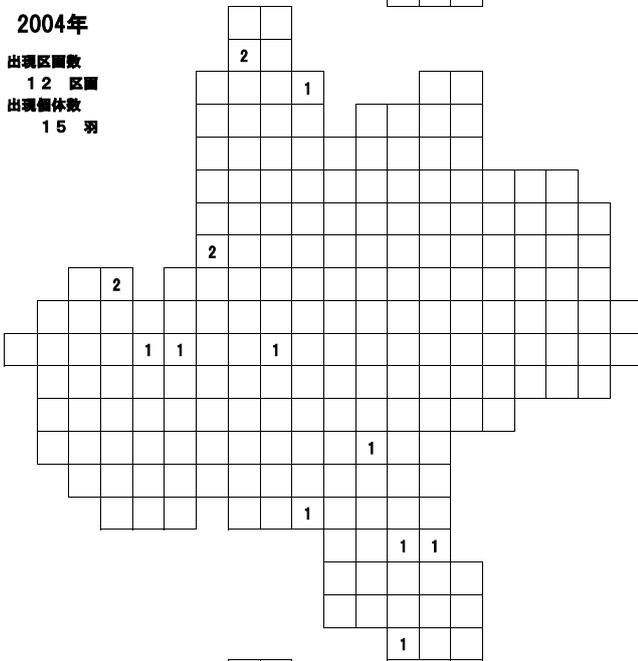
2014年

出現区画数  
11 区画  
出現個体数  
17 羽



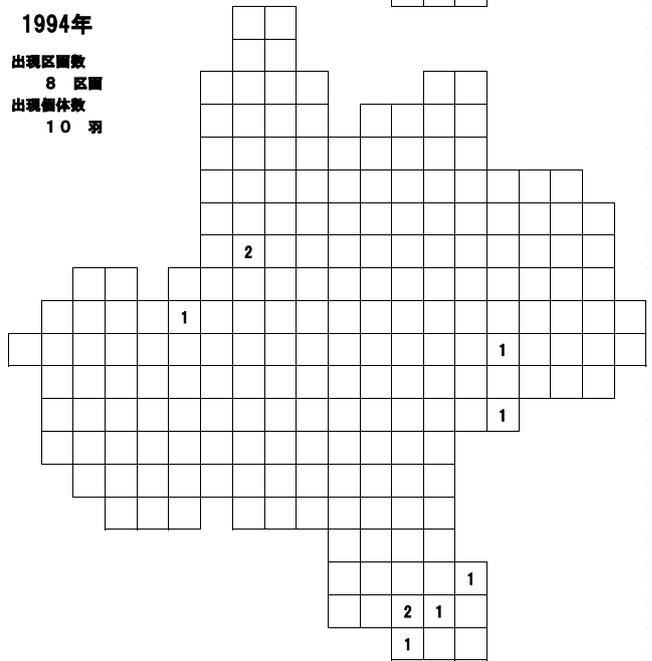
2004年

出現区画数  
12 区画  
出現個体数  
15 羽



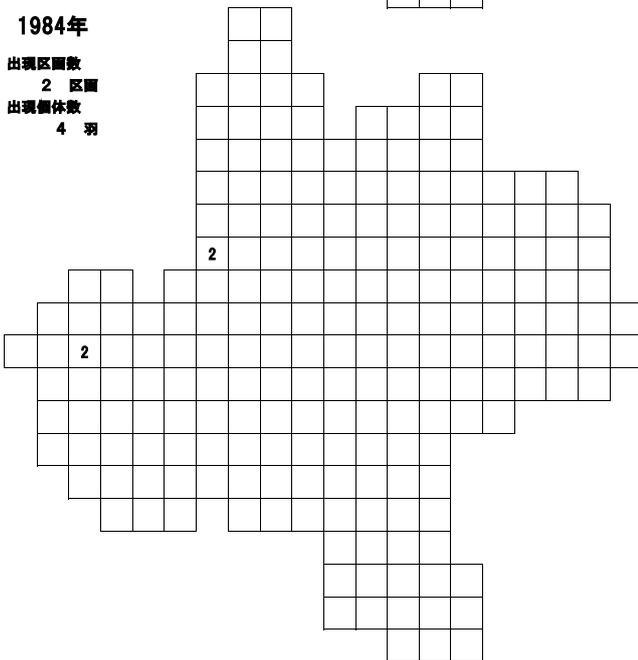
1994年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
10 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



### 29. オオタカ *Accipiter gentilis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	4	10	15	17	2
出現区画数	2	8	12	11	1
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	1.3	1.3	1.5	2.0

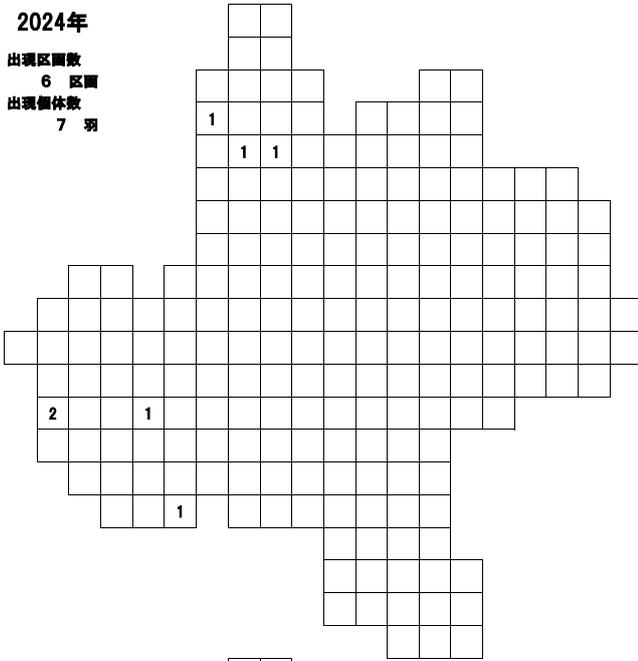
24年は加治丘陵で1区画で2羽を記録し、狭山丘陵では記録がなかった。

総個体数は、14年を頂点とした山型で推移し、24年は急激に減少している。アライグマによる繁殖妨害なども懸念されるが、原因は不明である。

狭山丘陵では1970年代末から繁殖するようになったと考えられている。その後、丘陵内での営巣が増え、平地の林でも営巣するようになった。本調査でも、84年以降14年まで、個体数が増加していく過程を記録している。留鳥系として区分。

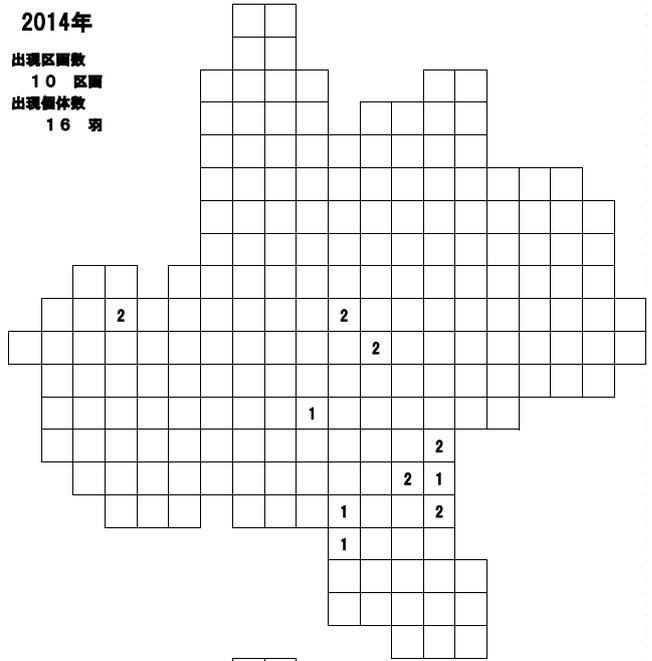
2024年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
7 羽



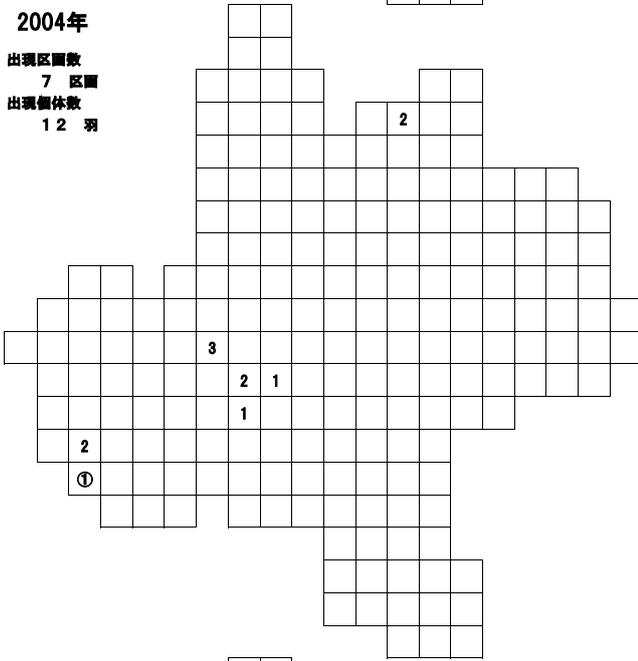
2014年

出現区画数  
10 区画  
出現個体数  
16 羽



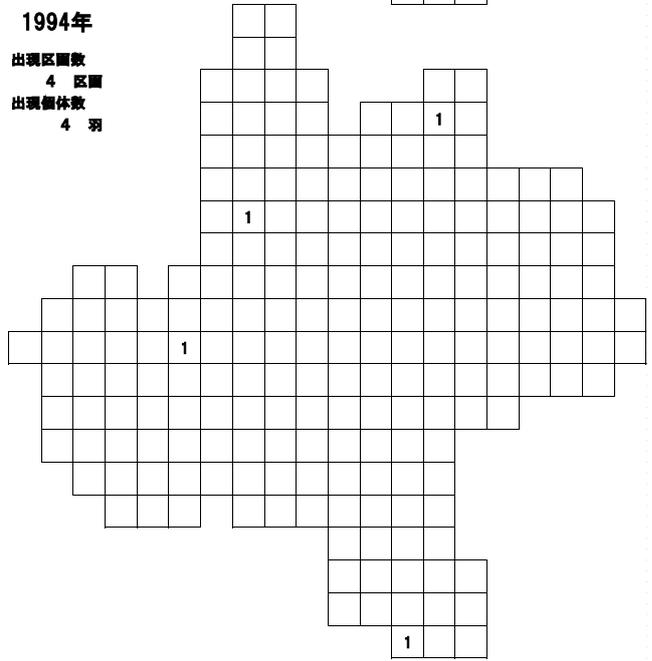
2004年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
12 羽



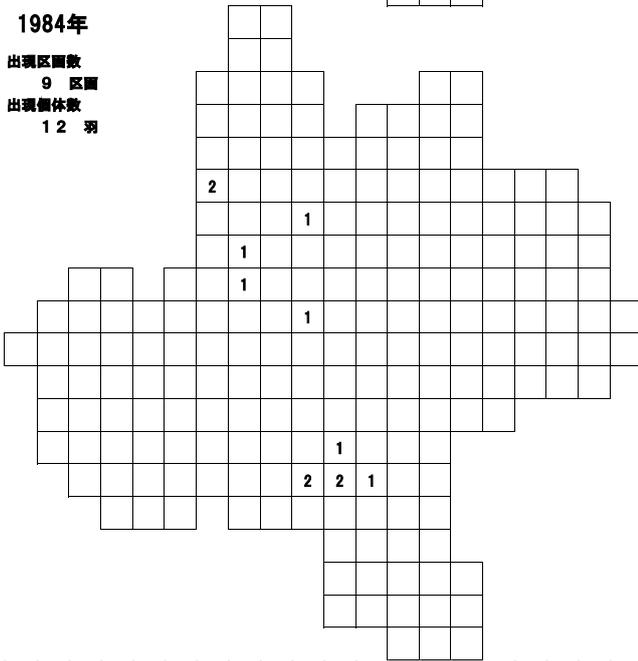
1994年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
4 羽



1984年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
12 羽



### 30. トビ *Milvus migrans*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	12	4	12	16	7
出現区画数	9	4	7	10	6
出現一区画当たりの平均個体数	1.3	1.0	1.7	1.6	1.2

24年は6区画で7羽を記録。

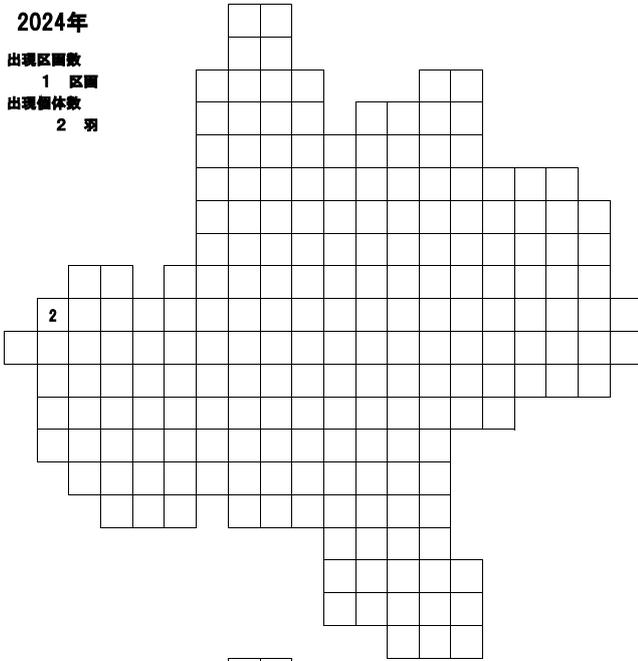
市内では入間川や霞川沿い、農耕地など、ほぼ全域で周年見られるが、個体数は多くない。1990年代は少なかったが、2000年代に入り見ることが増えている。本調査では84年に加治丘陵の高木で営巣を確認している。

トビは個体数が多いグループではなく、内陸部で複数を見ることは少ないが、養鶏場や養豚場の餌の残飯を求めて多数が集まることもある。

留鳥系として区分。

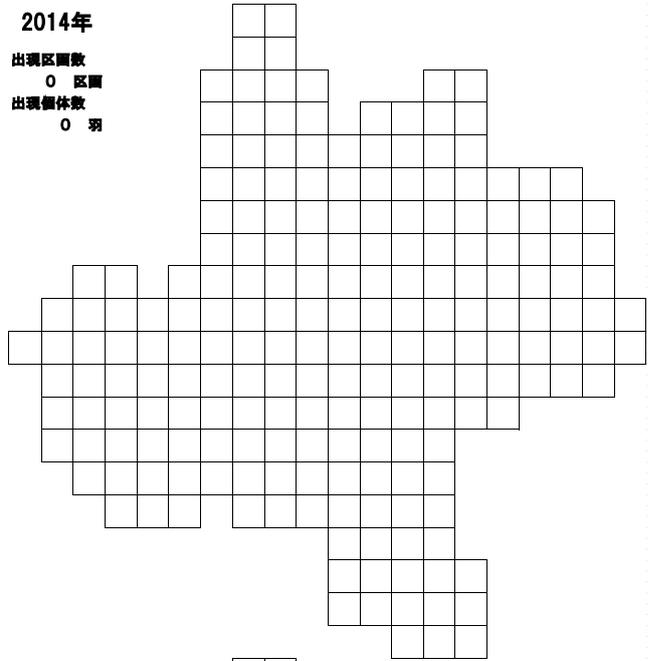
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



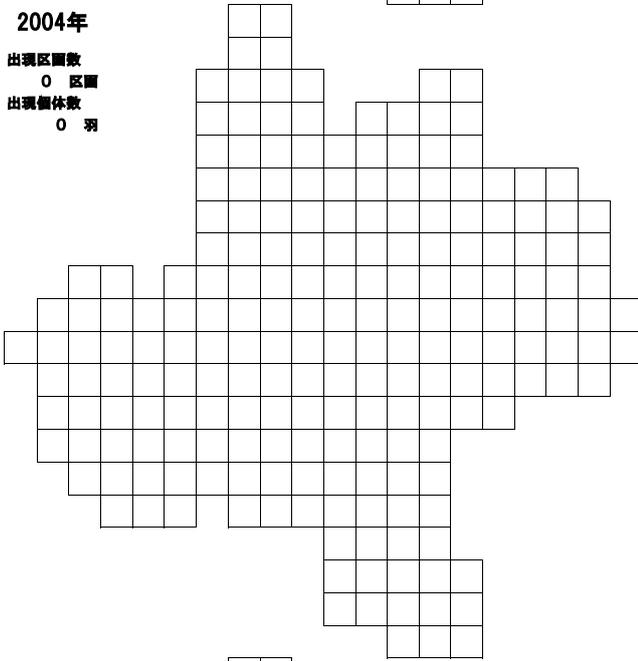
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



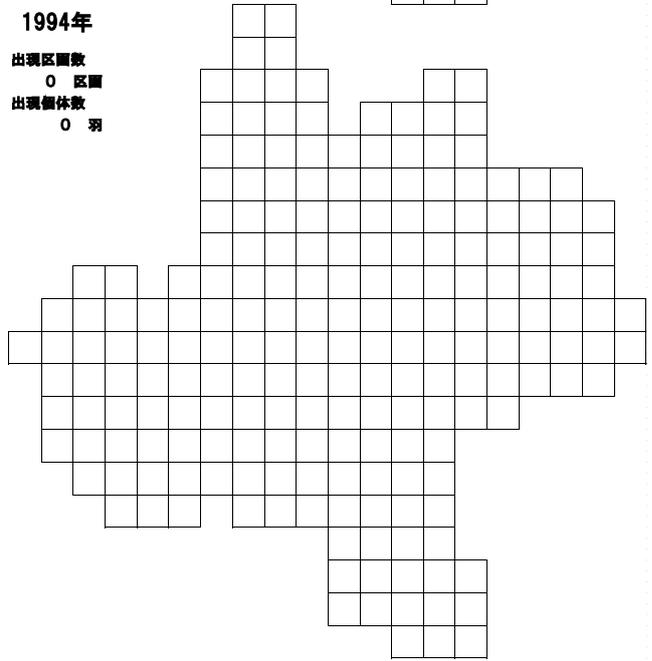
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



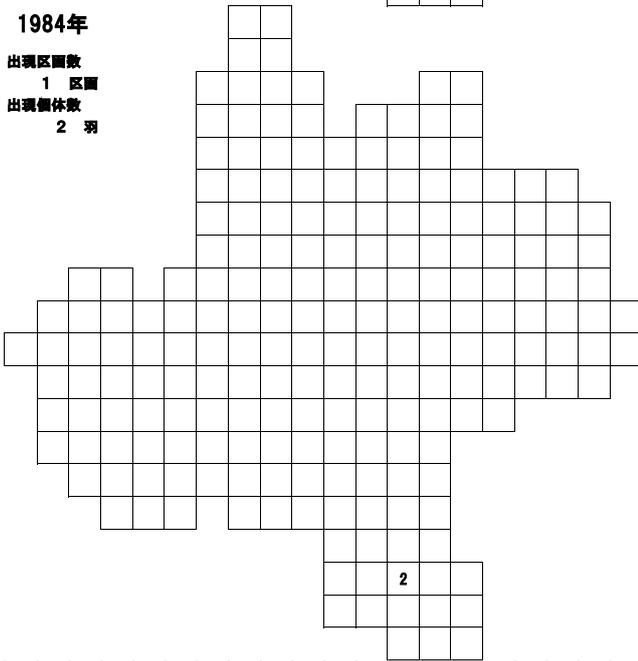
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



### 31. ノスリ *Buteo japonicus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	0	0	2
出現区画数	1	0	0	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	—	—	—	2.0

84年に1区画で2羽記録、その後3回の調査では記録されず、24年は1区画で2羽を記録した。

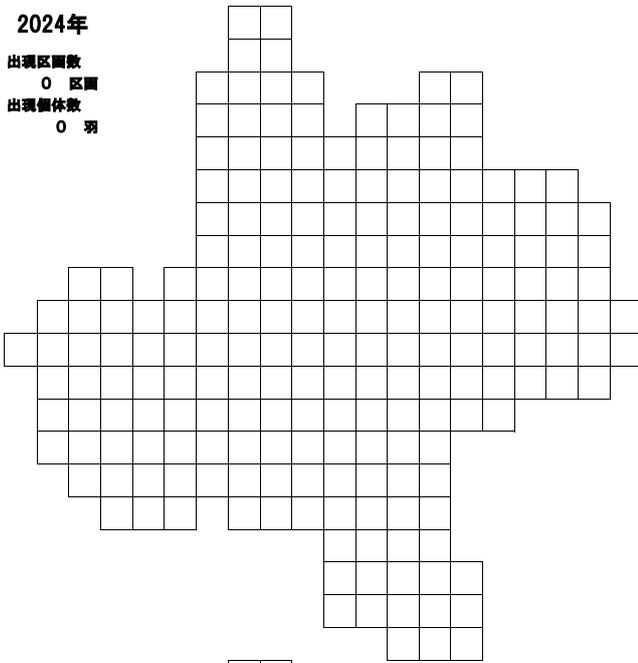
本種は以前から周年に観察されており、繁殖を期待されていたところ、近年、市近隣で繁殖が確認された。

本種の餌はネズミ類、モグラ類が主であり、本市でも農耕地と林がつながる丘陵周辺に、繁殖可能な環境があると思われる。

留鳥系として区分。

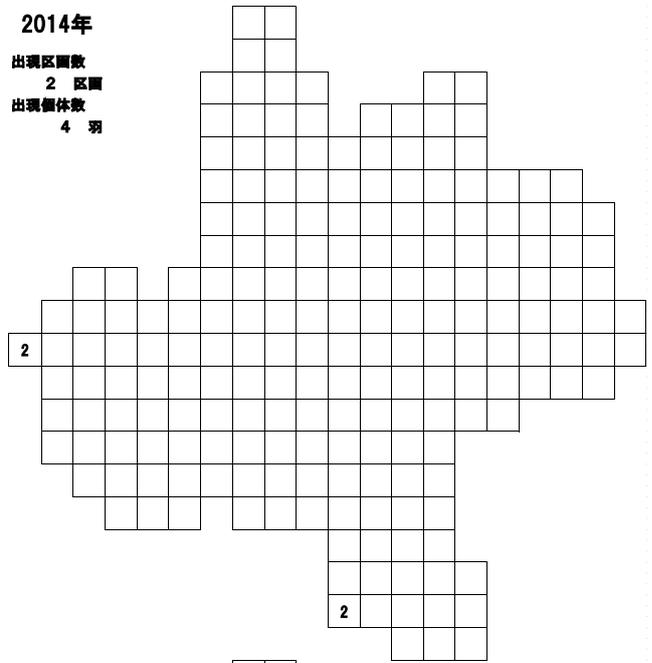
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



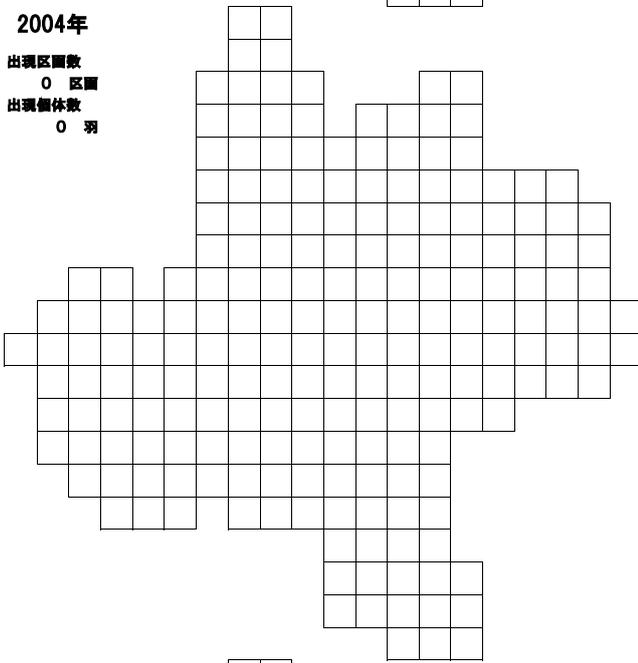
2014年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



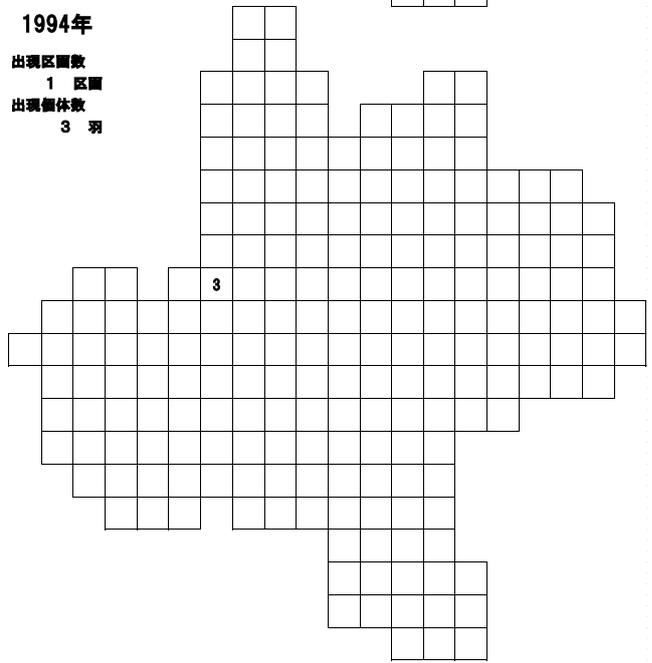
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



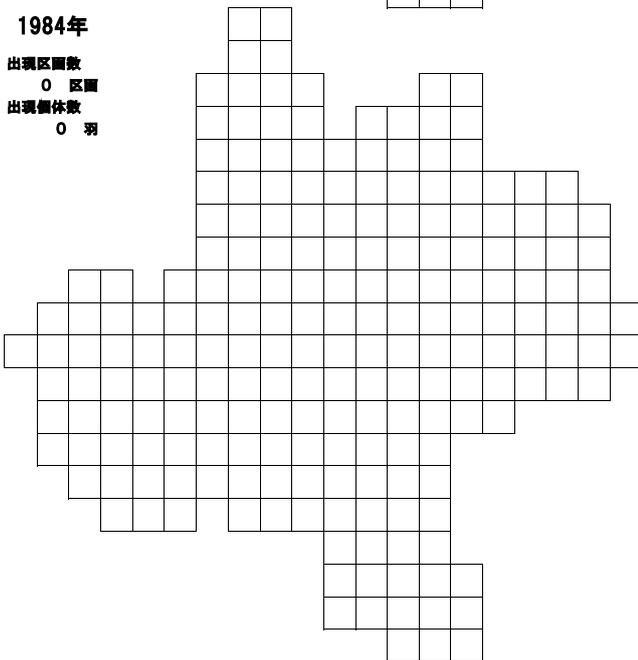
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
3 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 32. フクロウ *Strix uralensis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	3	0	4	0
出現区画数	0	1	0	2	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	3.0	—	2.0	—

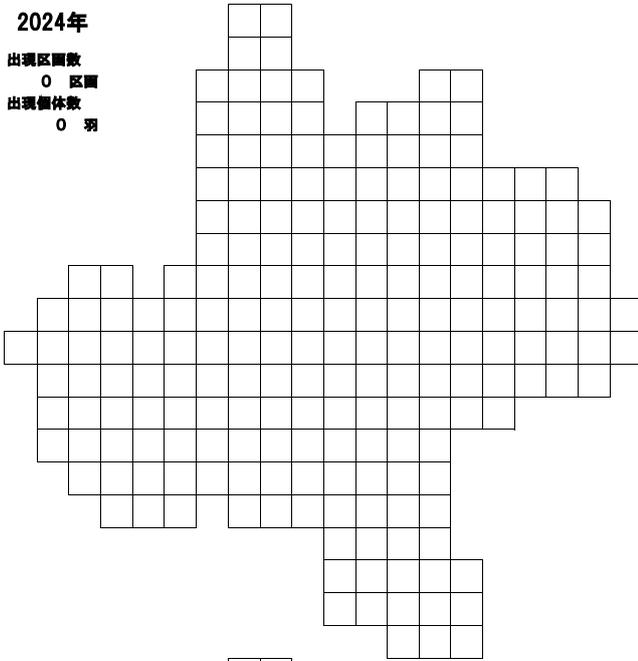
94年と14年に記録されたが、24年は記録されなかった。

本種の繁殖は多くが5月上旬に巣立するため、本調査期間では記録されにくい。また、夜行性のため声・姿とも確認が困難で記録されにくいいため、まばらな記録となっている。

これまでに、狭山丘陵では1985年以降繁殖が確認されている。1989年の入間市の加治丘陵自然環境調査では2組の繁殖が確認されている。24年の本調査では記録を得られなかったが、加治丘陵に住む市民から棲息の情報を得ている。留鳥系として区分。

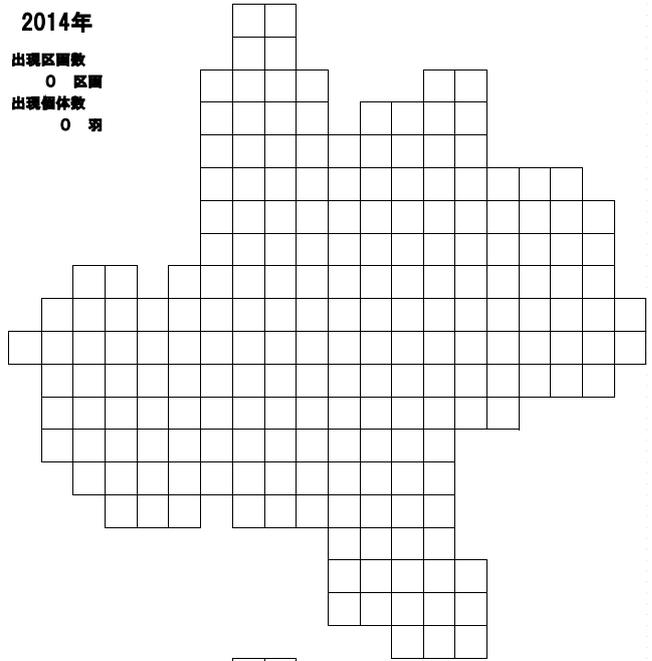
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



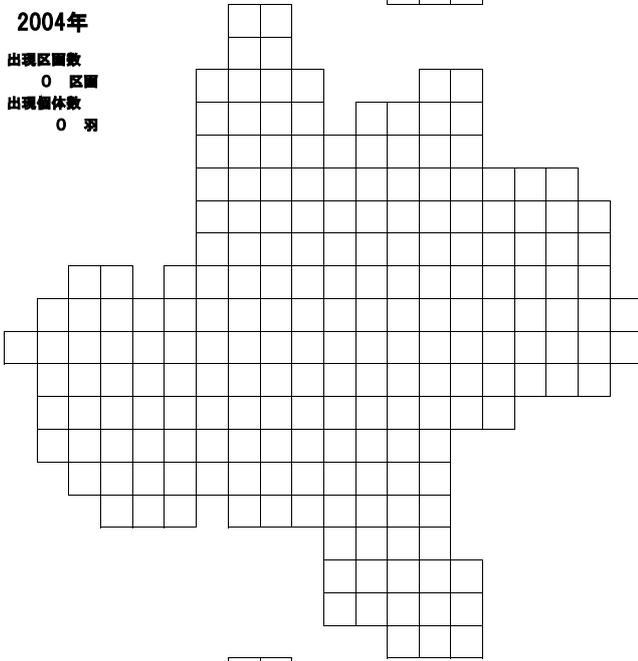
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



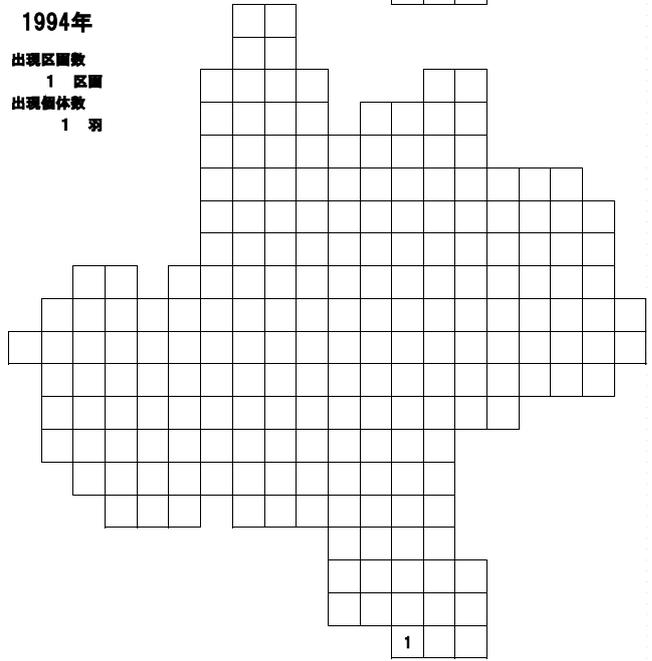
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



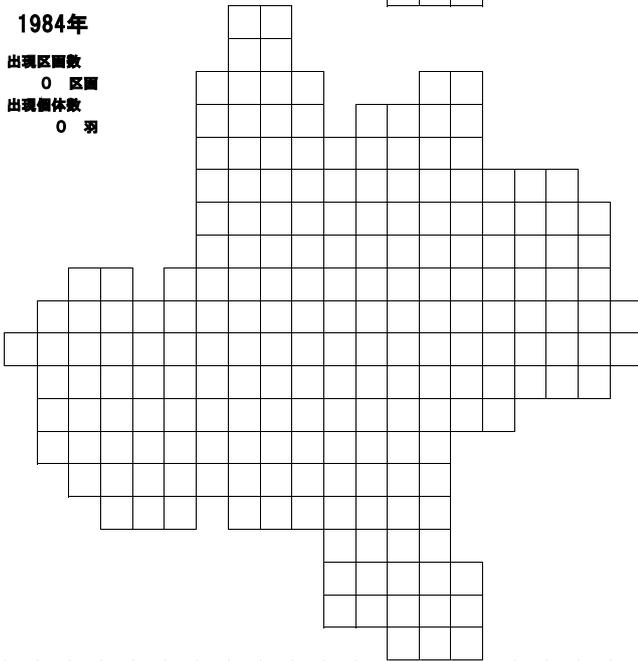
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 33. アカショウビン *Halcyon coromanda*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	1	0	0	0
出現区画数	0	1	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	1.0	—	—	—

94年に1区画で1羽記録。24年は記録が無かった。

市域では、春の渡りの時期(5月下旬以降)に独特の鳴き声を聞くことが稀にある。94年の記録は、狭山丘陵で記録したもの。

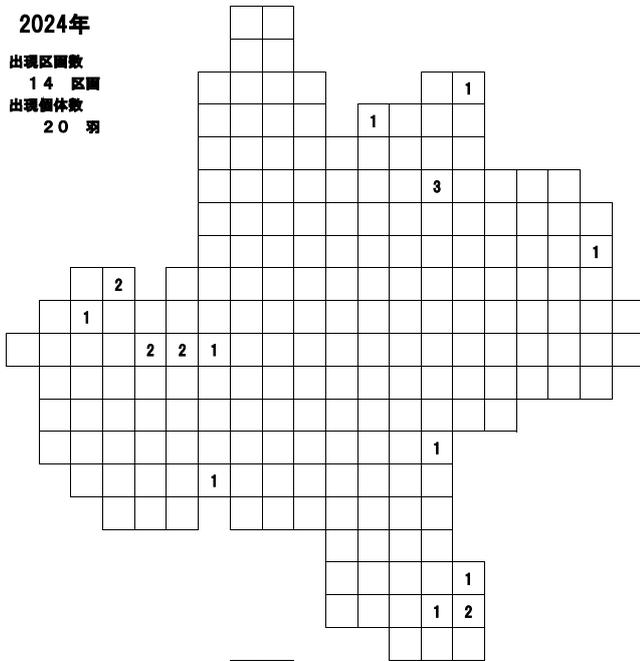
市内丘陵地の林が大木のある森林に育ち、本種が好む環境が整いつつある。本種が滞在、繁殖する事を期待したい。

しかし、ナラ枯れの影響が、どのように出てくるものなのか懸念される。

通過鳥系として区分。

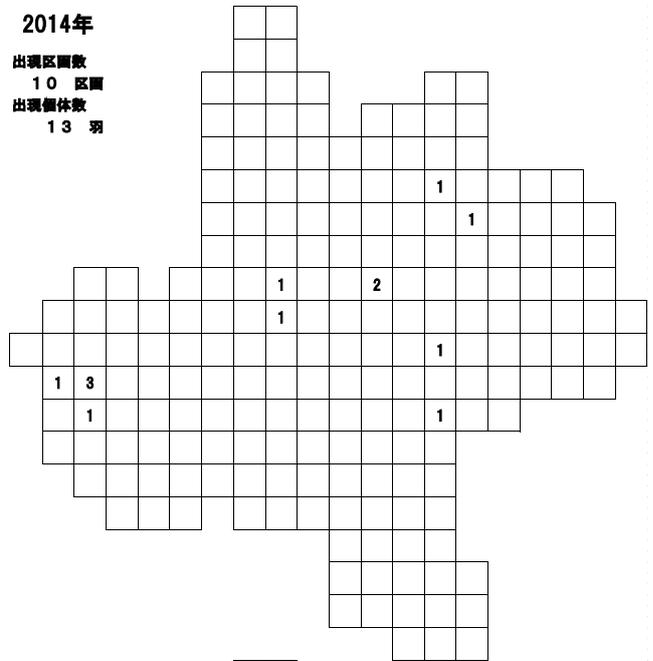
2024年

出現区画数  
14 区画  
出現個体数  
20 羽



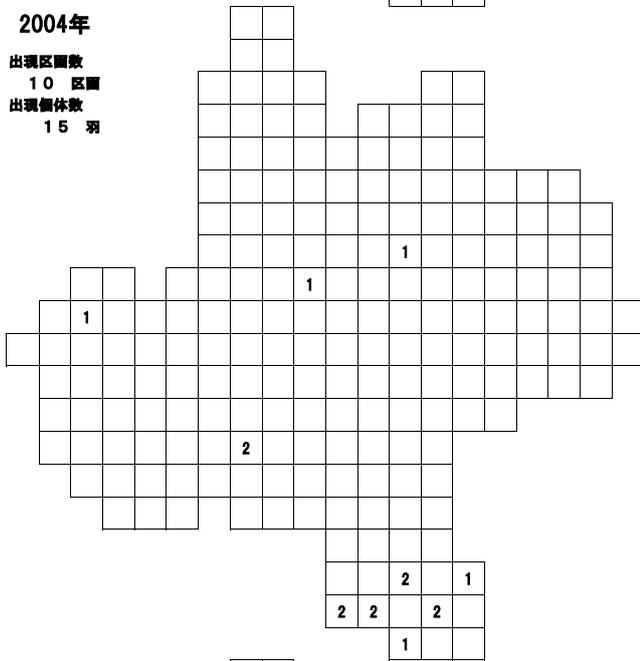
2014年

出現区画数  
10 区画  
出現個体数  
13 羽



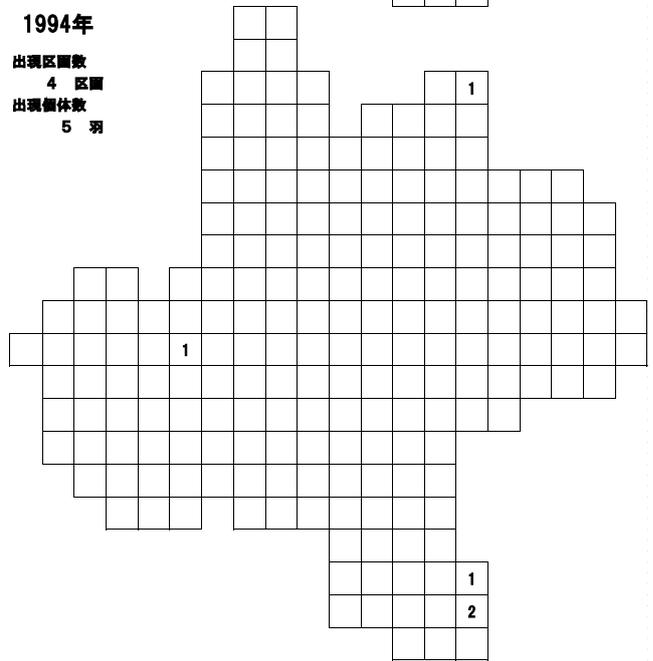
2004年

出現区画数  
10 区画  
出現個体数  
15 羽



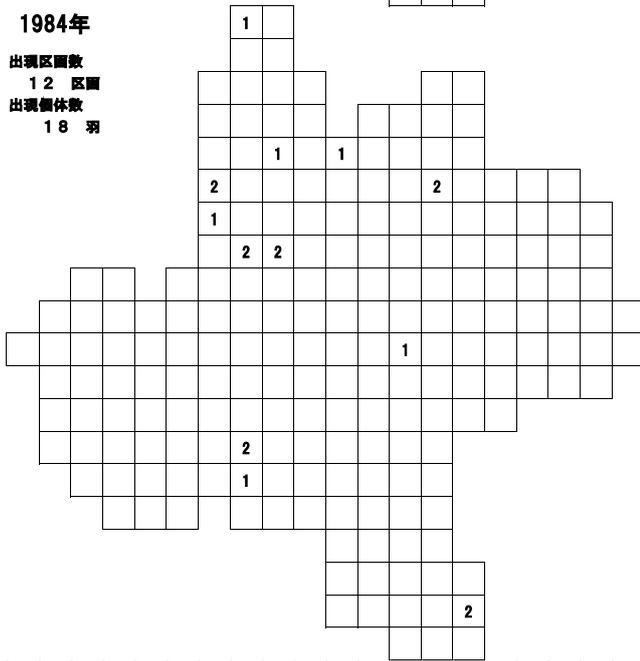
1994年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
5 羽



1984年

出現区画数  
12 区画  
出現個体数  
18 羽



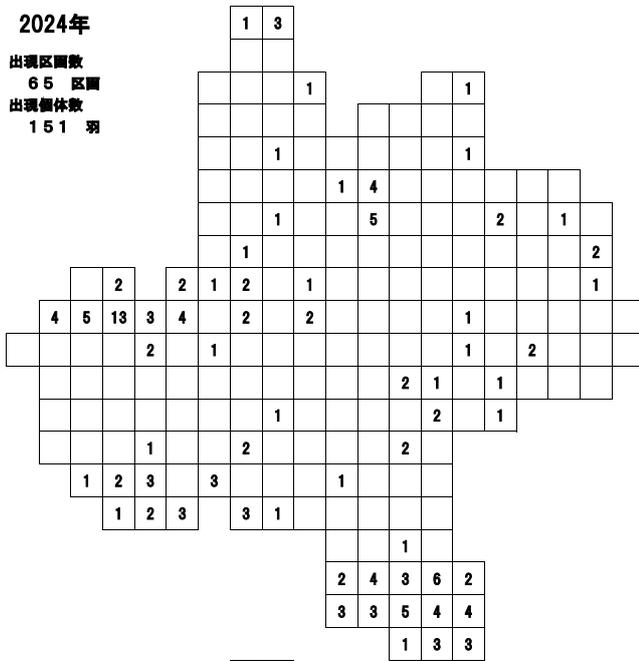
34. カワセミ *Alcedo atthis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	18	5	15	13	20
出現区画数	12	4	10	10	14
出現一区画当たりの平均個体数	1.5	1.3	1.5	1.3	1.4

24年は14区画で20羽を記録した。  
 入間川、霞川などの河川や狭山湖、大森調整池などの池沼で記録されている。  
 高度成長期に激減、1970年代後半から徐々に復活してきた鳥。本調査はその後として、少数だがほぼ安定した数を記録している。  
 本種が増加するためには、小魚類が十分に捕れる水辺と繁殖のための巣穴をつくる土の崖（壁）が必要である。市域にはそうした条件がそろった地形はそれほど多くない。これ以上の個体数の増加は期待できないであろう。  
 留鳥系として区分。

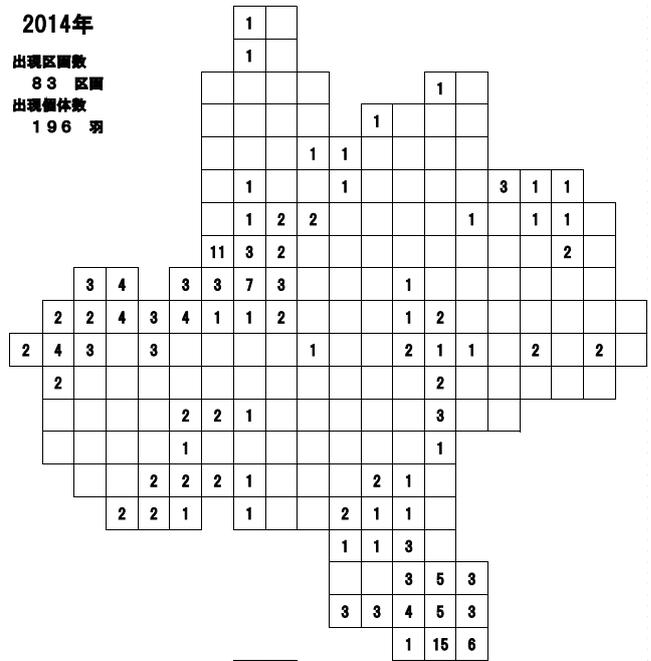
2024年

出現区画数  
65 区画  
出現個体数  
151 羽



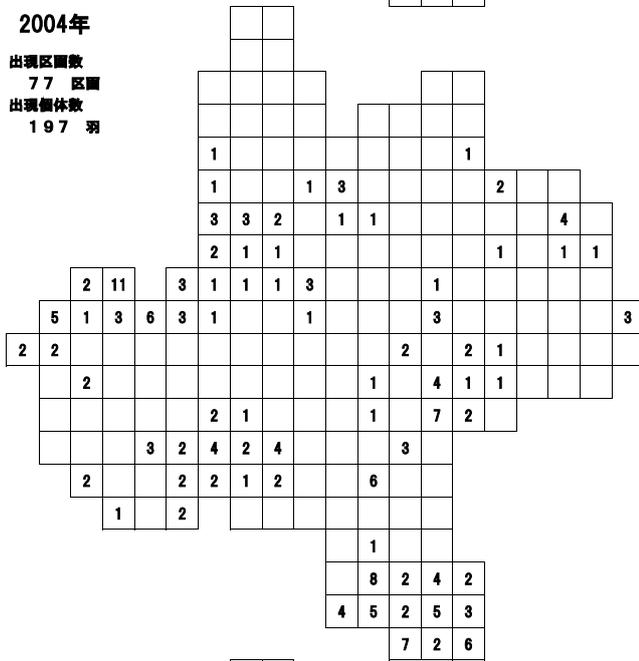
2014年

出現区画数  
83 区画  
出現個体数  
196 羽



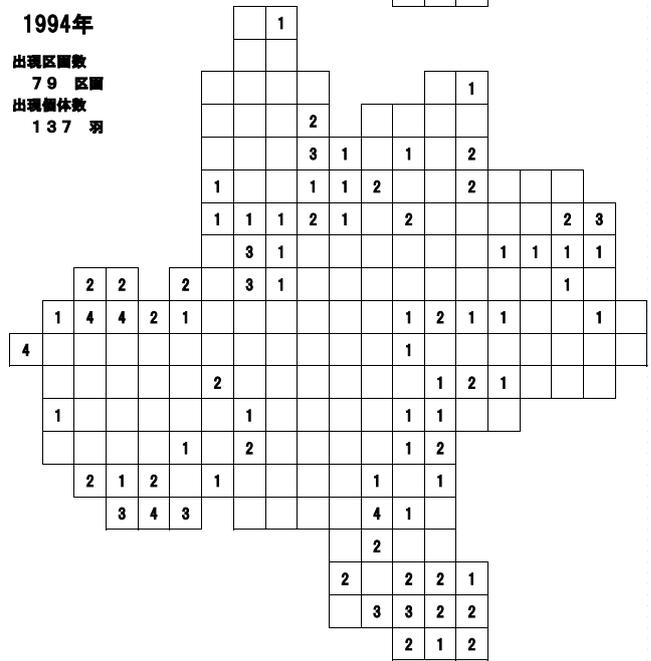
2004年

出現区画数  
77 区画  
出現個体数  
197 羽



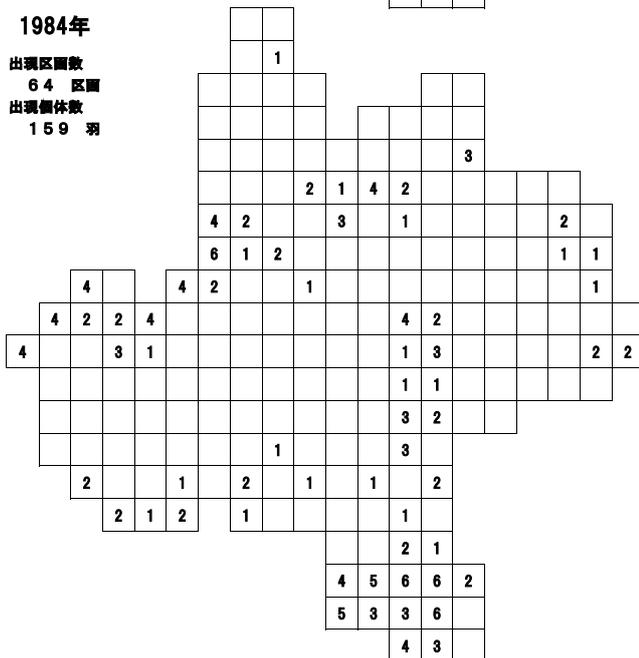
1994年

出現区画数  
79 区画  
出現個体数  
137 羽



1984年

出現区画数  
64 区画  
出現個体数  
159 羽



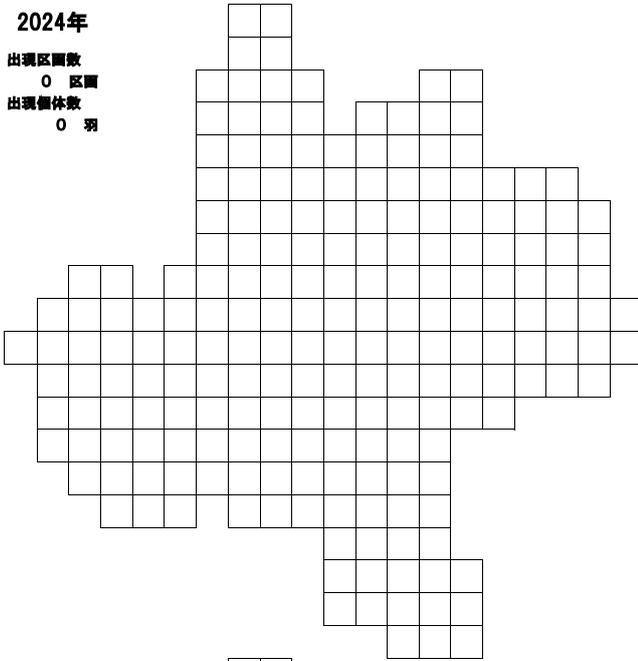
### 35. コゲラ *Yungipicus kizuki*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	159	137	197	196	151
出現区画数	64	79	77	83	65
出現一区画当たりの平均個体数	2.5	1.7	2.6	2.4	2.3

24年は65区画で151羽を記録した。本種は1960年代には少なく、70年代後半から増加傾向になった。雑木林が放置され枯れ木が増えたためと言われている。本記録では、総個体数、出現区画数とも14年まで増加したが、24年は減少している。区画図を見ても分布の拡大が丘陵や平地林から始まり、現在では公園など小規模な林や住宅地などへも進出している様子がうかがえる。近年丘陵ではナラ枯れによって倒木が増えている。コゲラへの影響がどうなるのか注視する必要がある。留鳥系として区分。

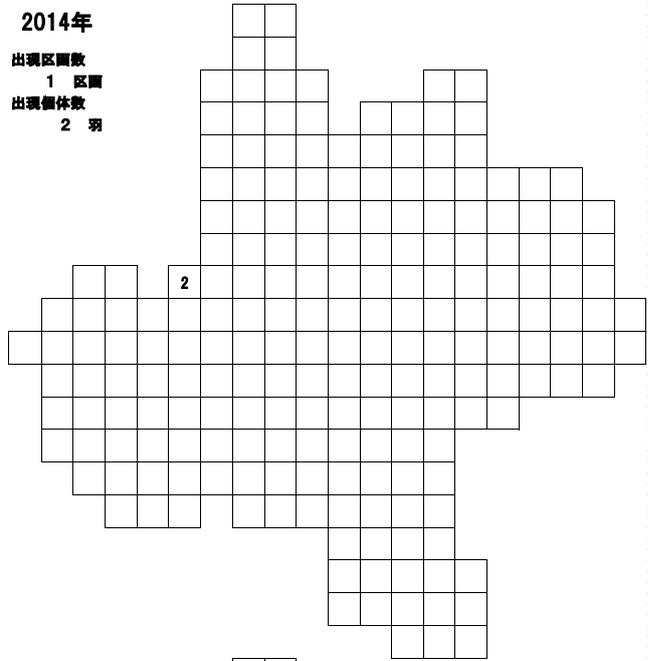
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



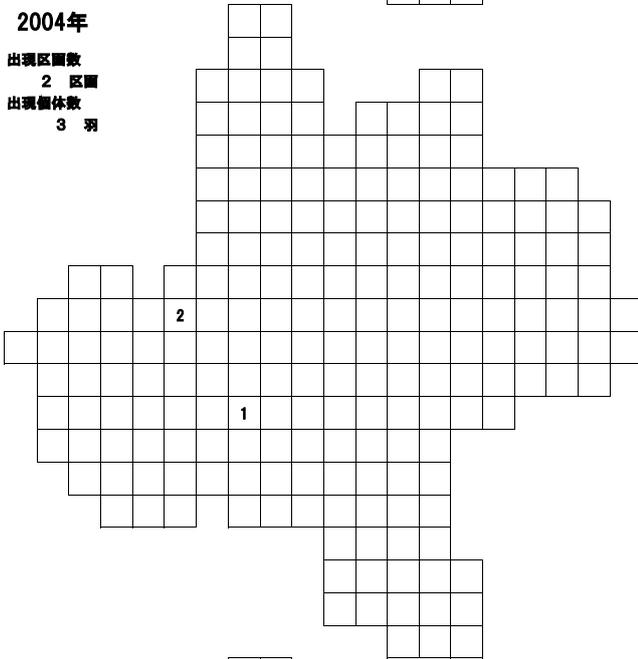
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



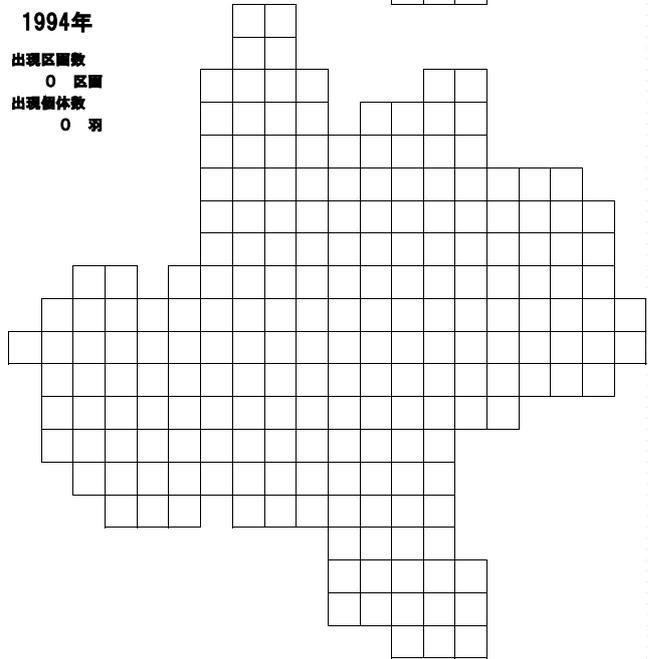
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



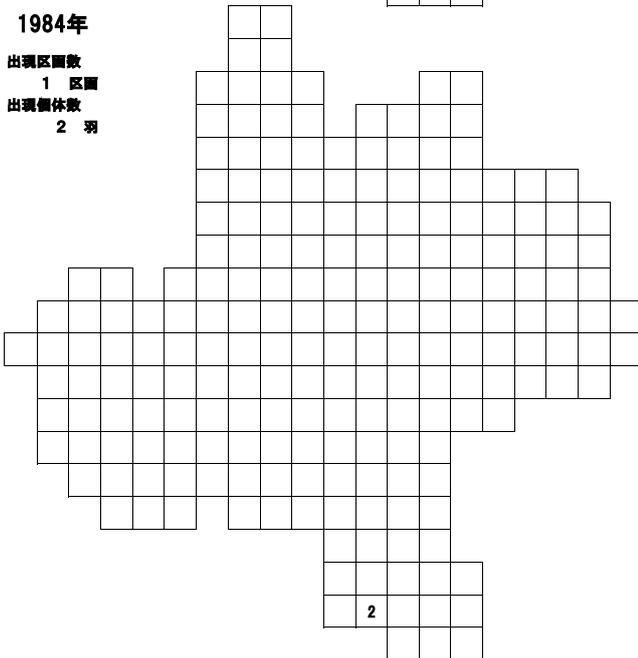
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



### 36. アカゲラ *Dendrocopos major*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	3	2	0
出現区画数	1	0	2	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	—	1.5	2.0	—

84年、04年、14年に記録したが、24年は記録されなかった。

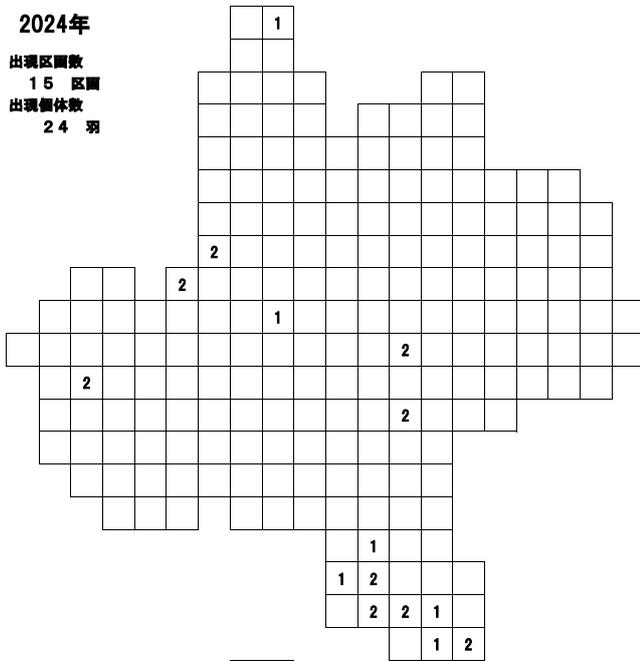
本種は、関東地方では、標高800m程度以上の山地の落葉広葉樹林に棲息し、繁殖している。

市域では、冬の観察回数は近年増えているが、繁殖期の情報は、本調査による記録のみであり、繁殖記録の情報はまだない。

通過鳥として区分。

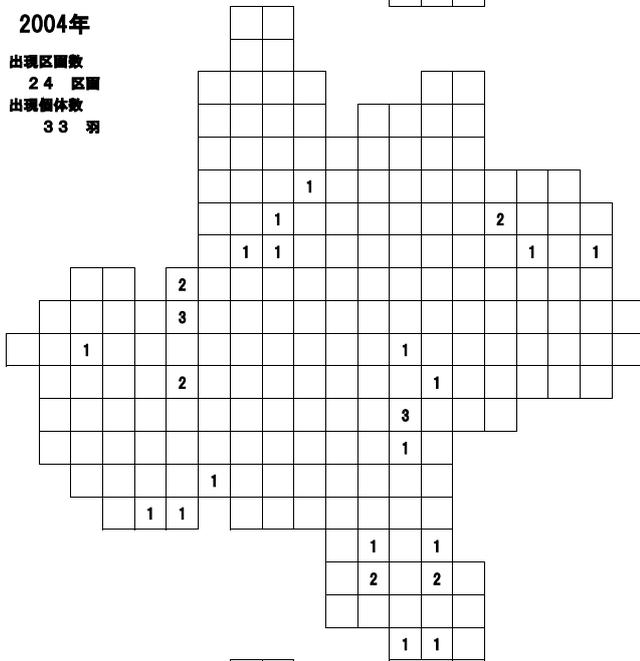
2024年

出現区画数  
15 区画  
出現個体数  
24 羽



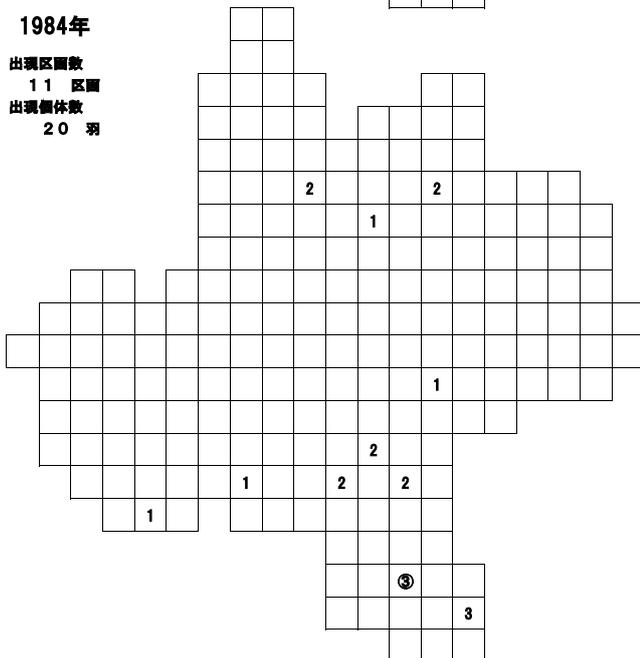
2004年

出現区画数  
24 区画  
出現個体数  
33 羽



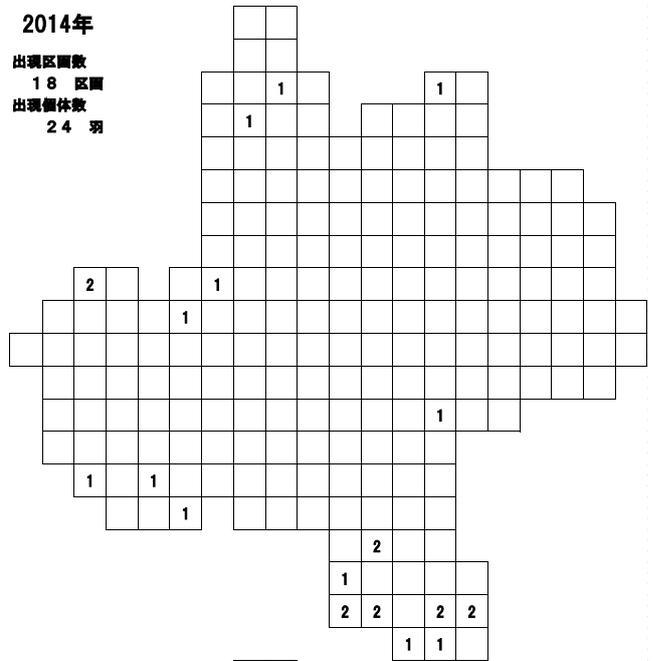
1984年

出現区画数  
11 区画  
出現個体数  
20 羽



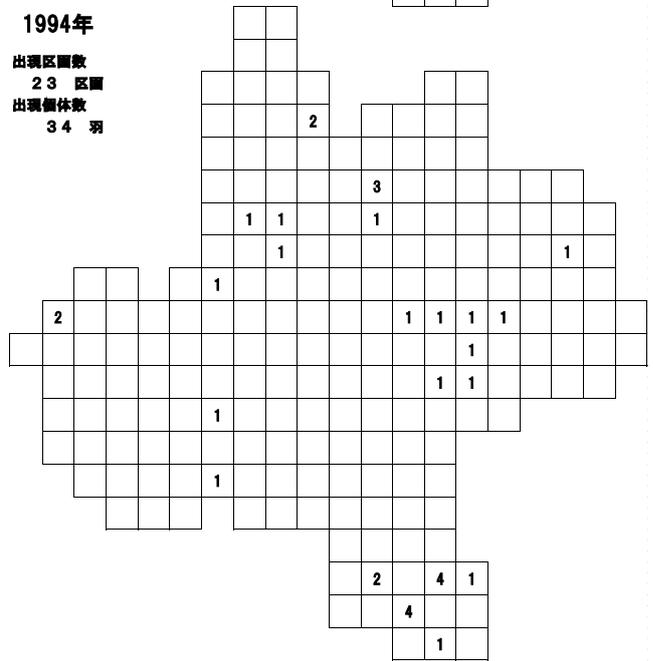
2014年

出現区画数  
18 区画  
出現個体数  
24 羽



1994年

出現区画数  
23 区画  
出現個体数  
34 羽



### 37. アオゲラ *Picus awokera*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総区画数	20	34	33	24	24
出現区画数	11	23	24	18	15
出現一区画当たりの平均個体数	1.8	1.5	1.4	1.3	1.6

24年は15区画で24羽を記録。

本種は、1960年代には稀に見られる鳥だったが、70年以降増加傾向になった鳥。94年・04年頃が本種としての飽和状況にあり、14年で減少、安定期に入ったものと思われる。

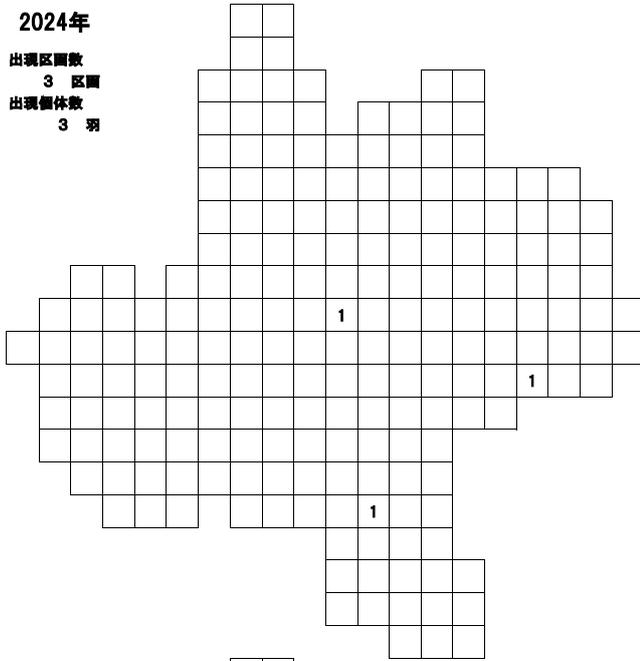
分布は丘陵の雑木林から平地林へ、近年は稀に公園や住宅地周辺などにも巣を造るものがある。分布の広がり方は同じキツツキ類のコゲラに似るが、個体数は格段に少ない。

留鳥系として区分。

※No.35コゲラ参照

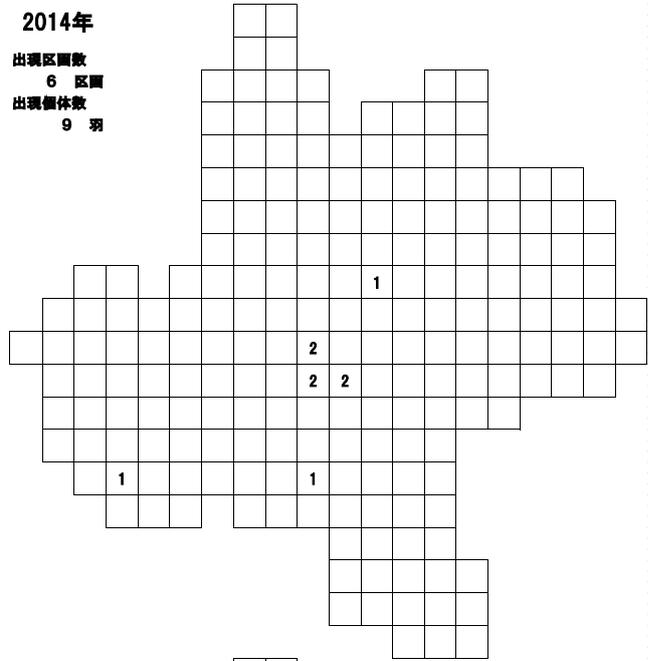
2024年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
3 羽



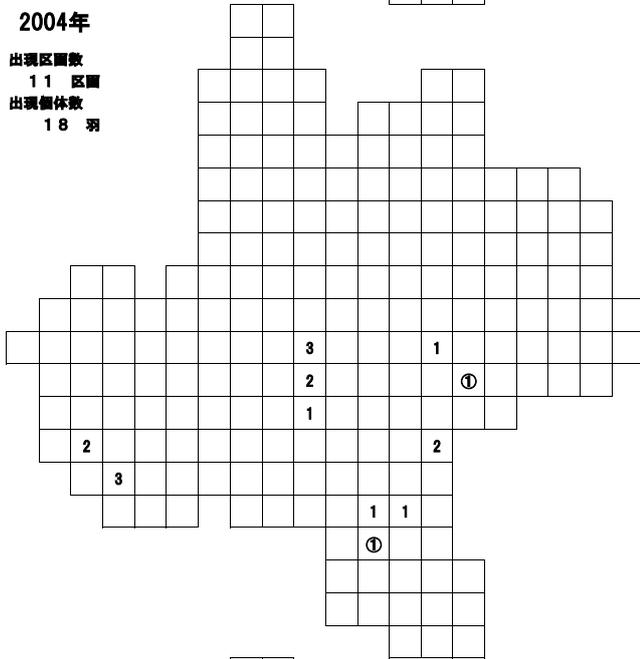
2014年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
9 羽



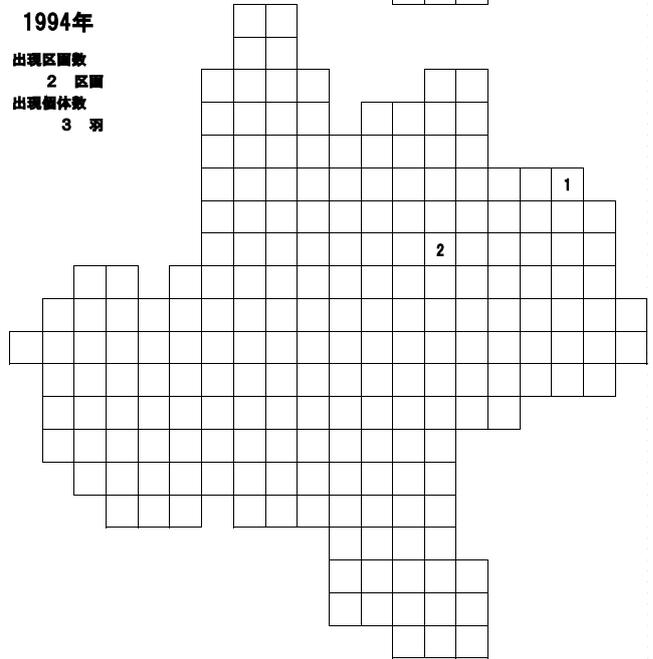
2004年

出現区画数  
11 区画  
出現個体数  
18 羽



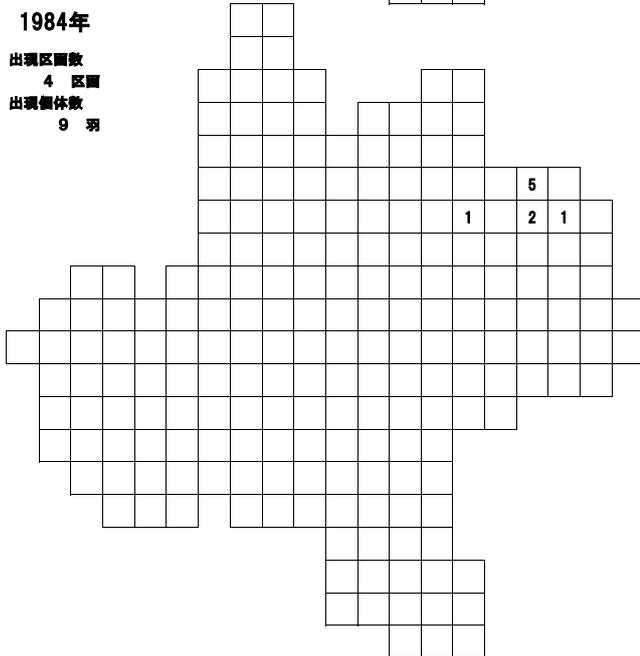
1994年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
9 羽



### 38. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総羽個体数	9	3	18	9	3
出現区画数	4	2	11	6	3
出現一区画当たりの平均個体数	2.3	1.5	1.6	1.5	1.0

24年は3区画で3羽を記録。

本種の自然での繁殖環境は崖地や切り立った岩棚で、1960年代頃から人口建造物に営巣する例が報告されている。

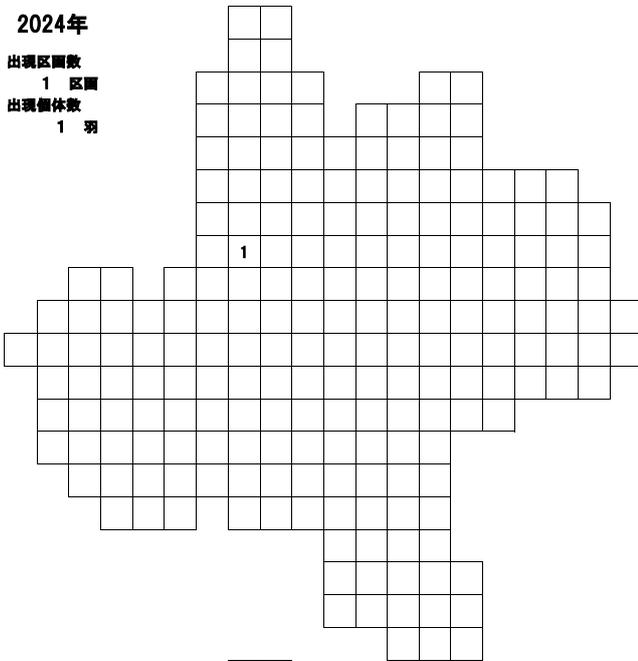
市近隣では1980年頃から人口建造物（山口貯水池取水塔、ビル、工場の換気口など）で繁殖するものが確認されるようになった。

本調査でも総個体数を一番多く記録した04年に、2例の繁殖（工場の換気口）が確認されている。

留鳥系として区分。

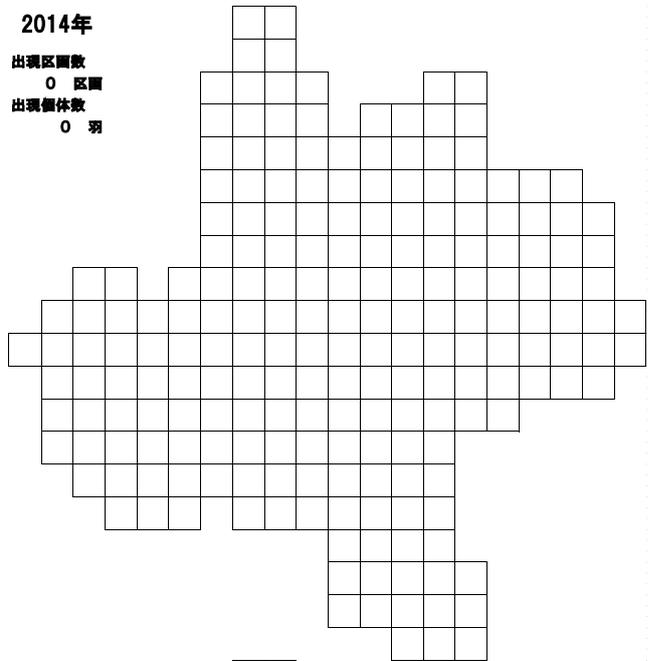
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



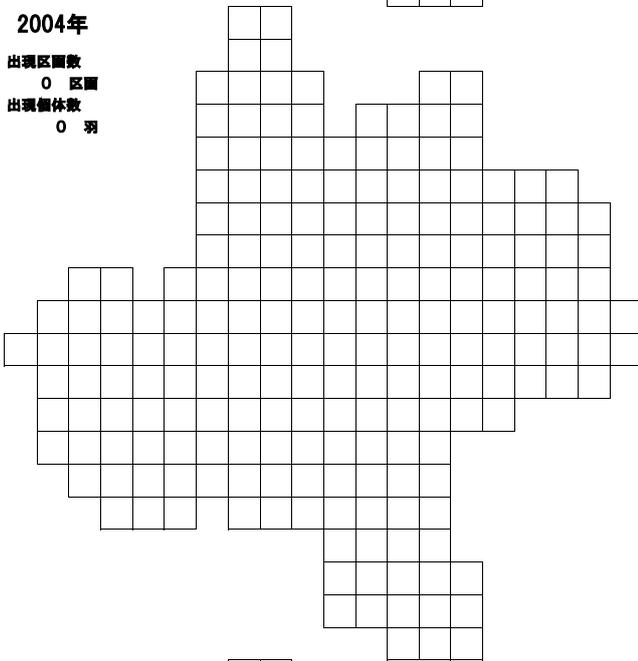
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



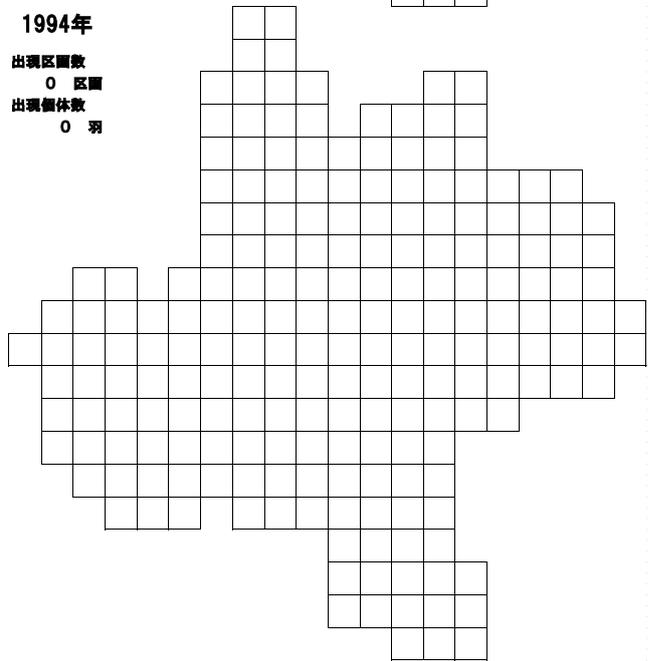
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



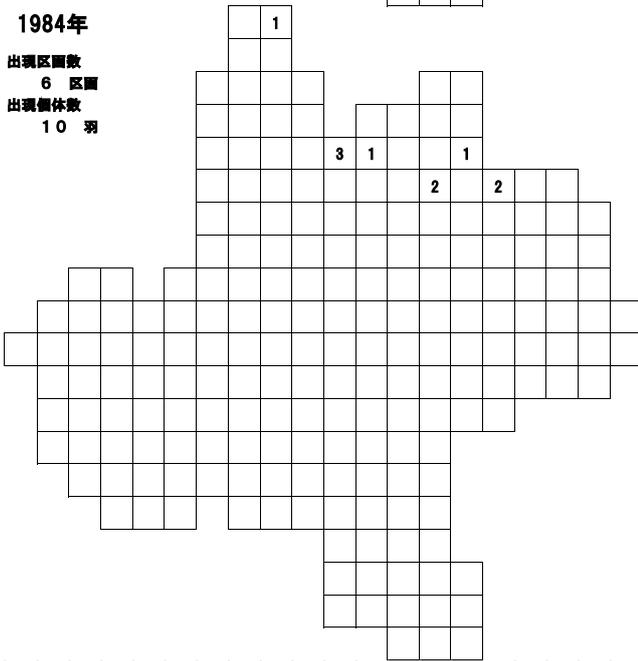
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
10 羽



### 39. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	10	0	0	0	1
出現区画数	6	0	0	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	1.7	—	—	—	1.0

84年に6区画で10羽を記録したがその後無く、24年は1区画で1羽が記録された。

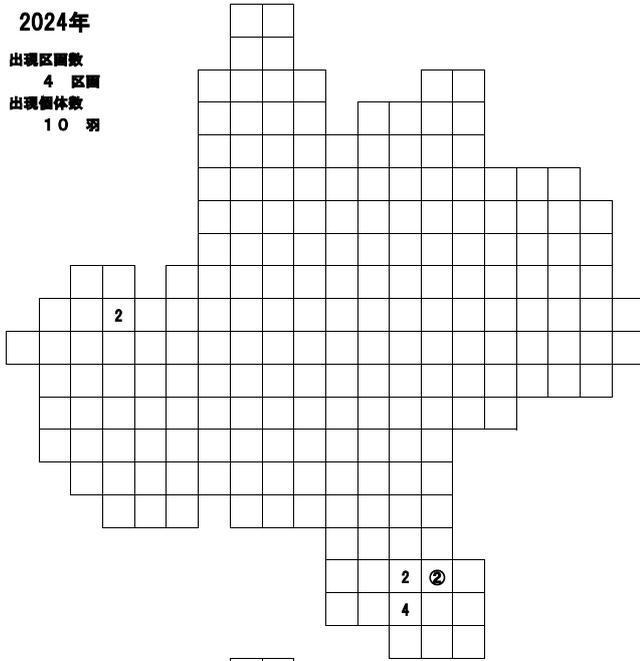
1970年代に入り減少傾向となり、84年にはまだ見られたが、1990年代には渡りの時期に稀に見られる程度にまで減った種。

本種は全国的には現在増加傾向と言われている。1990年代から南方のリュウキュウサンショウクイが沖縄・九州南部から北上し始め、分布域を広げている。2010年頃には関東地方にも飛来するようになっており、近年は市域でも記録されている。

夏鳥系として区分。

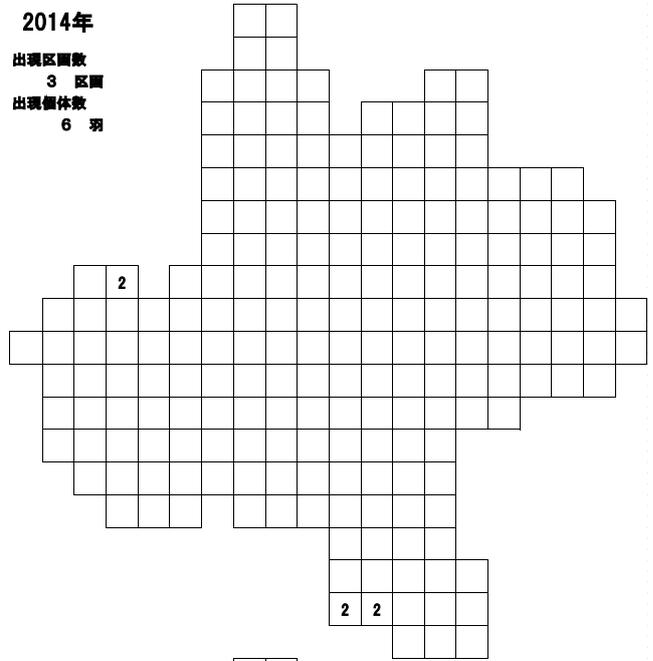
2024年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
10 羽



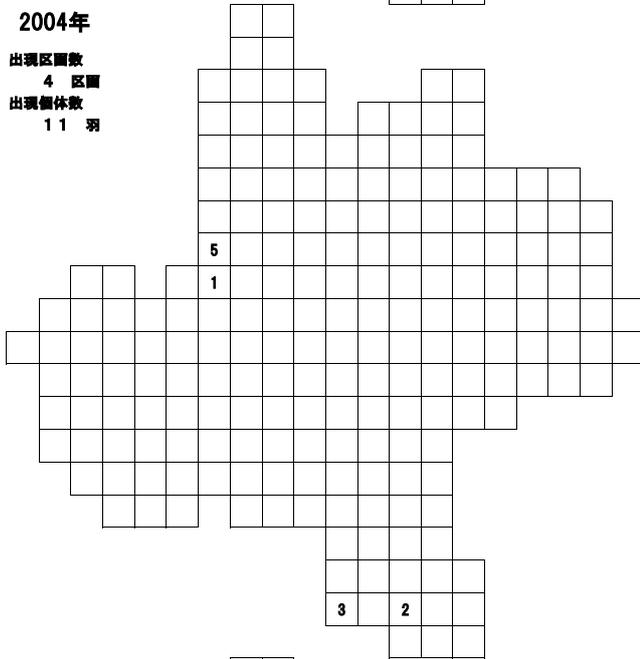
2014年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
6 羽



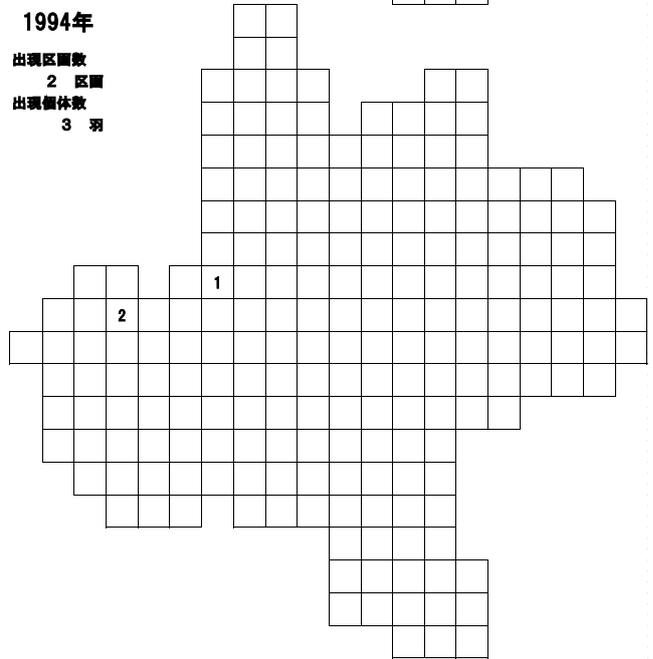
2004年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
11 羽



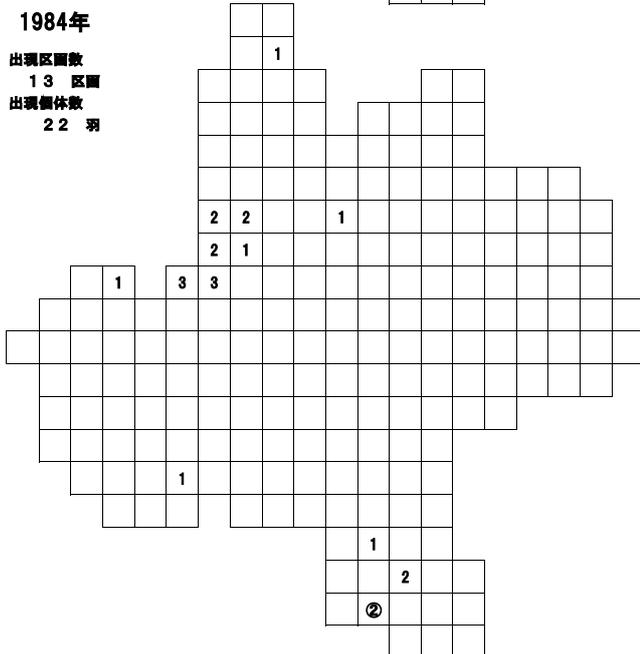
1994年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



1984年

出現区画数  
13 区画  
出現個体数  
22 羽



#### 40. サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	22	3	11	6	10
出現区画数	13	2	4	3	4
出現一区画当たりの平均個体数	1.7	1.5	2.8	2.0	2.5

24年は4区画で10羽を記録した。

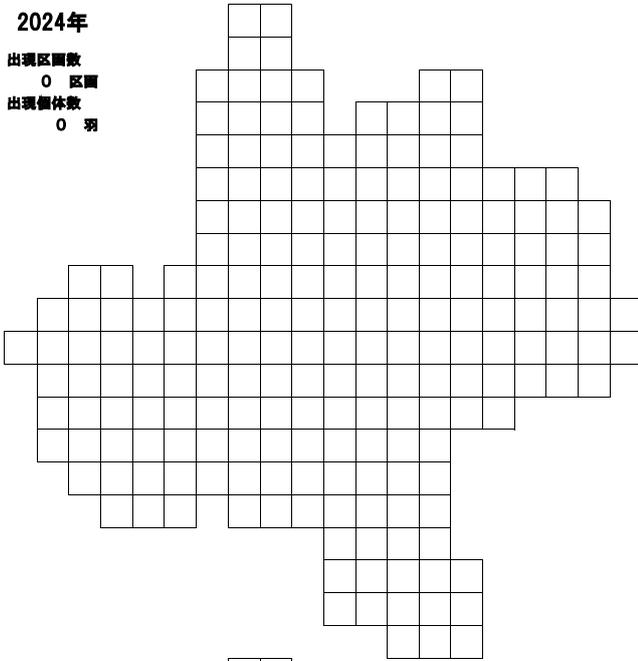
個体数、区画数、区画当り平均個体数が揃って減少・増加・減少・増加を繰り返している。原因は不明。

屋敷林や社寺林、スギ林など、少し暗めの林を好む。94年以降は加治丘陵・狭山丘陵だけで記録され、平地林では記録されていない。全国的には近年増加傾向と言われている。

夏鳥系として区分。

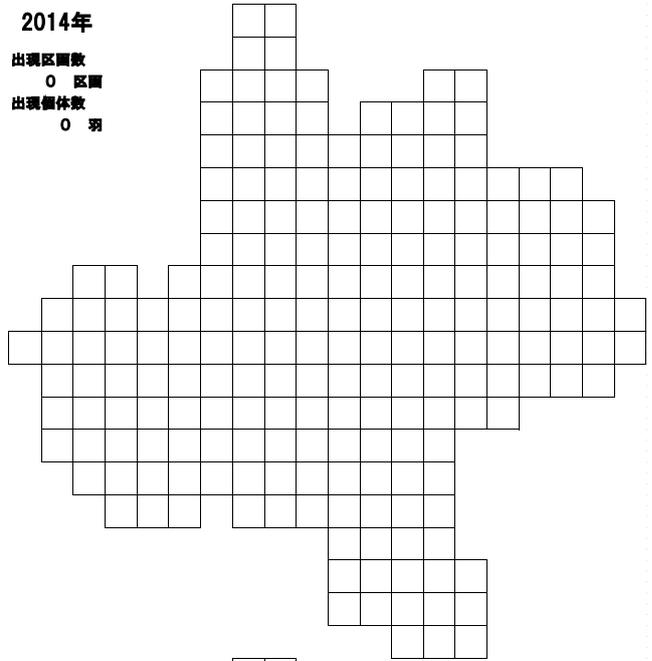
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



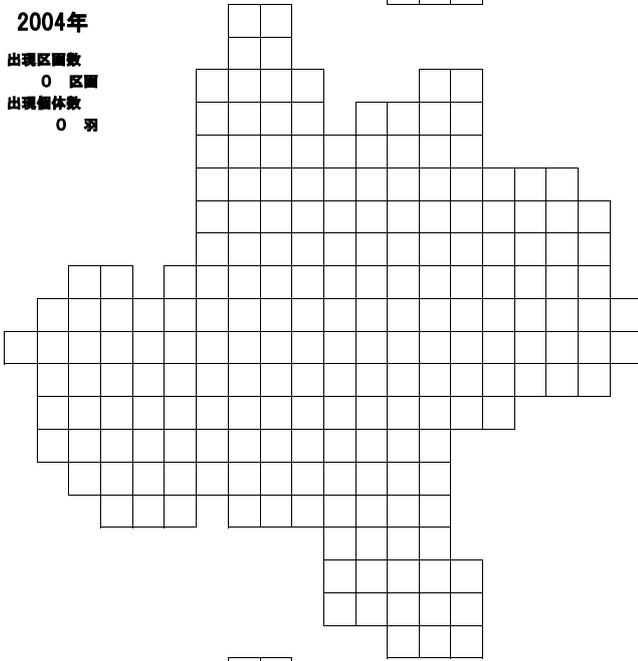
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



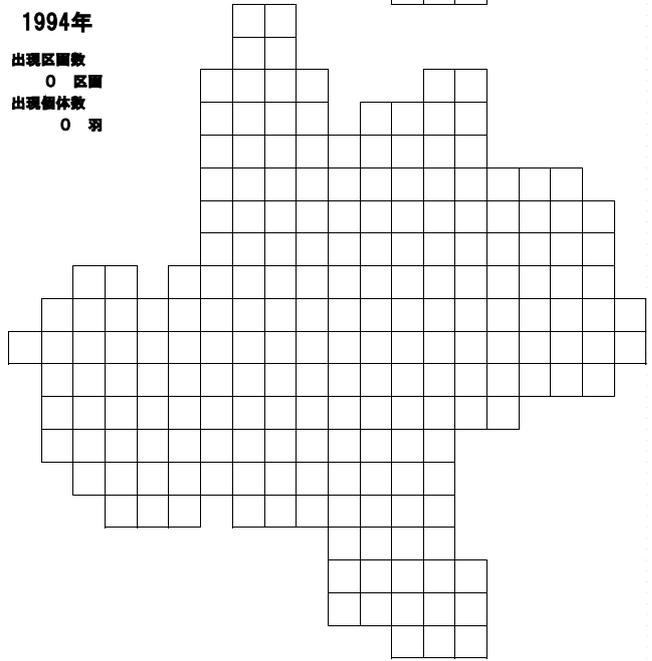
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



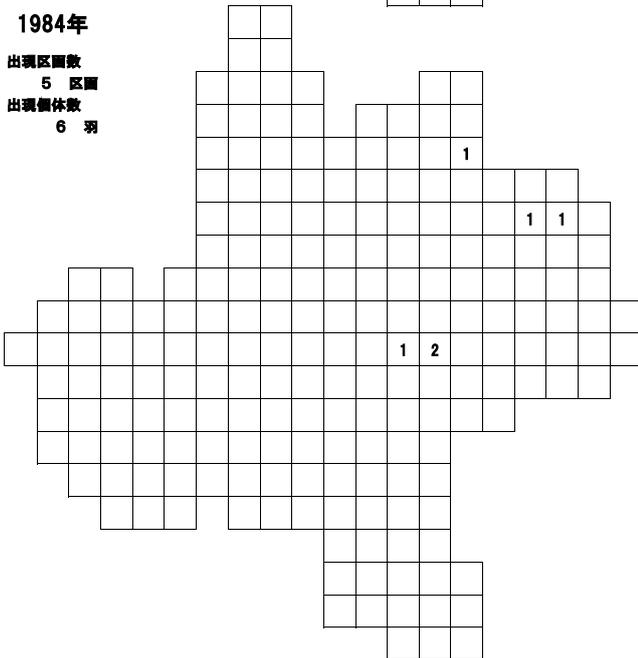
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
5 区画  
出現個体数  
6 羽



#### 41. チゴモズ *Lanius tigrinus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	6	0	0	0	0
出現区画数	5	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.2	—	—	—	—

84年に5区画で6羽を記録したが、94年以降記録が無く、24年も記録していない。

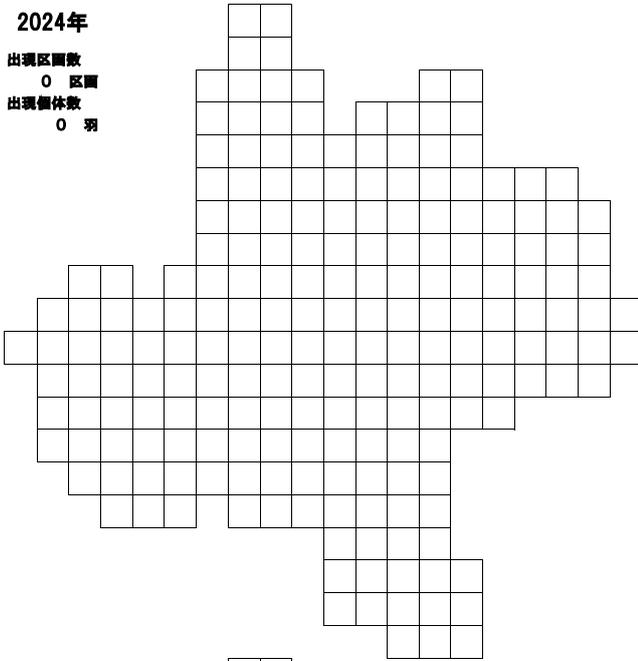
本種は夏鳥として渡来、モズやアカモズよりも樹林を好むという。全国的に減少しており、この調査結果もその状況を裏付ける結果となっている。

市内では、1971年、1979年に宮寺で巣立ち直後の幼鳥を連れた2羽を見た（萩野1980）などの報告があり、1980年頃までは平地の雑木林、ゴルフ場、公園などで少数が繁殖していた。

夏鳥系として区分。

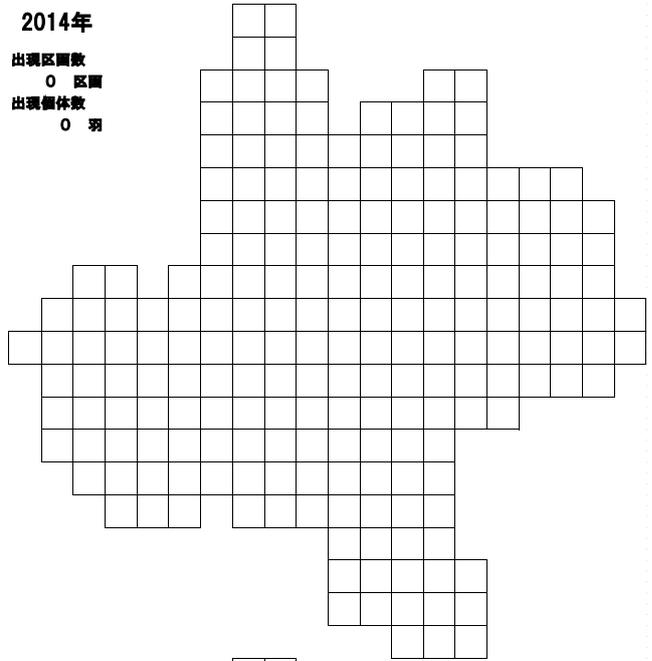
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



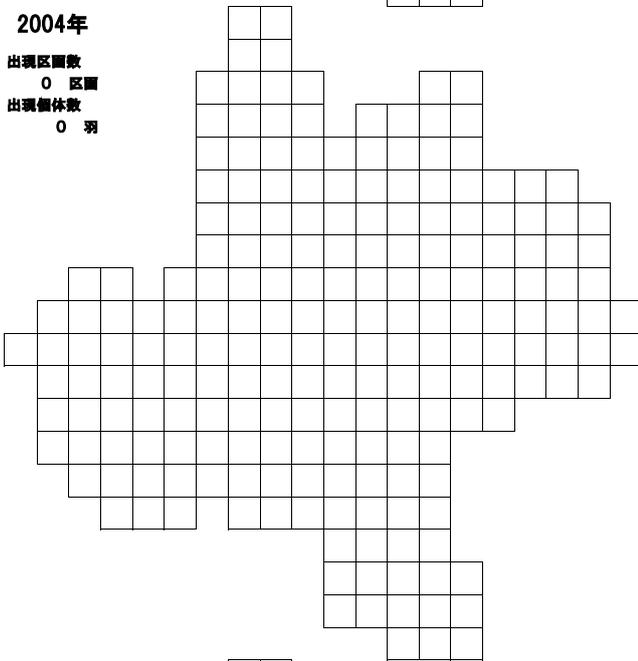
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



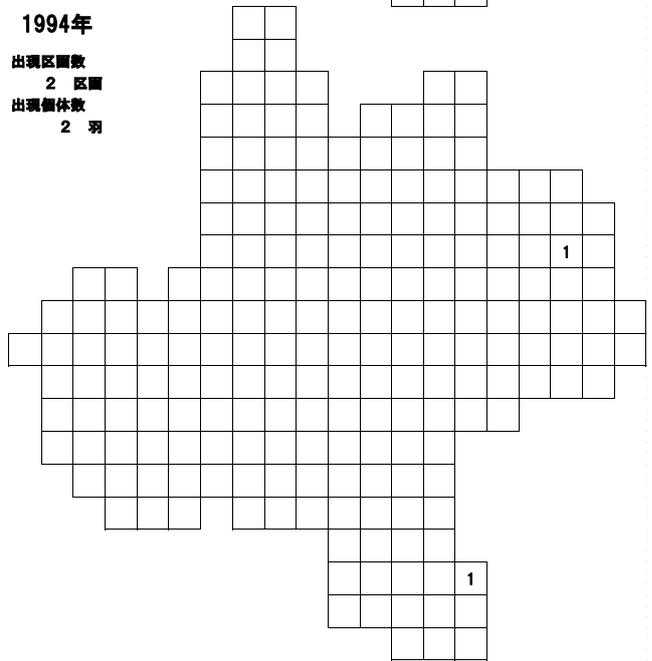
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



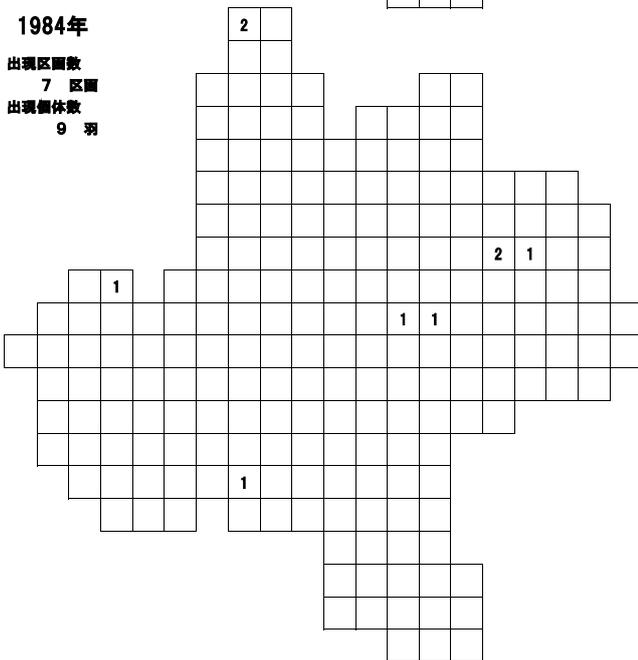
1994年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
9 羽



## 42. アカモズ *Lanius cristatus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	9	2	0	0	0
出現区画数	7	2	0	0	0
出現一區画当たりの平均個体数	1.3	1.0	—	—	—

84年、94年に記録しているが、その後24年も記録が無い。

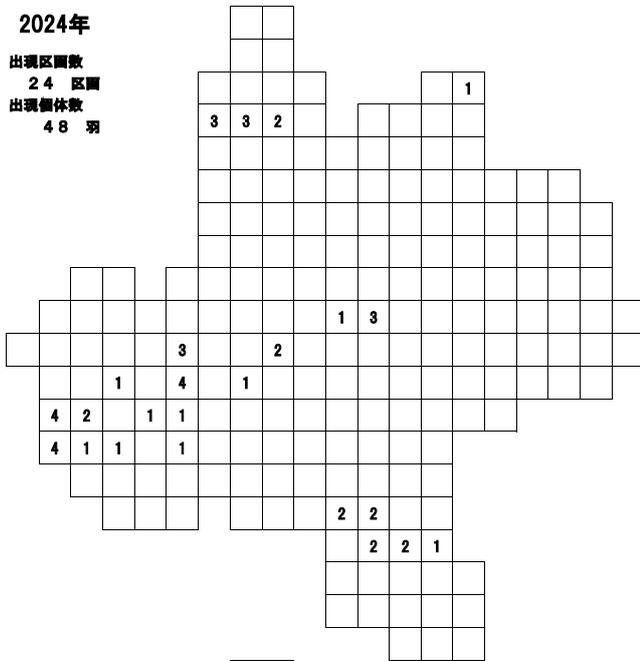
市域では、1966年までは狭山丘陵周辺部で確実に繁殖していた(荻野1980)。東町では1972年、74年に繁殖を確認している(柳澤2006)等の報告がある。しかし、本調査結果のみならず、近年では記録されていない。

全国的にも減少しており、この調査結果もその状況を裏付けている。

夏鳥系として区分。

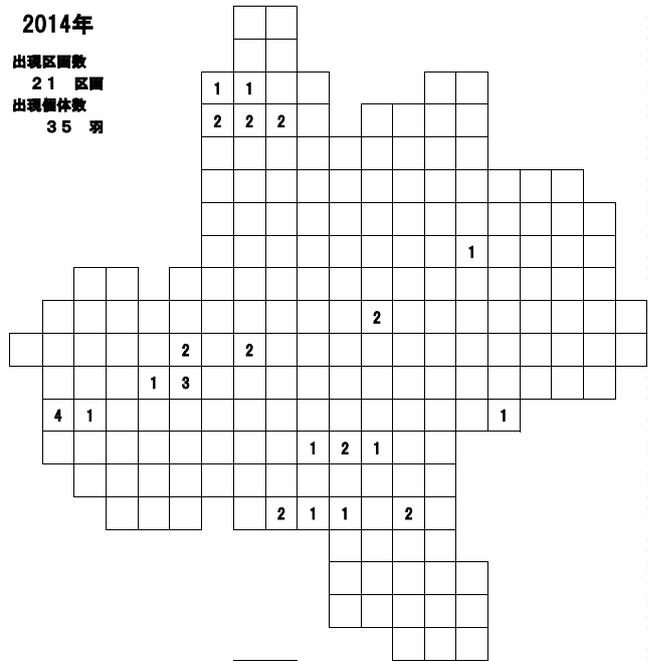
2024年

出現区画数  
24 区画  
出現個体数  
48 羽



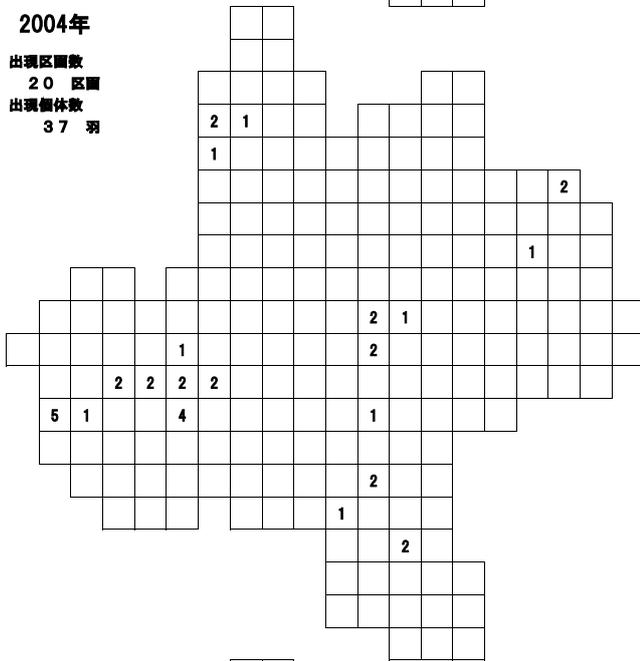
2014年

出現区画数  
21 区画  
出現個体数  
35 羽



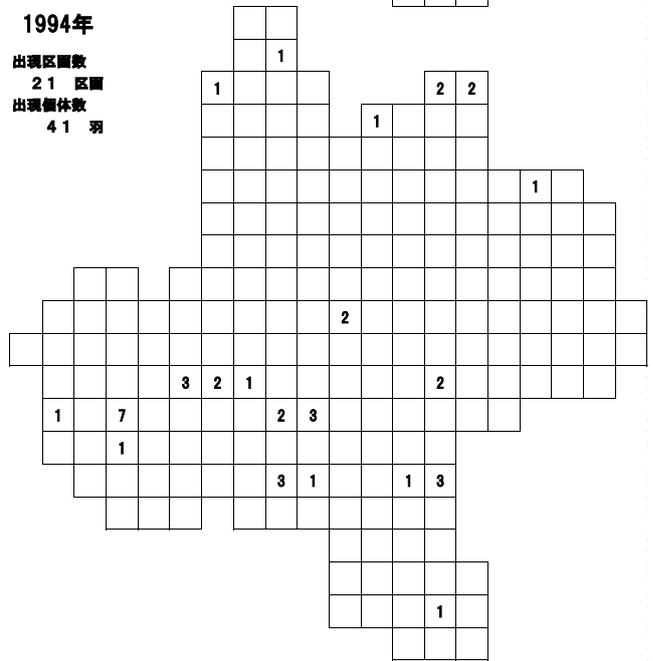
2004年

出現区画数  
20 区画  
出現個体数  
37 羽



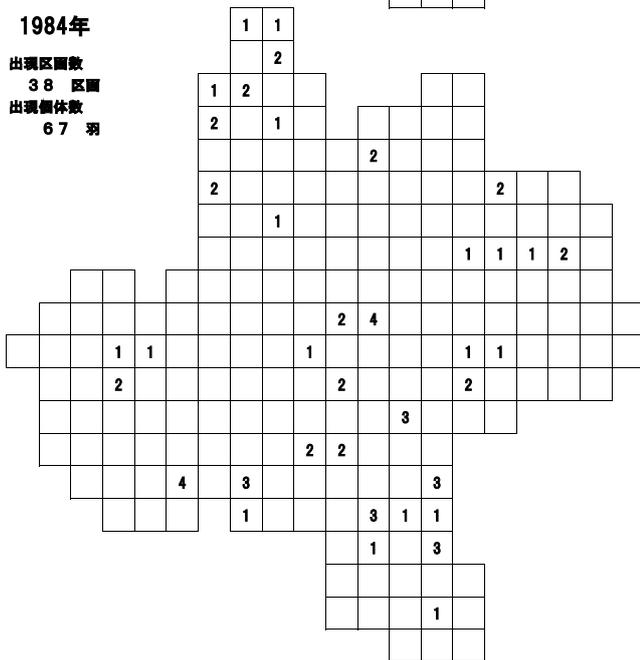
1994年

出現区画数  
21 区画  
出現個体数  
41 羽



1984年

出現区画数  
38 区画  
出現個体数  
67 羽



### 43. モズ *Lanius bucephalus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	67	41	37	35	48
出現区画数	38	21	20	21	24
出現一区画当たりの平均個体数	1.8	2.0	1.9	1.7	2.0

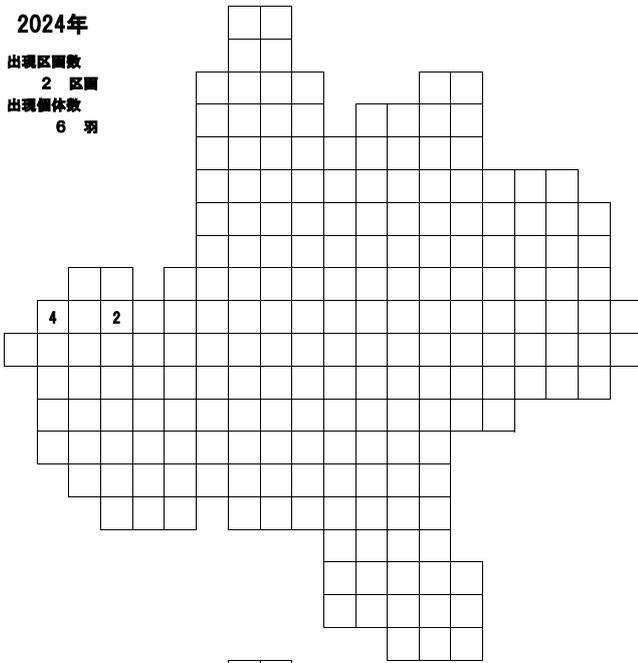
24年は24区画で48羽を記録した。

市域では、丘陵や平地の林、市街地では記録されず、主に農耕地に分布している。84年から14年では、半減するほど減少していたが、24年は増加に転じていた。増加の兆しとなるのか今後に期待したい。本種はカッコウが托卵する仮親でもあり、本種の増減はカッコウの個体数に大きく影響する。

モズの繁殖は一回目を前年秋から残って行い、6月以降は北部又は高地に移動して二回目を行うことが知られているが、ここでは留鳥系として区分した。 ※No.9カッコウ

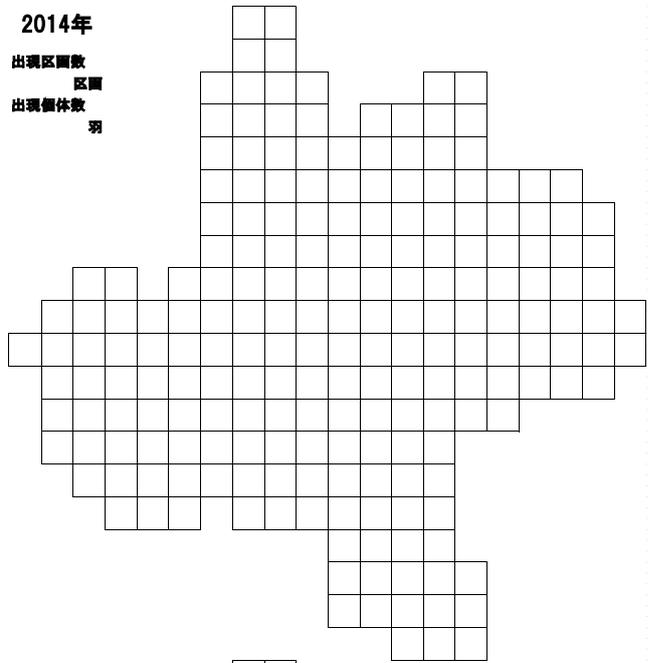
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
6 羽



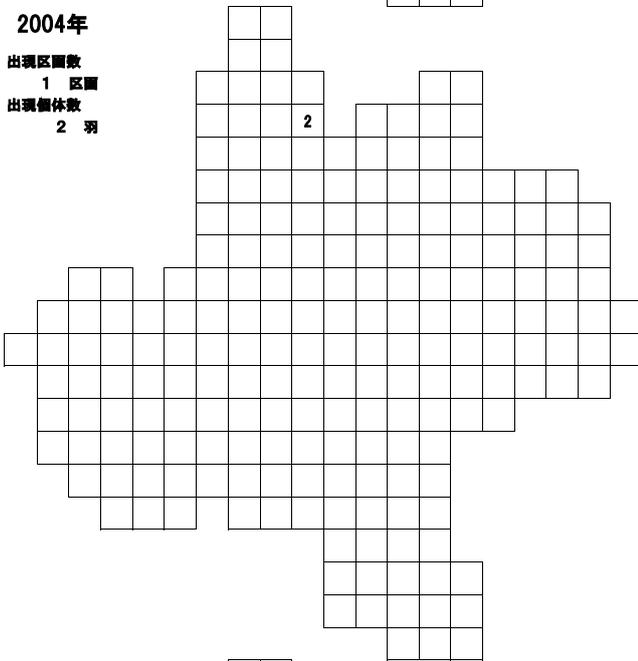
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
0 羽



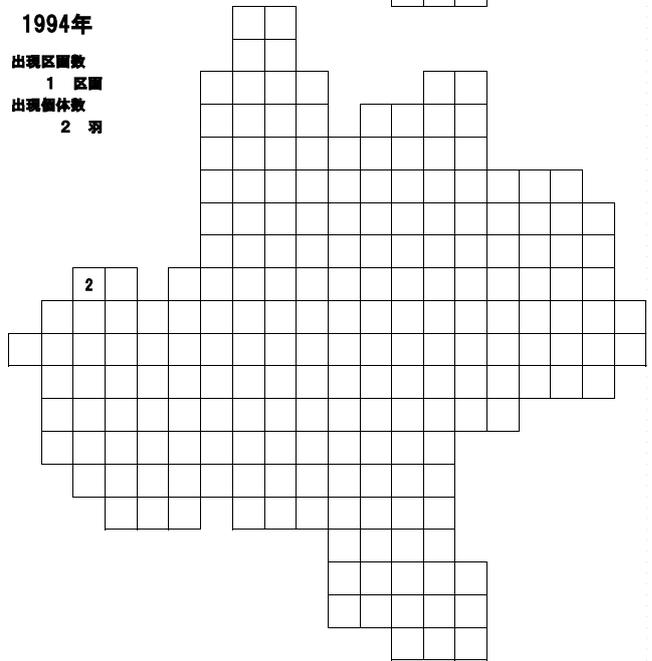
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



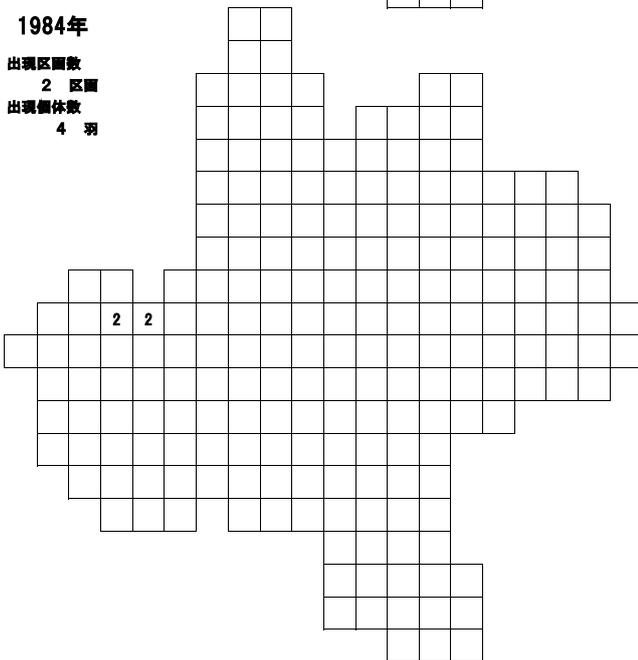
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



#### 44. カケス *Garrulus glandarius*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	4	2	2	0	6
出現区画数	2	1	1	0	2
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	2.0	2.0	—	3.0

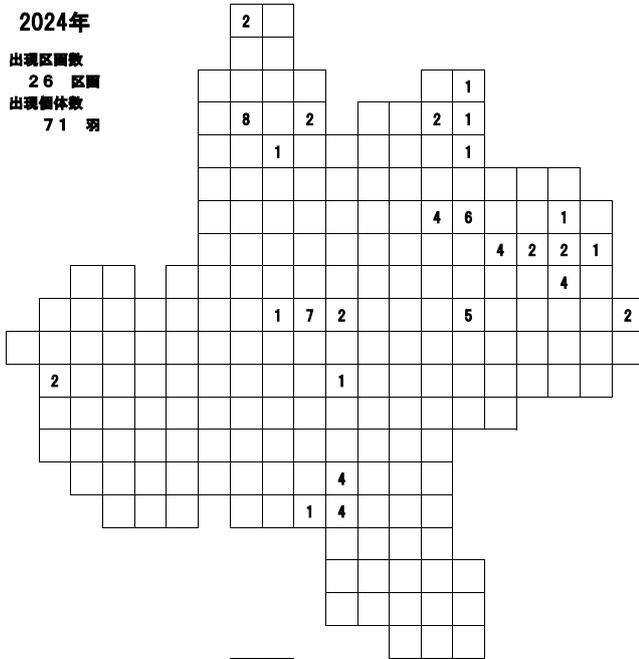
24年は2区画で6羽を記録した。

入間市の加治丘陵自然環境調査報告書(1990)では「繁殖期間中に数組が継続して観察され、繁殖行動(囀り、餌・巣材運び等)も観察され、営巣の可能性が高い」としている。

本調査の記録は、少数ながら全て加治丘陵で記録しており、狭山丘陵での記録はこれまで無い。先の報告書ではこの違いを「奥武蔵の山岳地と連坦している加治丘陵と、武蔵野台地上に独立している狭山丘陵という地形の立地環境の違い」からも繁殖の可能性を論じている。留鳥系として区分。

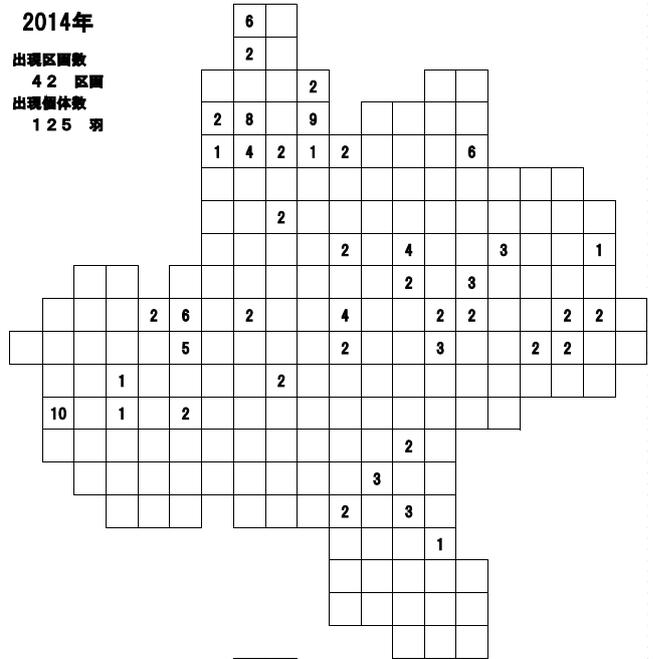
2024年

出現区画数  
26 区画  
出現個体数  
71 羽



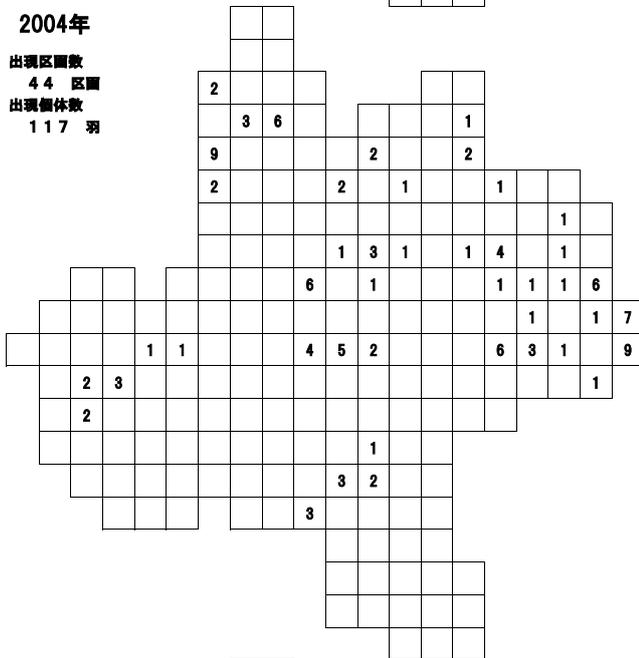
2014年

出現区画数  
42 区画  
出現個体数  
125 羽



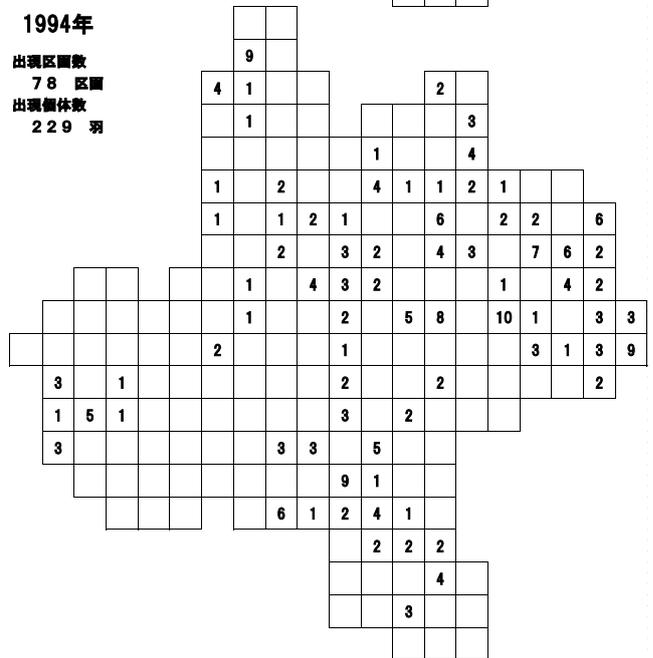
2004年

出現区画数  
44 区画  
出現個体数  
117 羽



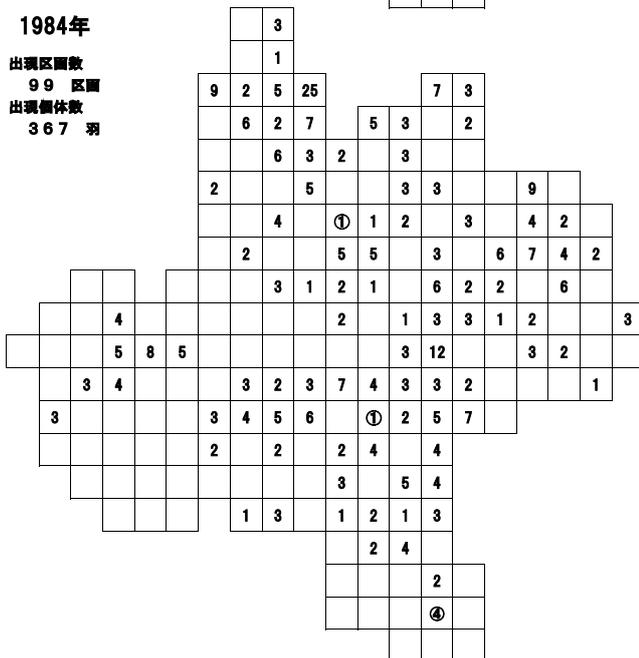
1994年

出現区画数  
78 区画  
出現個体数  
229 羽



1984年

出現区画数  
99 区画  
出現個体数  
367 羽



### 45. オナガ *Cyanopica cyanus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	367	229	117	125	71
出現区画数	99	78	44	42	26
出現一区画当たりの平均個体数	3.7	2.9	2.7	3.0	2.7

24年は26区画で71羽を記録した。

年を追うごとに個体数、区画数とも減少を続け、24年もその傾向が続いている。

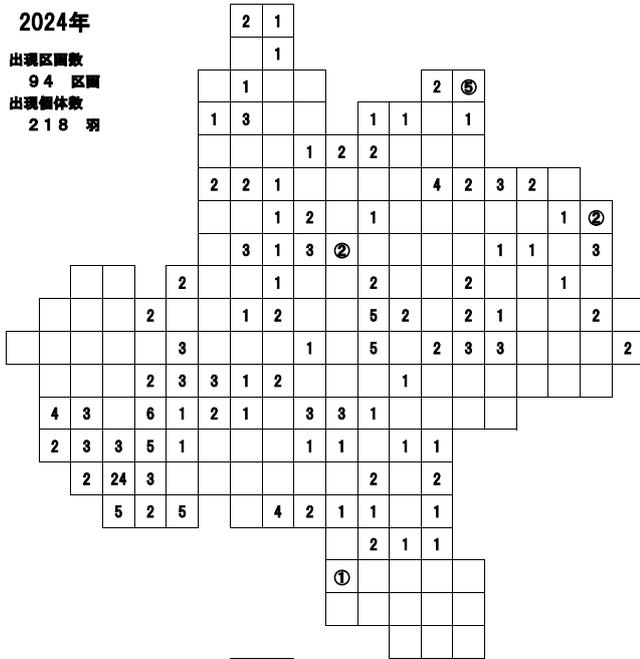
本種は、雑木林が放置され藪や大木が多くなった丘陵の森林には棲まず、平地の明るい雑木林、屋敷林、農耕地、果樹園などがモザイク状にある環境に棲息している。

このような土地が相続等で転売され、徐々に住宅地・工場・道路など、都市的な環境に変わってきたことで、群生活が維持できなくなってきているものと思われる。

留鳥系として区分。

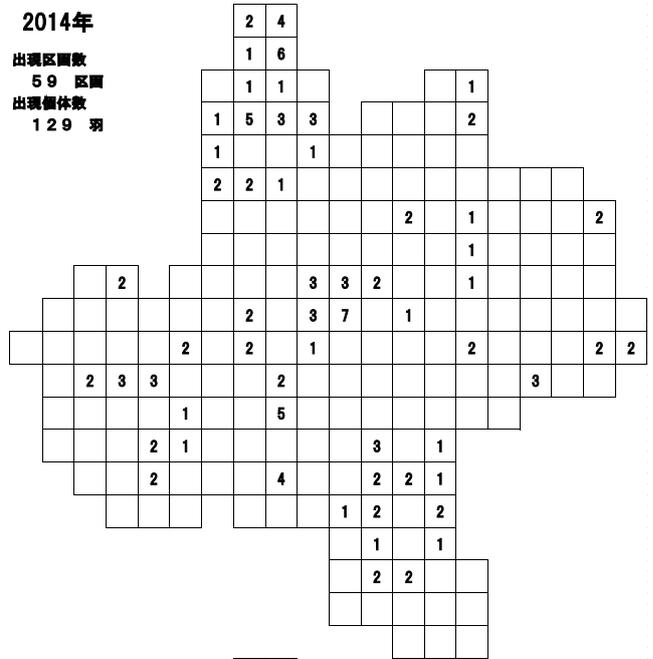
2024年

出現区画数  
94 区画  
出現個体数  
218 羽



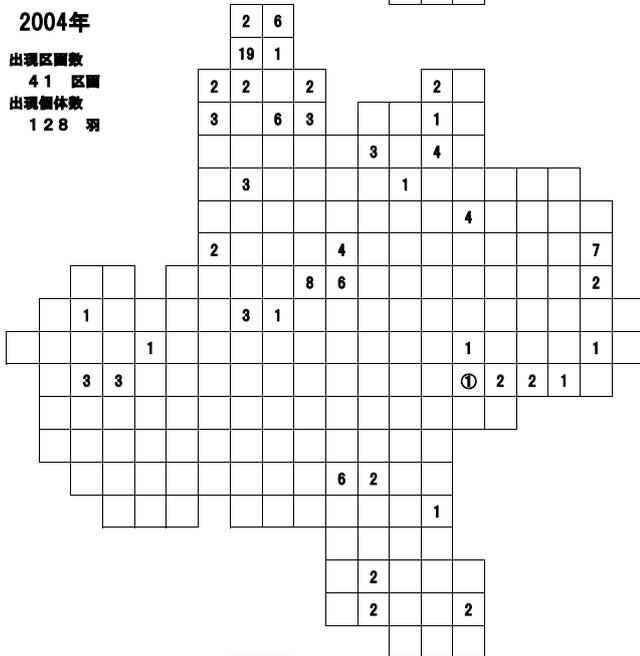
2014年

出現区画数  
59 区画  
出現個体数  
129 羽



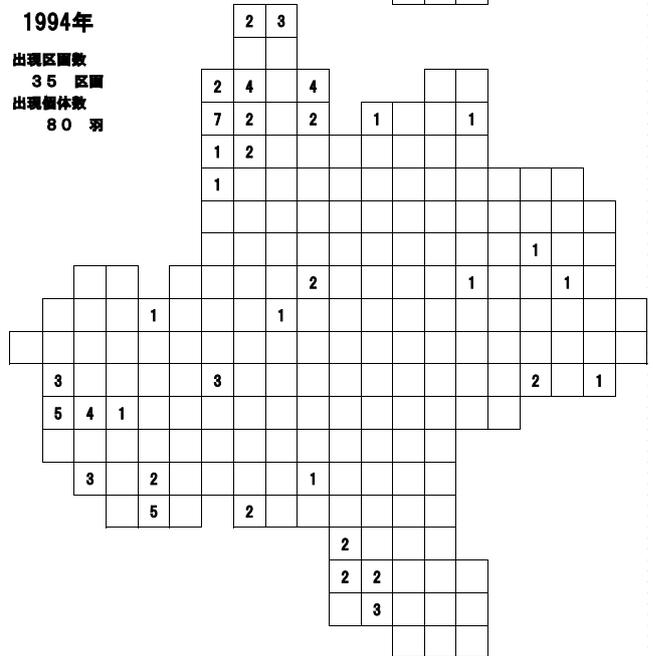
2004年

出現区画数  
41 区画  
出現個体数  
128 羽



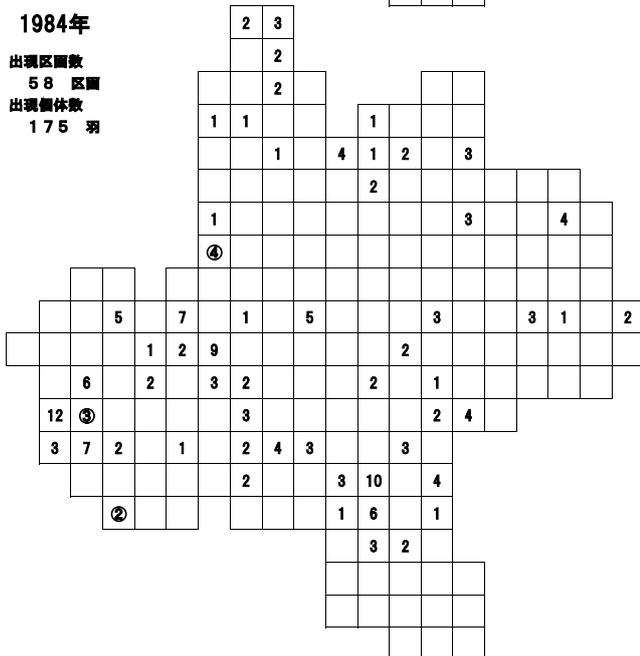
1994年

出現区画数  
35 区画  
出現個体数  
80 羽



1984年

出現区画数  
58 区画  
出現個体数  
175 羽



#### 46. ハシボソガラス *Corvus corone*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	175	80	128	126	218
出現区画数	58	35	41	59	94
出現一区画当たりの平均個体数	3.0	2.3	3.1	2.1	2.3

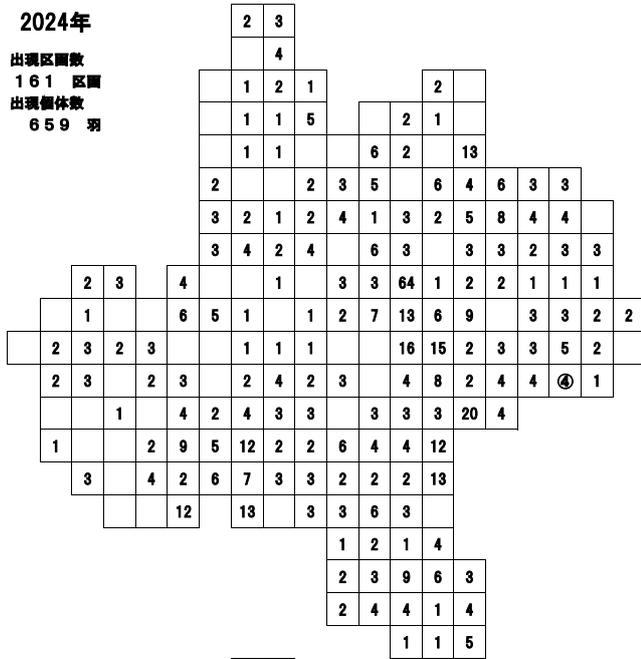
24年は94区画で218羽を記録した。総個体数は、84年から94年に54.3%も減少したが、以降増加に転じ14年から24年には73.0%も増加した。出現区画数もほぼ同様な傾向で回復をし、84年から24年では62.1%増加している。24年は3項目が増加している。

近似種のハシブトガラスは、04年以降現在も減少傾向にある。本種はその隙間（区画や棲息密度）を埋めるように、市西部の農地で増加が目立っているため、ハシブトガラスの動向にも注目する必要がある。

留鳥系として区分。※No.47ハシブトガラス

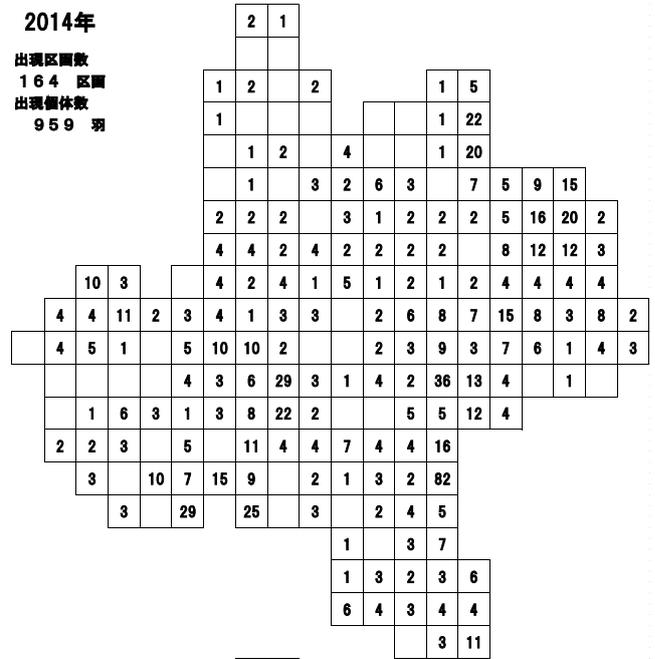
2024年

出現区画数  
161 区画  
出現個体数  
659 羽



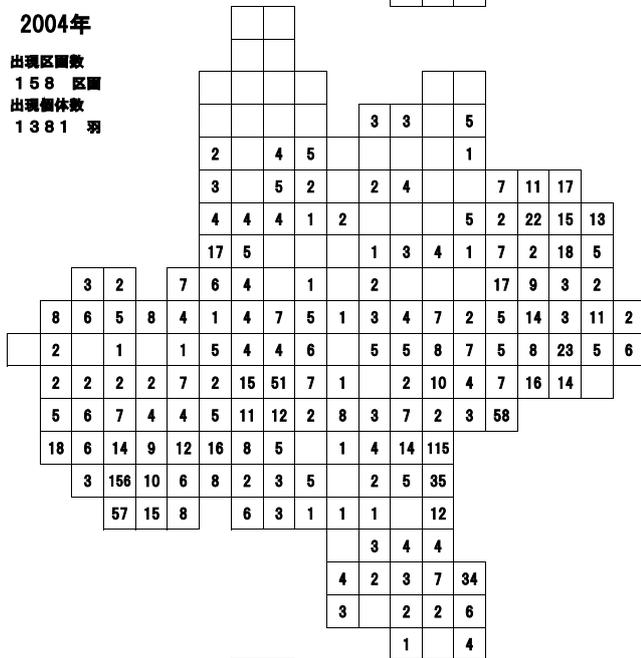
2014年

出現区画数  
164 区画  
出現個体数  
959 羽



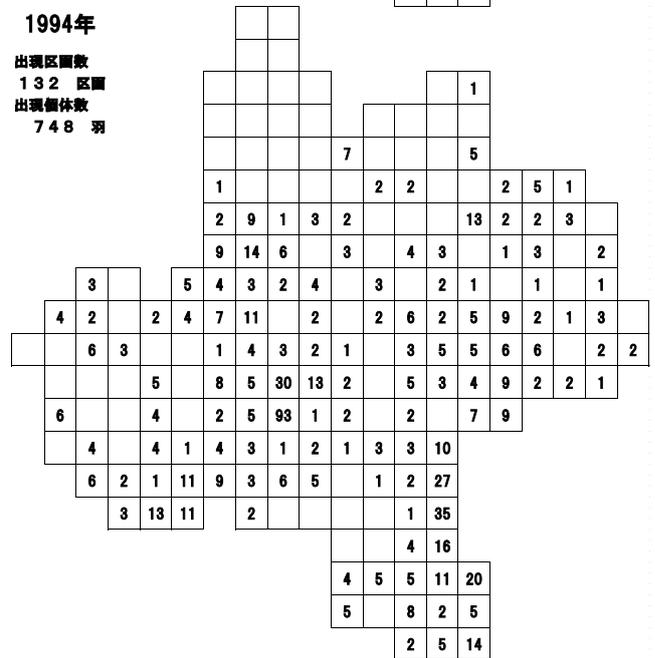
2004年

出現区画数  
158 区画  
出現個体数  
1381 羽



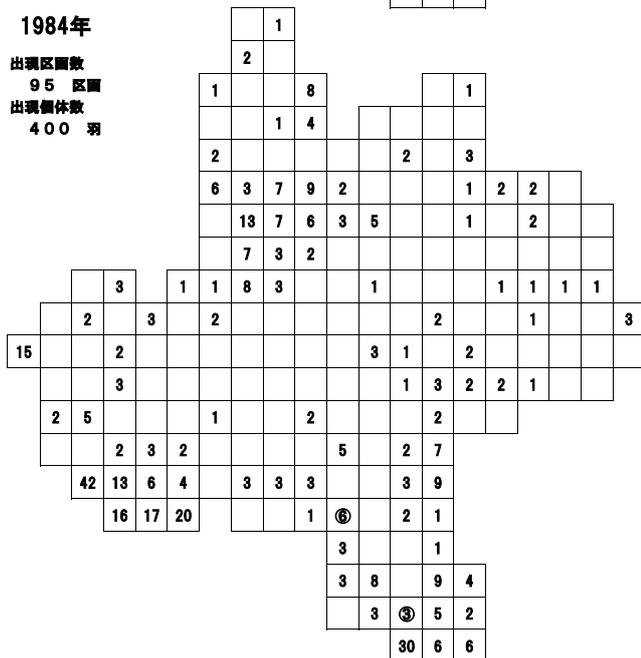
1994年

出現区画数  
132 区画  
出現個体数  
748 羽



1984年

出現区画数  
95 区画  
出現個体数  
400 羽



### 47. ハシボトガラス *Corvus macrohynchos*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	440	748	1,381	959	659
出現区画数	95	132	158	164	161
出現一区画当たりの平均個体数	4.6	5.7	8.7	5.8	4.1

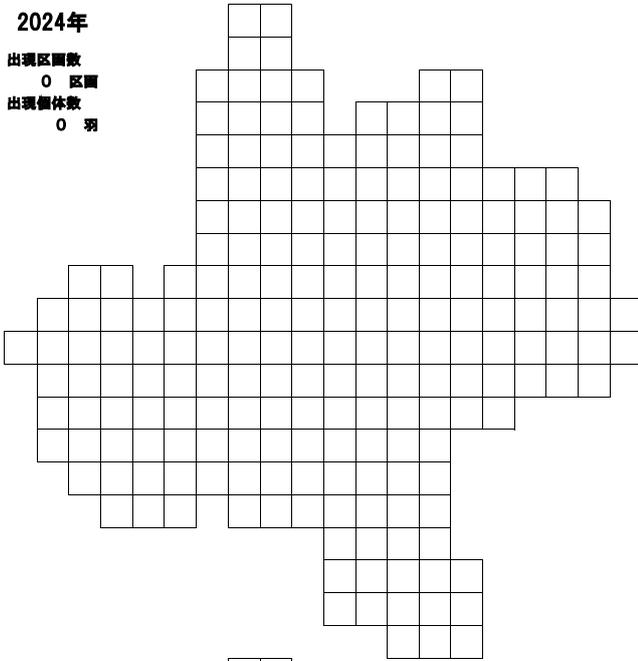
24年は161区画で659羽を記録した。総個体数は、84年から増加を始め、04年に頂点に減少に転じ、現在も減少中。04年から24年では52.3%も減少している。近似種ハシボソガラスと対照的に、24年は総個体数、出現区画数、一区画の平均個体数の3項目全てが減少しており、今後も続く可能性がある。

本種は人が排出する生ゴミを食べ増加したと言われている。ゴミの処理方法が改善された事が、04年以降の本種の減少につながったものと思われる。

留鳥系として区分。※No.46ハシボソガラス

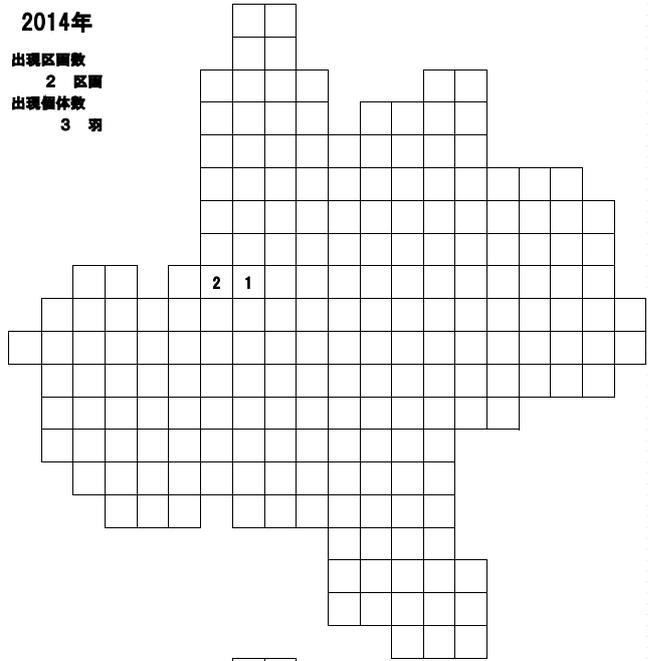
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



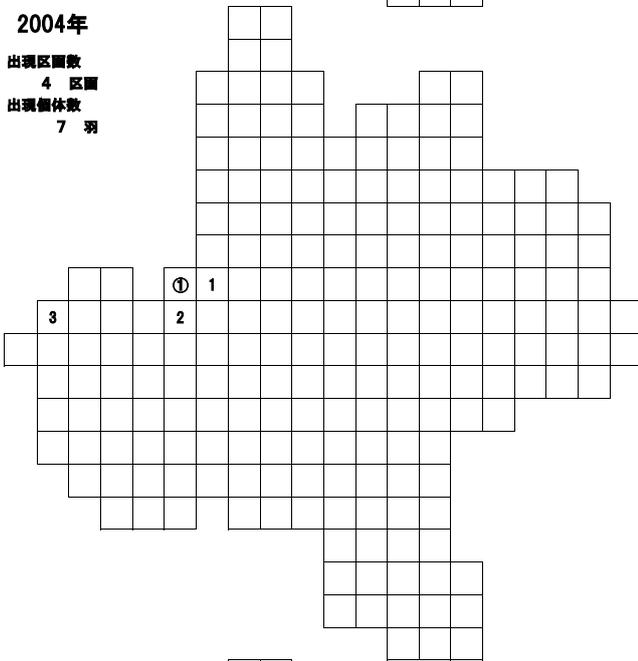
2014年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



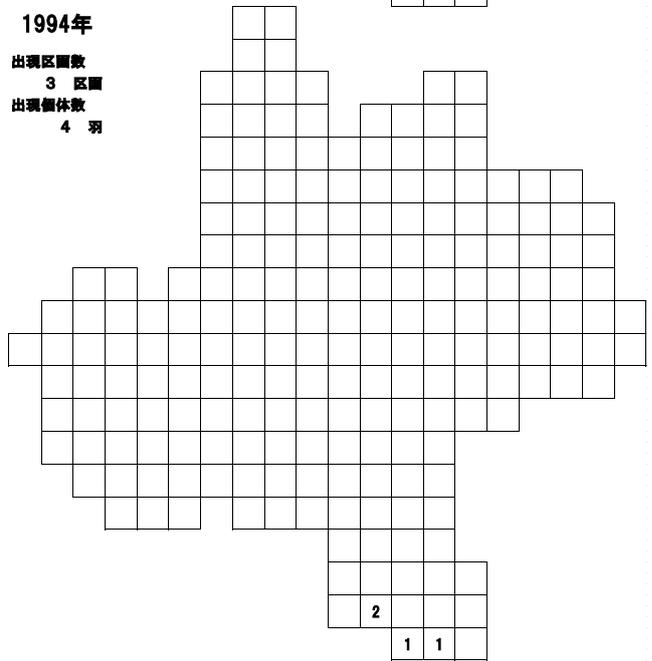
2004年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
7 羽



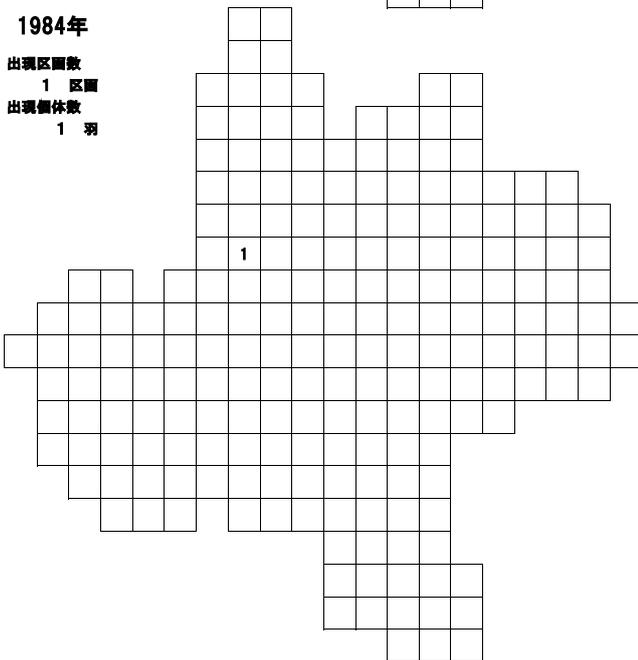
1994年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
4 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



#### 48. ヒガラ *Periparus ater*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	1	4	7	3	0
出現区画数	1	3	4	2	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	1.3	1.8	1.5	—

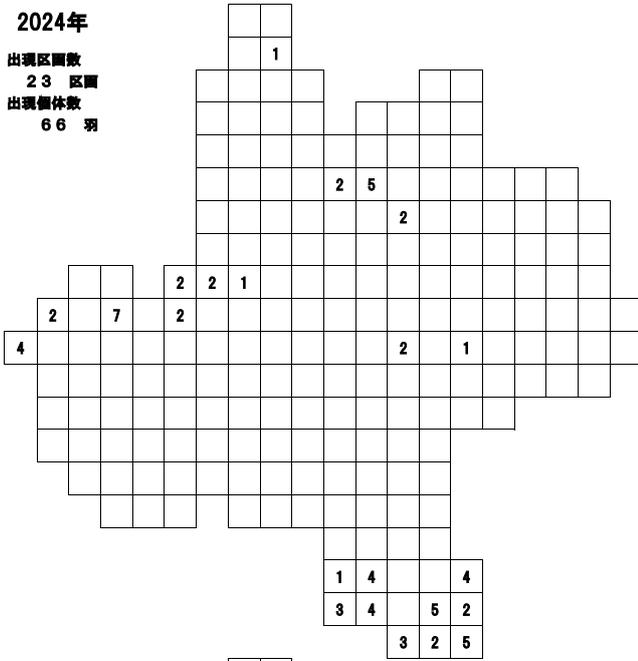
24年は記録が無かった。

狭山丘陵では1970年代末頃から5月末に見られるようになったという(荻野1980)。また、加治丘陵自然環境調査(1990)では、「丘陵西部の針葉樹林で囀りが継続的に記録され、少数が繁殖していると考えられる」と報告がある。

丘陵の雑木林が大木のある広葉樹林に育ち、本来は高標高に棲む本種の棲息環境が整って、繁殖期にも見られるようになったと思われる。しかし、近年の異常な温暖化、ナラ枯れによる森林の変容を考えると、今後の棲息が懸念される。 通過鳥系として区分。

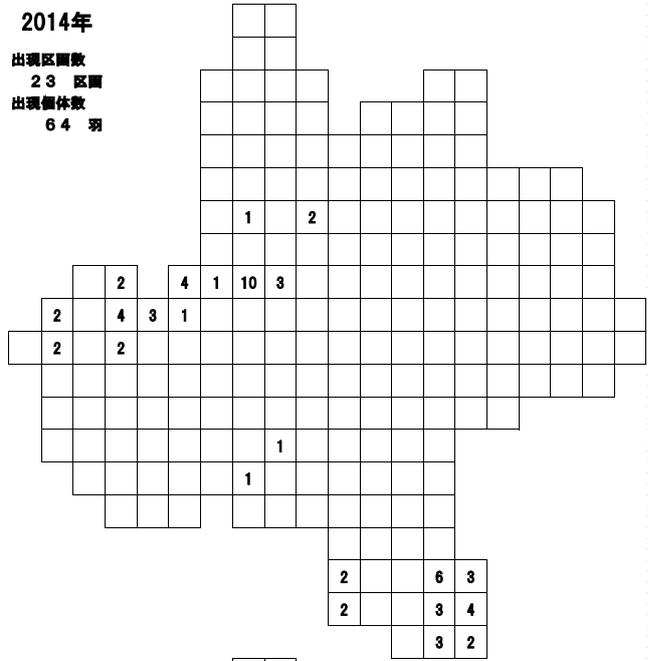
2024年

出現区画数  
23 区画  
出現個体数  
66 羽



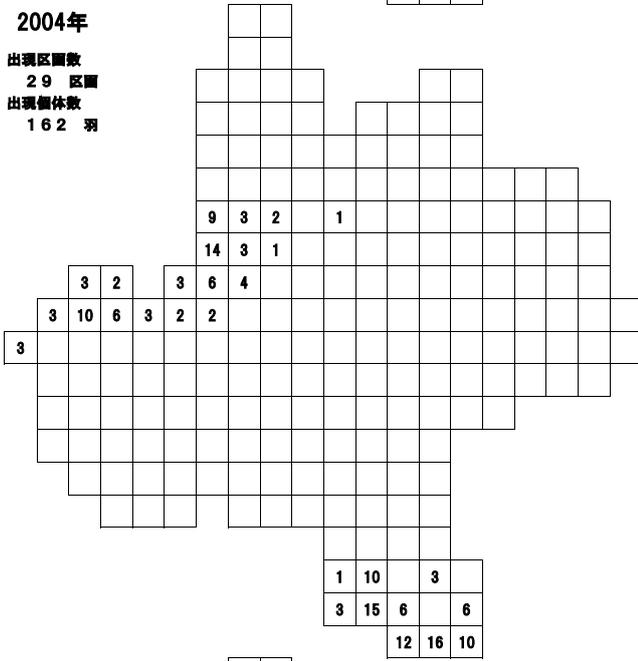
2014年

出現区画数  
23 区画  
出現個体数  
64 羽



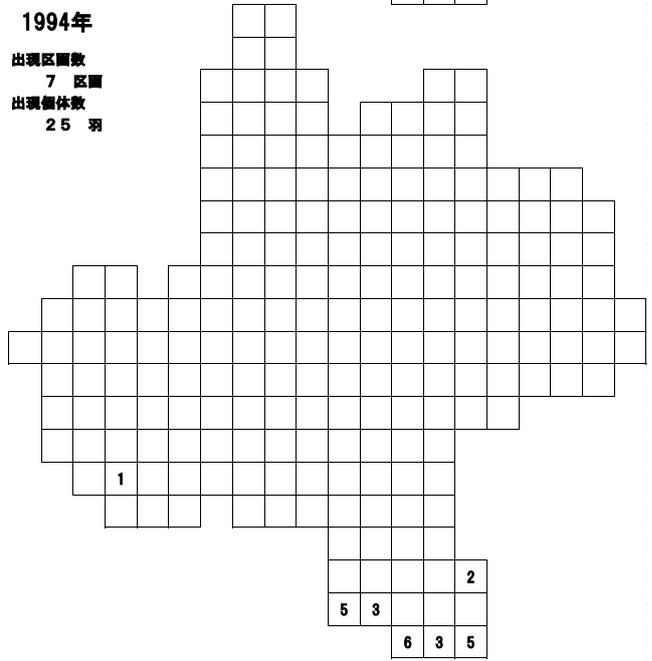
2004年

出現区画数  
29 区画  
出現個体数  
162 羽



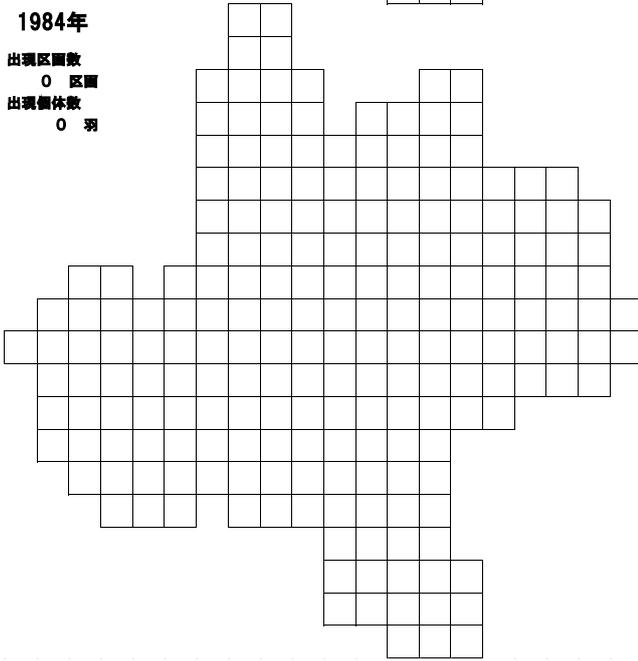
1994年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
25 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



#### 49. ヤマガラ *Sittiparus varius*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総総数	0	25	162	64	66
出現区画数	0	7	29	23	23
出現一区画当たりの平均個体数	—	3.6	5.6	2.8	2.9

24年は23区画で66羽を記録した。

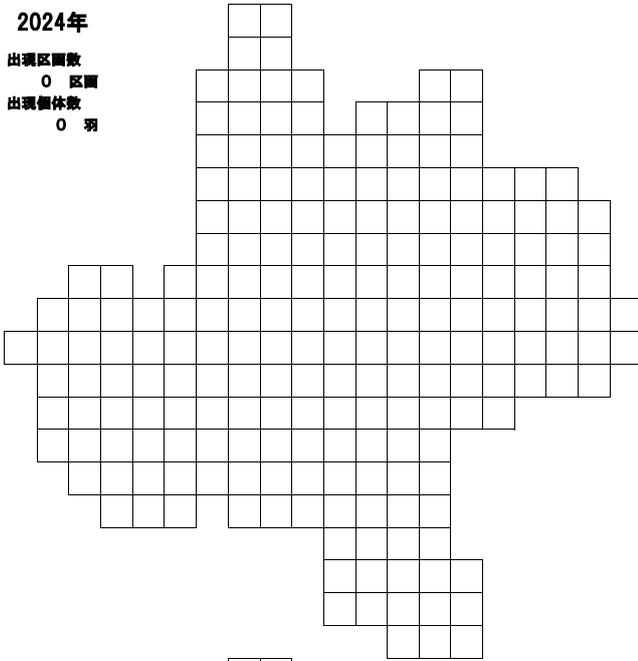
94年から記録され、総個体数は04年を頂点とし14年、24年は65羽前後に減少し安定している。出現区画数、一区画当たりの平均個体数もほぼ同様な傾向で増減をしている。

1970年代、狭山丘陵では、主にカシ類など照葉樹が生えた南斜面で、本種が留鳥として少数見られたという(荻野1980)。区画図を見ると94年に狭山丘陵で、04年に加治丘陵で多数見られ、14年、24年には平地林へ進出し始めた様子が現われている。

留鳥系として区分。

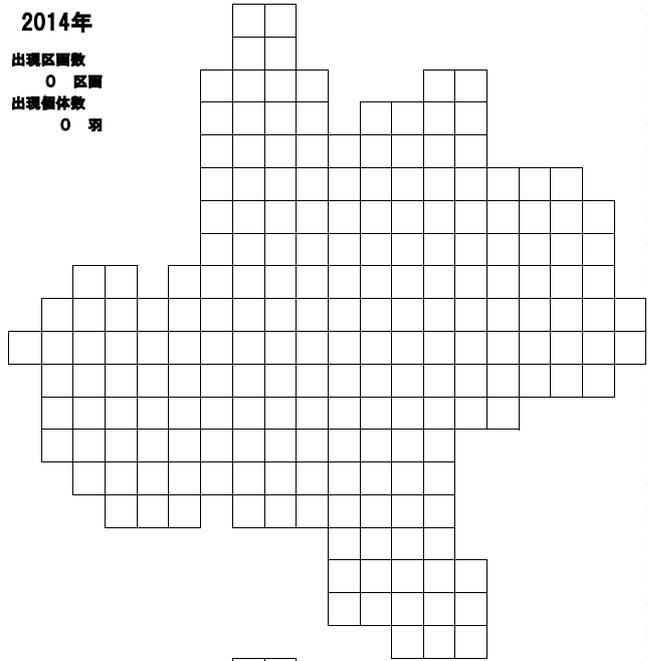
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



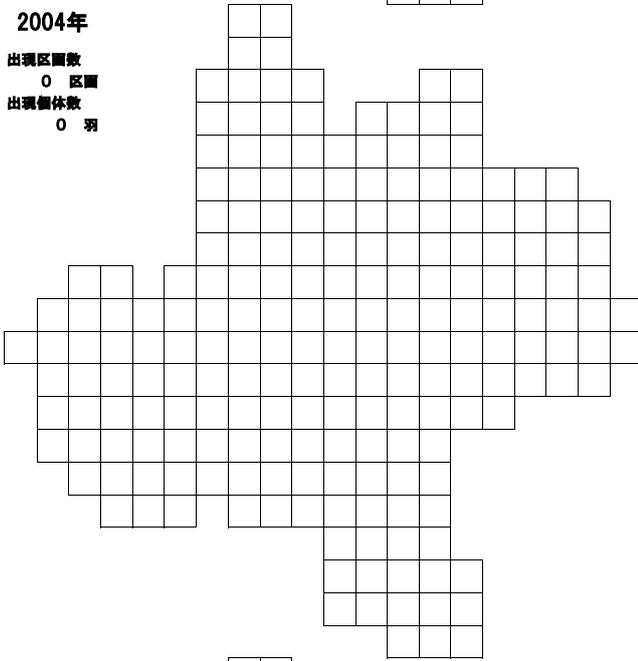
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



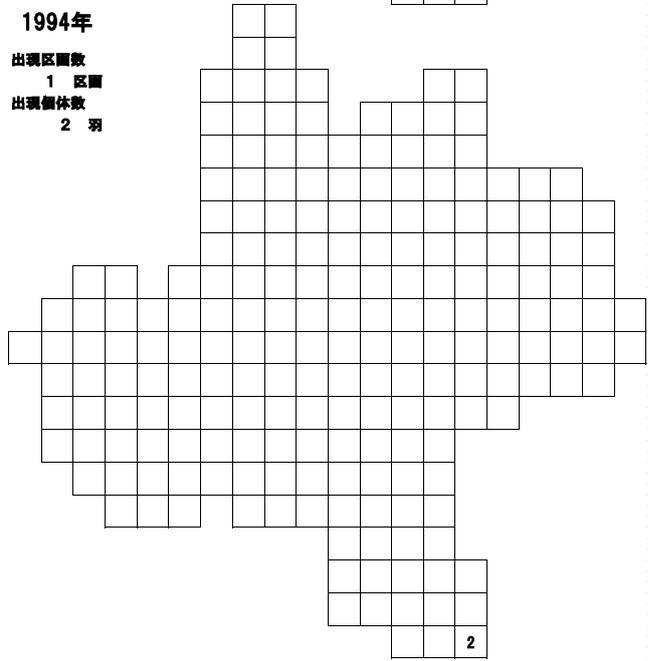
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



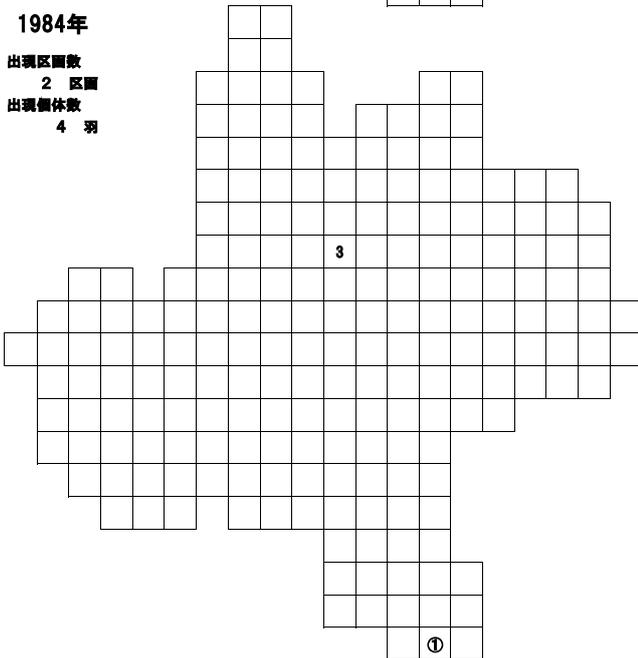
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



### 50. コガラ *Poecile montanus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	4	2	0	0	0
出現区画数	2	1	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	2.0	—	—	—

84年、94年に記録したが、以降24年も記録が無い。

関東地方では高標高の落葉広葉樹林などで繁殖する。

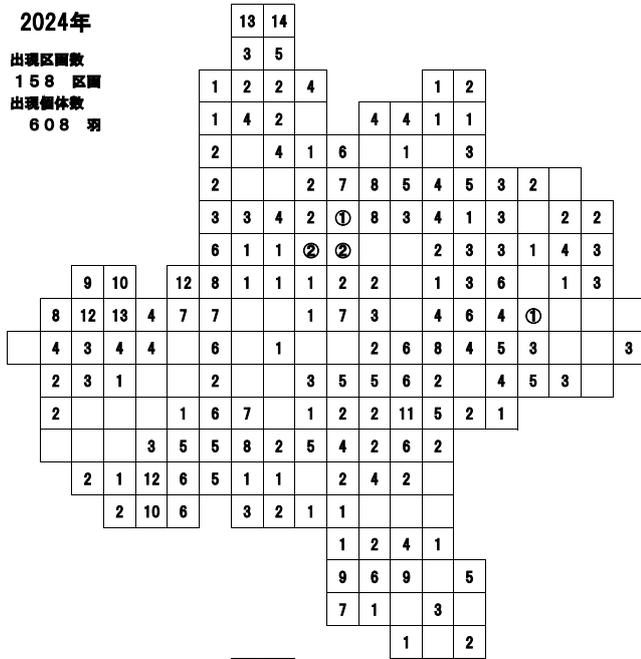
本種は、1985年に狭山丘陵（山口貯水池用地所沢市分）で巣立ち直後の雛への給餌行動が観察されている。市内では冬鳥として、加治丘陵や狭山丘陵の林で見るとはあるが、個体数は少ない。

市域の55～205mといった低標高での繁殖期の記録は貴重であったが、続かなかつた。

通過鳥系として区分。

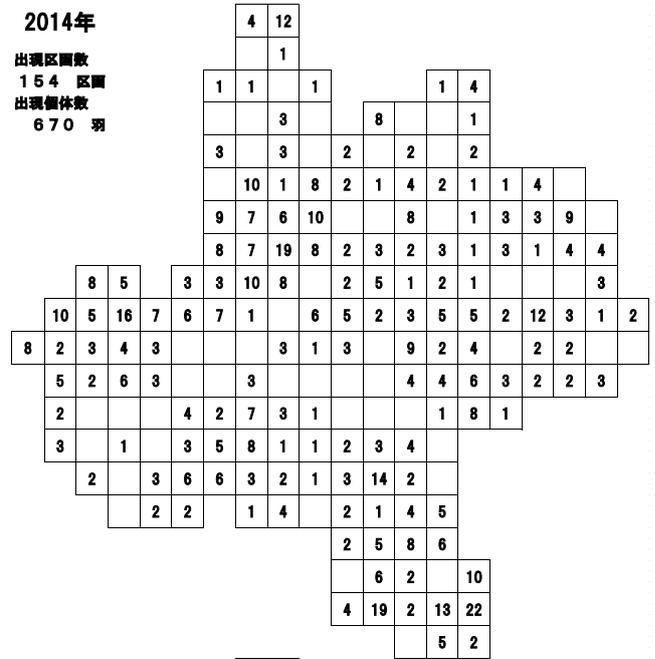
2024年

出現区画数  
158 区画  
出現個体数  
608 羽



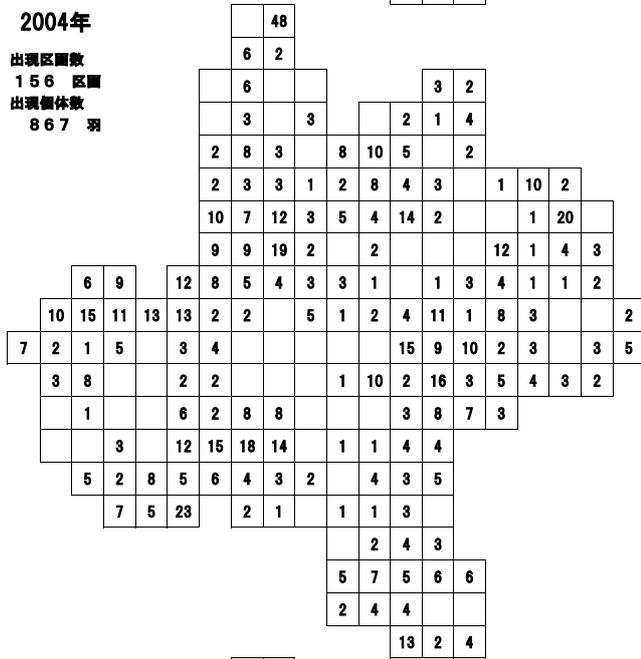
2014年

出現区画数  
154 区画  
出現個体数  
670 羽



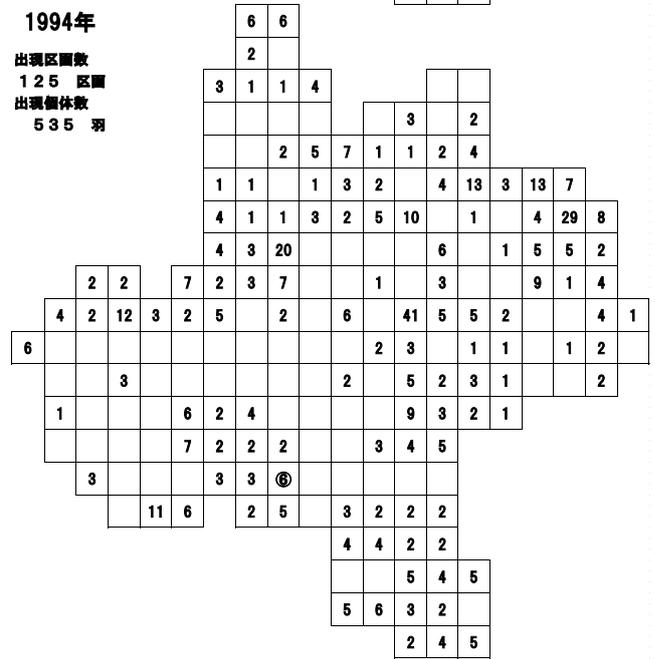
2004年

出現区画数  
156 区画  
出現個体数  
867 羽



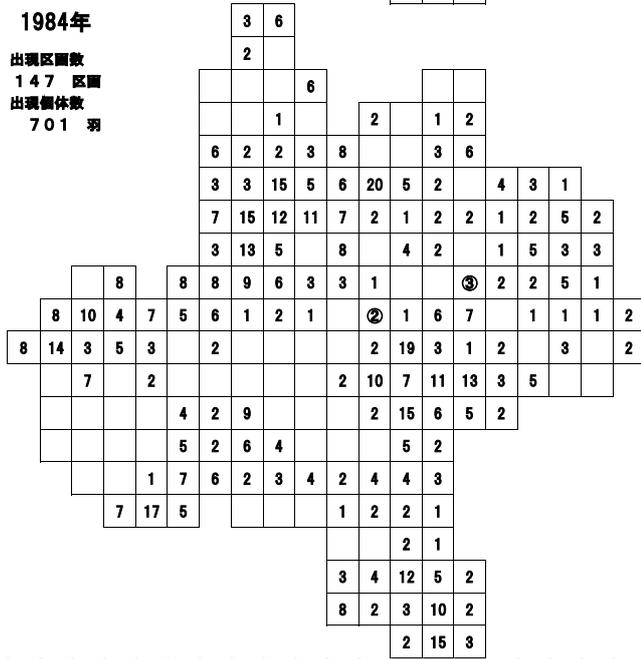
1994年

出現区画数  
125 区画  
出現個体数  
535 羽



1984年

出現区画数  
147 区画  
出現個体数  
701 羽



## 51. シジュウカラ *Parus cinereus*

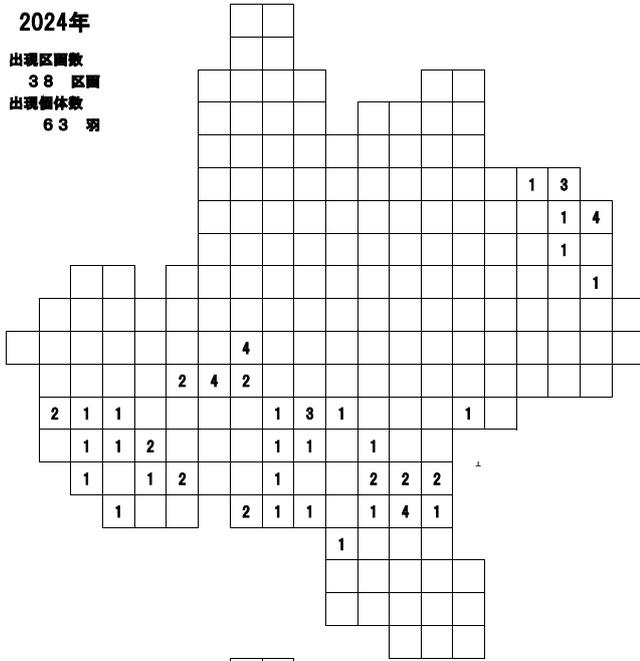
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	701	535	867	670	608
出現区画数	147	125	156	154	158
出現一区画当たりの平均個体数	4.8	4.3	5.6	4.4	3.8

24年は158区画で608羽を記録した。樹木が少ない圏央道北側の農耕地への進出は少ないが、市のほぼ全域に分布している。総個体数は、94年の535羽(最低)から04年の867羽(最高)の間(平均676.2羽)で変動している。04年からの減少は、同時期に増加したヤマガラとの競合の可能性もあるが、常緑樹の増加等、植生の遷移やナラ枯れによる棲息環境の変化も気になる。しかし、94年から04年への回復状況を見れば、通常の変動の範囲内として見ることもできるのか。

留鳥系として区分。 ※No.49ヤマガラ

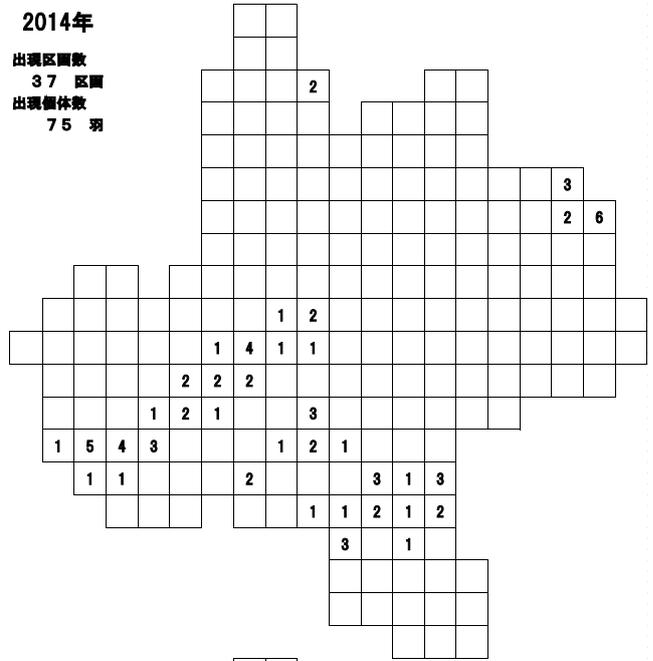
2024年

出現区画数  
38 区画  
出現個体数  
63 羽



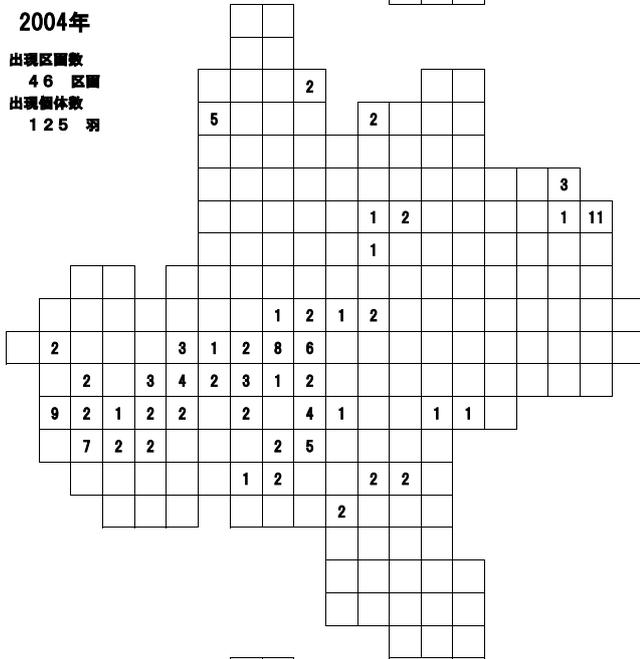
2014年

出現区画数  
37 区画  
出現個体数  
75 羽



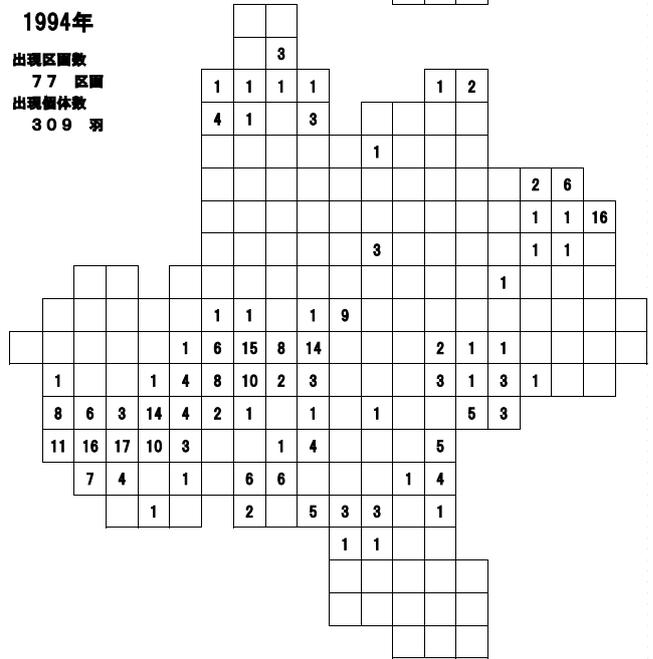
2004年

出現区画数  
46 区画  
出現個体数  
125 羽



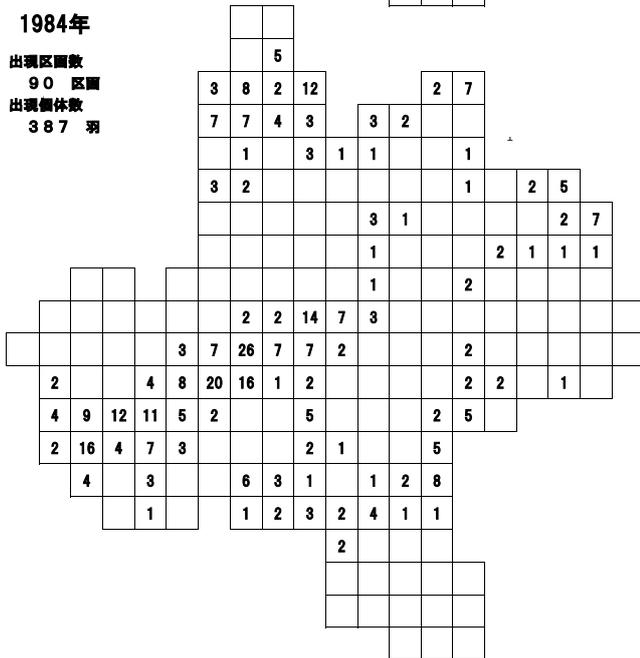
1994年

出現区画数  
77 区画  
出現個体数  
309 羽



1984年

出現区画数  
90 区画  
出現個体数  
387 羽



## 52. ヒバリ *Alauda arvensis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	387	309	125	75	63
出現区画数	90	77	46	37	38
出現一区画当たりの平均個体数	4.3	4.0	2.7	2.0	1.7

24年は38区画で63羽を記録した。

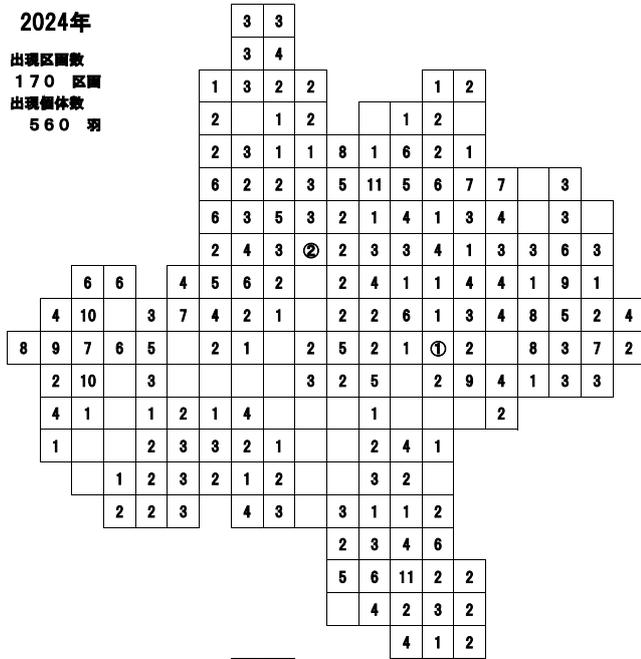
84年と比較し24年では、出現区画数(分布域)、一区画当たりの平均個体数(生息密度)とも減少し、結果、総個体数は83.7%も減少している。本種は入間市で減少が著しい種類の一つである。

区画図を見ると、近年は入間川北側の農耕地、入間川沿いの草地、市西部の圏央道北側の農地などの減少が目立つ。最近の農耕地域では、防霜ファンを立てて上から風を送り霜を防いでいる。この扇風機の柱が20m程の間隔で多数立ち、林となって上方から風を送るので草地的環境が失われていると思われる。1981年「入間市の鳥」に指定されたヒバリがこれ以上減らぬよう、棲息環境の保全が必要である。

留鳥系として区分。

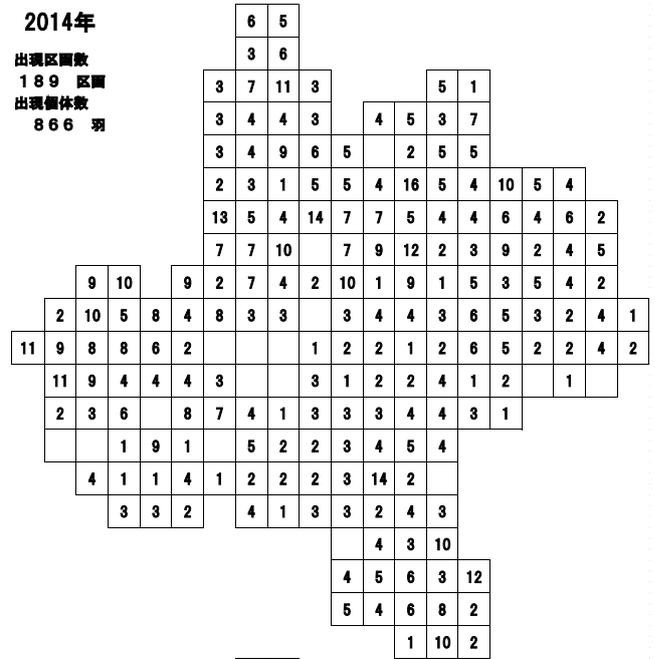
2024年

出現区画数  
170 区画  
出現個体数  
560 羽



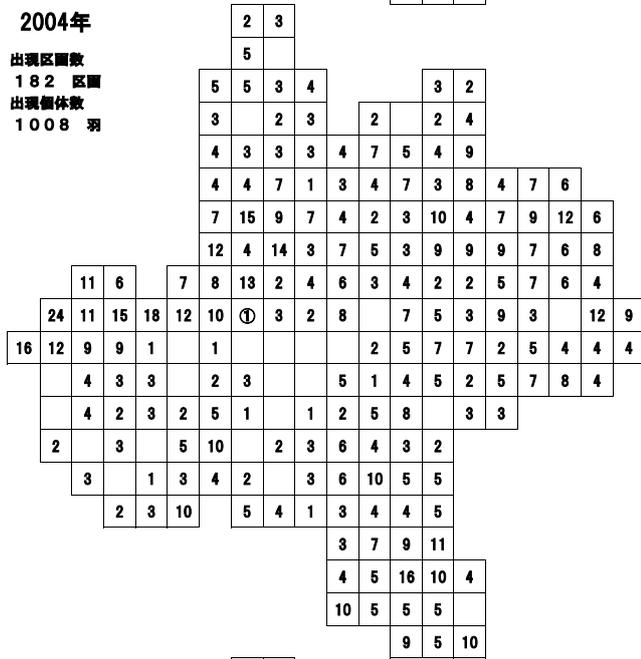
2014年

出現区画数  
189 区画  
出現個体数  
866 羽



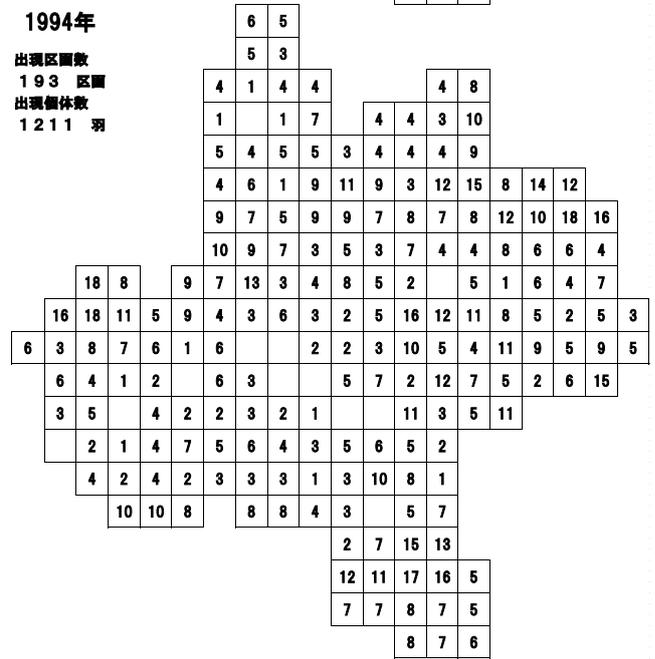
2004年

出現区画数  
182 区画  
出現個体数  
1008 羽



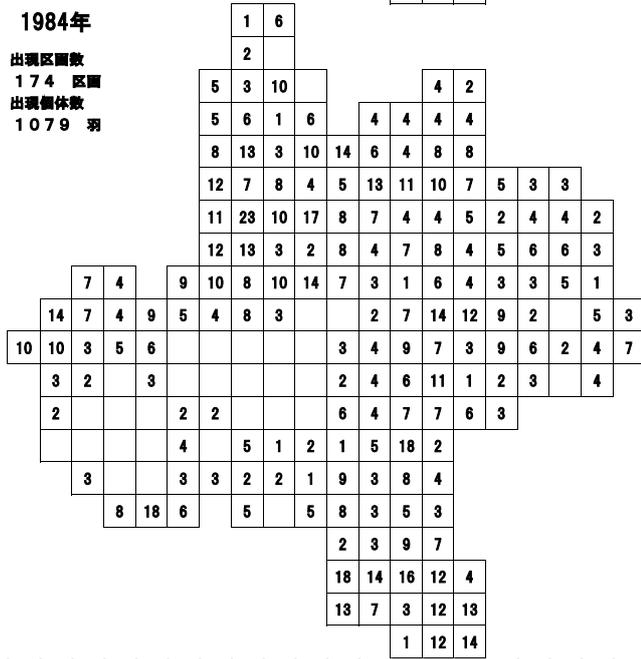
1994年

出現区画数  
193 区画  
出現個体数  
1211 羽



1984年

出現区画数  
174 区画  
出現個体数  
1079 羽



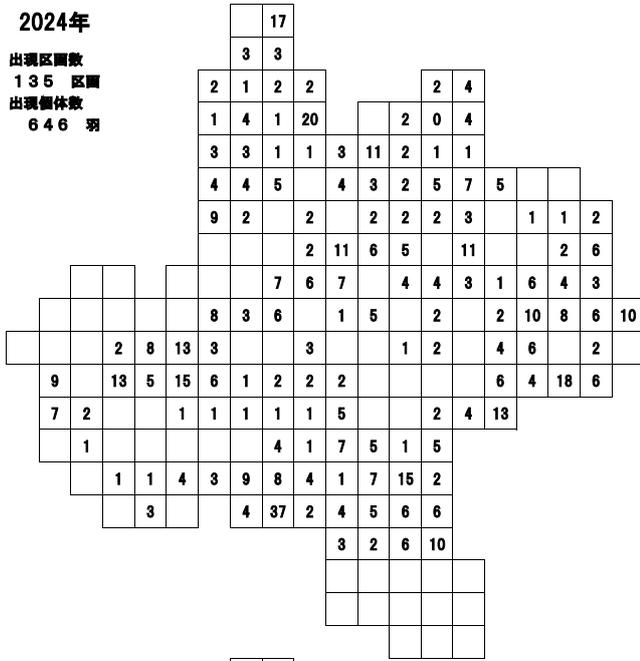
53. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	1,079	1,211	1,008	866	561
出現区画数	174	193	182	189	170
出現一区画当たりの平均個体数	6.2	6.3	5.5	4.6	3.3

24年は170区画で561羽を記録した。当市ではスズメに次ぐ分布の広さを持つ。総個体数は、94年を頂点とし、以降減少を続けている。出現区画数と一区画当たりの平均個体数の推移をみると、総個体数の減少は一区画当たりの平均個体数の減少(棲息密度の縮小)がより大きく影響したものと思われる。本種は、1960年代は夏に低山で繁殖し、冬は平地に降り越冬する典型的な漂鳥で、1970年代になると平地でも越冬、繁殖し、以降市域でも周年見られる留鳥として分布を広げてきた鳥である。留鳥系として区分。

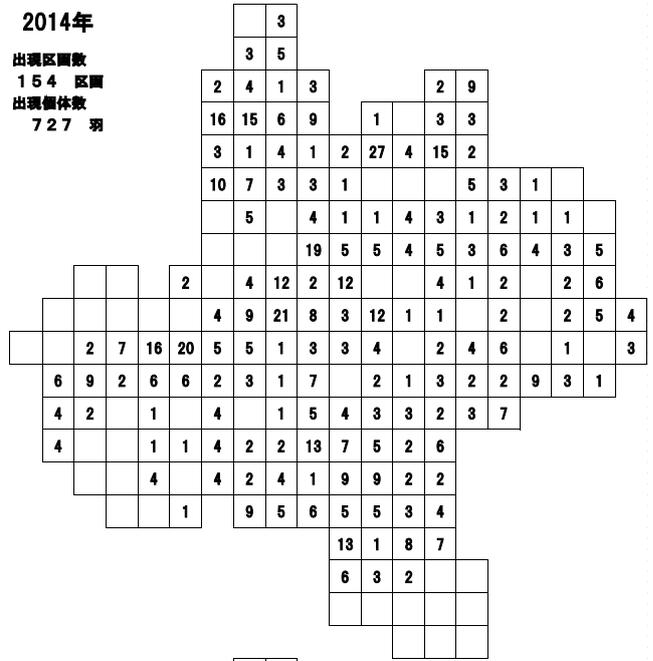
2024年

出現区画数  
135 区画  
出現個体数  
646 羽



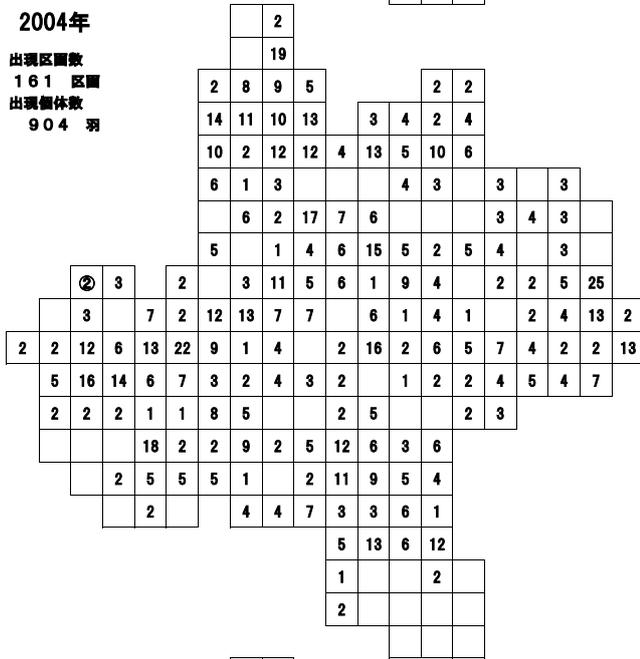
2014年

出現区画数  
154 区画  
出現個体数  
727 羽



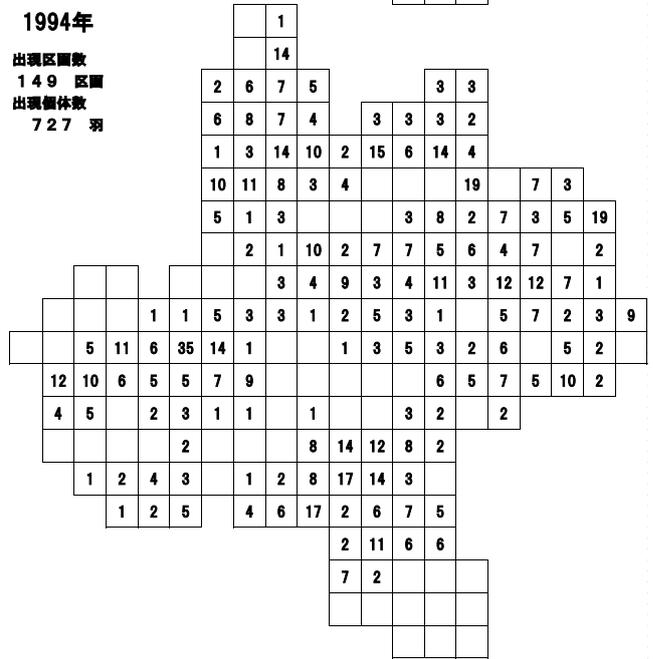
2004年

出現区画数  
161 区画  
出現個体数  
904 羽



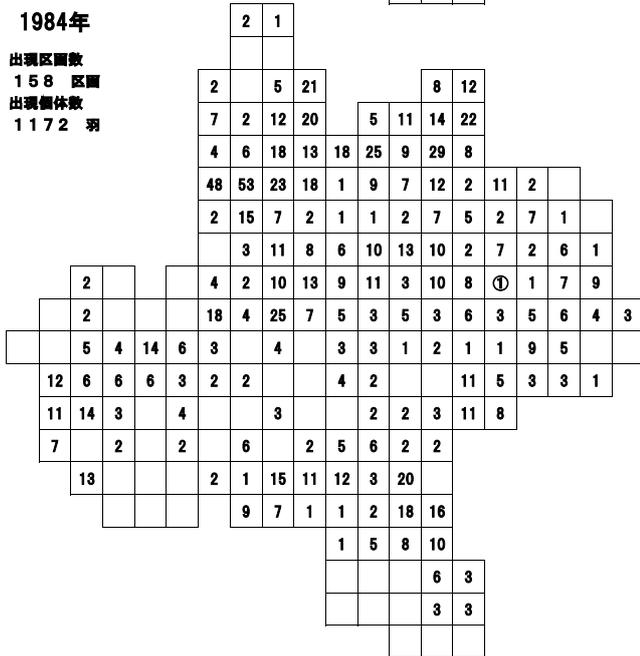
1994年

出現区画数  
149 区画  
出現個体数  
727 羽



1984年

出現区画数  
158 区画  
出現個体数  
1172 羽



54. ツバメ *Hirundo rustica*

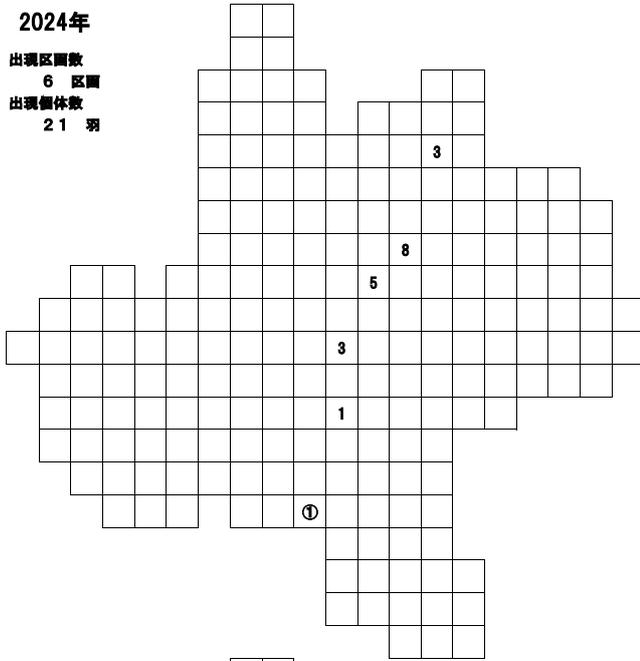
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	1,172	842	904	727	646
出現区画数	158	149	161	154	135
出現一區画当たりの平均個体数	7.4	5.7	5.6	4.7	4.8

24年は135区画で646羽を記録した。総個体数は、84年を頂点に減少を続け、24年では44.9%も減少している。総個体数の減少は、出現区画数(分布域の縮小)より一區画当たりの平均個体数の減少(棲息密度の縮小)が大きく影響したものと思われる。

本種は人家に巣を造り繁殖してきたが、近頃の住宅は軒が浅くカラスに襲われやすい。また、若鳥が集団時としてきた河川敷のヨシ原がグラウンドになったり、農薬で餌になる昆虫類が減るなどで、全国的に減っている。夏鳥系として区分。

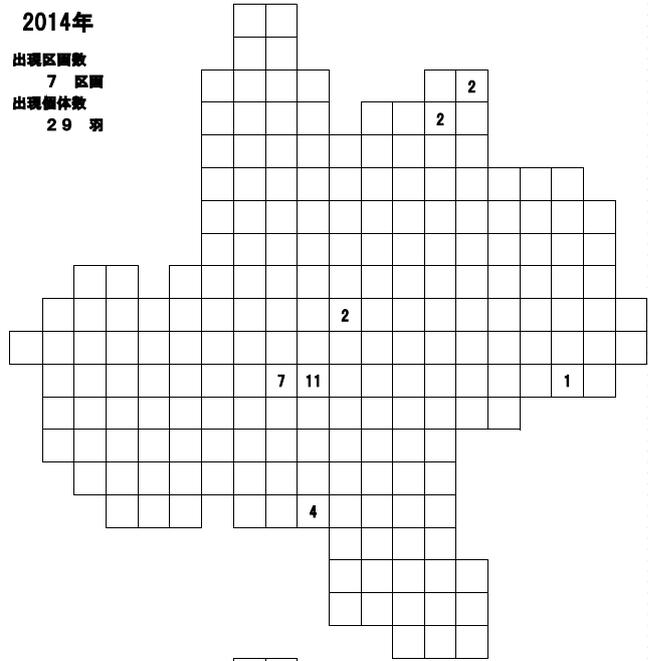
2024年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
21 羽



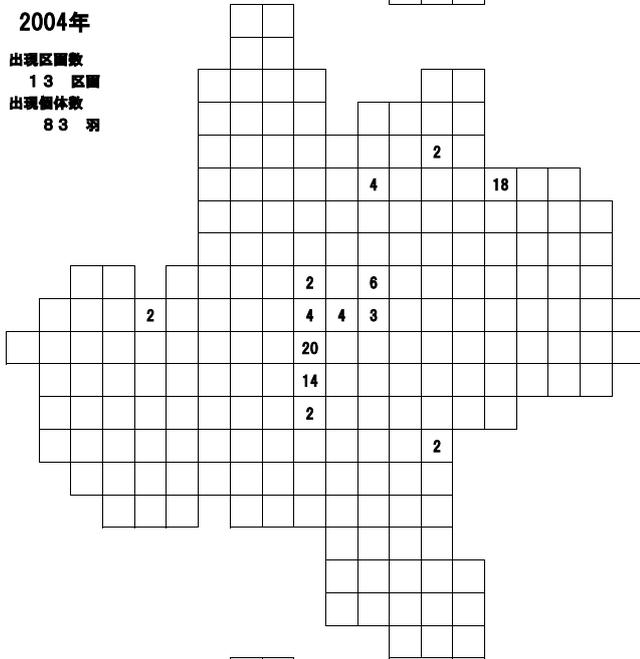
2014年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
29 羽



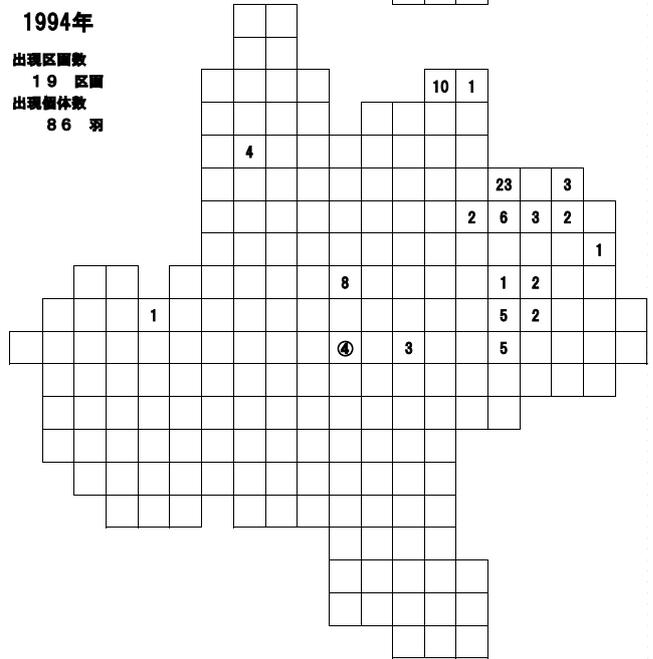
2004年

出現区画数  
13 区画  
出現個体数  
83 羽



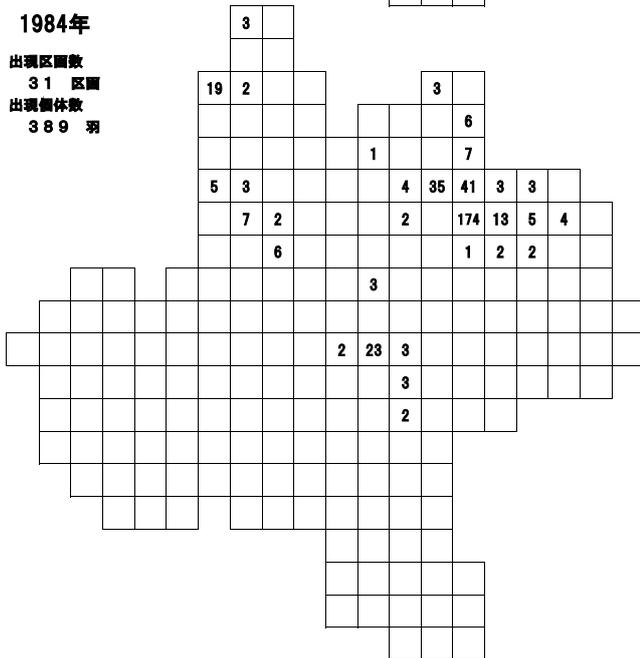
1994年

出現区画数  
19 区画  
出現個体数  
86 羽



1984年

出現区画数  
31 区画  
出現個体数  
389 羽



## 55. イワツバメ *Delichon dasypus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	389	86	83	29	21
出現区画数	31	19	13	7	6
出現一区画当たりの平均個体数	12.5	4.5	6.4	4.1	3.5

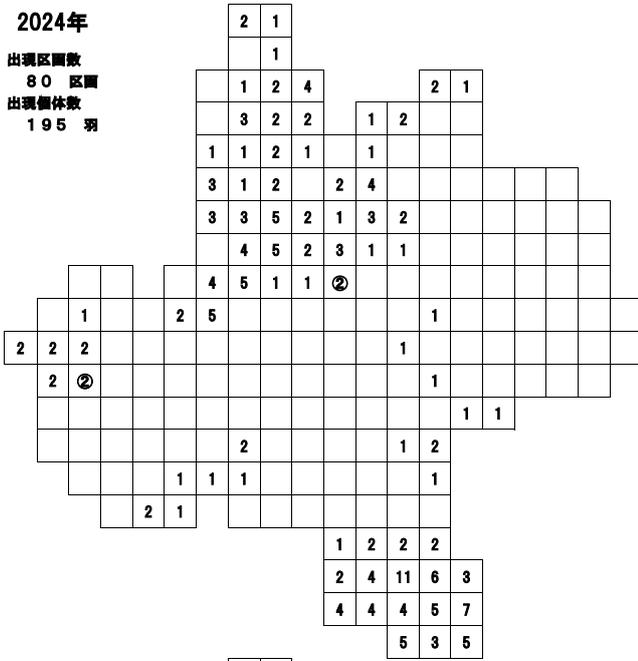
24年は6区画で21羽を記録した。

入間市でイワツバメが見られるようになったのは1975年頃からと言われる。

個体数、区画数、一区画当たりの平均個体数ともに減少を続けている。84年から94年の激減は、84年当時集団繁殖地があった市役所庁舎の外装を90年に工事して巣を取り払ってしまったため、91年春からは繁殖していない。94年、04年には庁舎の近隣で営巣するのが記録され、14年、24年には他へ移動し、二本木にある物流倉庫で小規模な集団営巣が確認されている。夏鳥系として区分。

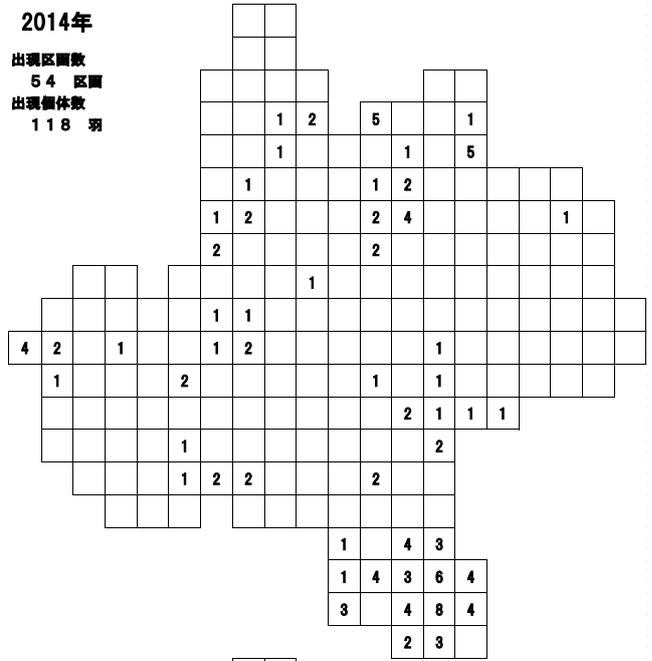
2024年

出現区画数  
80 区画  
出現個体数  
195 羽



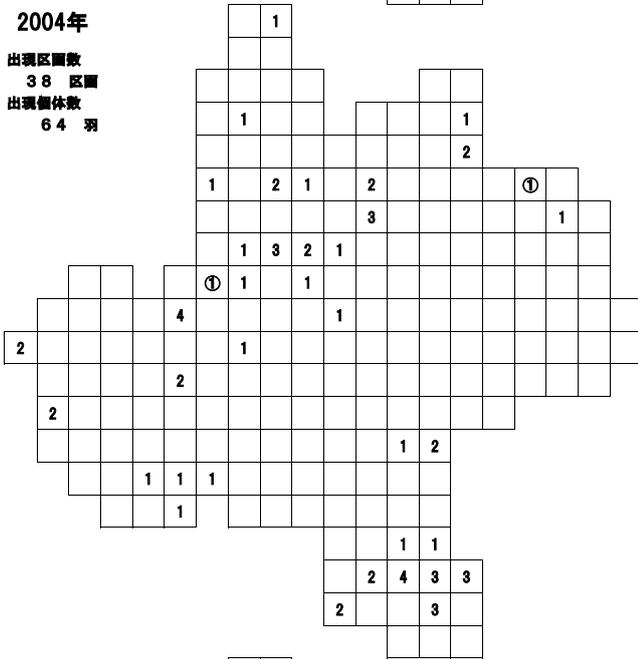
2014年

出現区画数  
54 区画  
出現個体数  
118 羽



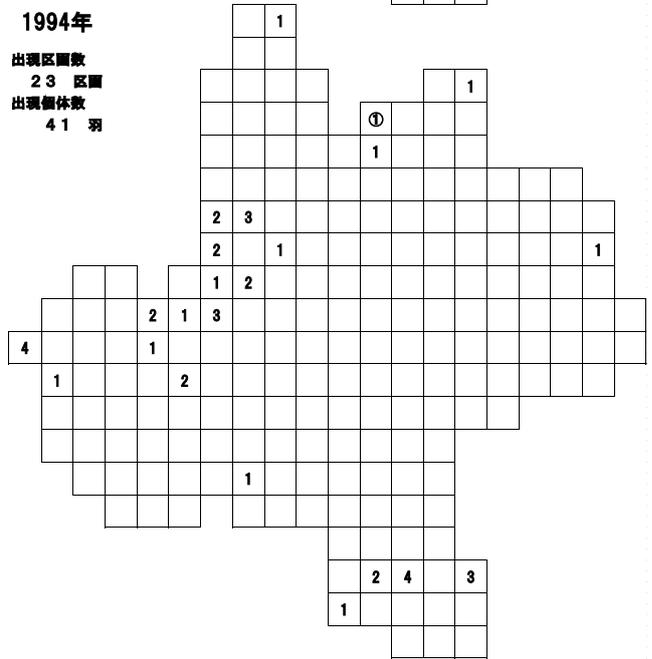
2004年

出現区画数  
38 区画  
出現個体数  
64 羽



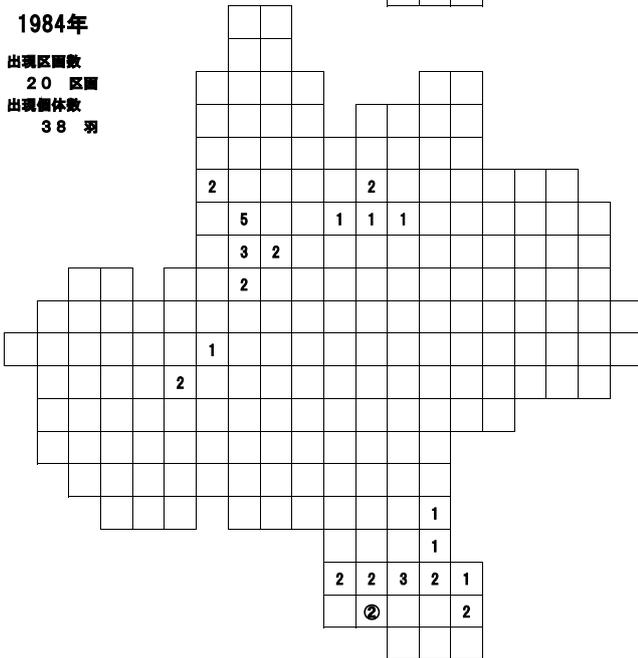
1994年

出現区画数  
23 区画  
出現個体数  
41 羽



1984年

出現区画数  
20 区画  
出現個体数  
38 羽



## 56. ウグイス *Horornis diphone*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	38	41	64	118	195
出現区画数	20	23	38	54	80
出現一区画当たりの平均個体数	1.9	1.8	1.7	2.2	2.4

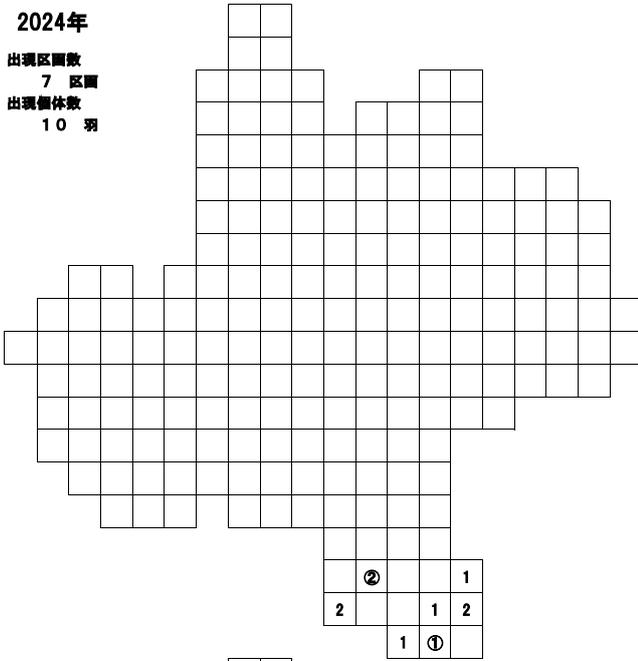
24年は80区画で195羽を記録した。出現区画数は84年から、一区画当たりの平均個体数は04年から増加しており、総個体数の増加を裏付けている。分布の拡大は両丘陵地から平地林に、特に24年は加治丘陵と入間川周辺での増加が著しい。

本種の増加は、雑木林の笹藪、河川敷のやや背丈のある藪などの棲息環境が増えてきたためと考えられる。本種の増加は托卵相手のホトトギスの増加に大きな影響をもつと考えられる。留鳥系として区分。

※No.7ホトトギス、No.57ヤブサメ参照

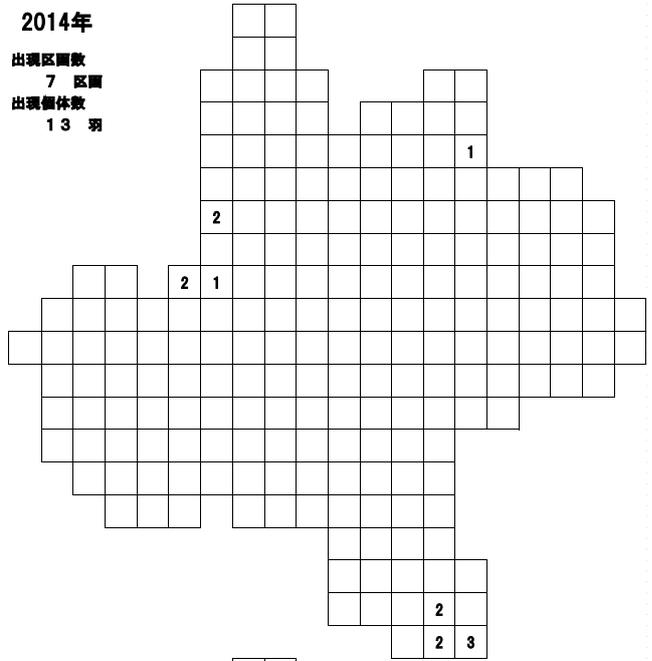
2024年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
10 羽



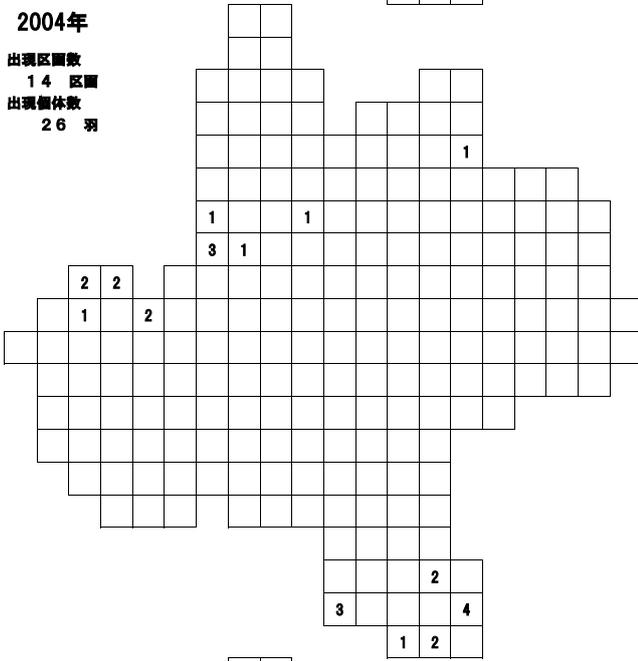
2014年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
13 羽



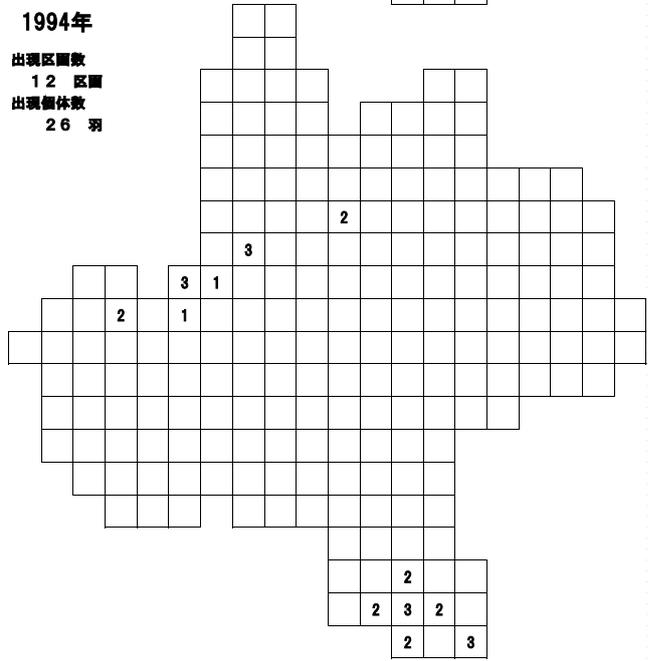
2004年

出現区画数  
14 区画  
出現個体数  
26 羽



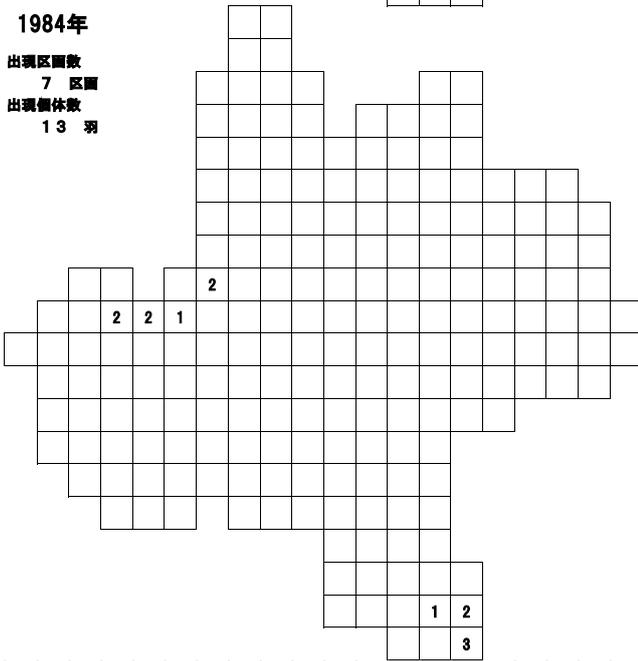
1994年

出現区画数  
12 区画  
出現個体数  
26 羽



1984年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
13 羽



### 57. ヤブサメ *Urosphena squameiceps*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	13	26	26	13	10
出現区画数	7	12	14	7	7
出現一区画当たりの平均個体数	1.9	2.2	1.9	1.9	1.4

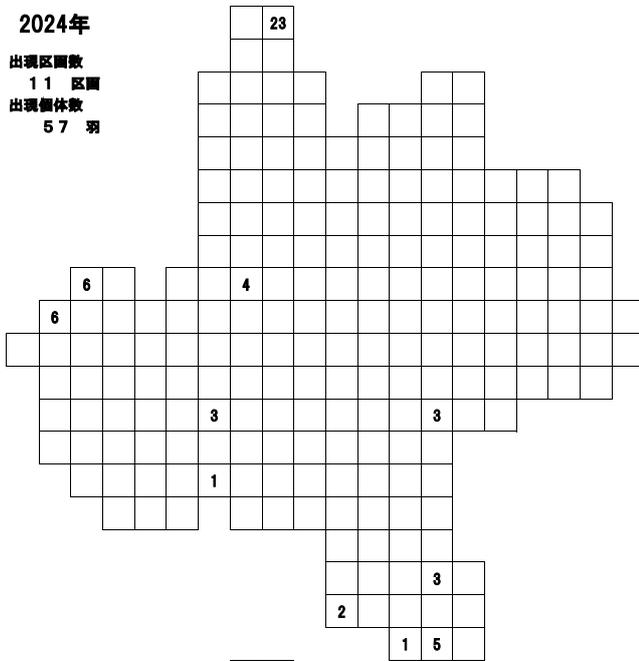
24年は7区画で10羽を記録した。総個体数は94、04年、出現区画数は04年、一区画当たりの平均個体数は94年を頂点とし、以降減少傾向である。

本種の市域の記録は、加治丘陵と狭山丘陵に限られており、今回24年の記録は狭山丘陵のみであった。同じ下層植生が繁茂する環境を好むと言われるウグイスの分布図と比較すると、ウグイスは丘陵の周囲部に、ヤブサメは丘陵の深部で記録されている事が興味深い。

夏鳥系として区分。※No.56ウグイス参照

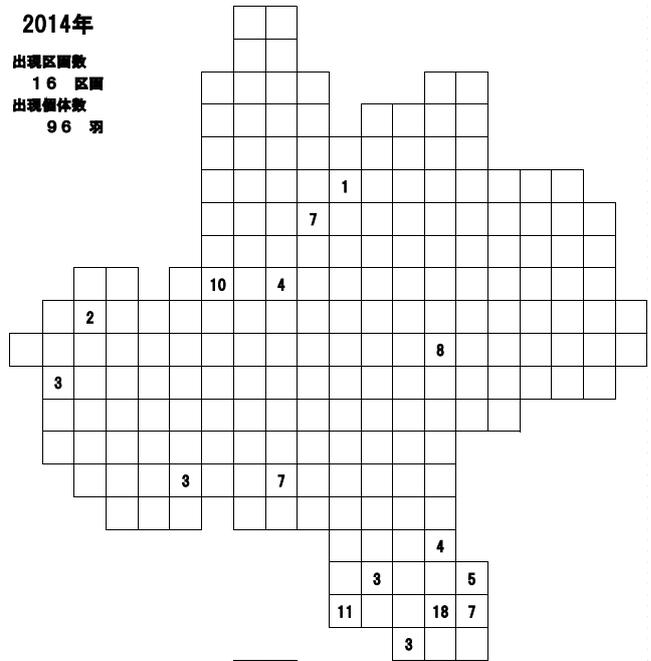
2024年

出現区画数  
11 区画  
出現個体数  
57 羽



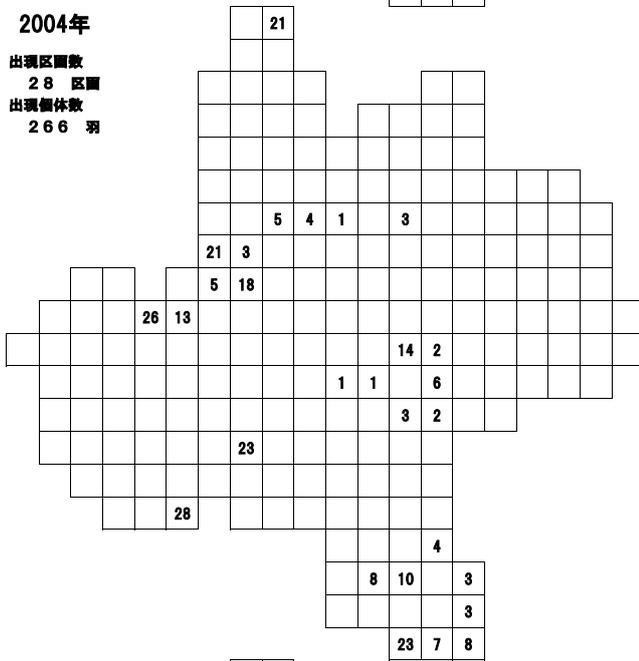
2014年

出現区画数  
16 区画  
出現個体数  
96 羽



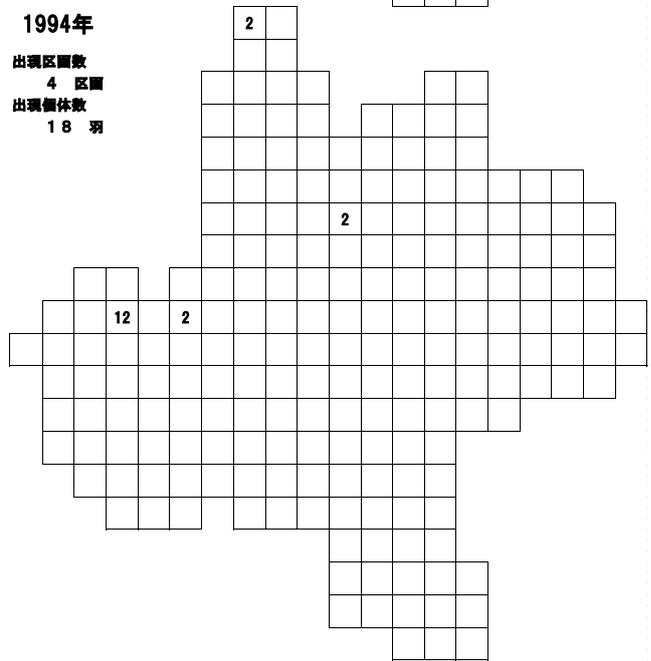
2004年

出現区画数  
28 区画  
出現個体数  
266 羽



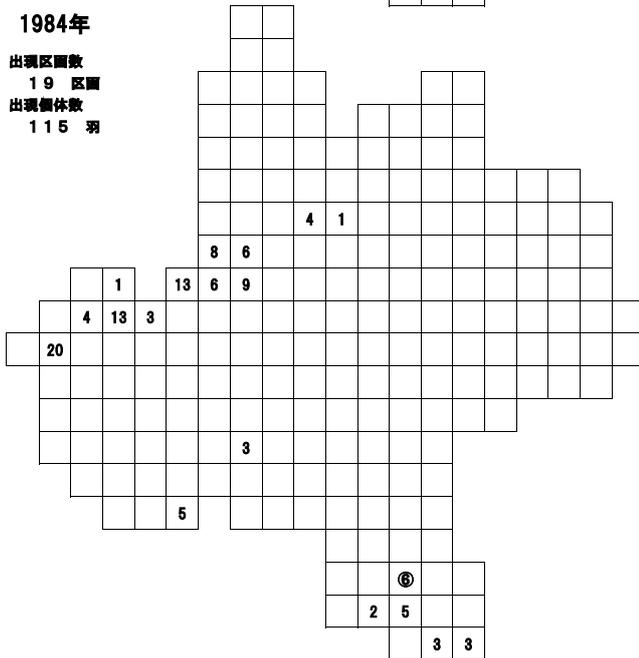
1994年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
18 羽



1984年

出現区画数  
19 区画  
出現個体数  
115 羽



## 58. エナガ *Aegithalos caudatus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	115	18	266	96	57
出現区画数	19	4	28	16	11
出現一区画当たりの平均個体数	6.1	4.5	9.5	6.0	5.2

24年は11区画で57羽を記録した。

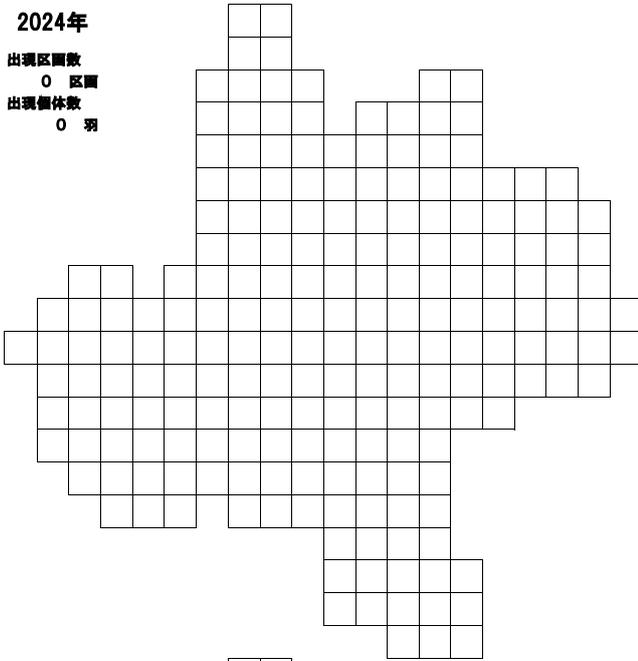
主に加治丘陵と狭山丘陵で記録され、平地林での記録は少数である。94年の記録はどの項目も急減しており、狭山丘陵では記録が無い。原因は不明である。

本種の繁殖は本調査期間よりも早く、5月上旬までに巣立つことも多い。巣立つと20~30羽が群になって林の中を移動しながら餌を探す習性がある。94年は不遇にもこの群に会えなかった調査者が、複数いたのかもしれない。頻度を高めた調査の必要性を感じる。

留鳥系として区分。

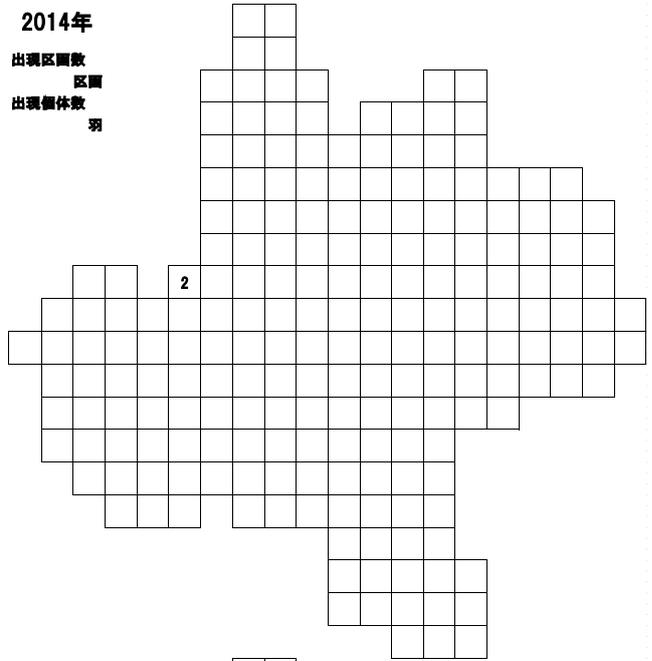
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



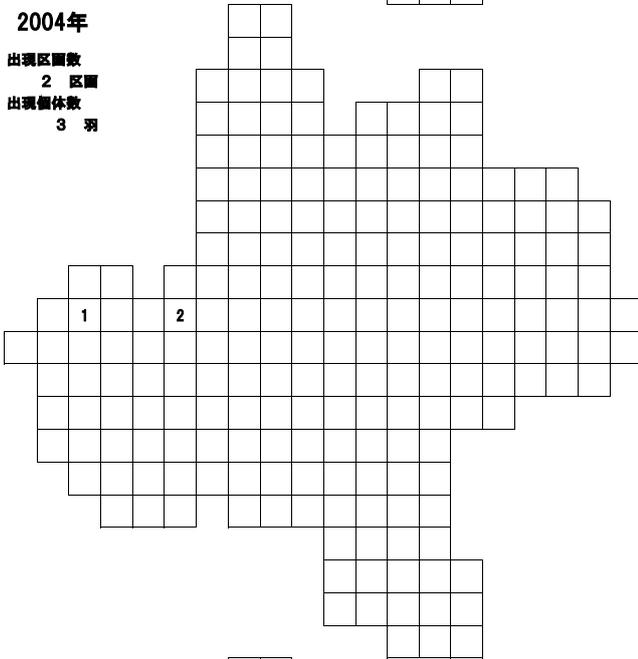
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
2 羽



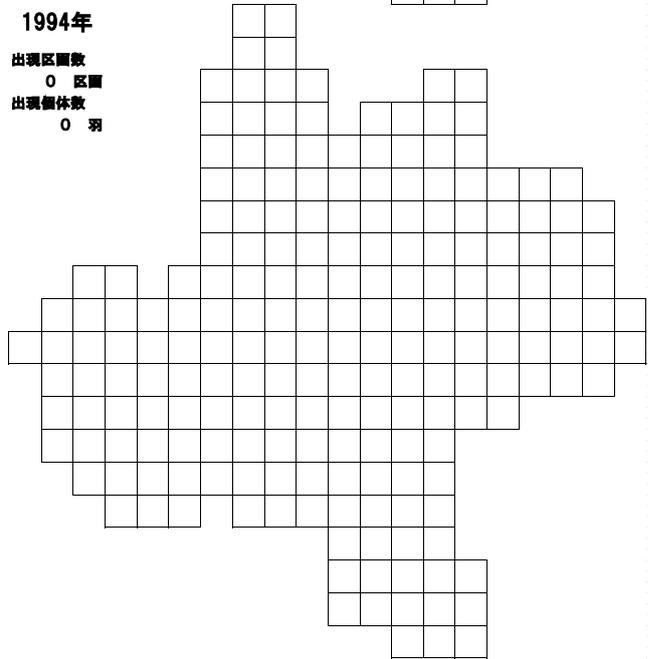
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



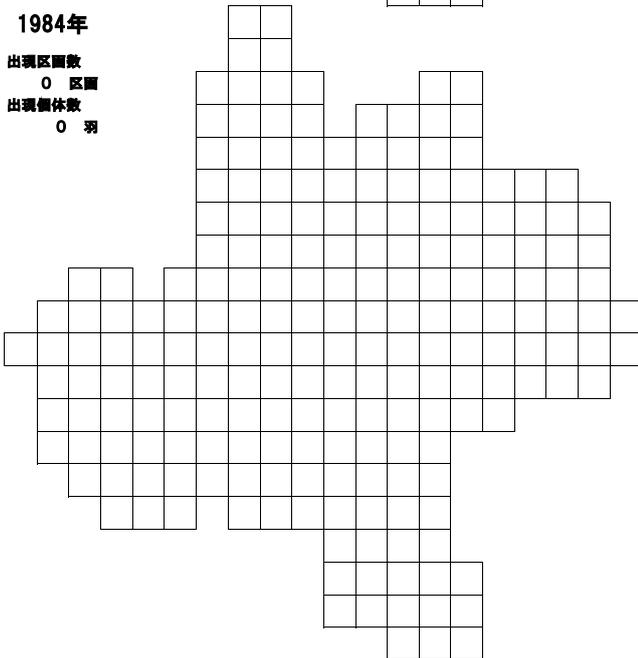
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 59. センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	3	2	0
出現区画数	0	0	2	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	1.5	2.0	—

04年は3羽、14年も2羽を記録したが、24年は記録が無かった。

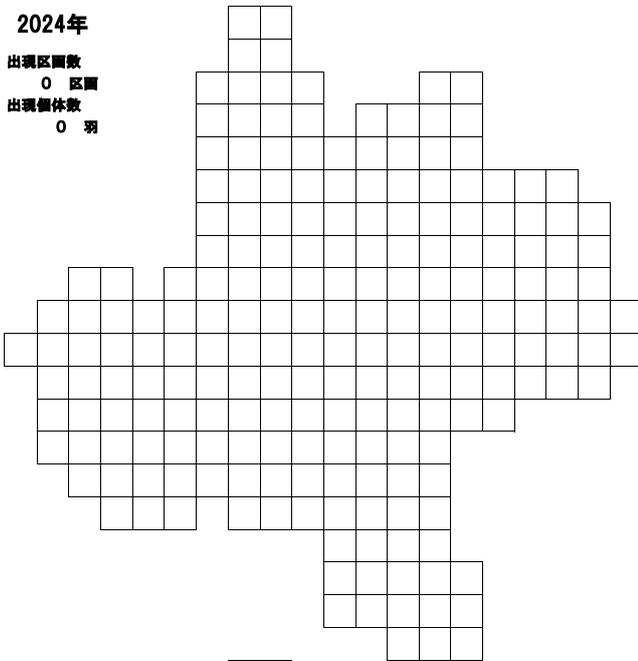
本調査の記録は加治丘陵に限られている。

市内では春と秋の渡り時期に見られる通過鳥である。春は4月下旬から遅くは6月上旬に囀りを聞くこともあるが、繁殖を期待できる記録はない。これまでの記録は移動途中の個体を記録してきたものと思われる。

しかし、本種の棲息環境は丘陵の広葉樹林ならば該当すると思われる、少数がとどまる可能性もある。今後の動向に注目していくことが大切である。通過鳥系として区分。

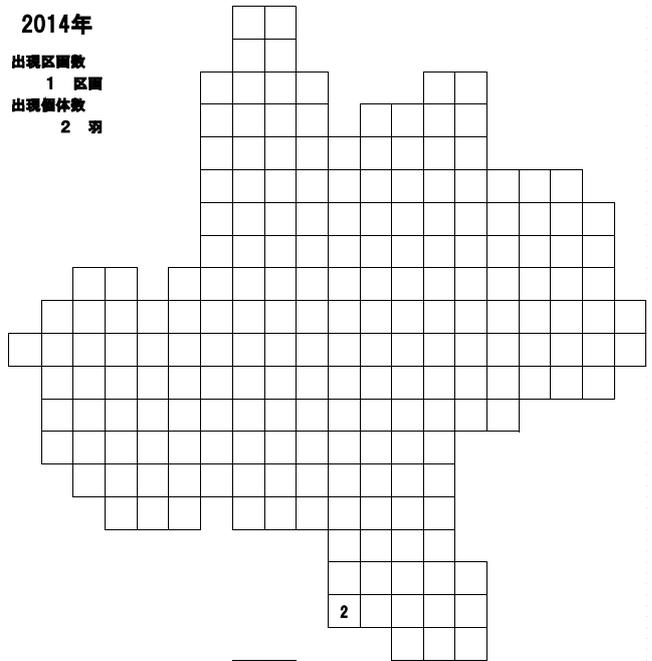
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



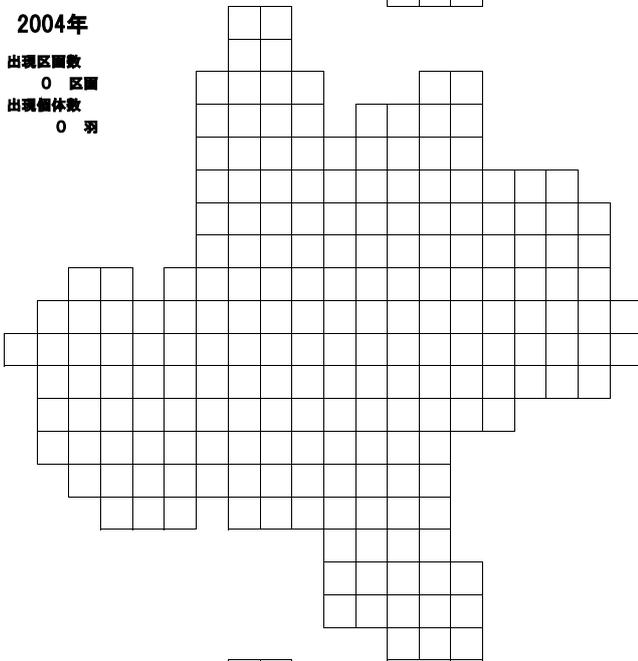
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



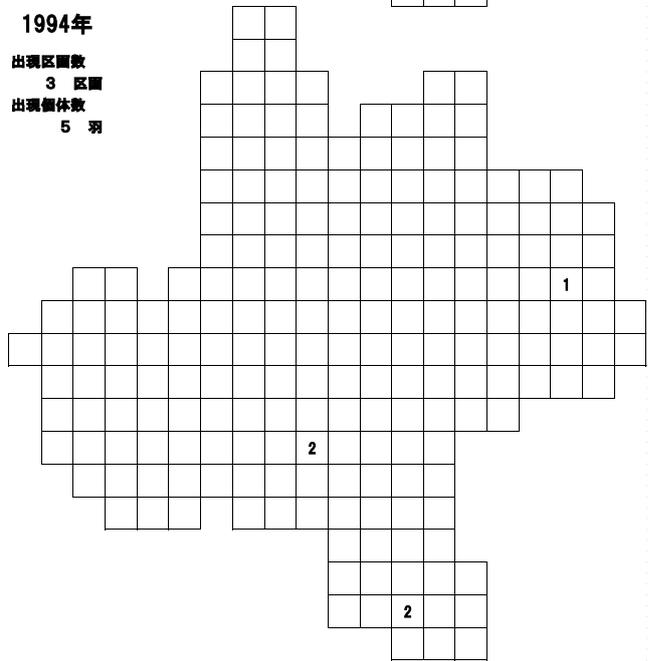
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



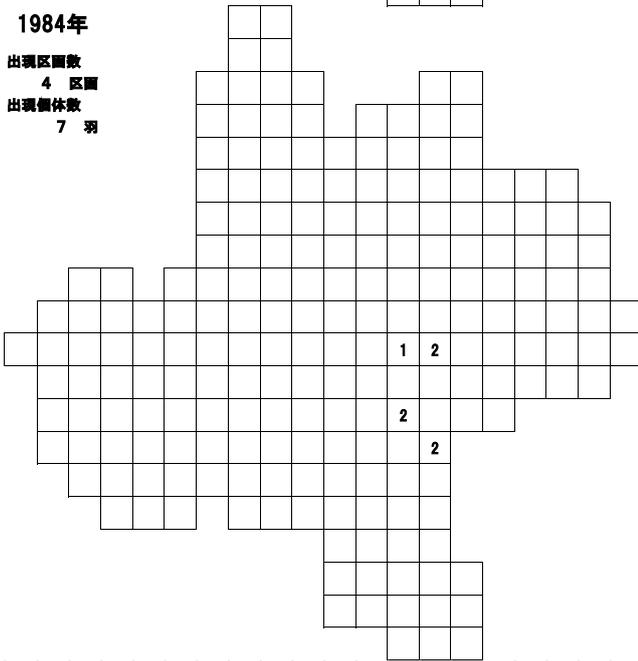
1994年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
5 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
7 羽



60. メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	7	5	0	2	0
出現区画数	4	3	0	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.8	1.7	—	2.0	—

84年、94年、14年にも記録されてきたが、24年は記録が無い。

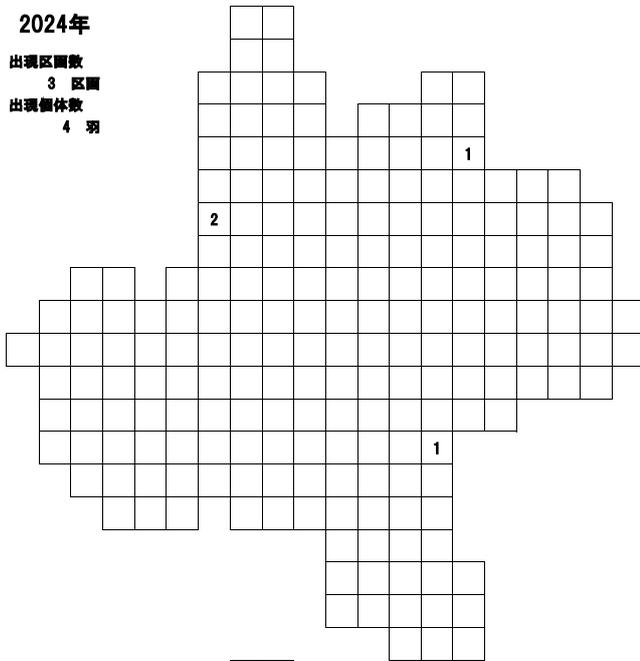
市内では5～6月と9～10月の渡り時期に少数が見られる通過鳥である。センダイムシクイに比べ春の渡り時期は遅めで、特徴のある囀りを聞くことがある。

本種の繁殖環境は、亜高山帯の針葉樹林であるため、低標高の市域には繁殖環境はない。これまでの記録は移動途中の個体を記録したものと思われる。

通過鳥系として区分。

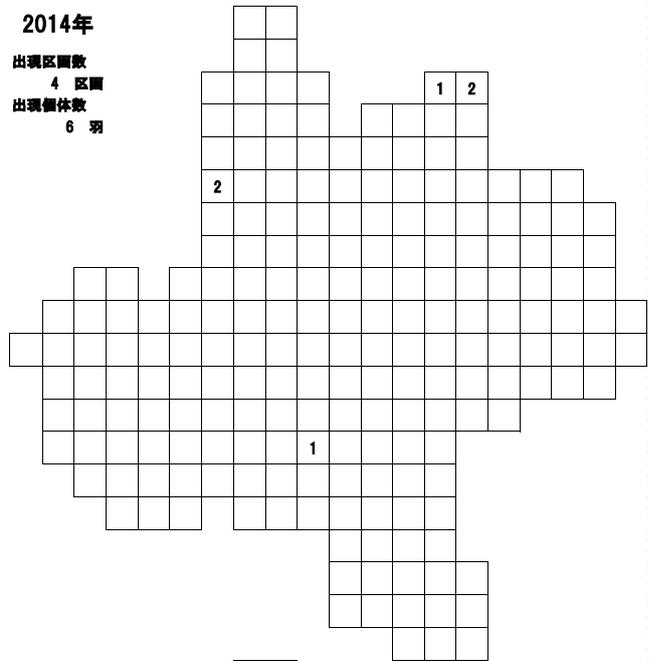
2024年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
4 羽



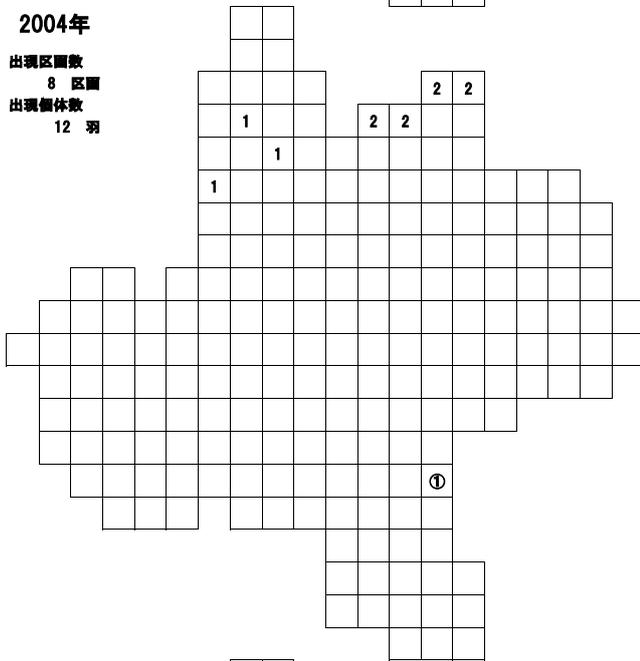
2014年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
6 羽



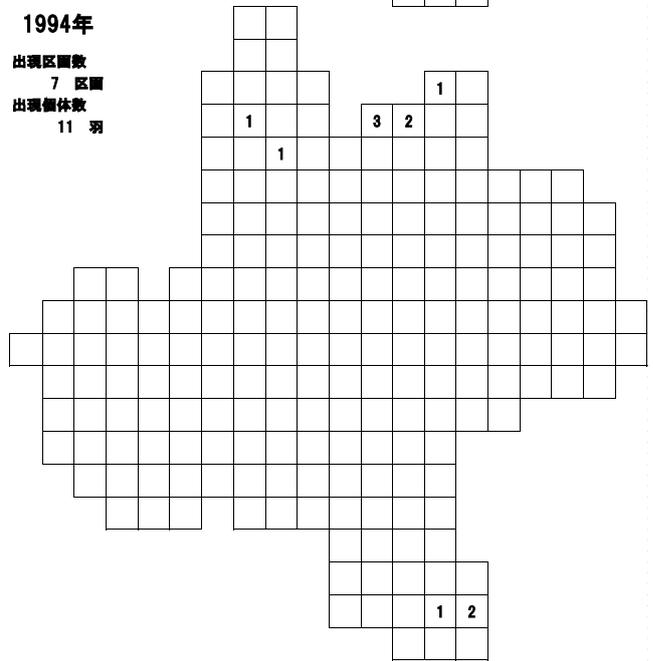
2004年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
12 羽



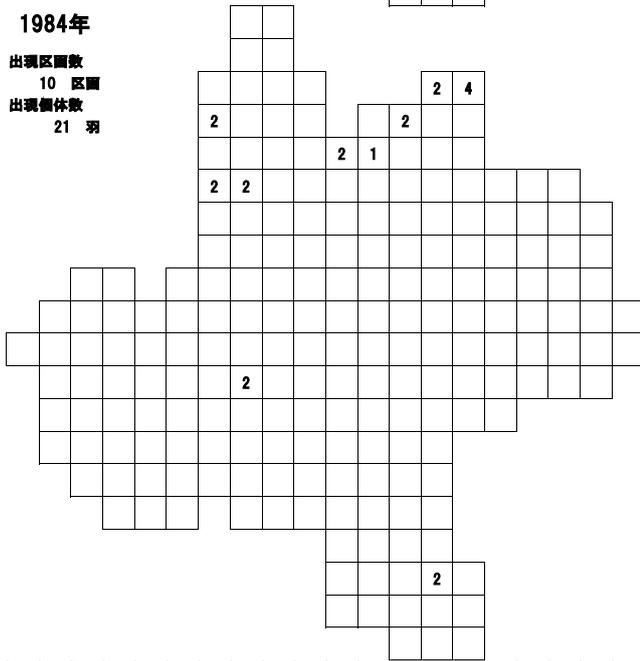
1994年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
11 羽



1984年

出現区画数  
10 区画  
出現個体数  
21 羽



### 61. オオヨシキリ *Acrocephalus orientalis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	21	11	12	6	4
出現区画数	10	7	8	4	3
出現一区画当たりの平均個体数	2.1	1.6	1.5	1.5	1.3

24年は3区画で4羽を記録した。

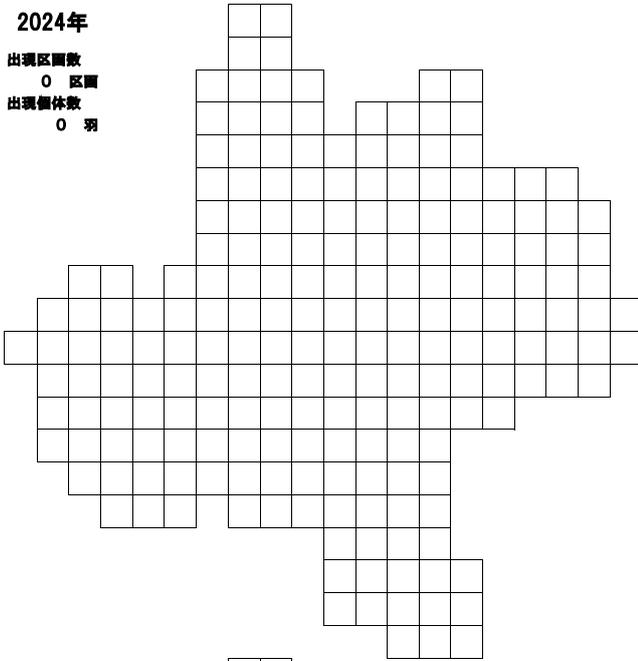
84年から総個体数、区画数、一区画当たりの平均羽数すべてが減少を続けている。本種は河川敷・池沼畔のヨシ原を棲息環境にしており、市域のヨシ原の消長が本種の個体数に反映していると思われる。24年の記録は入間市駅近くに臨時的にできたヨシ原と大森調整池、そして入間川は一か所であった。

ヨシ原が広がればオオヨシキリが増加し、オオヨシキリが増加すると托卵をするカッコウの増加にもつながる可能性が出てくる。

夏鳥系として区分。※No. 9カッコウ参照

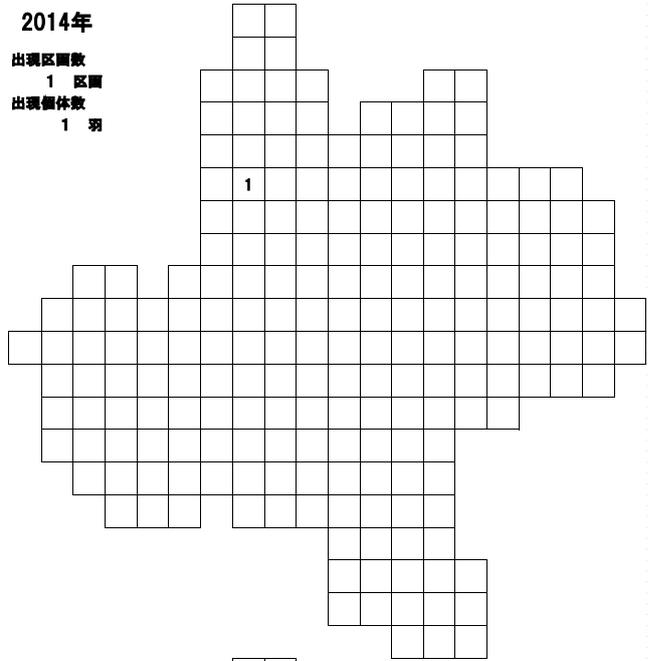
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



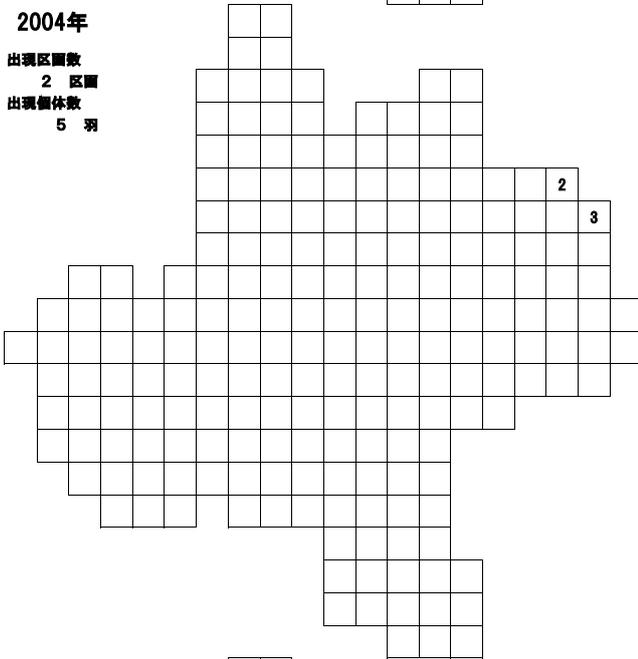
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



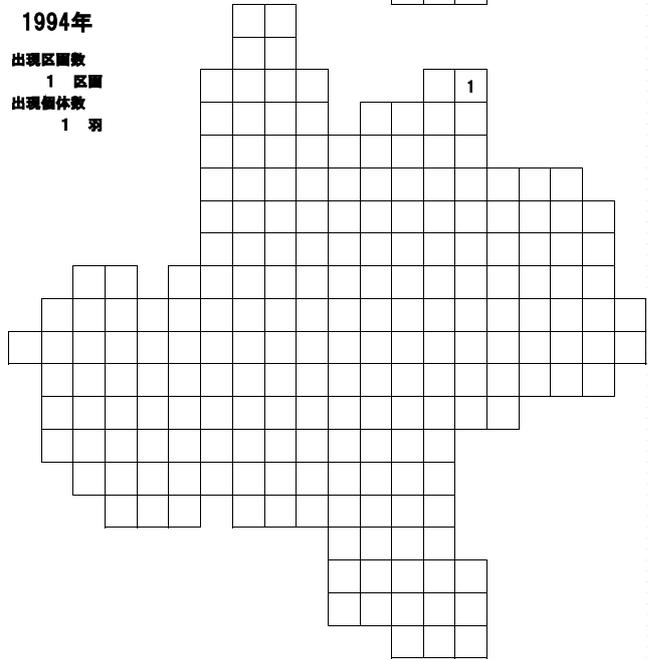
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
5 羽



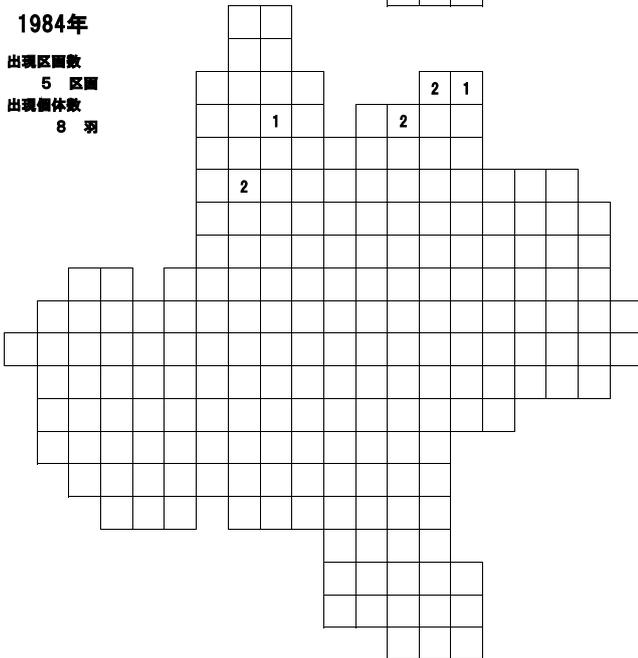
1994年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



1984年

出現区画数  
5 区画  
出現個体数  
8 羽



## 62. セッカ *Cisticola juncidis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	8	1	5	1	0
出現区画数	5	1	2	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.6	1.0	2.5	1.0	—

24年は記録が無かった。

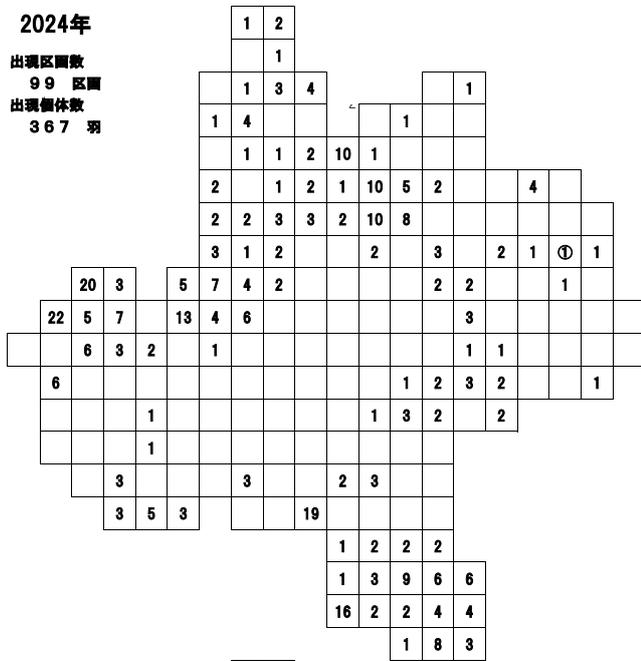
総個体数、出現区画数、一区画当たりの平均個体数すべてが84年から減少増加を繰り返し、24年は見られなかった。

本種は耕作していない農地や河川敷にできた背丈のある草地（ススキなど）に棲息する。84年当時は、入間川の河川敷で周年見られ、繁殖するものもいて記録も多かった。その後グラウンドや駐車場などが増え、棲息環境が失われてしまった。今後の増加は期待できない状況である。

留鳥系として区分。

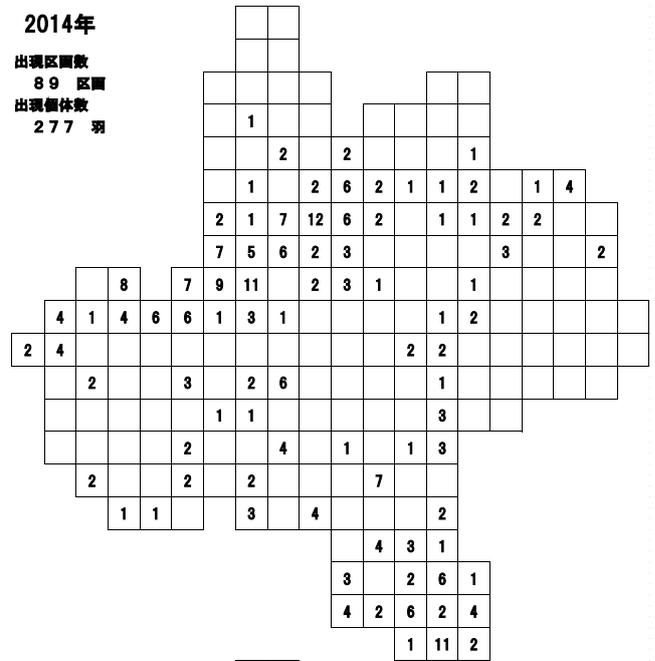
2024年

出現区画数  
99 区画  
出現個体数  
367 羽



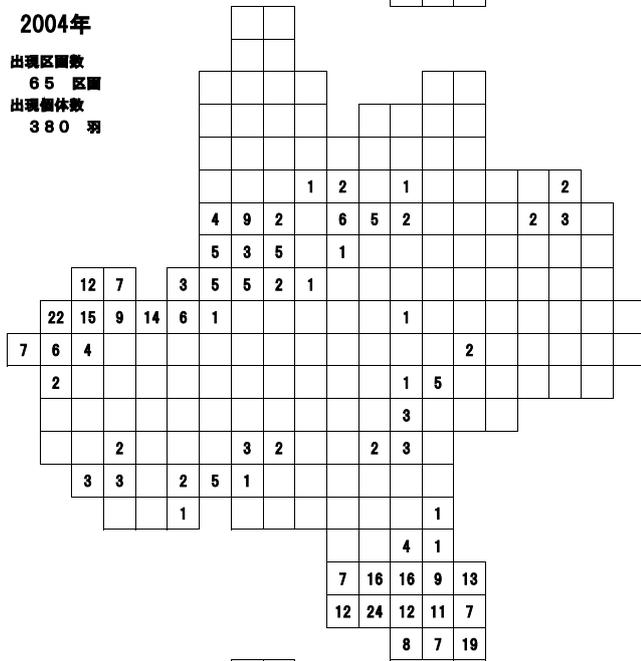
2014年

出現区画数  
89 区画  
出現個体数  
277 羽



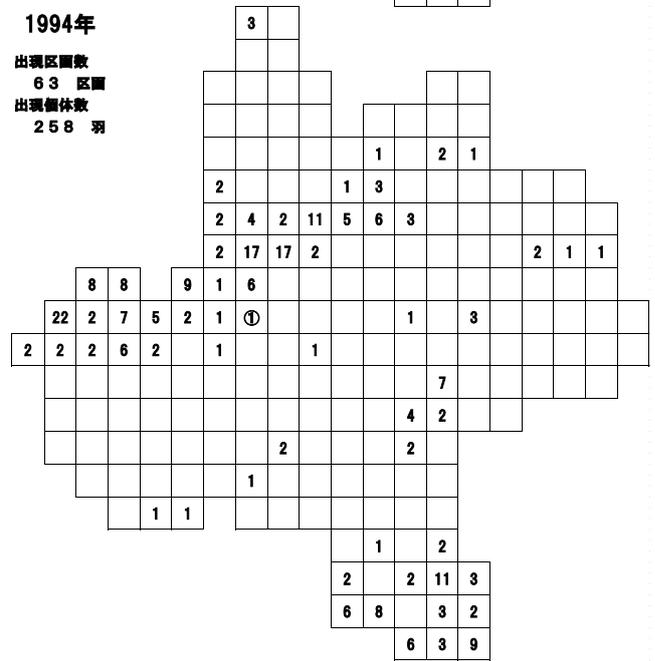
2004年

出現区画数  
65 区画  
出現個体数  
380 羽



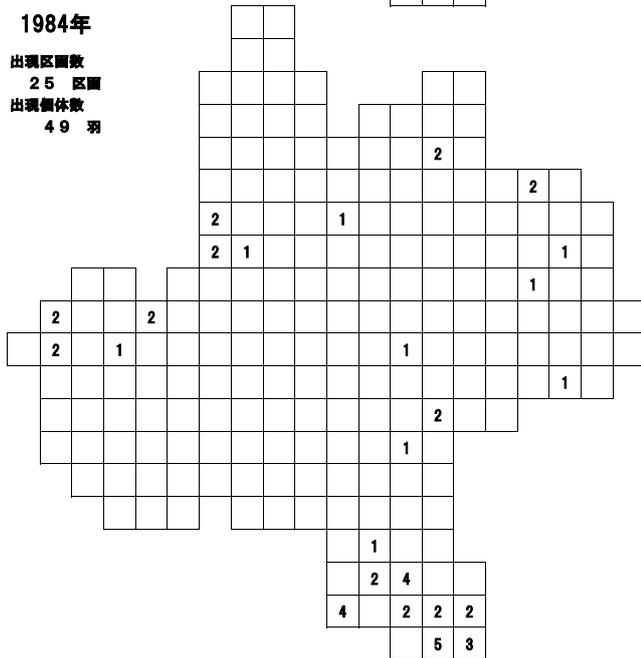
1994年

出現区画数  
63 区画  
出現個体数  
258 羽



1984年

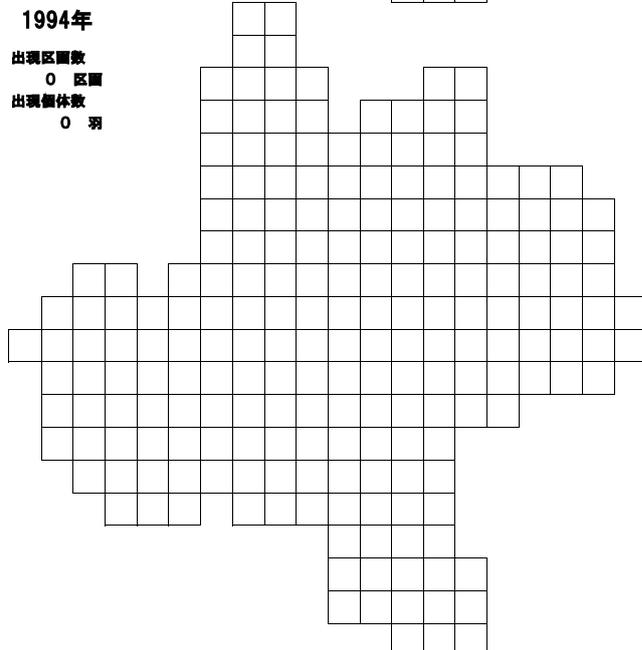
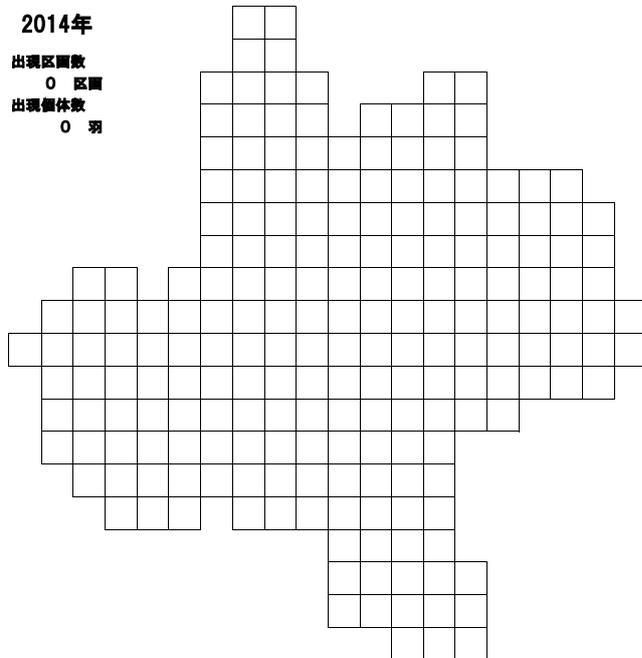
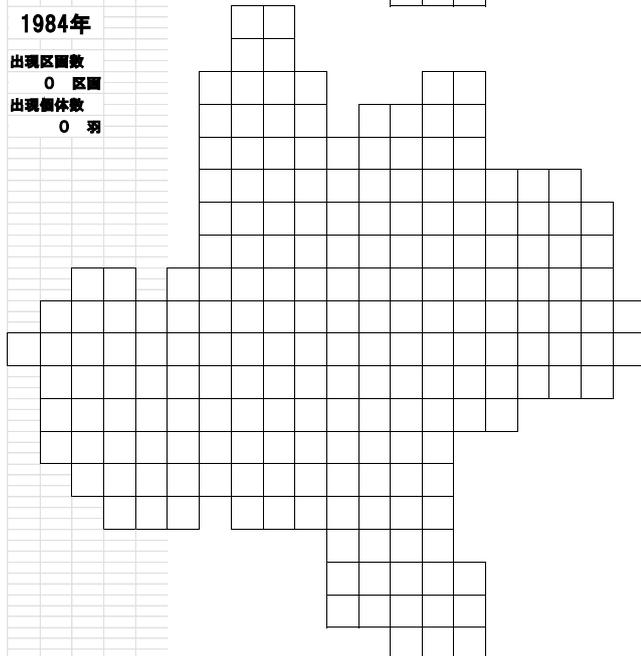
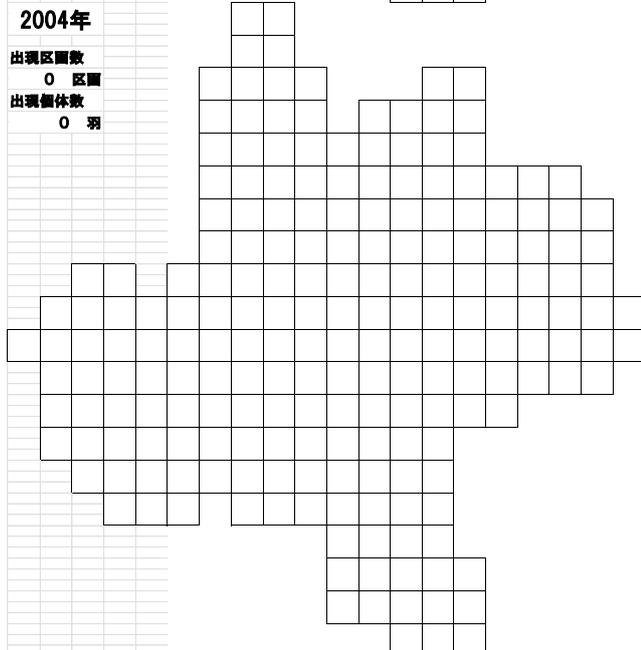
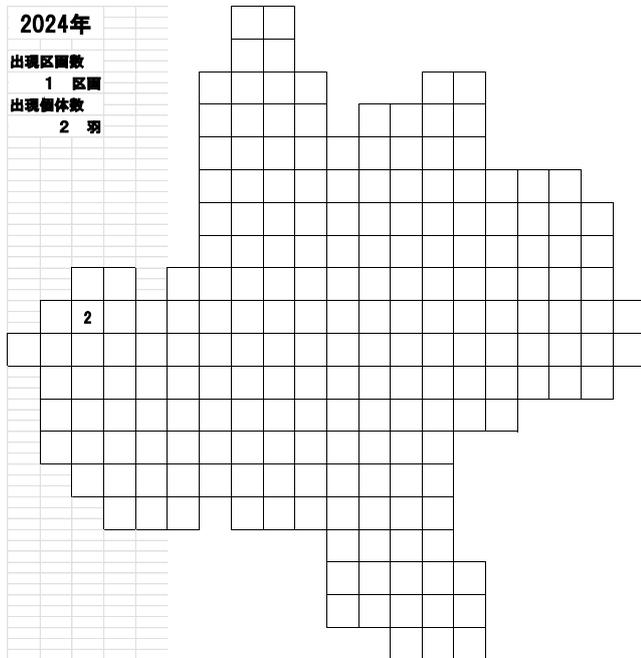
出現区画数  
25 区画  
出現個体数  
49 羽



### 63. メジロ *Zosterops japonicus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	49	258	380	277	367
出現区画数	25	63	65	89	99
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	4.1	5.8	3.1	3.7

24年は99区画で367羽を記録した。総個体数、一区画当たりの平均個体数は、04年を頂点に山型の推移をしてきた。出現区画数は、84年から現在も増加を続けている。84年は加治丘陵・狭山丘陵を主とした分布だったが、94年頃から平地林への進出も顕著になり、順次分布域の拡大を続けている。それを推し進めてきたのは、薪炭用の雑木林を50年以上放置した結果、常緑樹も混じる大木のある落葉広葉樹林が徐々に育ったためと考えられる。留鳥系として区分。



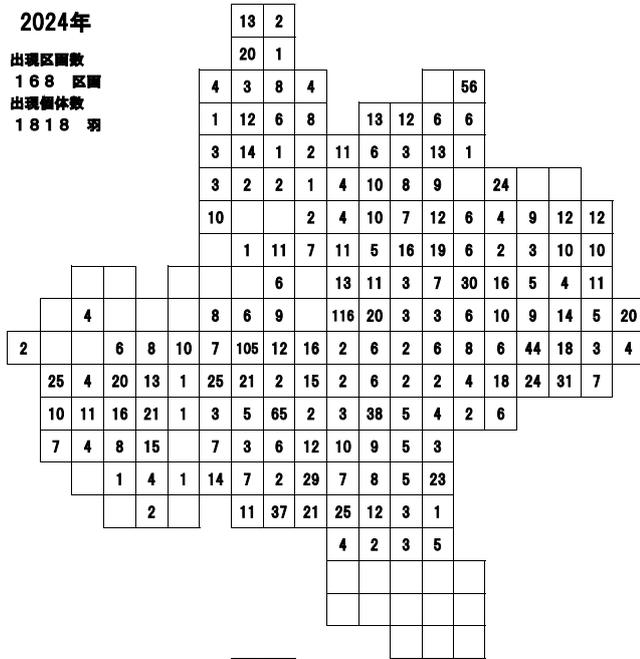
**64. ミソサザイ *Troglodytes troglodytes***

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	0	2
出現区画数	0	0	0	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	2.0

24年に初めて1区画で2羽を記録した。  
 市域で見られてきたのは冬で、加治丘陵や狭山丘陵の沢沿いが多い。24年の記録は加治丘陵の細流と陸地である。  
 本種は、通常標高300m以上の溪流沿いで、早くは2月頃から囀り、4月～8月に繁殖すると言われている。カケスやオオルリの項でも述べているが、加治丘陵は標高200mと低くはあるが、奥武蔵の山岳と地続きで高低差のある沢が多数ある。繁殖条件は揃っているものと思われる。今後の本種の繁殖に期待したい。 通過鳥系として区分。

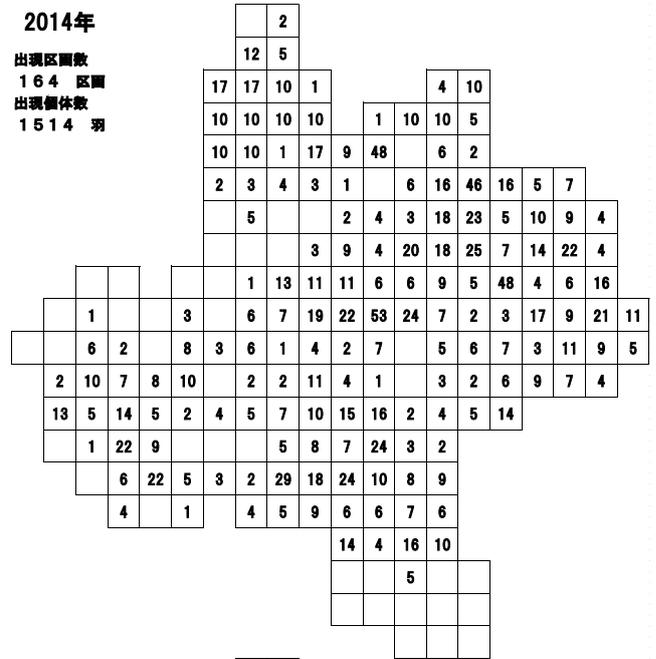
2024年

出現区画数  
168 区画  
出現個体数  
1818 羽



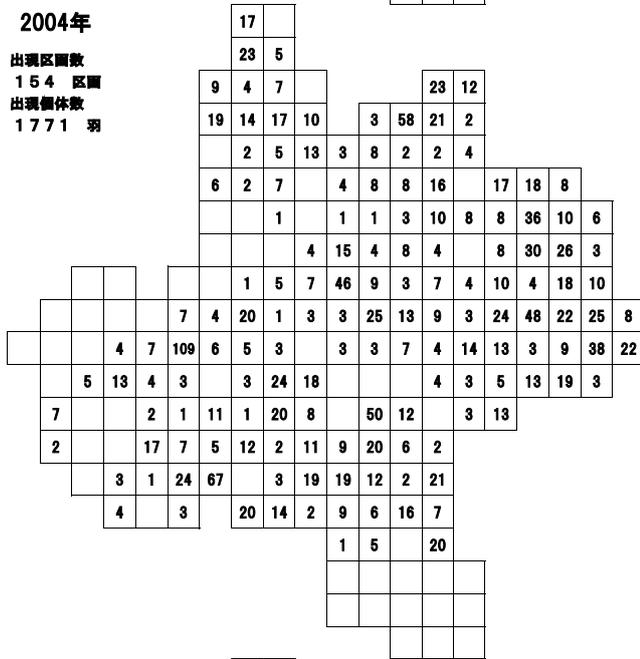
2014年

出現区画数  
164 区画  
出現個体数  
1514 羽



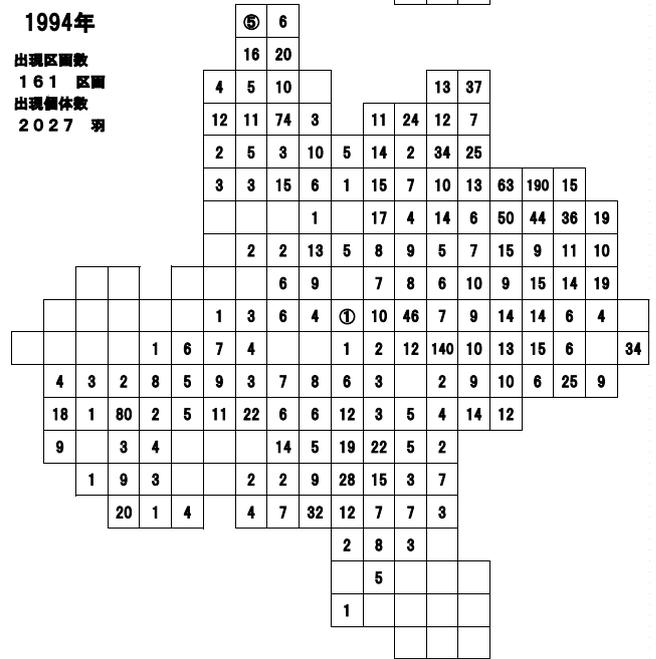
2004年

出現区画数  
154 区画  
出現個体数  
1771 羽



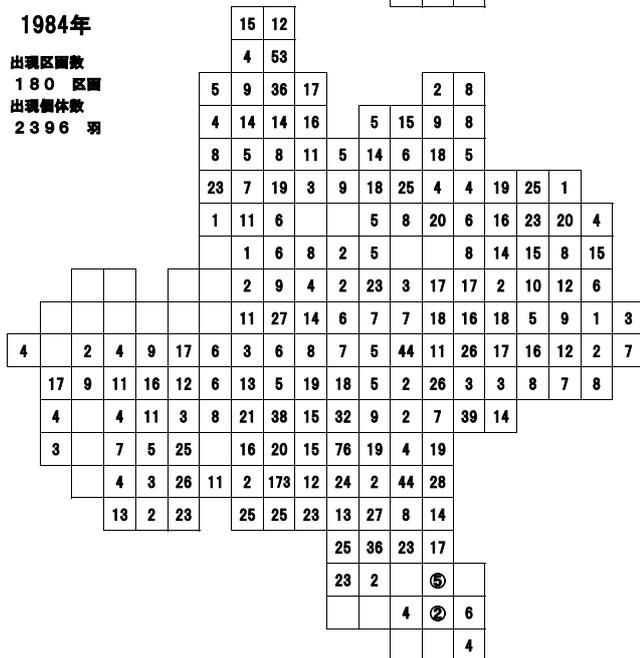
1994年

出現区画数  
161 区画  
出現個体数  
2027 羽



1984年

出現区画数  
180 区画  
出現個体数  
2396 羽



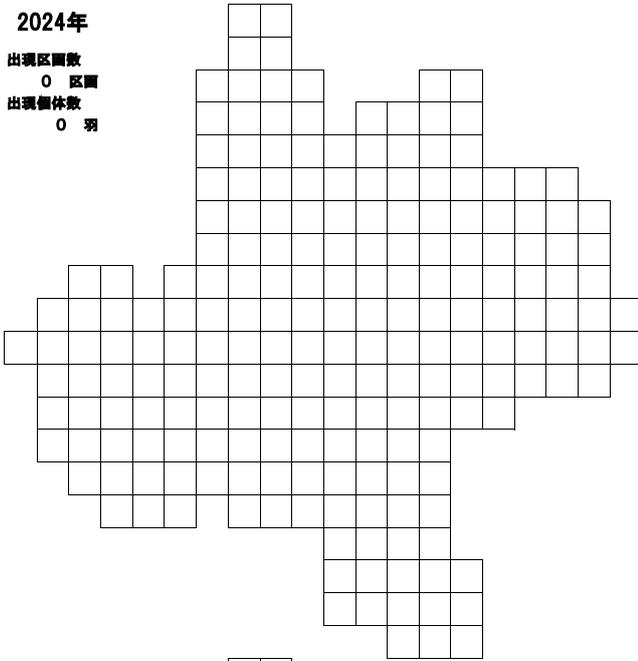
### 65. ムクドリ *Spodiopsar cineraceus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2,396	2,072	1,771	1,514	1,818
出現区画数	180	161	154	164	168
出現一区画当たりの平均個体数	13.3	12.9	11.5	9.2	10.8

24年は168区画で1,818羽を記録した。市域では個体数がスズメに次いで多い。総個体数、一区画当たりの平均個体数は、84年から14年まで減少を続け、24年に増加に転じている。出現区画数は、154~180区画で安定した推移であったことから、総個体数の増減は、一区画当たりの平均個体数（生息密度）による影響が強かったものと考えられる。本種は時に大群をつくるため、鳴き声や糞害で知られる。しかし、農地の害虫駆除役として多大な価値があることを理解していただきたい。留鳥系として区分。

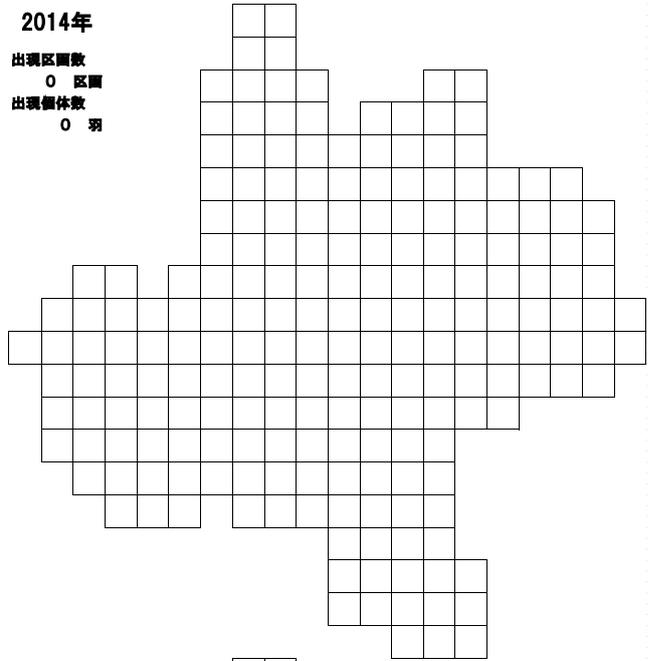
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



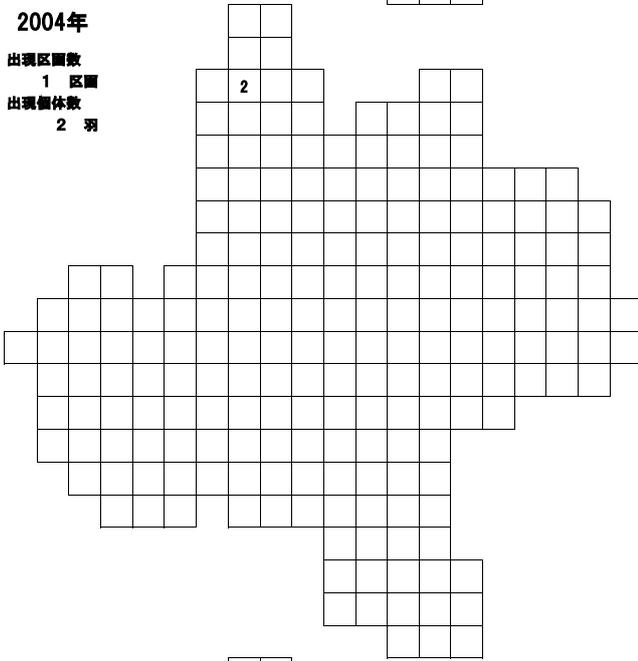
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



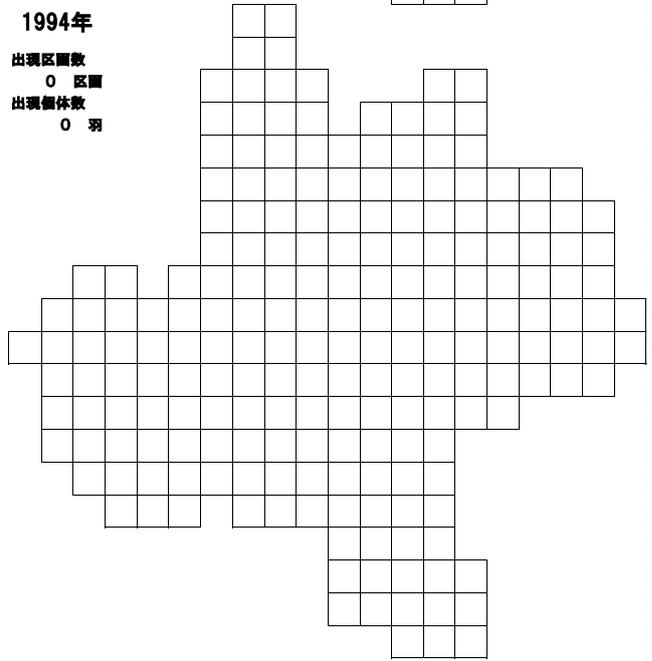
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



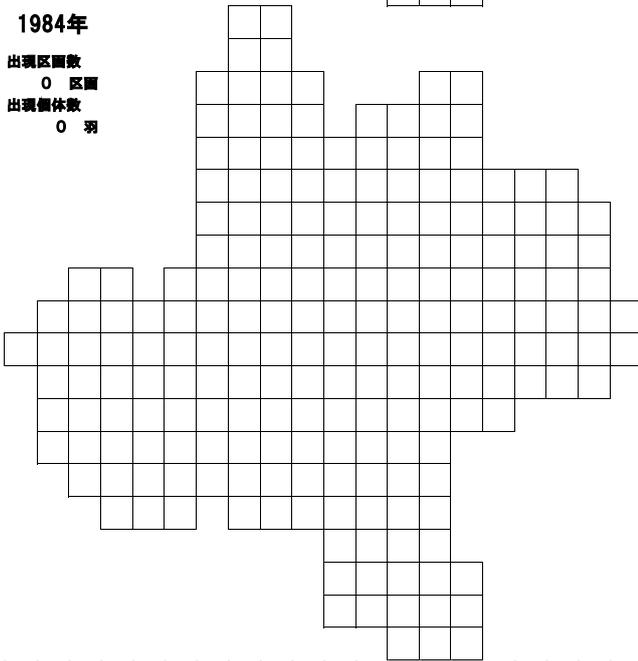
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 66. コムクドリ *Agropsar philippensis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	2	0	0
出現区画数	0	0	1	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	2.0	—	—

04年に記録したが、24年は記録がなかった。

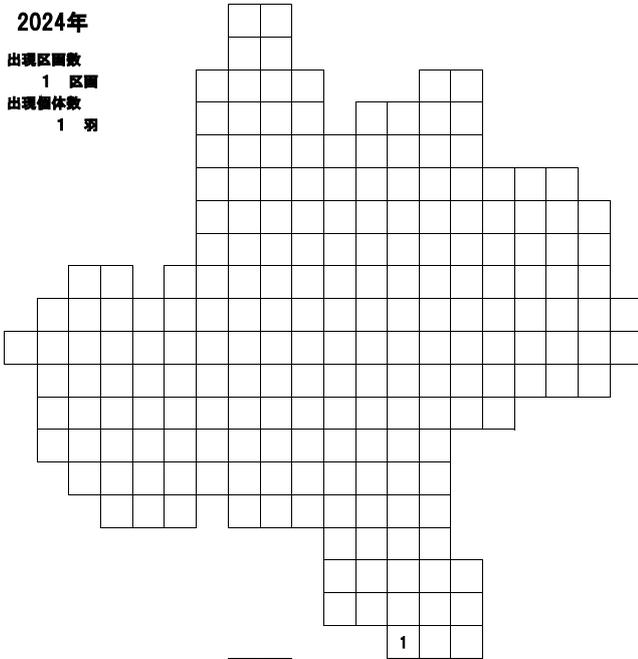
日本に夏鳥として渡来し、市域では春と夏の渡り時期に通過する鳥。個体数は多くない。

当地では繁殖せず、移動の時期に通過するのみであり、04年の記録は、遅い春の渡り途中のものと思われる。

通過鳥系として区分。

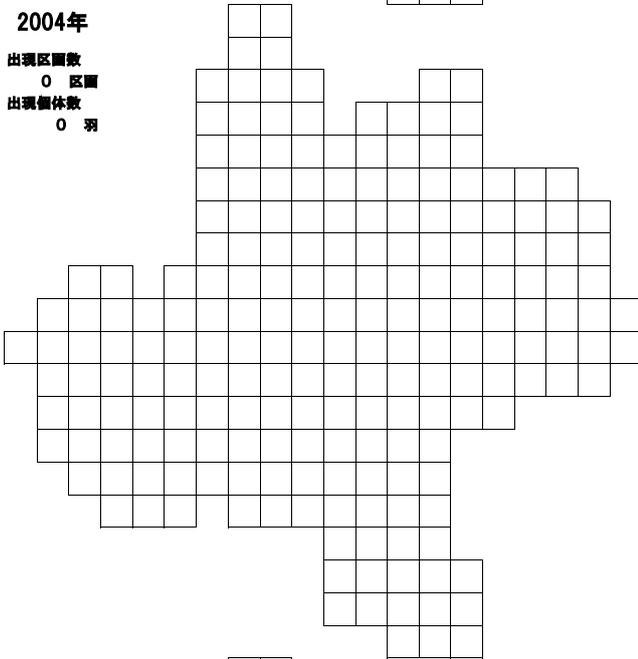
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



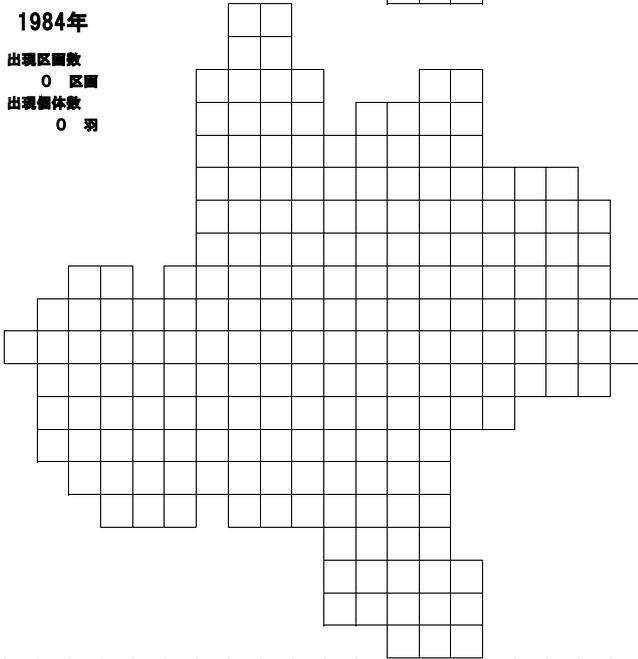
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



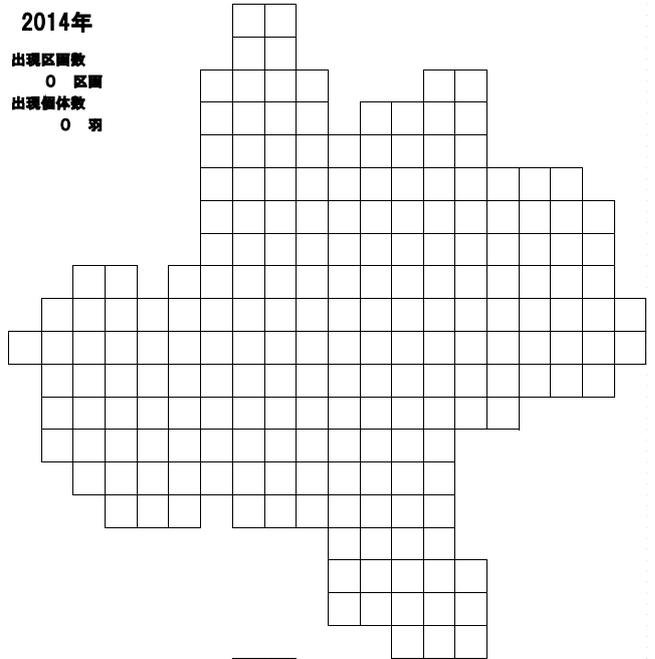
1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



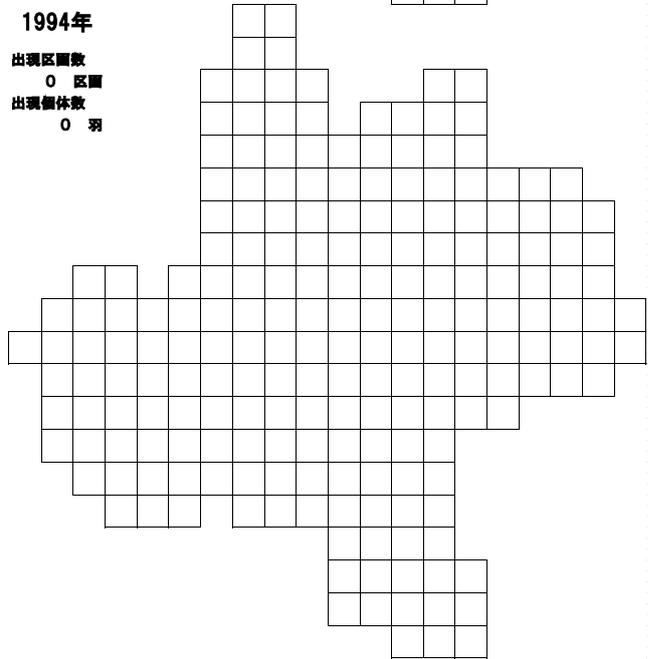
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 67. トラツグミ *Zoothera aurea*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	0	1
出現区画数	0	0	0	0	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	1.0

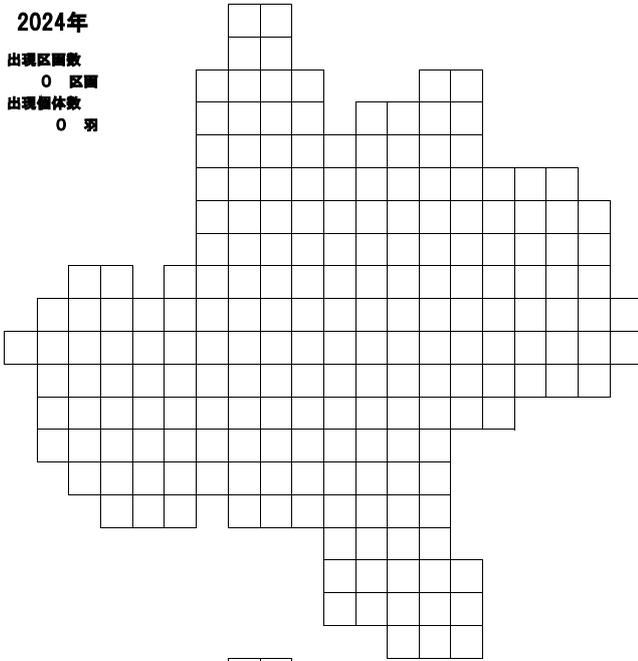
24年に初めて1区画で1羽を記録した。山地から丘陵や平地の雑木林などに棲息し、冬は屋敷林、社寺林、公園などでも見られる。やや湿った場所で落ち葉を探り、ミミズを探る姿を見ることが多い。

市域での個体数は少ないが、周年見られる。繁殖期には、夜や早朝に独特な金属音の囀りを聞くことがあるので、繁殖の可能性は十分ある。が、まだ確証を得ていない。24年の記録は山口貯水池涵養林での記録。

通過鳥として区分。

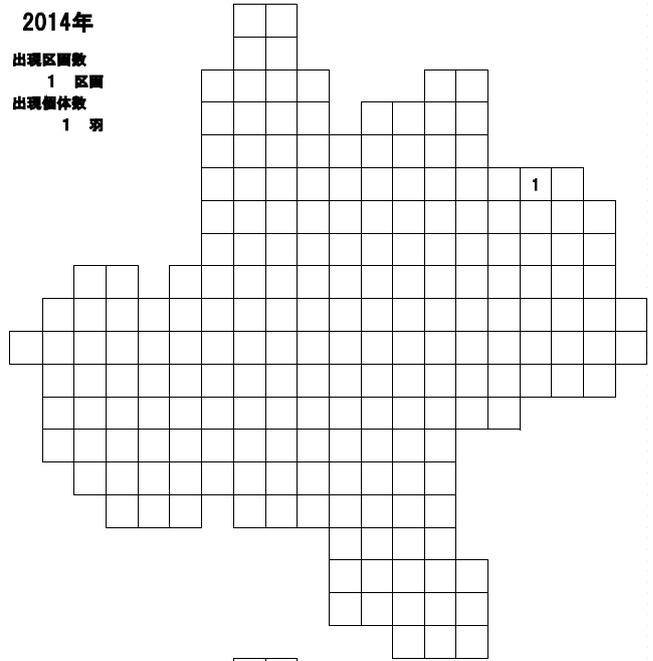
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



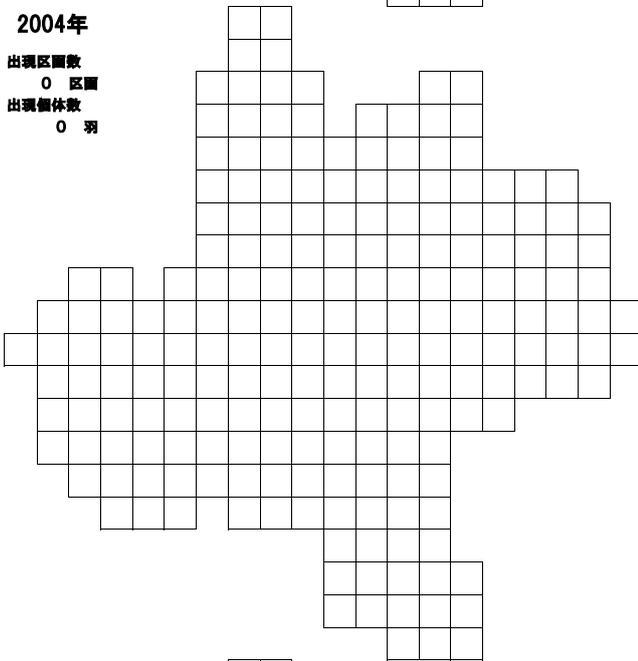
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



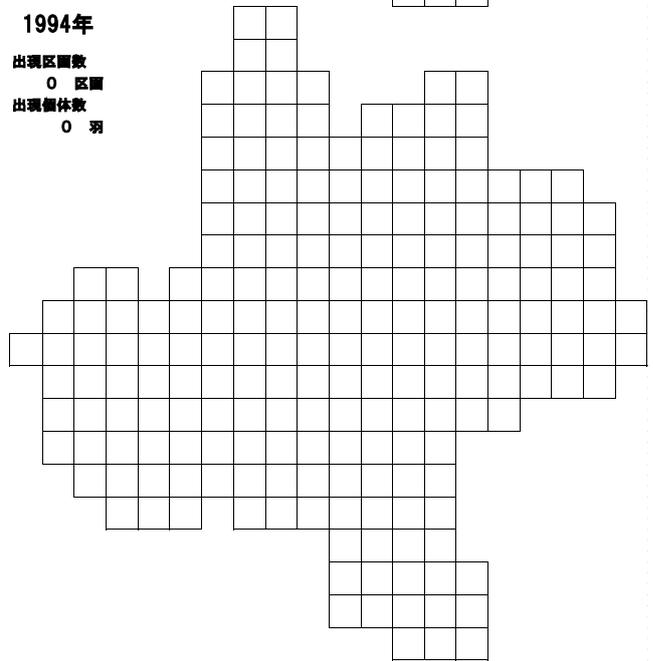
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



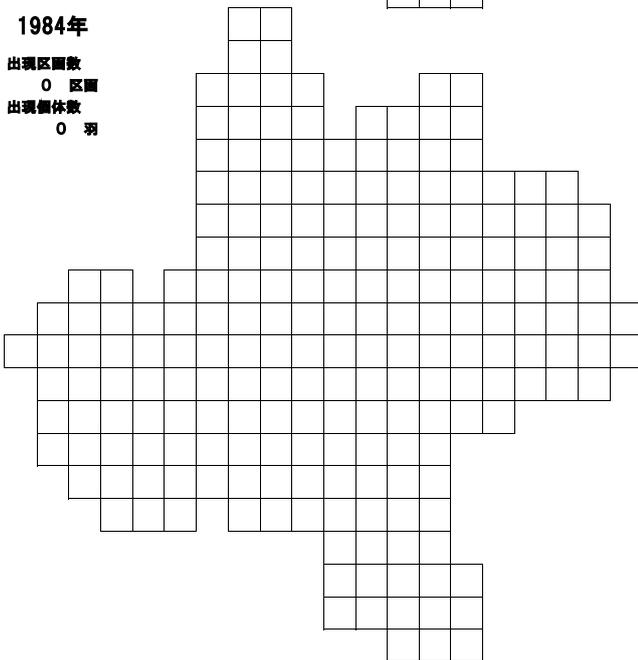
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 68. マミジロ *Geokichla sibirica*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	1	0
出現区画数	0	0	0	1	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	1.0	—

14年に記録したが、24年は記録が無かった。

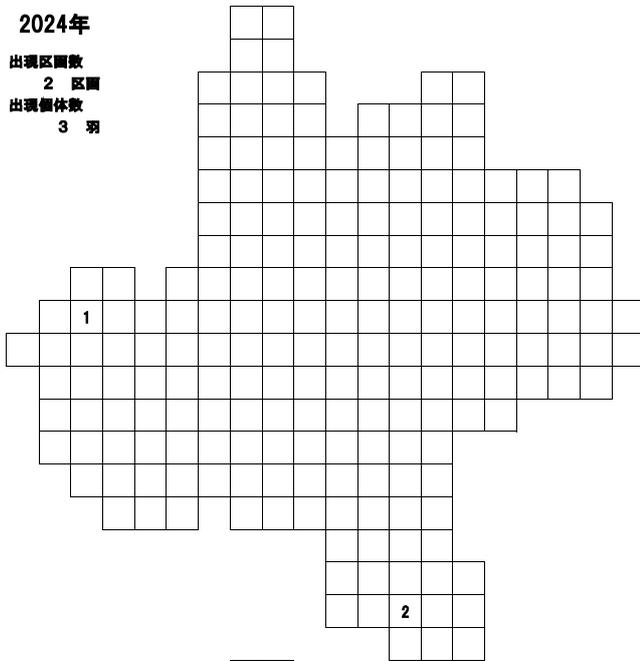
日本では夏鳥として渡来し、山地（標高700 m以上）の落葉広葉樹林、針葉樹林に棲息して繁殖する。

本種が市域のような低標高の森林で繁殖することは考えにくい。1980年に狭山丘陵で記録された例もあるが、移動時期の通過で、14年の記録もそれに当たると思われる。しかし、数少ない貴重な記録である。

通過鳥系として区分。

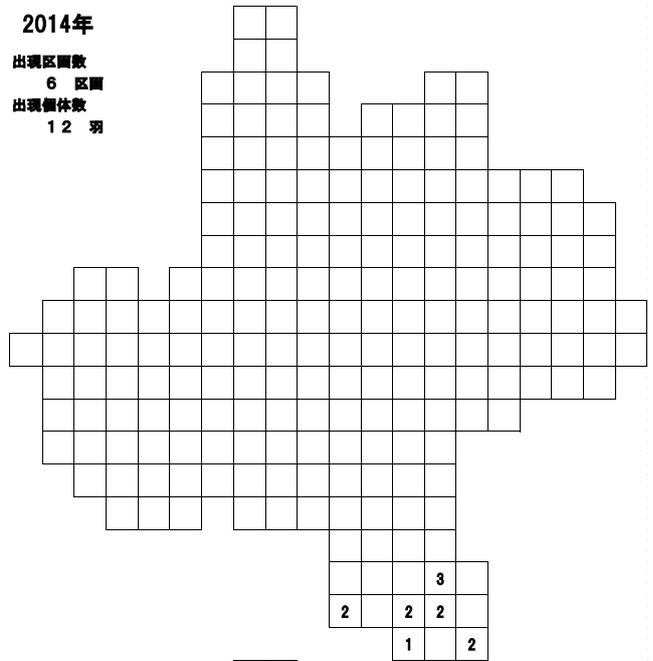
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



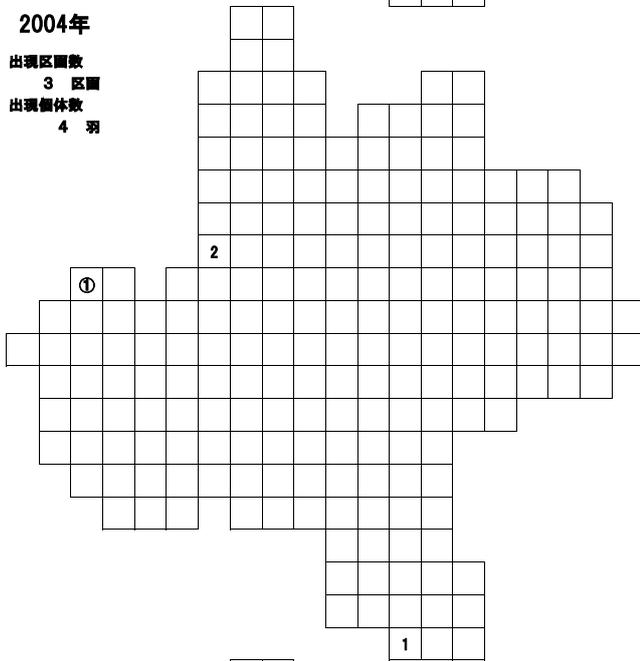
2014年

出現区画数  
6 区画  
出現個体数  
12 羽



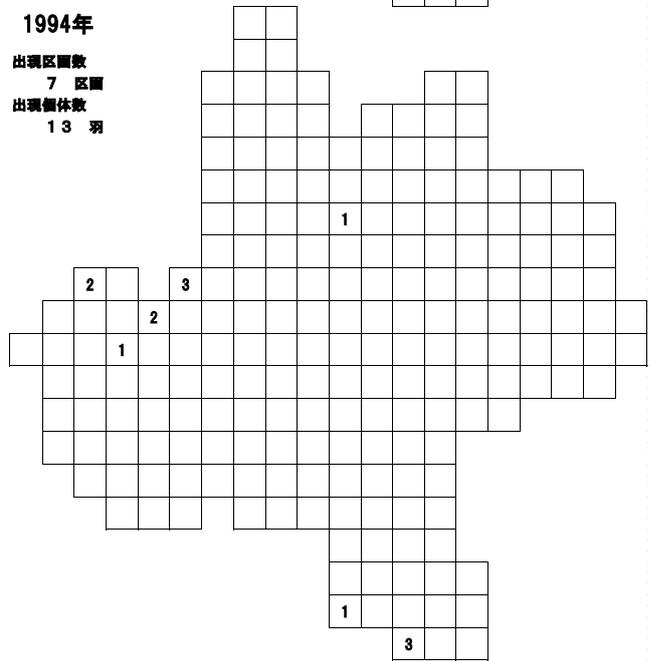
2004年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
4 羽



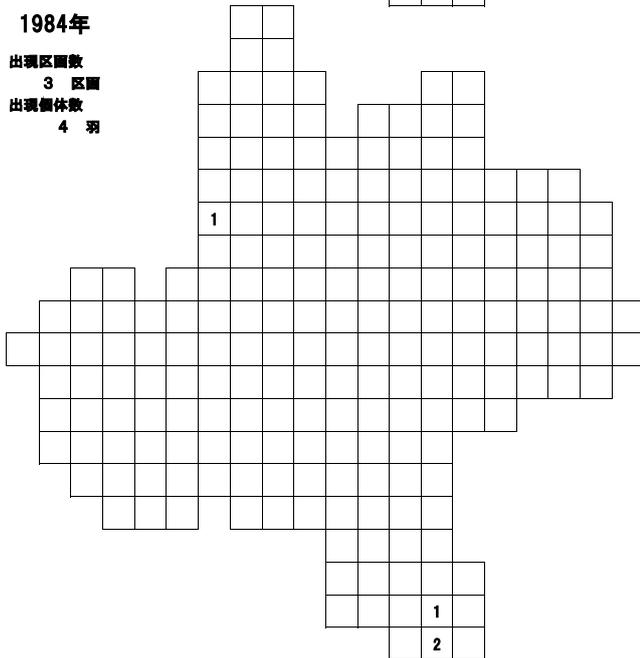
1994年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
13 羽



1984年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
4 羽



### 69. クロツグミ *Turdus cardis*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	4	13	4	12	3
出現区画数	3	7	3	6	2
出現一区画当たりの平均個体数	1.3	1.9	1.3	2.0	1.5

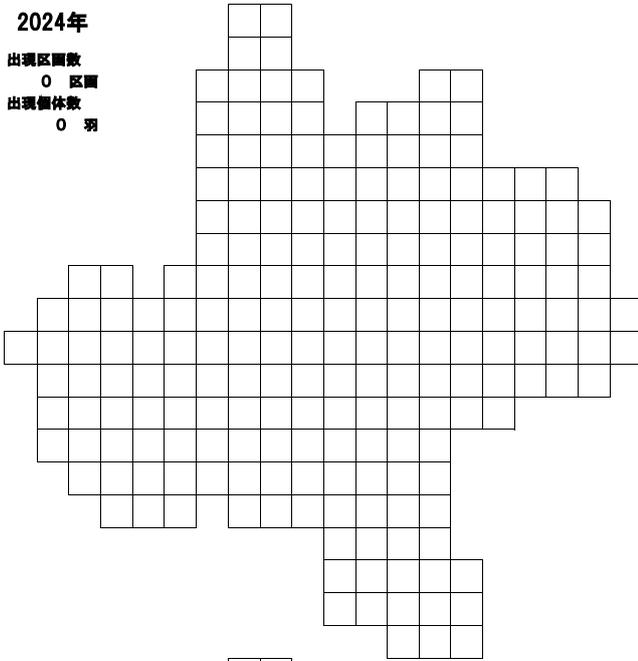
24年は2区画で3羽を記録した。

総個体数、他2項目揃って調査年毎に増減を繰り返している。その原因は不明である。

本種は、1970年代から夏にも少数が確認されており、1980年に下藤沢で繁殖が確認されている。雑木林が伐採されず、階層構造が発達した落葉広葉樹林が育ち、棲息環境が増えたと考えられるが、増加の気配はない。本種と同じ森林性のキビタキは、90年代から増加し始め、24年には本種の10倍以上の数に増えている。この違いは何によるものか、見極めたい。夏鳥系として区分。※No.72キビタキ

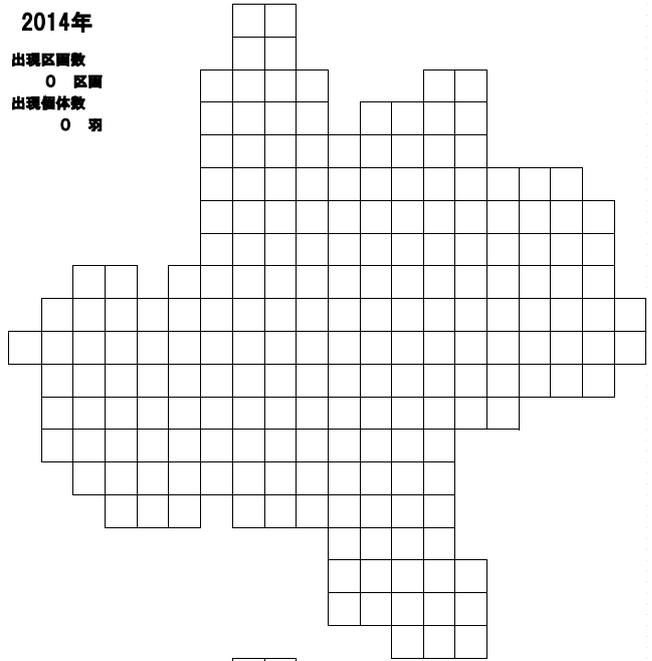
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



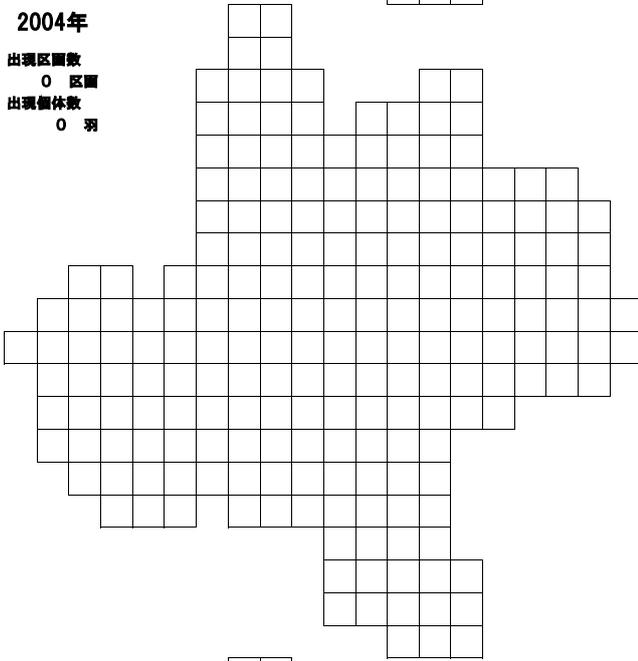
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



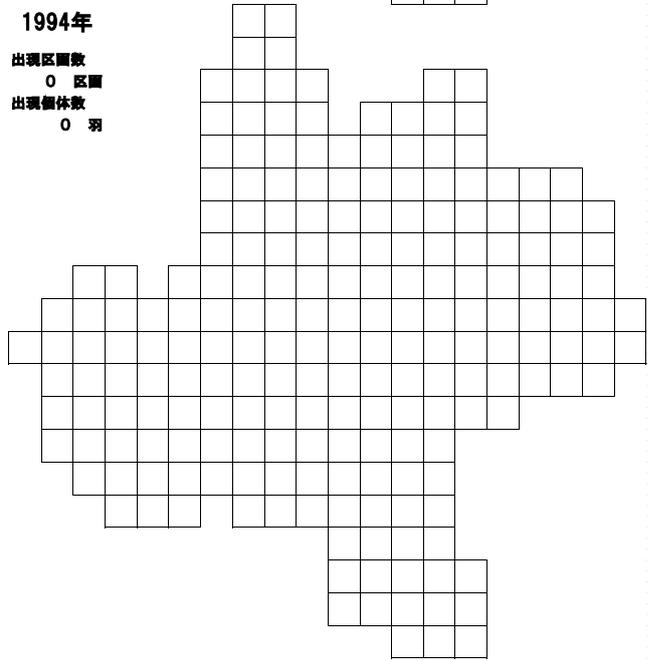
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



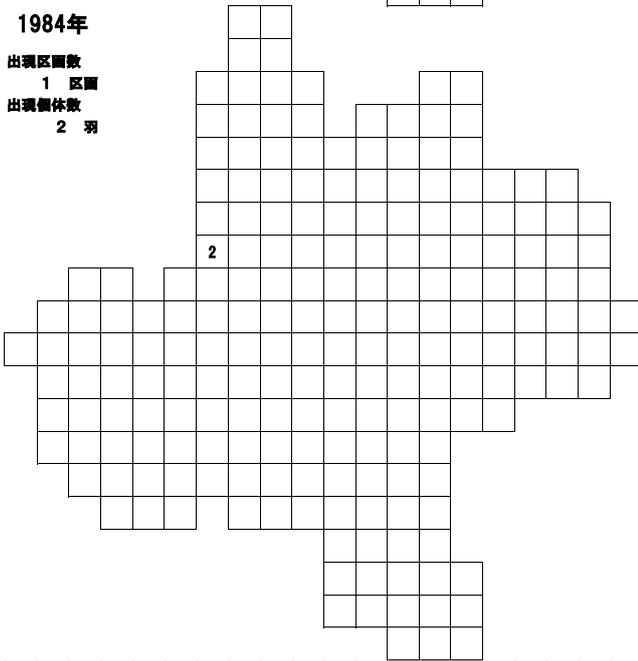
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



### 70. コサメビタキ *Muscicapa dauurica*

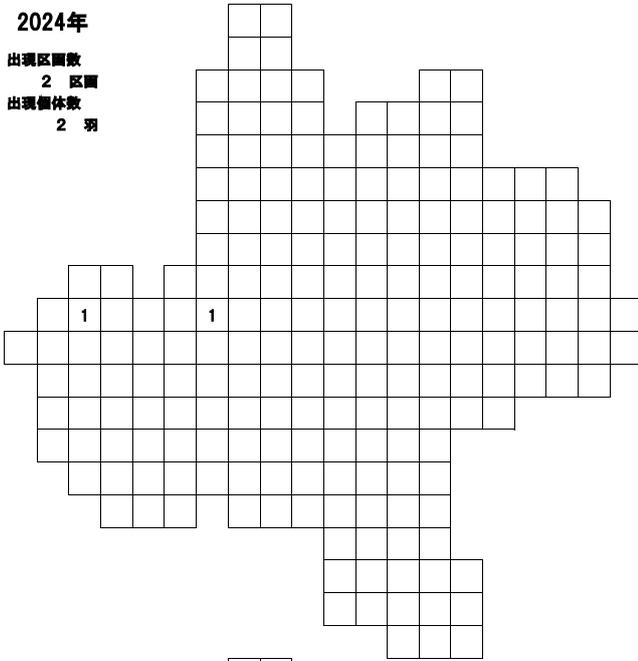
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	0	0	0
出現区画数	1	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	—	—	—	—

84年に記録したが、以降24年も無い。  
 低山の明るい林で繁殖する本種の減少は、雑木林が長い間放置され鬱蒼とした暗い森林に遷移し、棲息環境がなくなったためと思われる。全国的にも減少している。

狭山丘陵では1970年、1977、1979年に繁殖を確認している。その後、1985年に造巢中を記録したのを最後に、本種の繁殖に関する情報は無い。1970年代は個体数は少ないながら普通に見られた鳥だったが、1980年代以降は春・秋の渡り時期にしか見られない稀な鳥になっている。夏鳥系として区分。

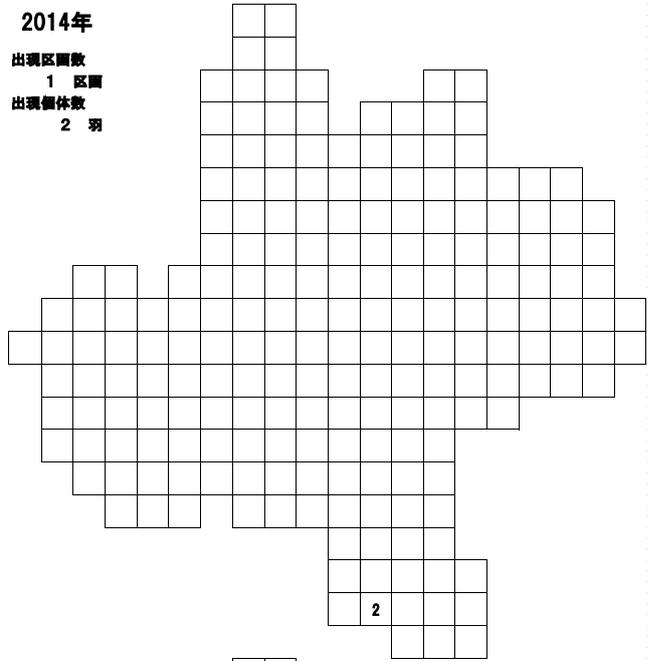
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



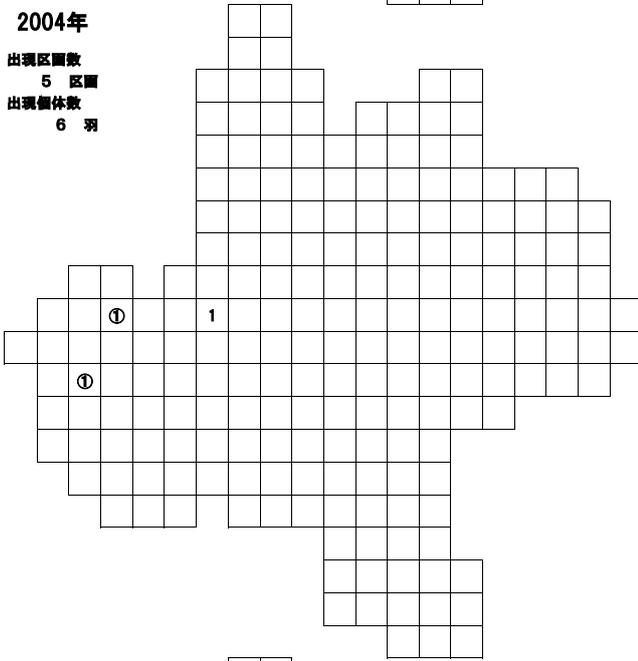
2014年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



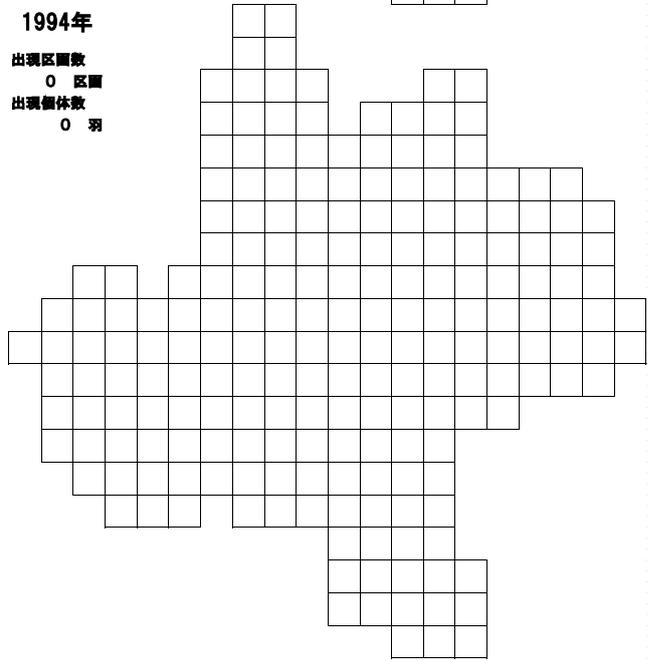
2004年

出現区画数  
5 区画  
出現個体数  
6 羽



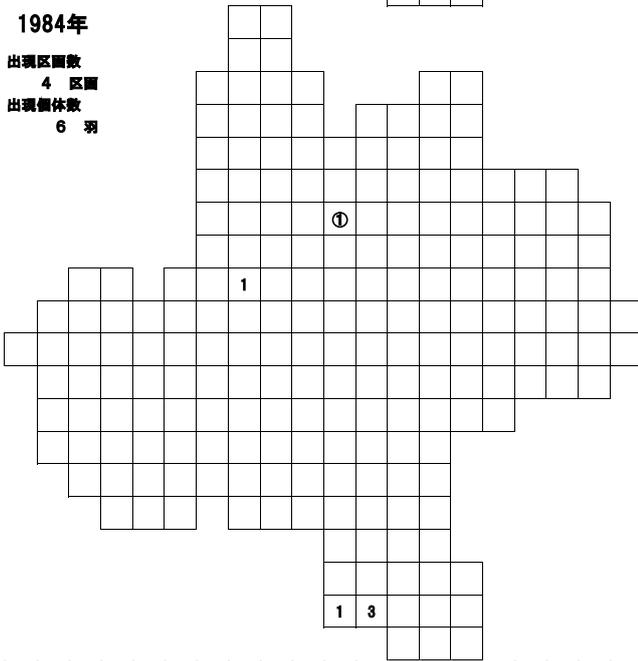
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
6 羽



### 71. オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	6	0	6	2	2
出現区画数	4	0	5	1	2
出現一区画当たりの平均個体数	1.5	—	1.2	2.0	1.0

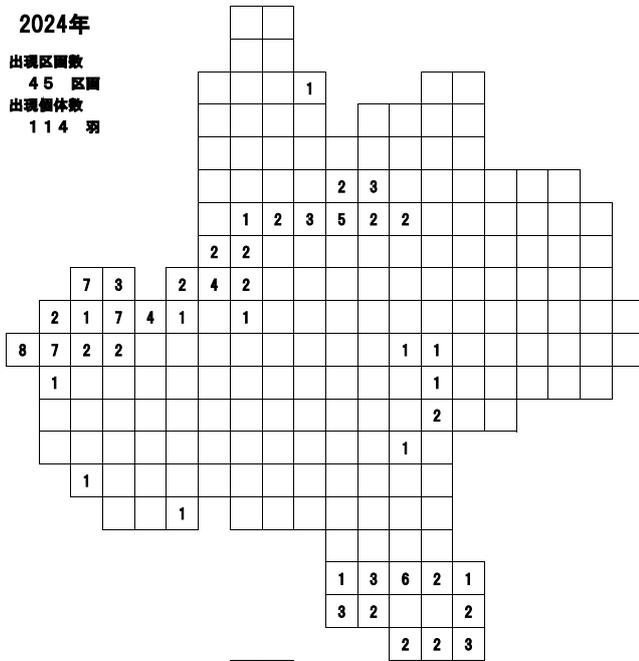
24年は2区画で2羽を記録した。

本種は標高250m以上の低山～山地の森林で繁殖するとされているが、狭山丘陵では1983年に巢立ち雛が確認され、狭山市でも1978年に営巣例がある。加治丘陵自然環境調査報告書(1999年)では「奥武蔵からの接続丘陵でオオルリが好む高低差が大きい溪谷的景観を持ち、繁殖期間中数組が継続して観察され営巣の可能性が高い」と報告している。

今後も両丘陵とも繁殖の可能性はあり、毎年春には囀りを聞けるので、継続した観察をしていく事が望ましい。夏鳥系として区分

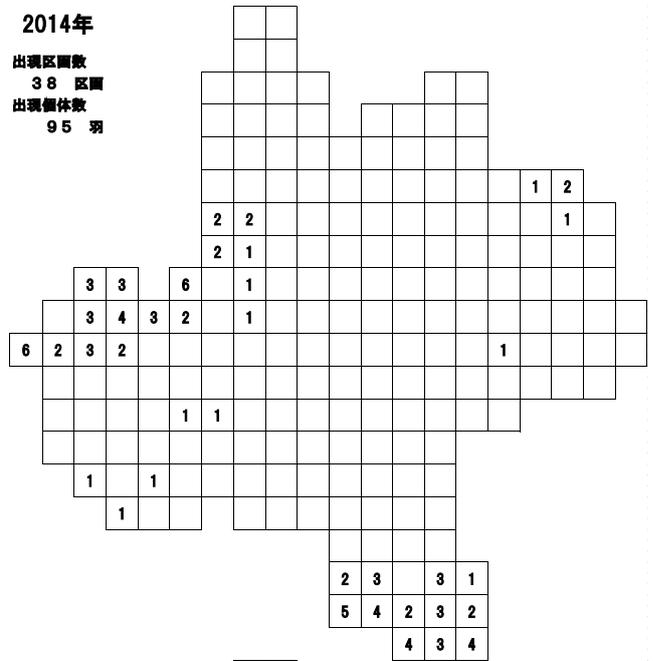
2024年

出現区画数  
45 区画  
出現個体数  
114 羽



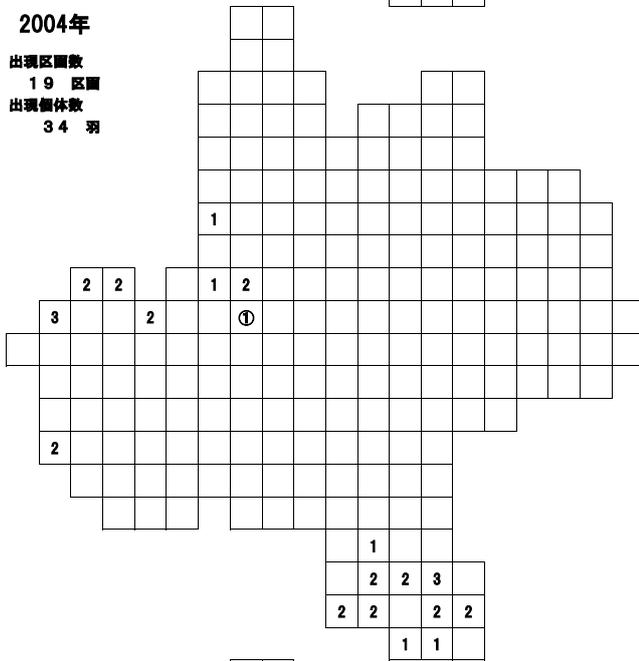
2014年

出現区画数  
38 区画  
出現個体数  
95 羽



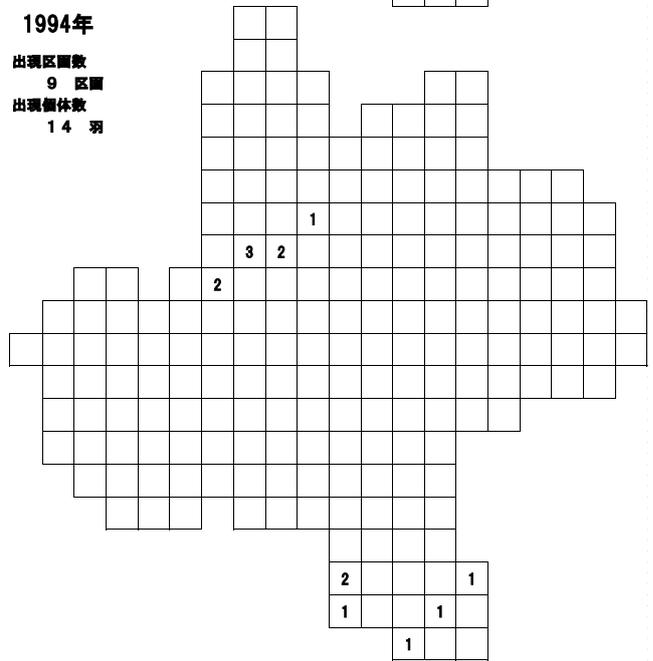
2004年

出現区画数  
19 区画  
出現個体数  
34 羽



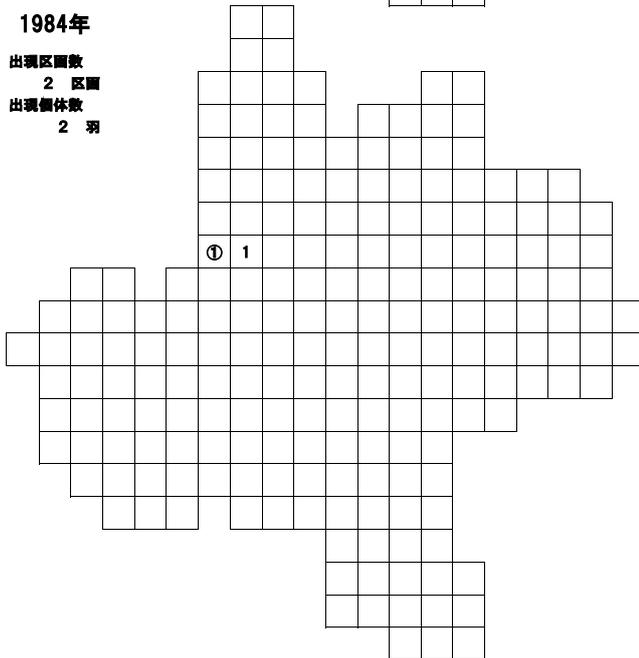
1994年

出現区画数  
9 区画  
出現個体数  
14 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



## 72. キビタキ *Ficedula narcissina*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	14	34	95	114
出現区画数	2	9	19	38	45
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	1.6	1.8	2.5	2.5

24年は45区画で114羽を記録した。

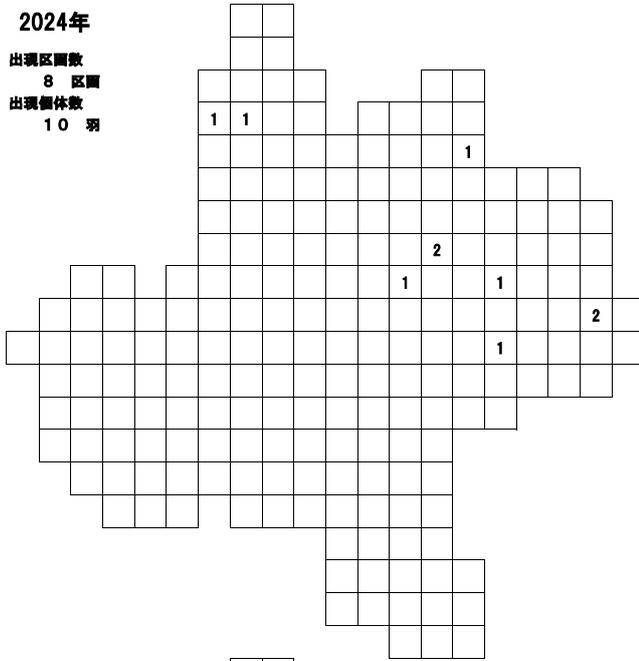
総個体数、出現区画数は84年から現在も増加中であるが、一区画当たりの平均個体数は、14年に2.5羽となり24年も同等となった。

1970年代後半から少数が夏にも見られ、1990年代には増加傾向が明確になった。主に加治丘陵・狭山丘陵で分布の拡大と棲息密度を上げ、個体数増加を図ってきた。現状の棲息密度は上限と思われ、個体数が今後も増加するならば、平地林への分布拡大が本格的になることが予想される。

夏鳥系として区分。※69クロツグミ参照

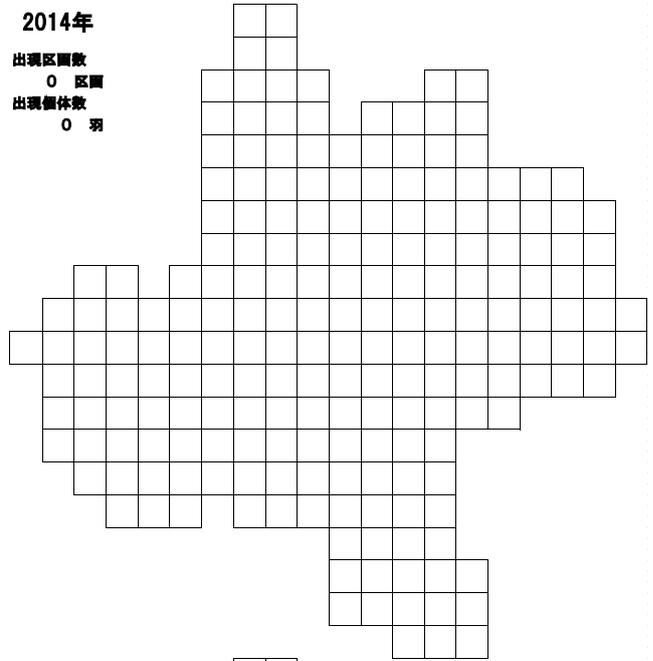
2024年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
10 羽



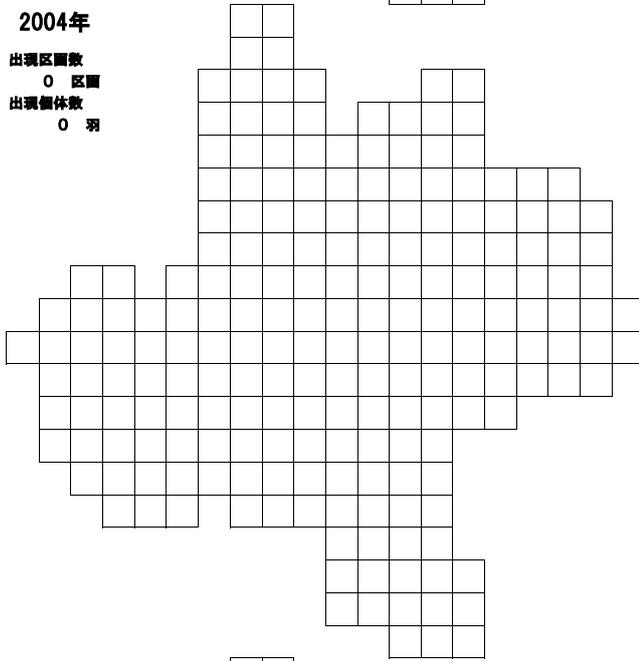
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



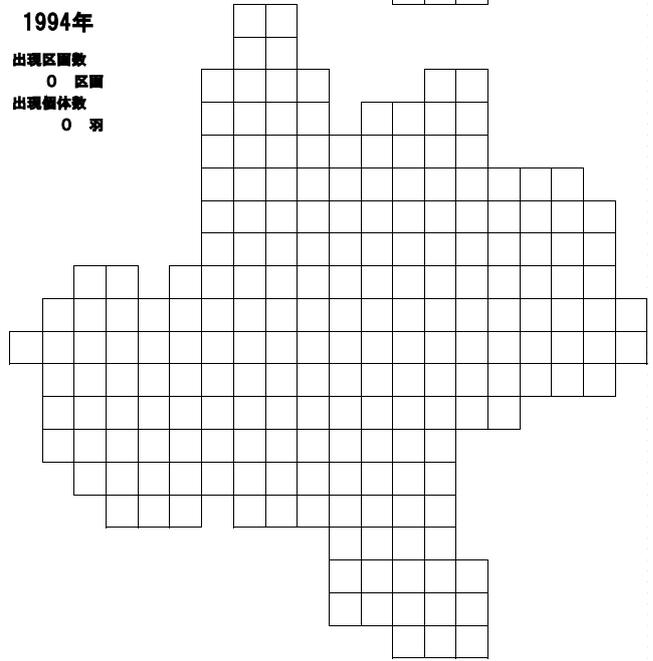
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



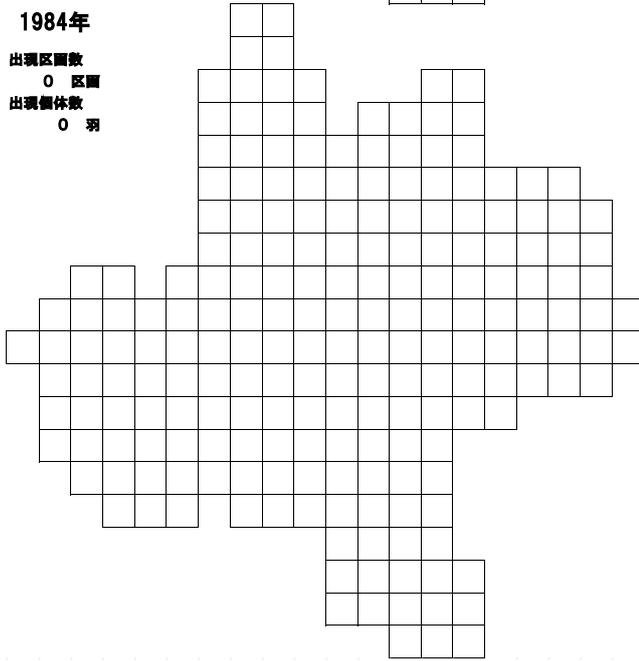
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 73. イソヒヨドリ *Monticola solitarius*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	0	10
出現区画数	0	0	0	0	8
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	1.3

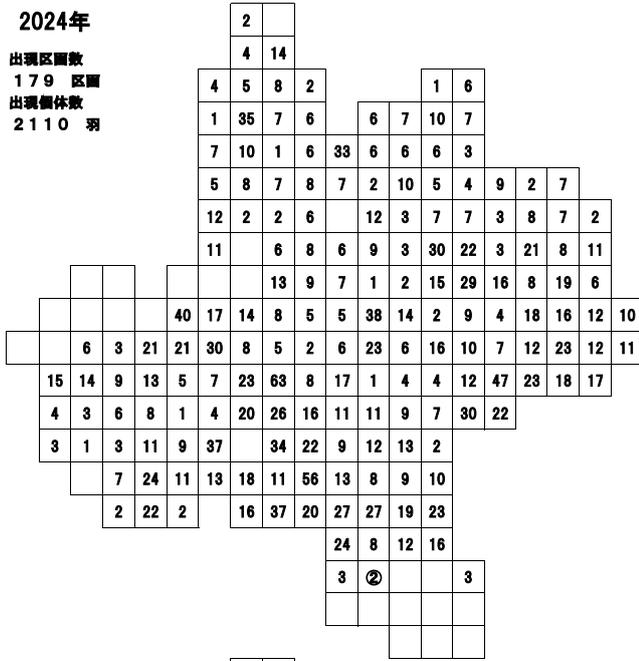
24年に初めて8区画で10羽を記録した。

本種は1990年代まで、海岸の崖地に棲息するのが普通であった。八王子市では1993年に初めて現れ、2009年から駅周辺などで繁殖、20年は46巣確認されたという。現在は近畿から関東を中心に内陸に進出し増えている。

入間市では全国に先駆け、1984年10月に豊岡の高層住宅に現れ、翌85年6月に4羽の雛を育て繁殖するイソヒヨドリを確認している。その後、本市及び近隣での記録は無く、2010年頃から観察や繁殖の報告が聞かれるようになった。留鳥系として区分。

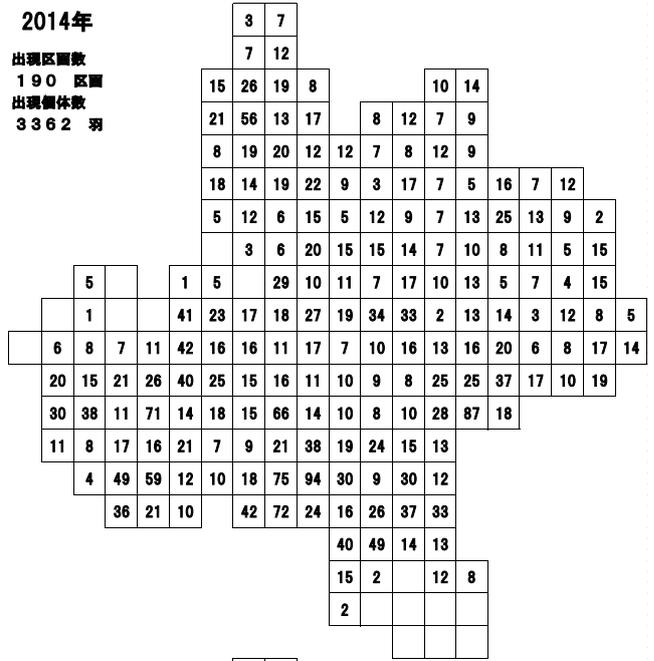
2024年

出現区画数  
179 区画  
出現個体数  
2110 羽



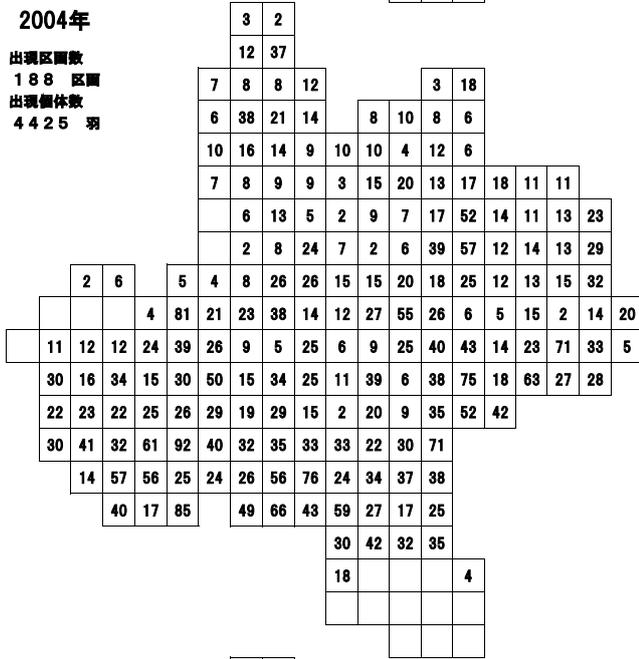
2014年

出現区画数  
190 区画  
出現個体数  
3362 羽



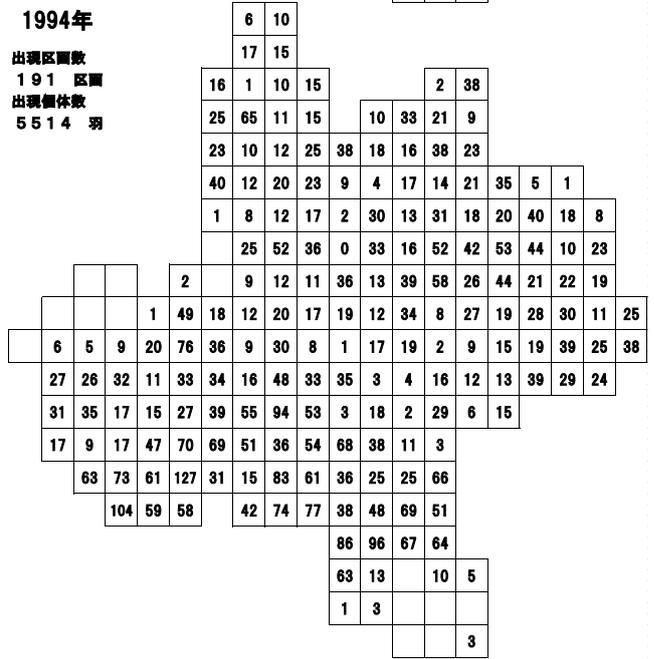
2004年

出現区画数  
188 区画  
出現個体数  
4425 羽



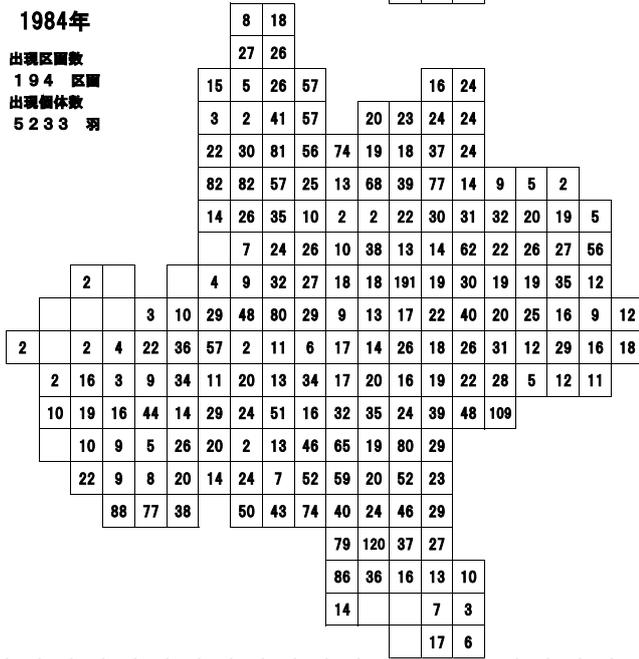
1994年

出現区画数  
191 区画  
出現個体数  
5514 羽



1984年

出現区画数  
194 区画  
出現個体数  
5233 羽



74. スズメ *Passer montanus*

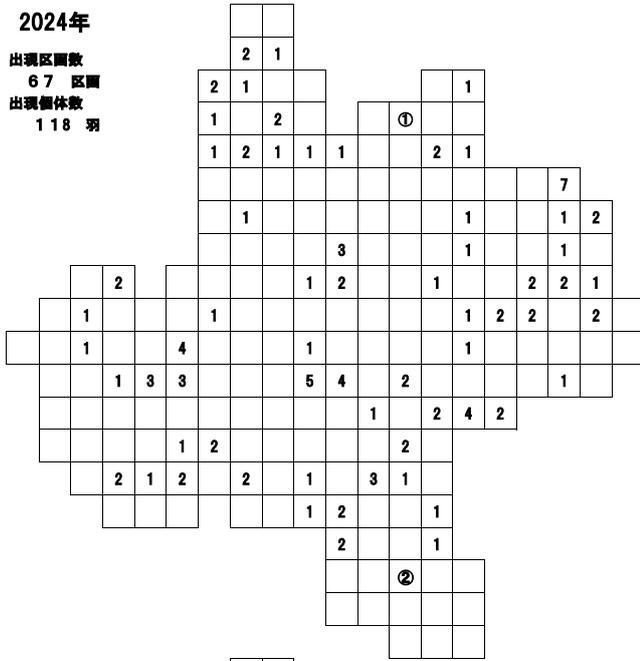
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	5,233	5,514	4,425	3,362	2,110
出現区画数	194	191	188	190	179
出現一区画当たりの平均個体数	27.0	28.9	23.5	17.7	11.8

24年は179区画で2,110羽を記録した。市域で区画数・個体数ともに最も多い鳥。総個体数は94年を頂点に以降10年1,000羽(年100羽)単位で減少を続けている。出現区画数に大きな変動はなく、一区画当たりの平均個体数が総個体数に準じた変動のため、総個体数減少は、平均個体数の減少(生息密度の減少)による影響が強かったものと考えられる。本種は丘陵など林には棲息せず、人が関わる農耕地や住宅地に棲息し繁栄してきた。長年営巣場所とした住宅の構造が変化し、全国的に減少している。留鳥系として区分。



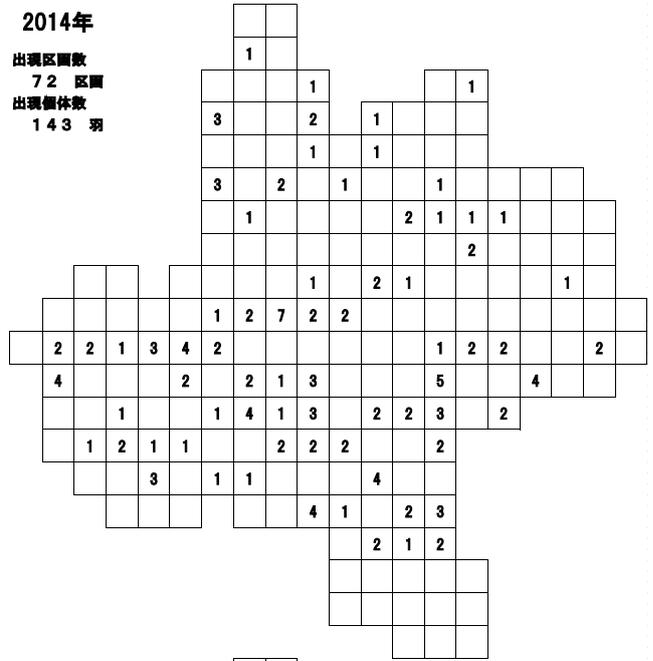
2024年

出現区画数  
67 区画  
出現個体数  
118 羽



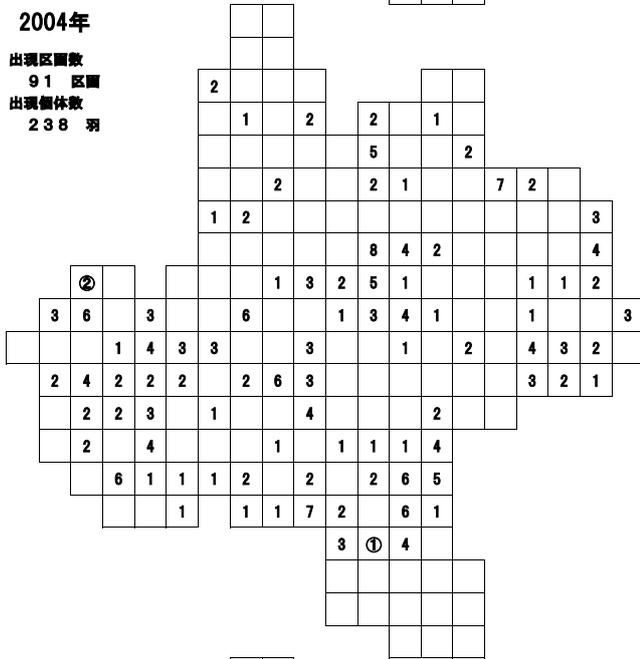
2014年

出現区画数  
72 区画  
出現個体数  
143 羽



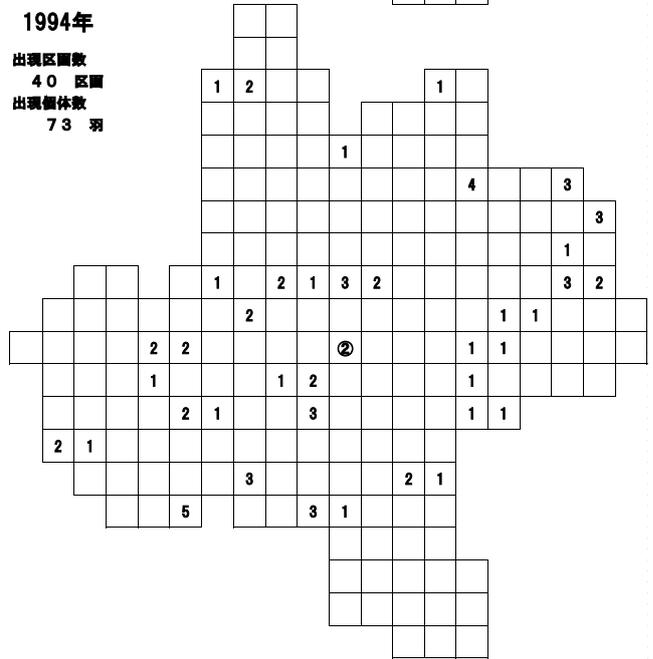
2004年

出現区画数  
91 区画  
出現個体数  
238 羽



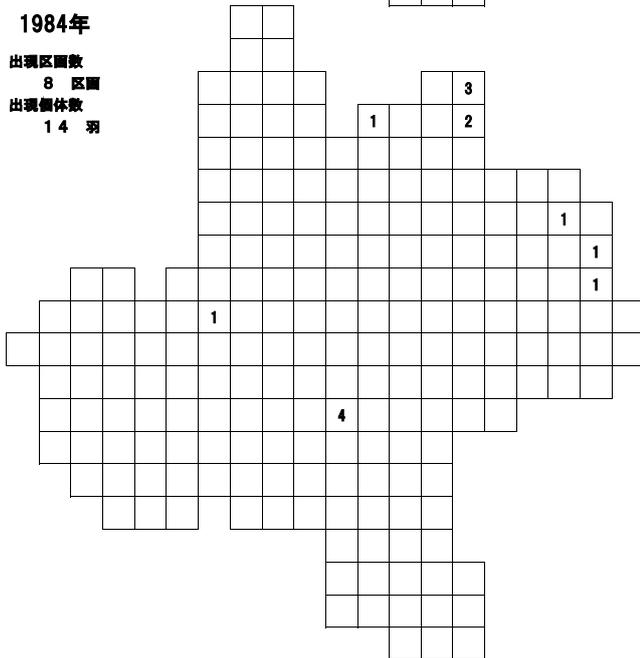
1994年

出現区画数  
40 区画  
出現個体数  
73 羽



1984年

出現区画数  
8 区画  
出現個体数  
14 羽



76. ハクセキレイ *Motacilla alba*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	14	73	238	143	118
出現区画数	8	40	91	72	67
出現一区画当たりの平均個体数	1.8	1.8	2.6	2.0	1.8

24年は67区画で118羽を記録した。  
市域では、1970年代は冬鳥として渡来、1980年代前半から少数が繁殖期にみられ、以降は留鳥として定着した鳥である。

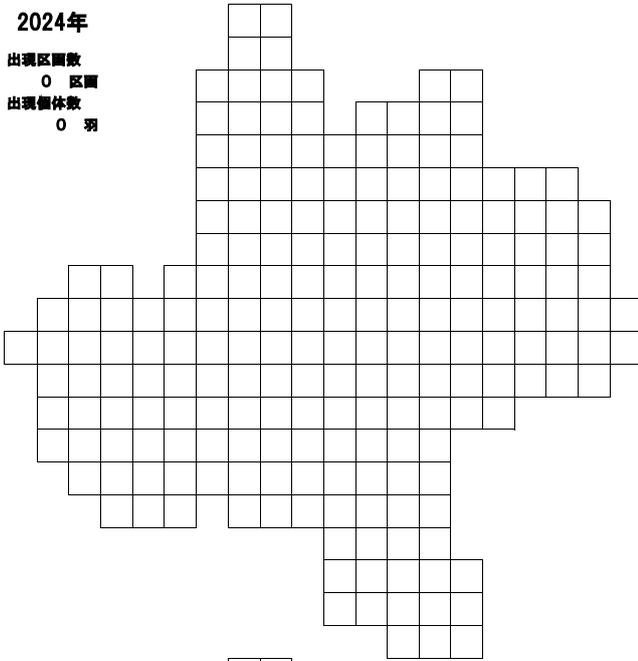
本市で繁殖する3種のセキレイは、水系を主な生息地としているが、本種は農地、工場、住宅地、駅など水系から離れた場所にも進出し、他の2種を凌ぐ勢いで増加してきた。冬は人通りの多い街路樹に集団囀をつくるほどだが、24年は減少している。

留鳥系として区分。※No.75キセキレイ、No.77セグロセキレイ参照



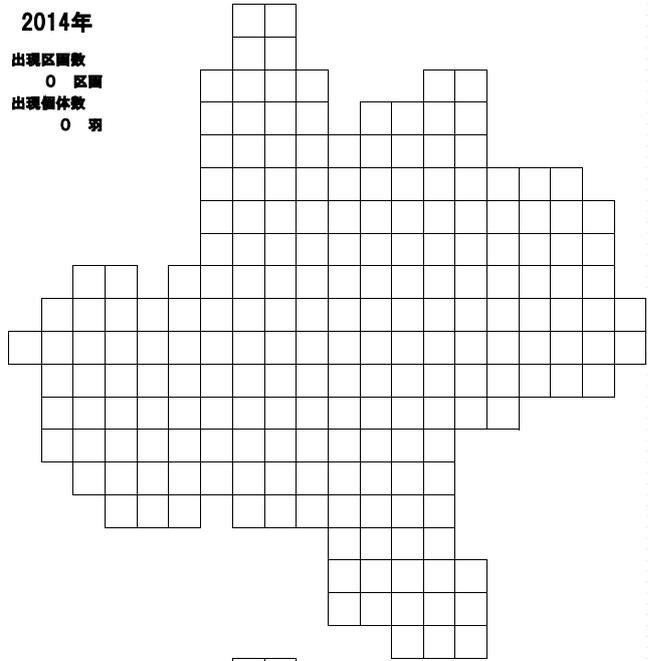
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



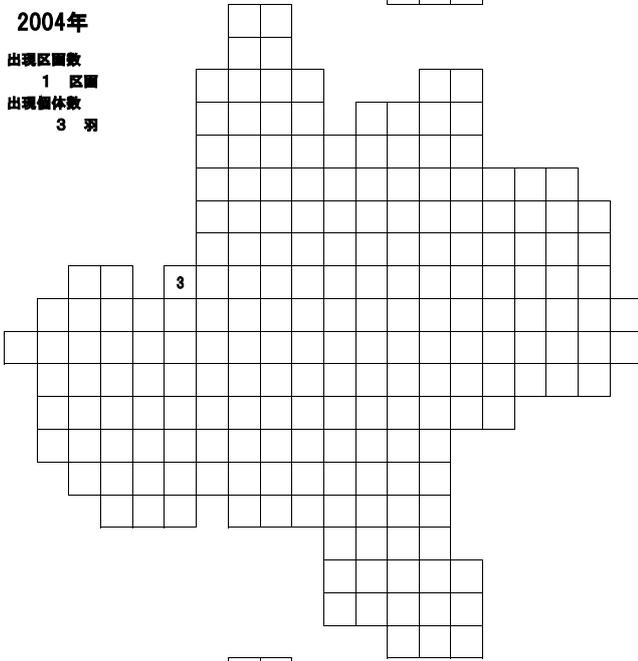
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



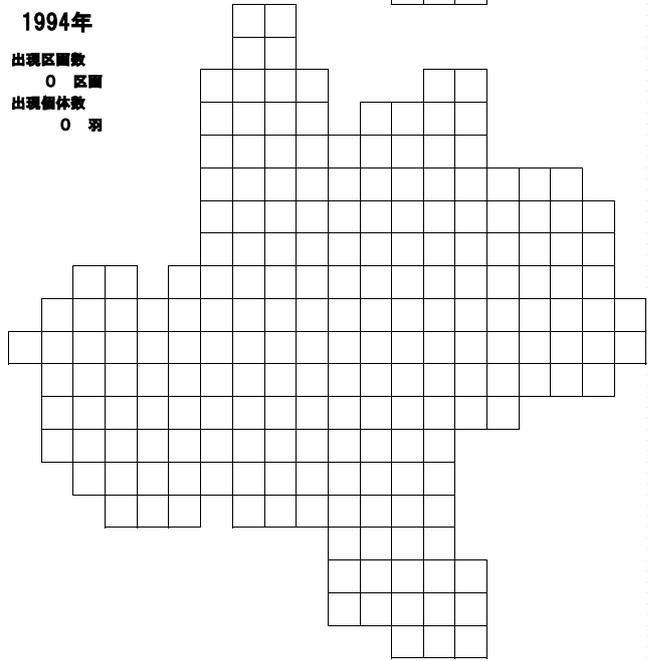
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
3 羽



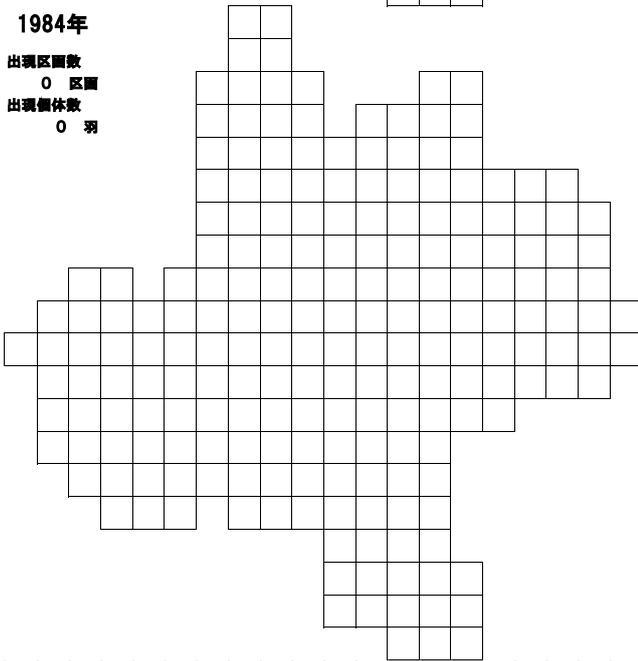
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



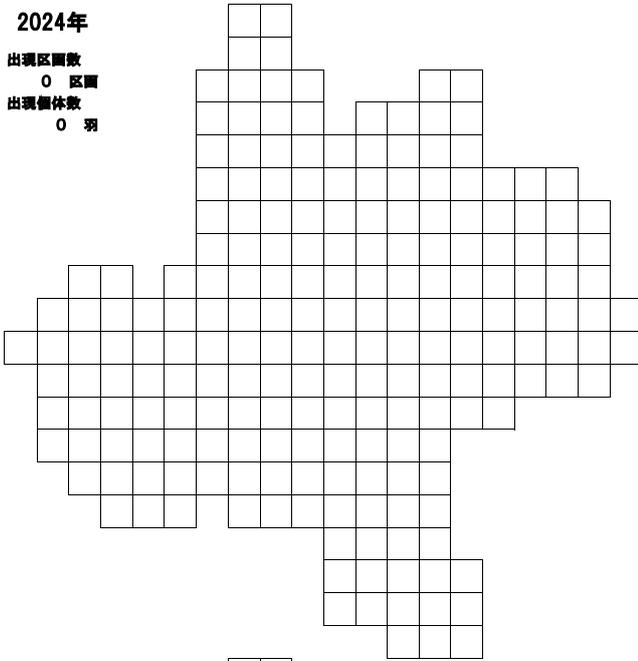
### 78. シメ *Coccothraustes coccothraustes*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	3	0	0
出現区画数	0	0	1	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	3.0	—	—

04年だけ記録され、他24年も記録は無い。  
 本種は、北海道と本州の中部地方以北で局地的に繁殖している。  
 市域では、10月中旬～5月下旬に見られる。丘陵地以外でも林のある所では見られるが、単独のことが多いために見つけにくい。渡来した10月～11月と渡去する4月～5月には群れで見られることもある。  
 関東地方では繁殖しておらず、稀に6月上旬まで滞在するものもいるので、04年の記録は移動途中のものと思われる。  
 通過鳥系として区分。

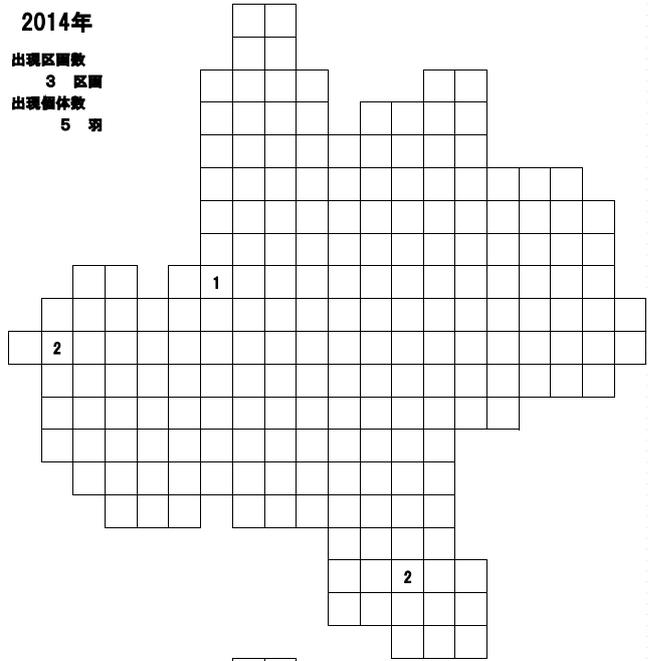
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



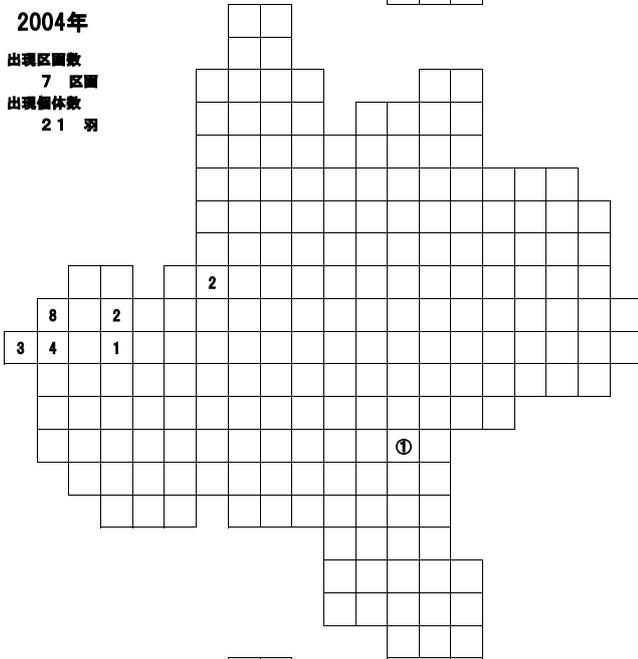
2014年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
5 羽



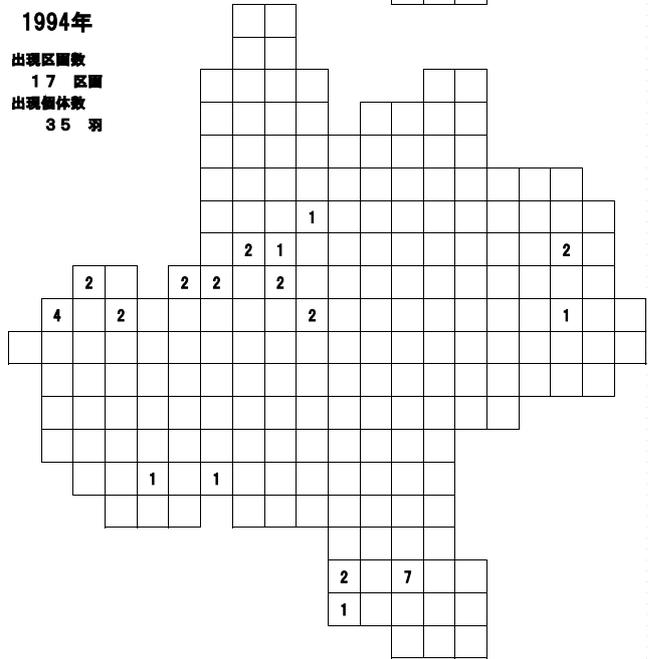
2004年

出現区画数  
7 区画  
出現個体数  
21 羽



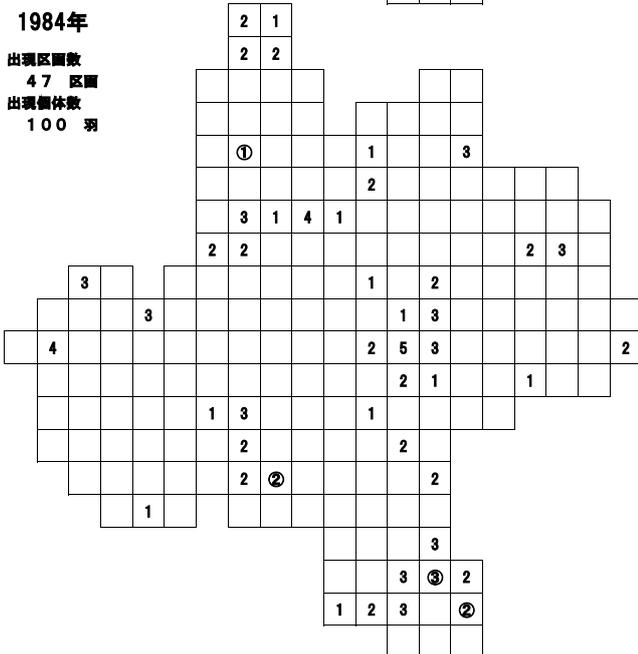
1994年

出現区画数  
17 区画  
出現個体数  
35 羽



1984年

出現区画数  
47 区画  
出現個体数  
100 羽



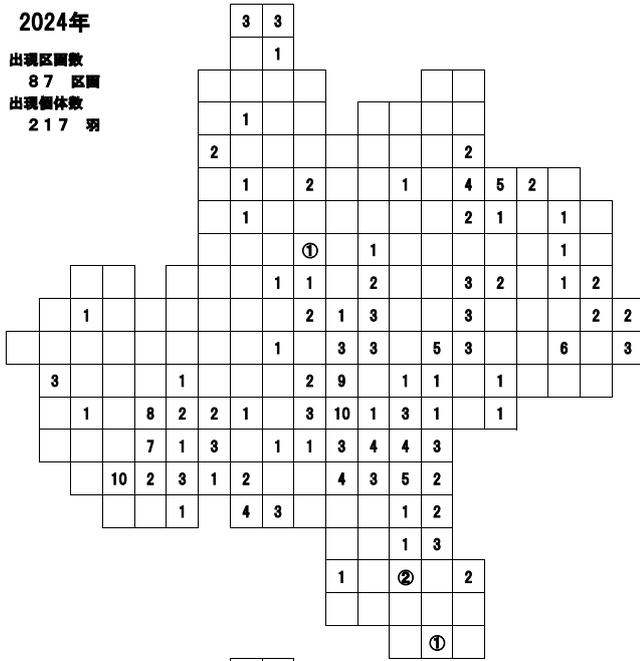
79. イカル *Epohona personata*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	100	35	21	5	0
出現区画数	47	17	7	3	0
出現一区画当たりの平均個体数	2.1	2.1	3.0	1.7	—

84年から減少を続け、24年は記録が無い。  
84年には加治、狭山丘陵のほか、平地林でも記録され繁殖していた。しかし、94年は平地林からほとんど消え、04年、14年は丘陵地のみと分布域が縮小してきた。  
94年以降の減少は、80年代から90年代にかけての松枯れ被害の影響かと思えたが、東京都鳥類繁殖分布調査(2016-2021)によると、本種は山間部で増加傾向と報告しており、本市での減少は分布域が山間部(西方向)へ移動してきた結果とも考えられる。  
留鳥系として区分。

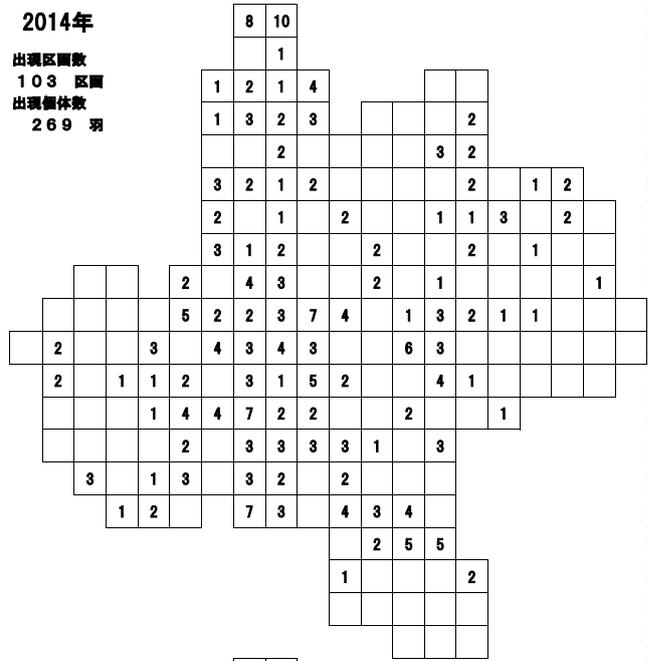
2024年

出現区画数  
87 区画  
出現個体数  
217 羽



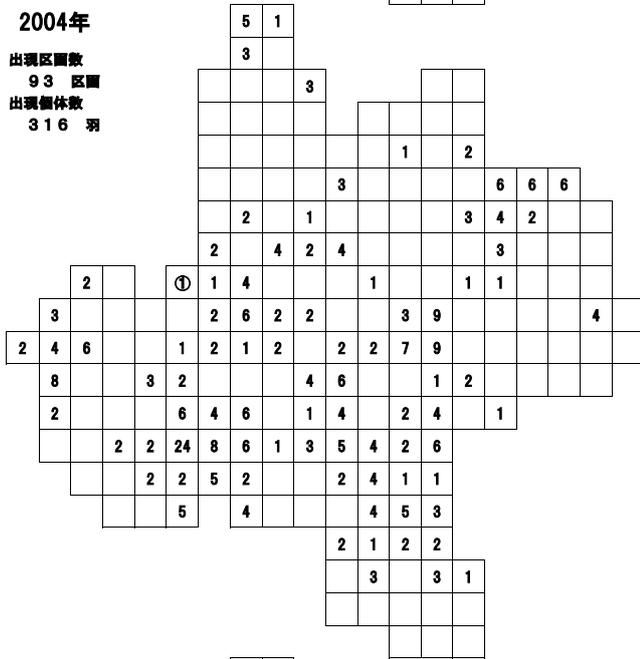
2014年

出現区画数  
103 区画  
出現個体数  
269 羽



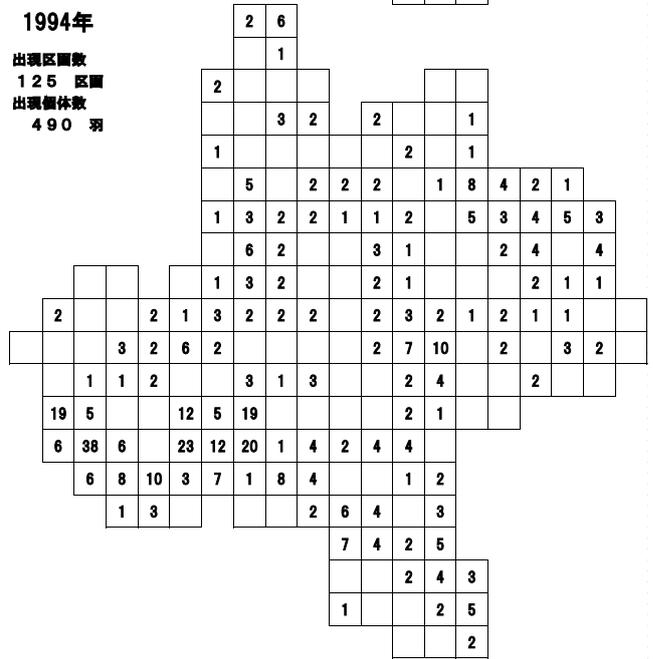
2004年

出現区画数  
93 区画  
出現個体数  
316 羽



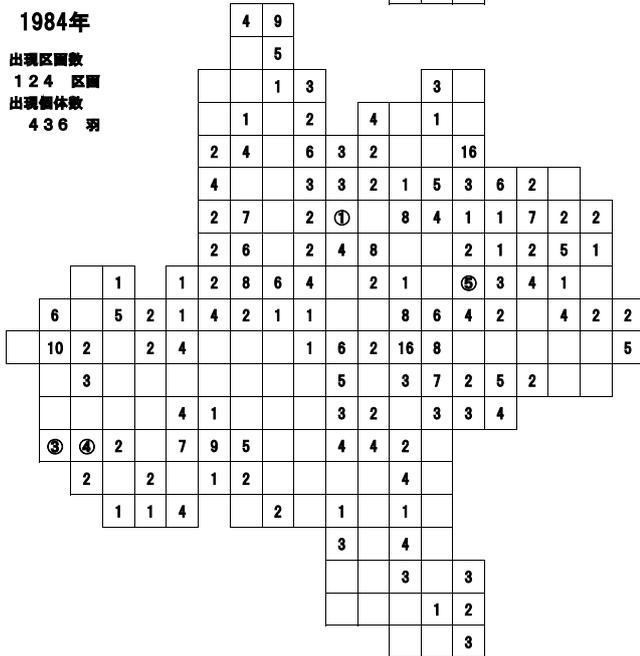
1994年

出現区画数  
125 区画  
出現個体数  
490 羽



1984年

出現区画数  
124 区画  
出現個体数  
436 羽



## 80. カワラヒワ *Chloris sinica*

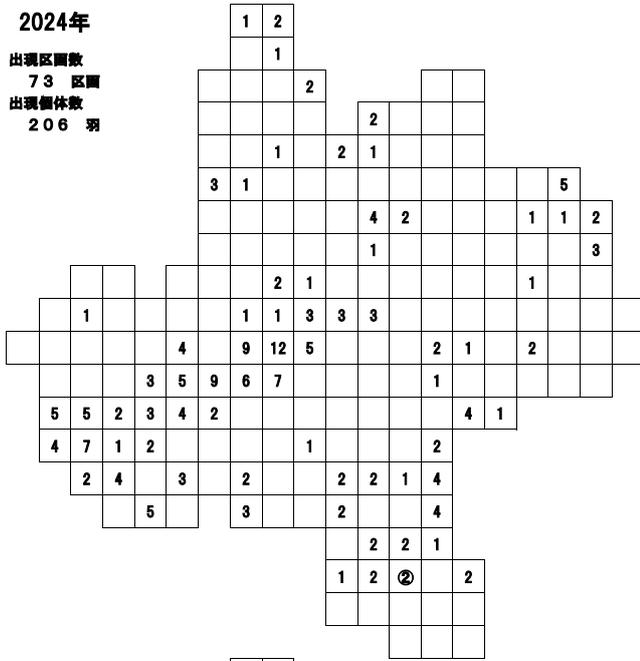
調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	436	490	316	269	217
出現区画数	124	125	93	103	87
出現一区画当たりの平均個体数	3.5	3.9	3.4	2.6	2.5

24年は87区画で217羽を記録した。総個体数、一区画当たりの平均個体数は、94年を頂点に減少を続けている。総個体数は24年には55.7%も減少している。出現区画数は増加と減少を繰り返している。

住宅地・市街地・屋敷林・社寺林・林縁などに棲息し、市域に広く分布している。5回の本調査では出現区画数、個体数ともに毎回8~10位に順位するほど多い鳥で、全国鳥類繁殖分布調査(2016-2020)でも分布の広さは7位に、個体数は8位に順位されている。留鳥系として区分。

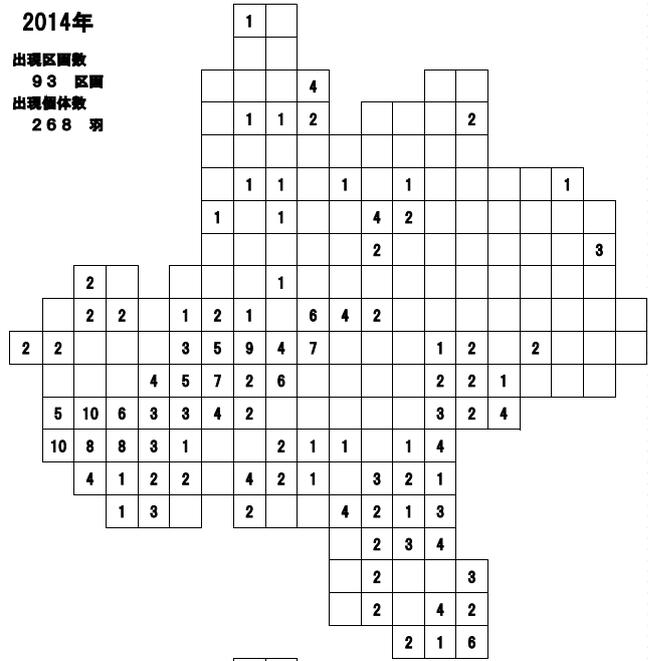
2024年

出現区画数  
73 区画  
出現個体数  
206 羽



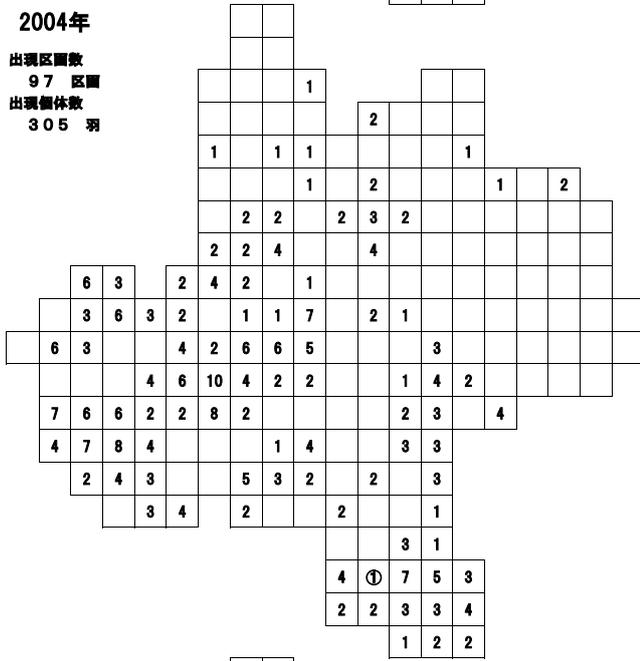
2014年

出現区画数  
93 区画  
出現個体数  
268 羽



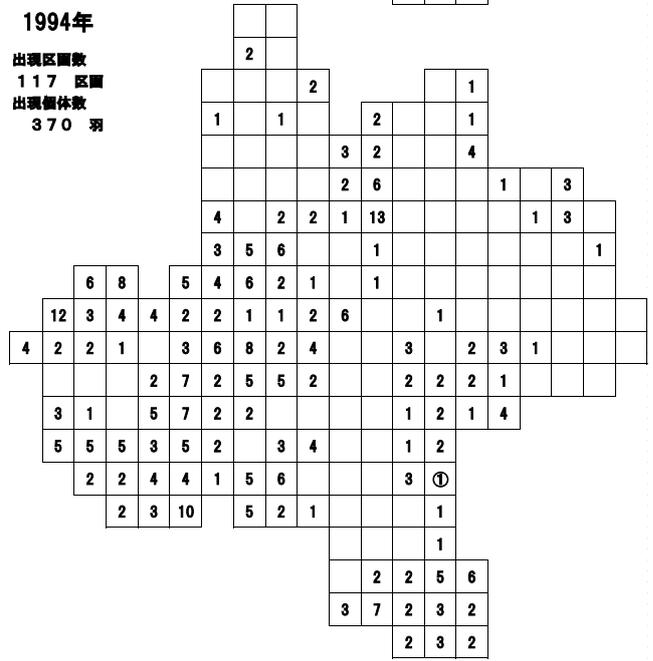
2004年

出現区画数  
97 区画  
出現個体数  
305 羽



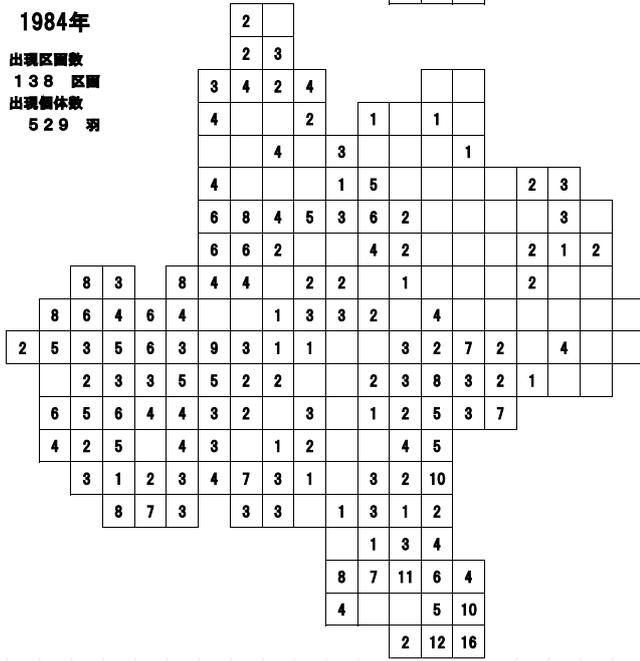
1994年

出現区画数  
117 区画  
出現個体数  
370 羽



1984年

出現区画数  
138 区画  
出現個体数  
529 羽



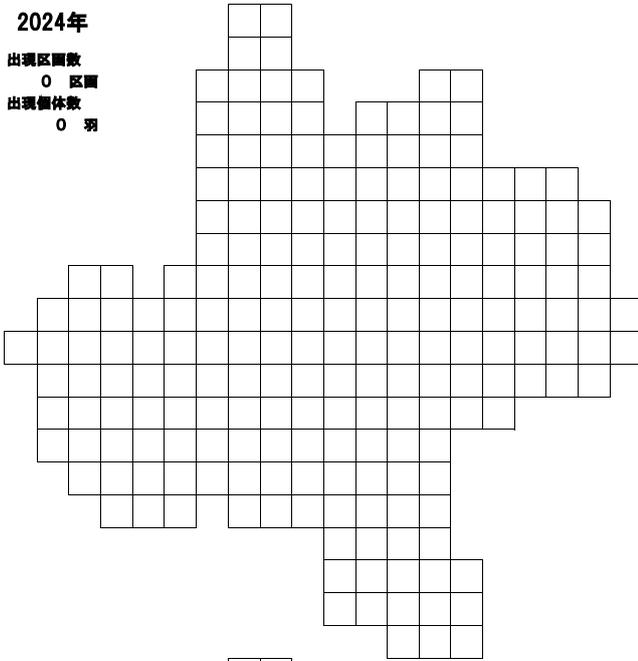
### 81. ホオジロ *Emberiza cioides*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	529	370	305	268	206
出現区画数	138	117	97	93	73
出現一区画当たりの平均個体数	3.8	3.2	3.1	2.9	2.8

24年は73区画で206羽を記録した。総個体数、出現区画数、一区画当たりの平均個体数とも減少が続いており、総個体数は84年に比べ24年では61.1%も減少している。本種は疎林や林縁、茶畑などを好んで棲息してきた。丘陵地は森林化が進み、農地には自動車専用道路が開通（1996年）した。更にはその周辺は工場や倉庫へと変わってきた。残された茶畑も大型茶刈り機で刈られるようになったため、枝が密になって巣作りしにくくなっている。恒久的な生息環境の確保が必要である。留鳥系として区分。

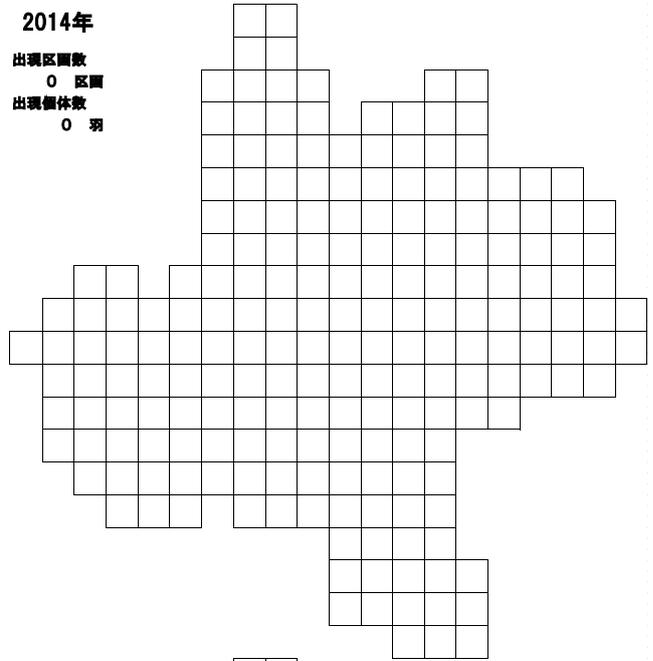
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



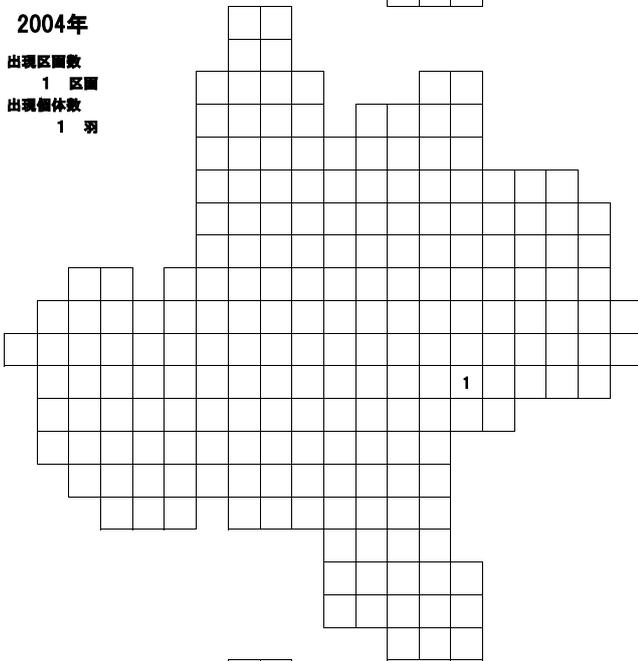
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



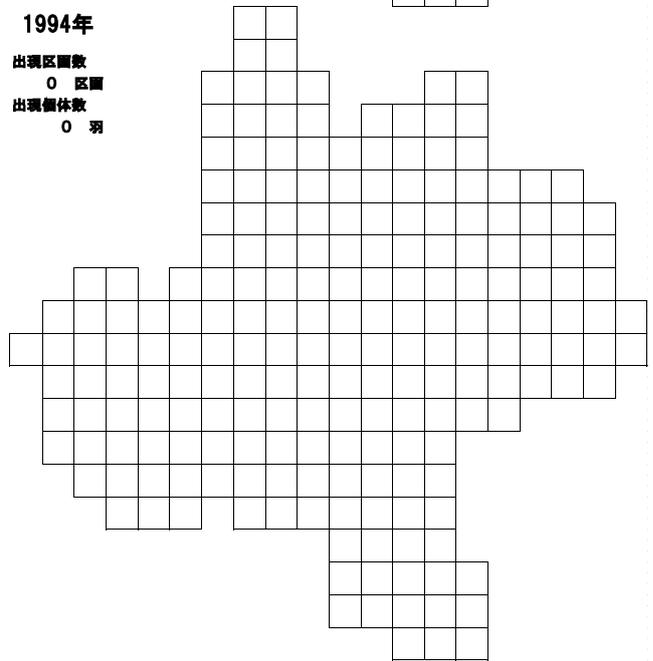
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



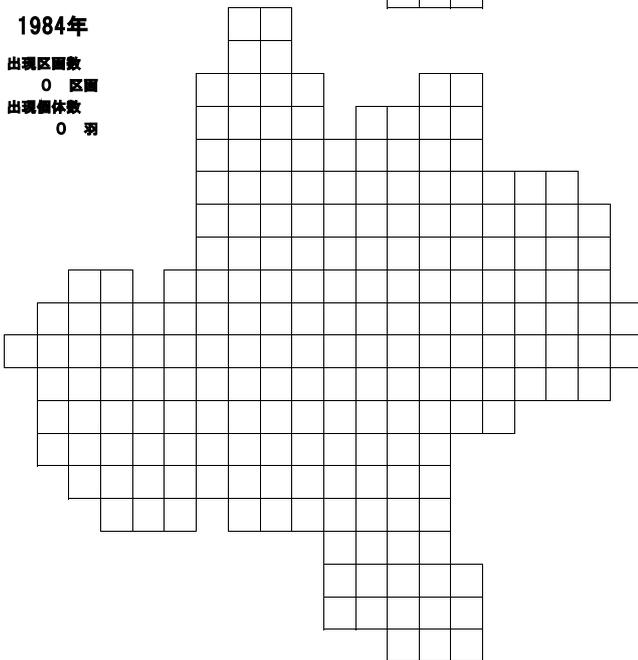
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



## 82. アオジ *Emberiza personata*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	1	0	0
出現区画数	0	0	1	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	1.0	—	—

04年に記録したが、その他24年も記録は無い。

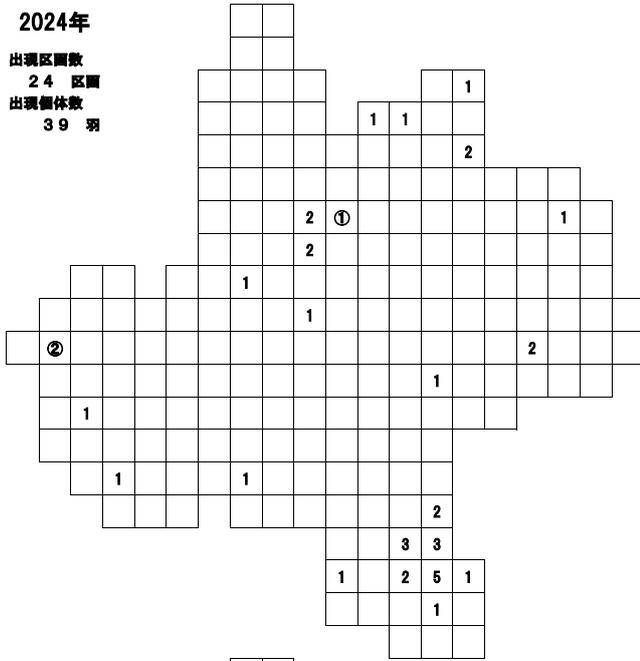
関東地方では標高500m以上の山地で繁殖しており、低標高の市域では繁殖の可能性は無い。

市域では11月に飛来し越冬する。遅くは6月初旬まで見られることがあるため、04年の記録は移動途中のものが記録されたと思われる。

通過鳥として区分。

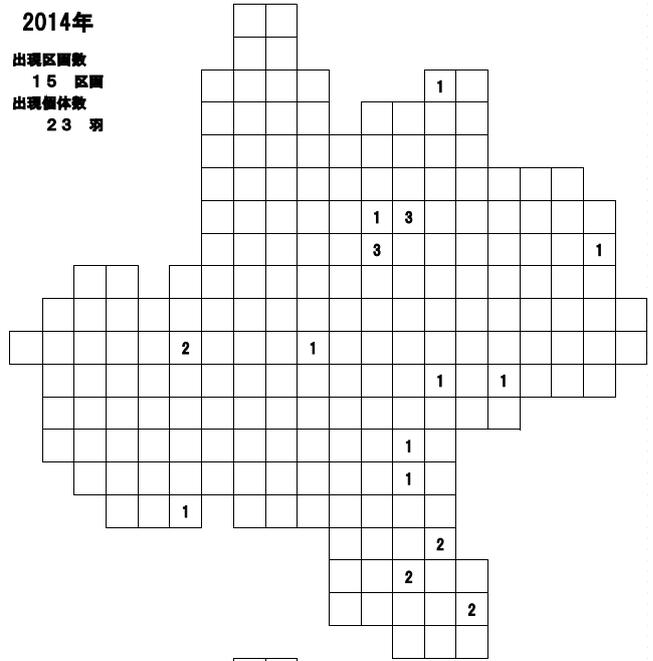
2024年

出現区画数  
24 区画  
出現個体数  
39 羽



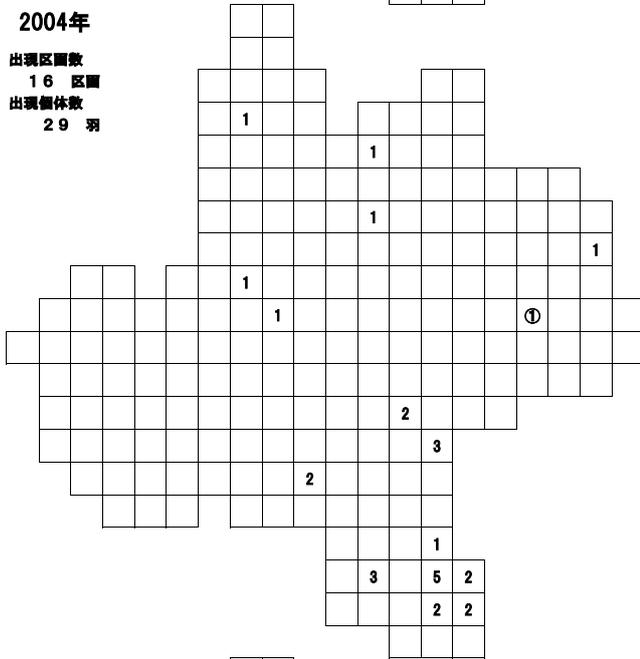
2014年

出現区画数  
15 区画  
出現個体数  
23 羽



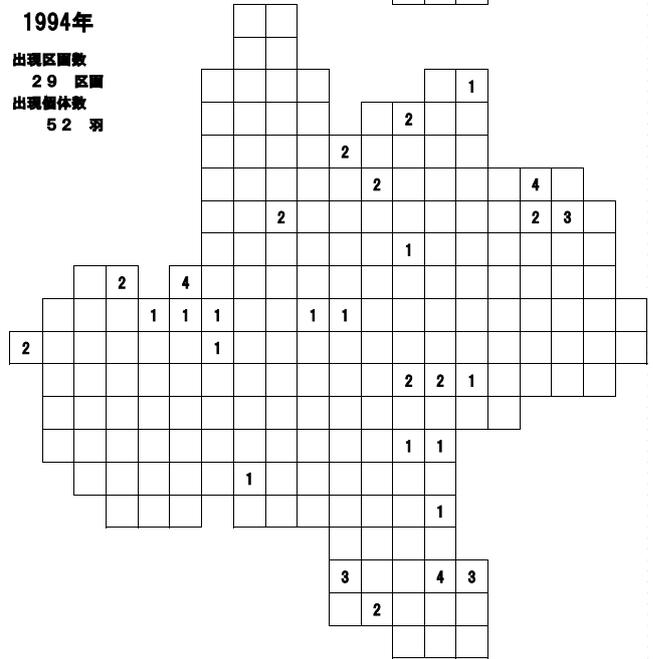
2004年

出現区画数  
16 区画  
出現個体数  
29 羽



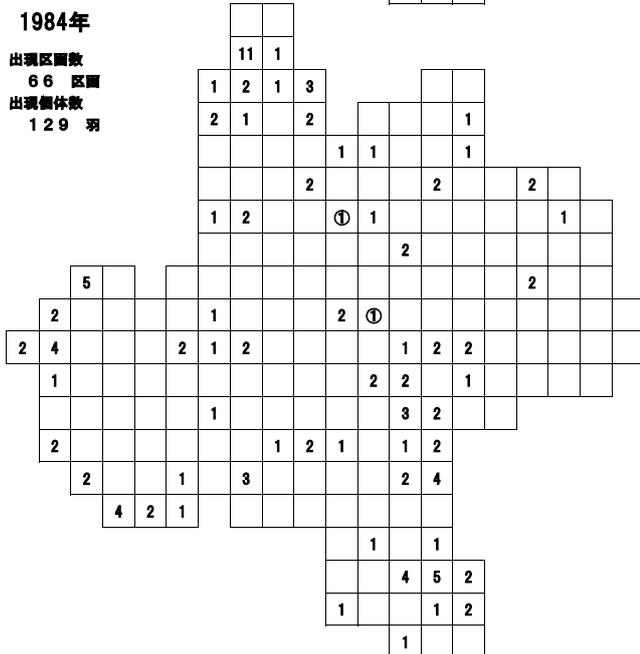
1994年

出現区画数  
29 区画  
出現個体数  
52 羽



1984年

出現区画数  
66 区画  
出現個体数  
129 羽



### 83. コジュケイ *Bambusicola thoracicus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	129	52	29	23	39
出現区画数	66	29	16	15	24
出現一区画当たりの平均個体数	2.0	1.8	1.8	1.5	1.6

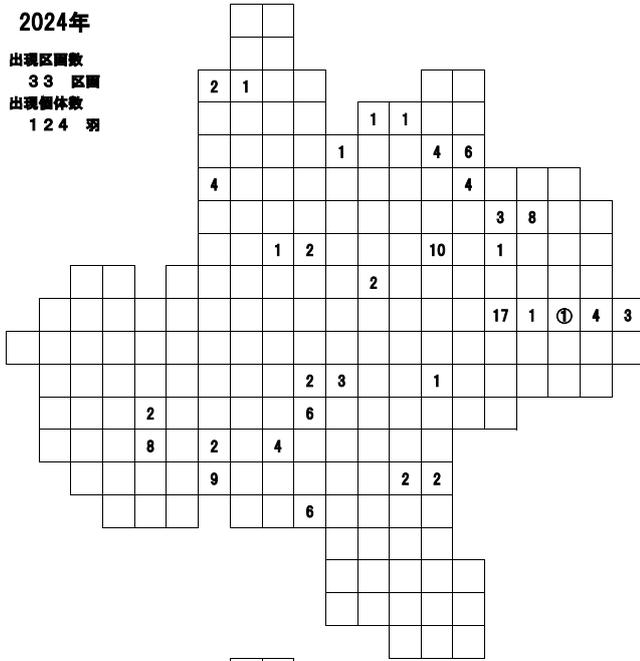
24年は24区画で39羽を記録した。

本種は中国南部原産で、1910年代に飼育した個体が逃げたり、放鳥した個体が自然繁殖したのが始まりで、以後狩猟を目的に1970年代まで放鳥され増加してきた。

萩野(1980)によると狭山丘陵では1960年代より1970年代に多く記録されている。本調査では84年から14年まで減少、24年は増加に転じた。04年頃には放鳥終了後の減少期も収束し、安定期に入ったように思われる。又、雑木林から鬱蒼とした森林への遷移も減少の要因として挙げられる。移入種系として区分

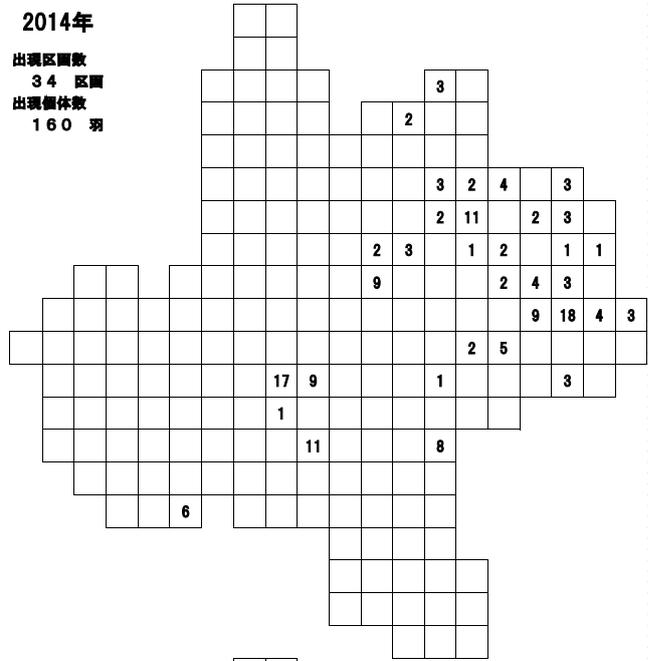
2024年

出現区画数  
33 区画  
出現個体数  
124 羽



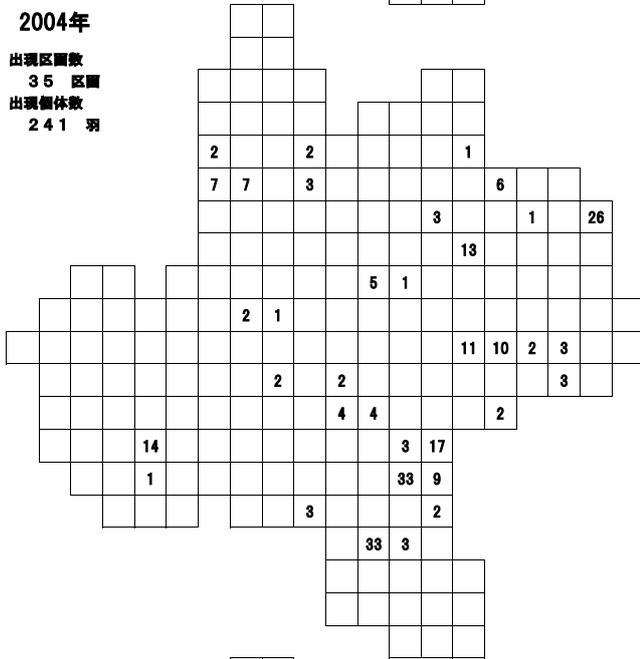
2014年

出現区画数  
34 区画  
出現個体数  
160 羽



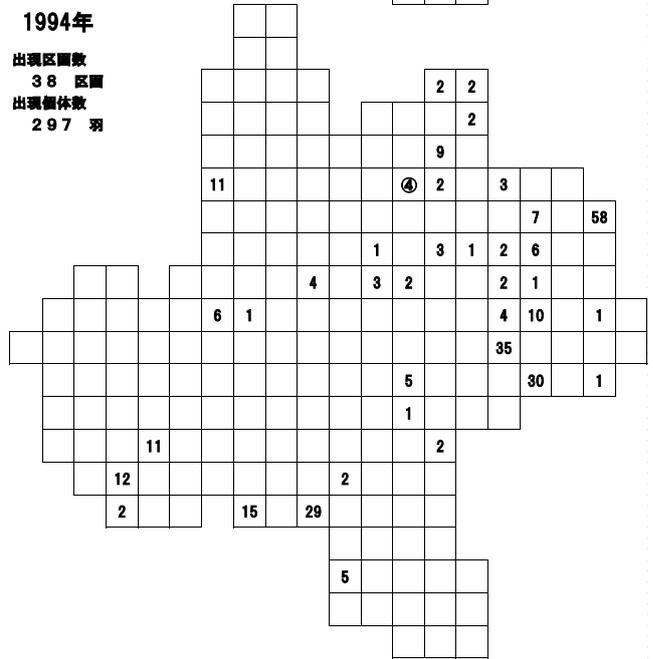
2004年

出現区画数  
35 区画  
出現個体数  
241 羽



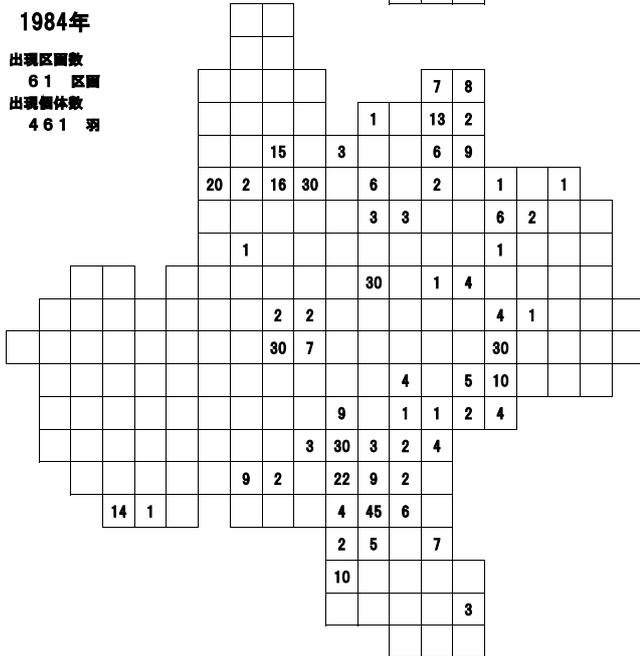
1994年

出現区画数  
38 区画  
出現個体数  
297 羽



1984年

出現区画数  
61 区画  
出現個体数  
461 羽



#### 84. カワラバト(ドバト) *Columba livia* ver. domestica

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	461	297	241	160	124
出現区画数	61	38	35	34	33
出現一区画当たりの平均個体数	7.6	7.8	6.9	4.7	3.8

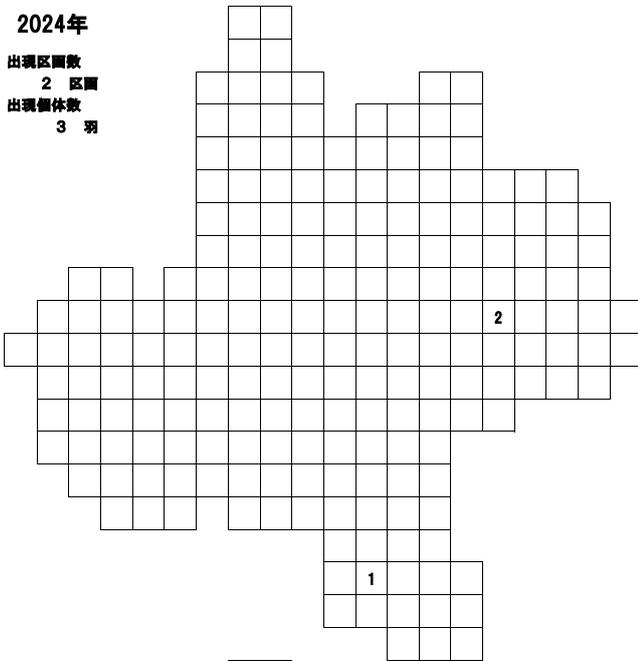
24年は33区画で124羽を記録した。

本種はユーラシア大陸原産のカワラバトを飼育・改良し、それが野生化したもの。市街地、工場団地など人工的環境に棲息している。

総個体数、出現区画数、一区画当たりの平均個体数とも84年を頂点に減少を続けている。総個体数は、84年に比べ24年では73.1%も減少している。減少の要因としては、公園や社寺等で給餌する人が減ったこと、又、オオタカなどによる捕食の影響などが考えられる。移入種系として区分。

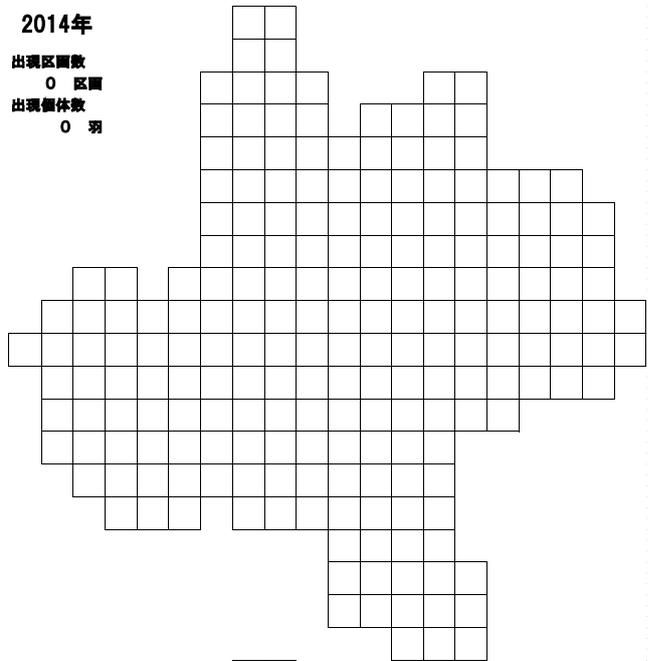
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
3 羽



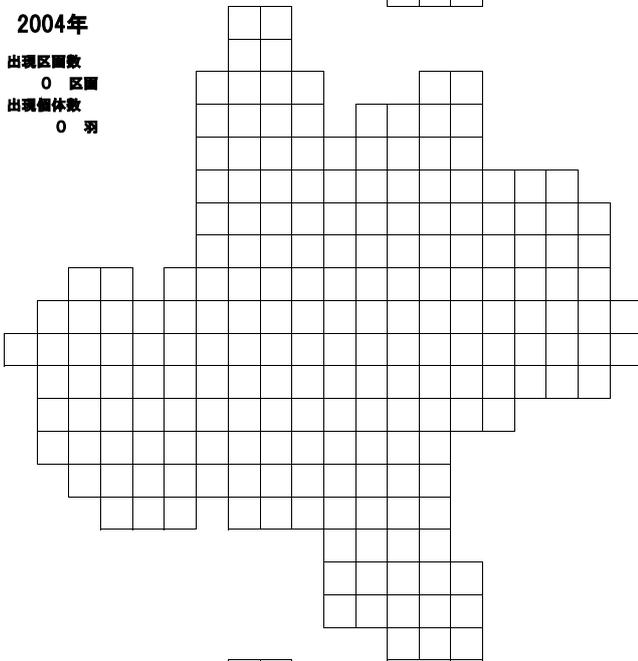
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



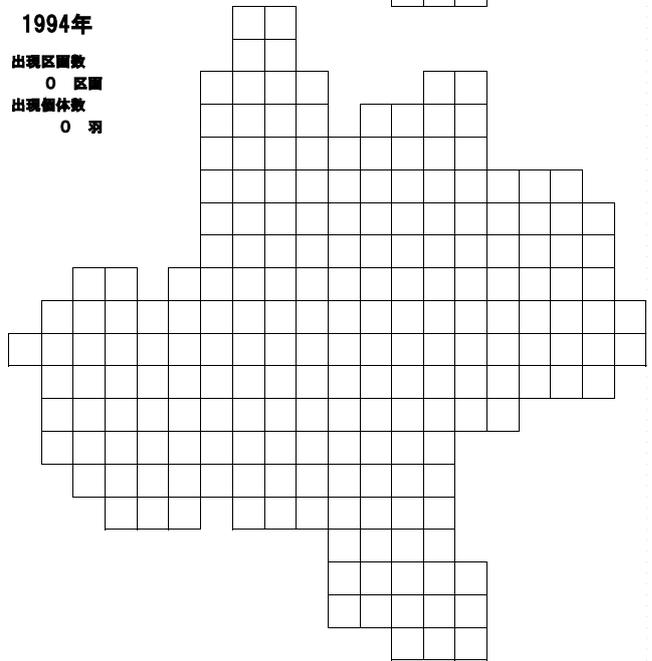
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



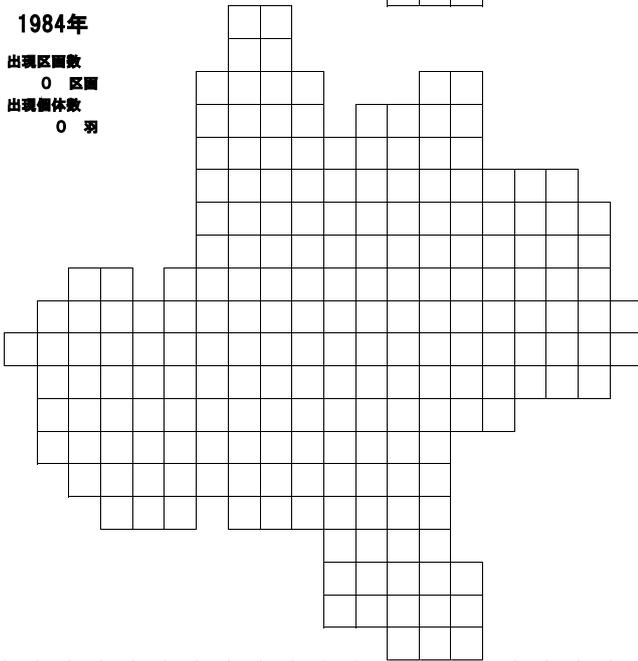
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 85. ホンセイインコ *Psittacula krameri* ver. domestica

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	0	0	3
出現区画数	0	0	0	0	2
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	1.5

24年に初めて2区画3羽を記録した。

本調査ではホンセイインコの亜種、ワカケホンセイインコを記録した。インド・パキスタン・スリランカ等を原産地とする。

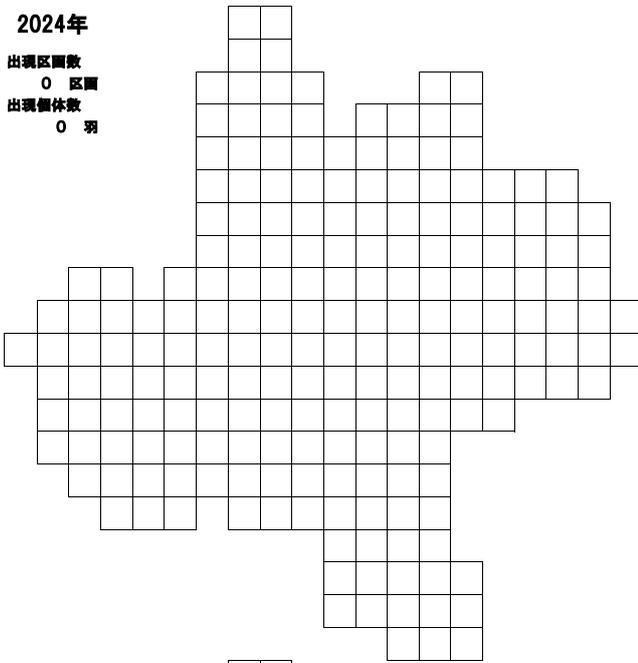
本亜種は1969年に東京世田谷で目撃されて以来、1983年時点には400羽、1988年には800羽、20か所の繁殖地が、2014年～2019年時点では1500羽になっていたという。現在も郊外に向けて首都圏で分布を拡大中である。

2016年市近隣の瑞穂町では、ケヤキの樹洞で繁殖が確認され、6羽を確認している。

移入種系として区分。

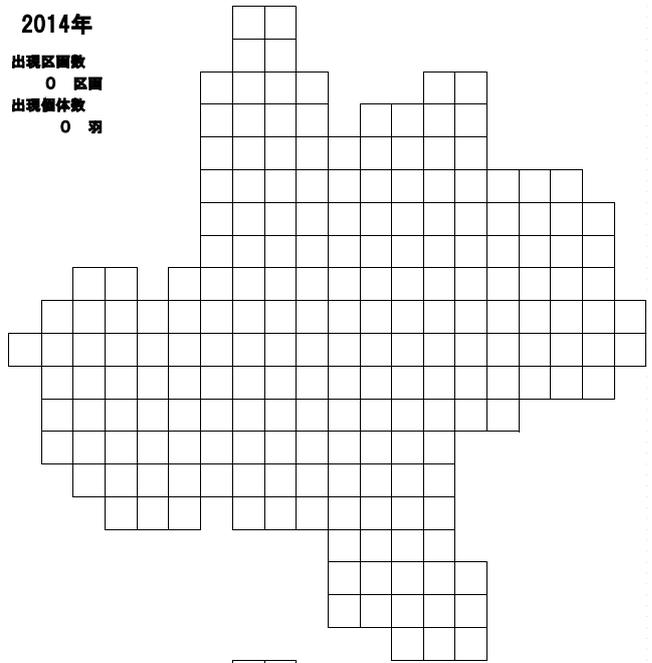
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



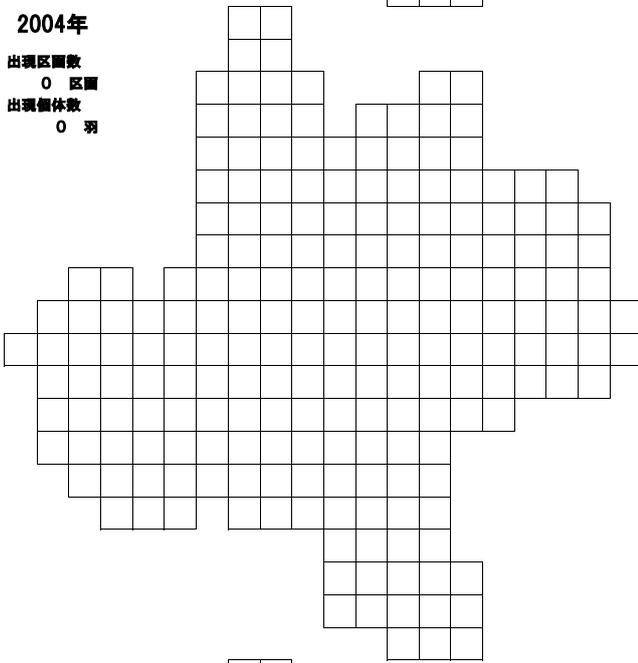
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



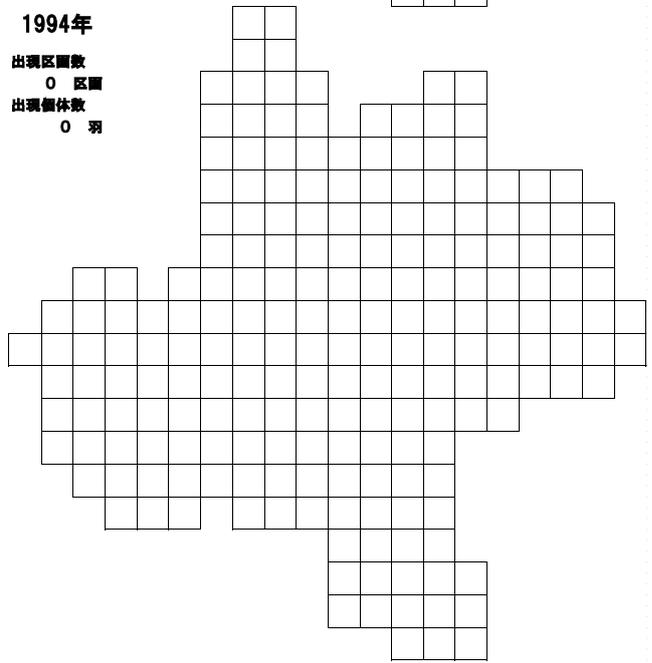
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



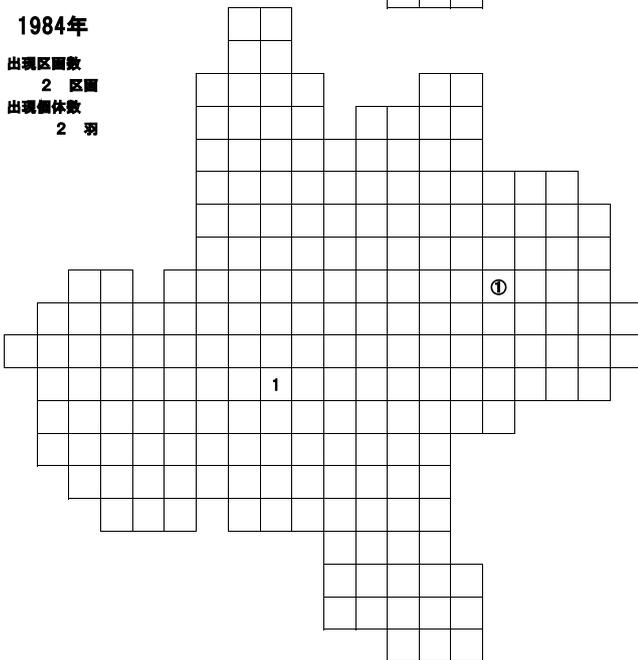
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



### 86. セキセイインコ *Melopsittacus undulatus* ver. domestica

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	2	0	0	0	0
出現区画数	2	0	0	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	1.0	—	—	—	—

84年に2区画で2羽を記録し、以降24年まで記録は無い。

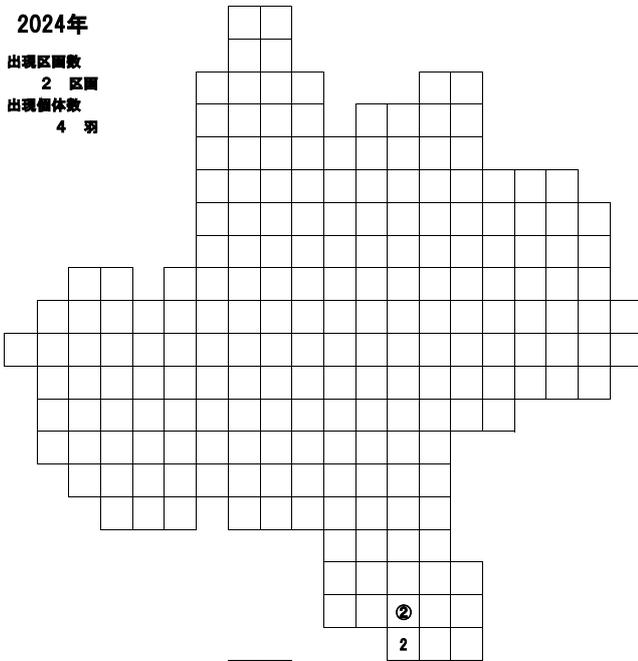
オーストラリア原産で飼い鳥として改良・輸入されている。1960年代、1970年代は本種を飼育する人が多かったため、手乗りとしてカゴから出され、逃亡する個体が多かった。

その後は飼育する人も減ったこと、野外に逃げた個体も就寝・繁殖するための樹洞が無く、日本の冬の気候に対応できず越冬できなかったため繁殖には至らず、その後の記録は途絶えている。

移入種系として区分。

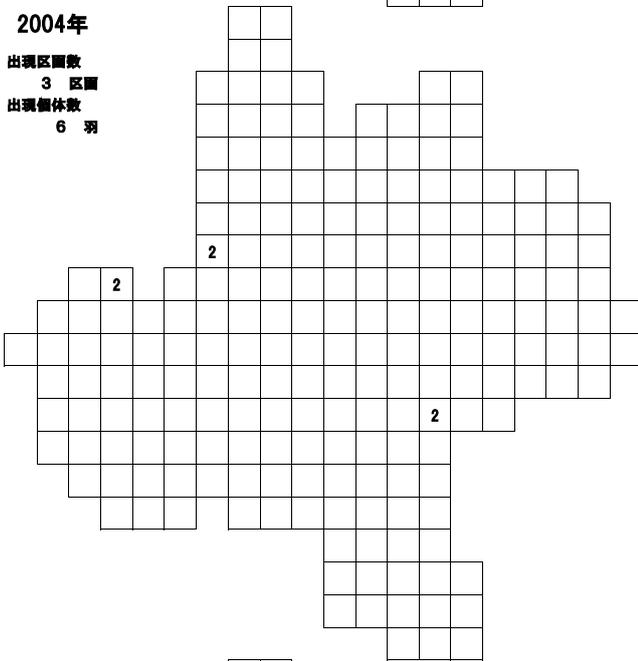
2024年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
4 羽



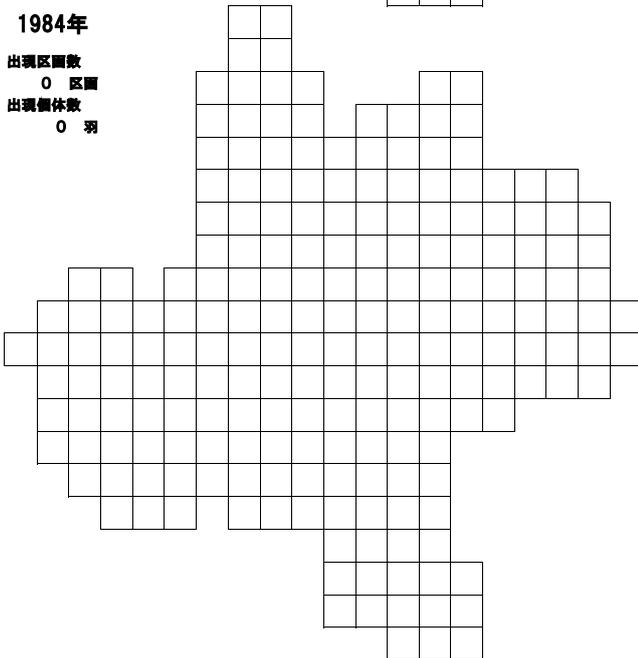
2004年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
6 羽



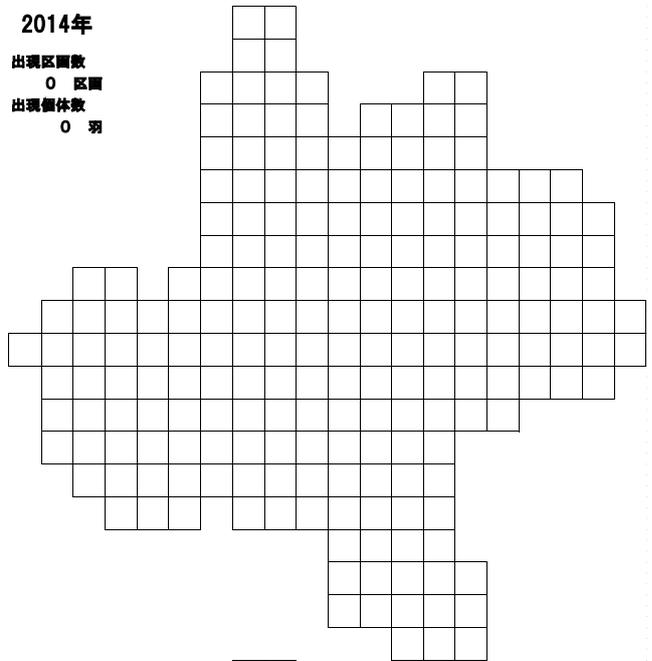
1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



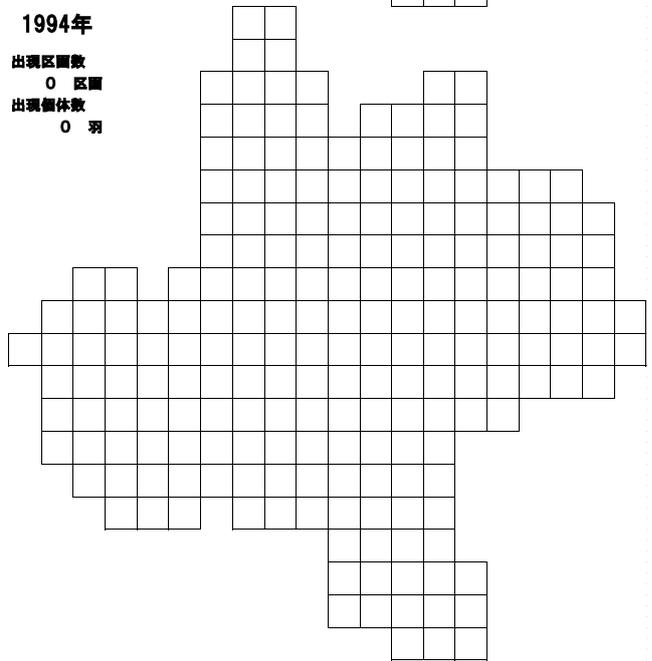
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 87. ソウシチョウ *Leiothrix lutea*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	6	0	4
出現区画数	0	0	3	0	2
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	2.0	—	2.0

04年に記録し、24年は2区画で4羽を記録。中国南部原産。1970年代から九州の山地、関東では筑波山や丹沢山地で繁殖が確認されている。市近隣では1980年代に奥多摩で、1983年に所沢市北中で記録されている。

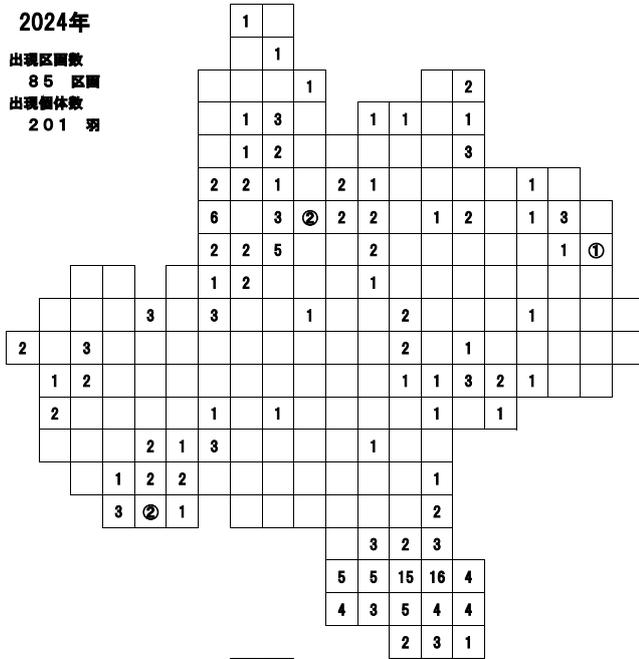
市域でも1990年代後半になり、少数が丘陵や平地の雑木林で見られており、主に越冬地的な棲息をしていたと思われる。

24年の記録は、山口貯水池の水源林内の2区画でいずれも2羽と2+羽を確認したもので、繁殖している可能性がある。

移入種系として区分。特定外来生物。

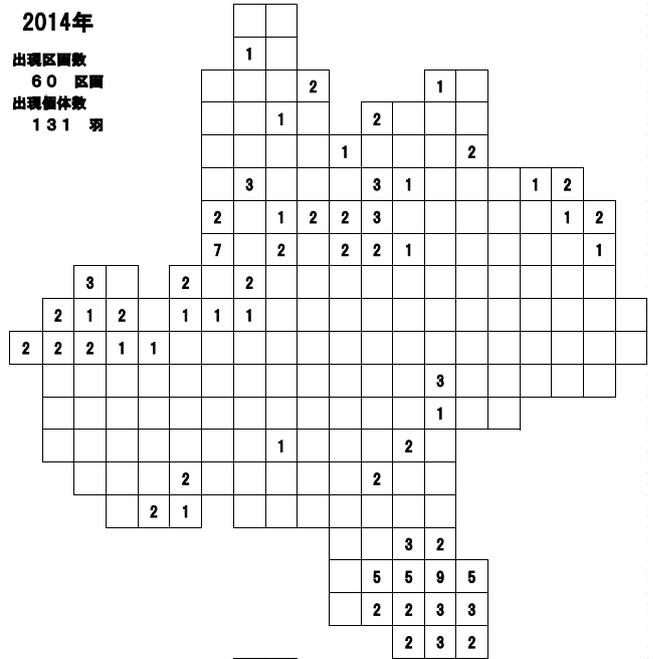
2024年

出現区画数  
85 区画  
出現個体数  
201 羽



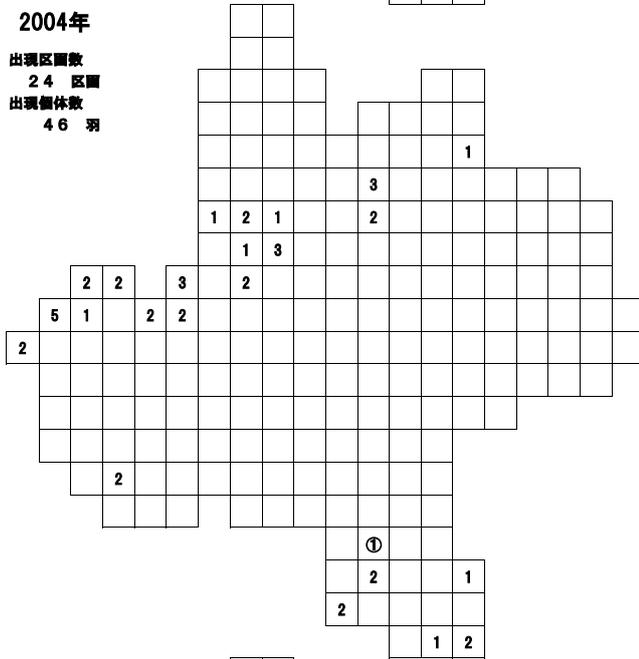
2014年

出現区画数  
60 区画  
出現個体数  
131 羽



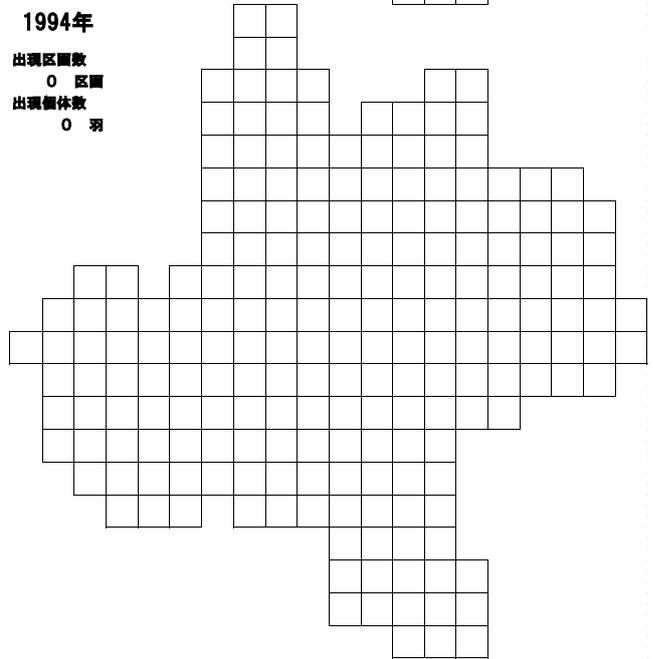
2004年

出現区画数  
24 区画  
出現個体数  
46 羽



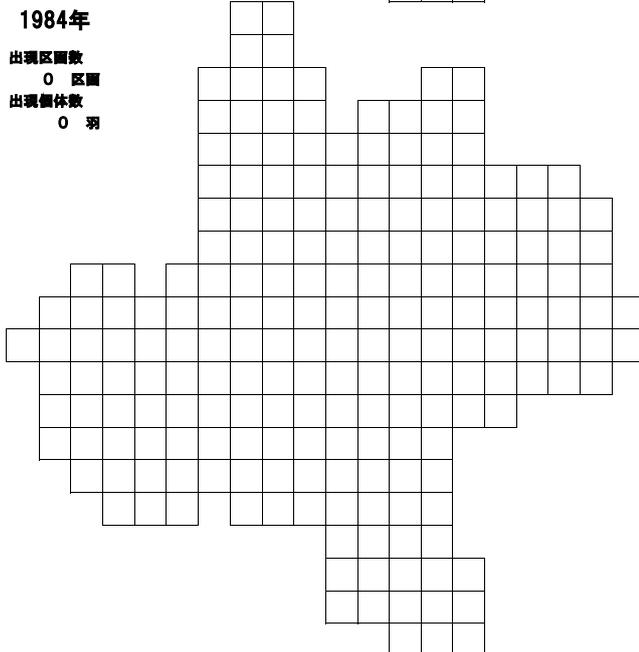
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



## 88. ガビチョウ *Garrulax canorus*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	46	131	201
出現区画数	0	0	24	60	85
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	1.9	2.2	2.4

24年は85区画で201羽を記録した。

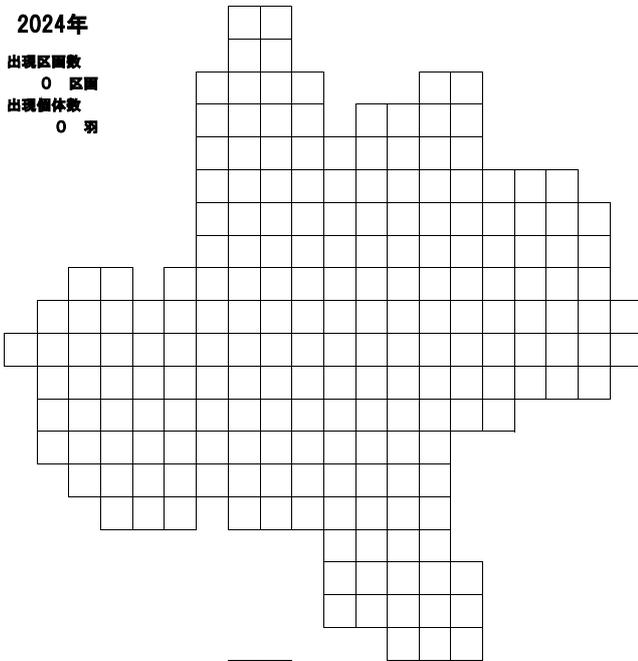
中国南部原産で鳴き声を観賞する目的で輸入された飼い鳥。04年から記録されるようになり、以後増加を続けている。

秩父や奥多摩の山地では1980年代から、市域では90年代末頃から棲息が確認され始めた。本調査の04年では加治丘陵・狭山丘陵の林に、14年では平地林やゴルフ場に、24年には民家の庭先にまで分布を広げてきた経過が現れている。現在の増加状況をみると、今後とも分布域や棲息密度が増える可能性がある。

移入種系として区分。特定外来生物。

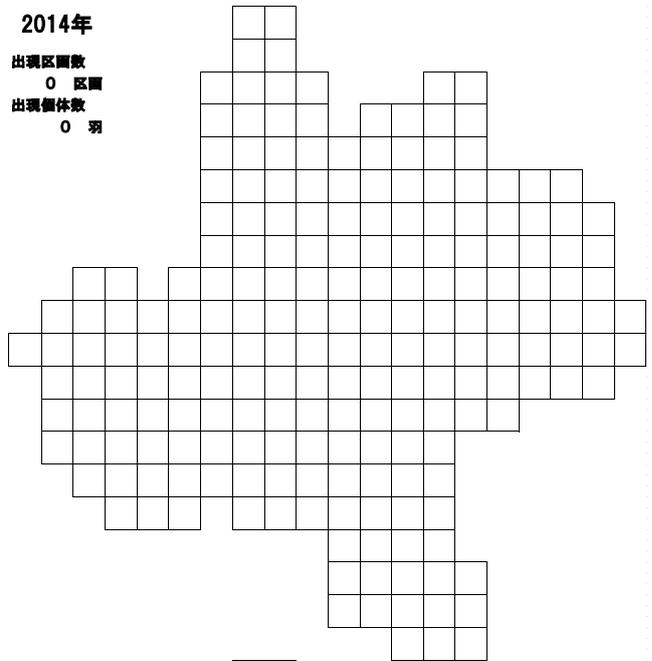
2024年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



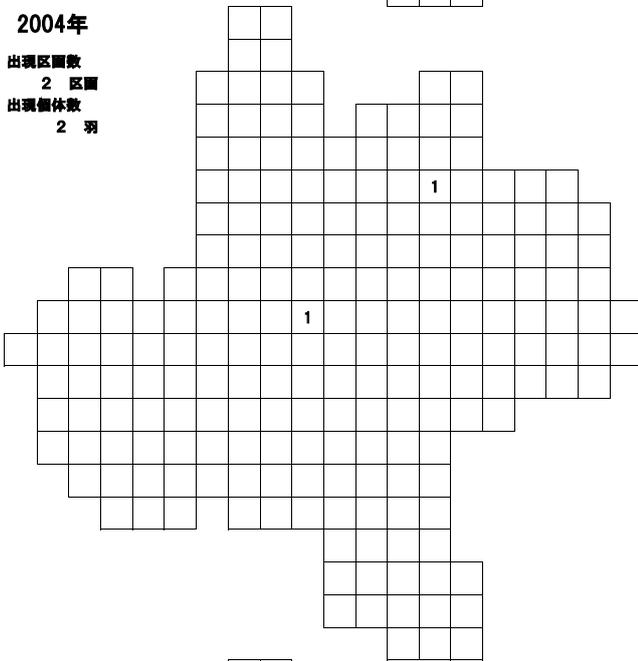
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



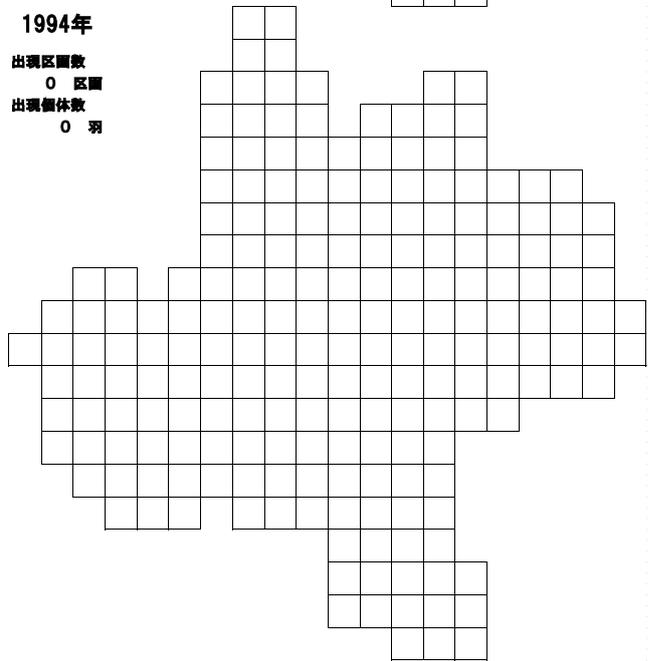
2004年

出現区画数  
2 区画  
出現個体数  
2 羽



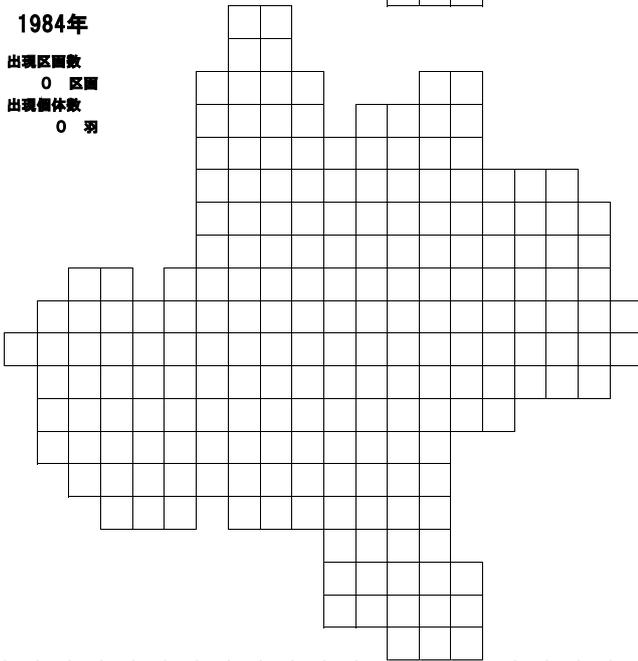
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 89. パリケン *Cairina moschata* ver. domestica

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	0	0	2	0	0
出現区画数	0	0	2	0	0
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	1.0	—	—

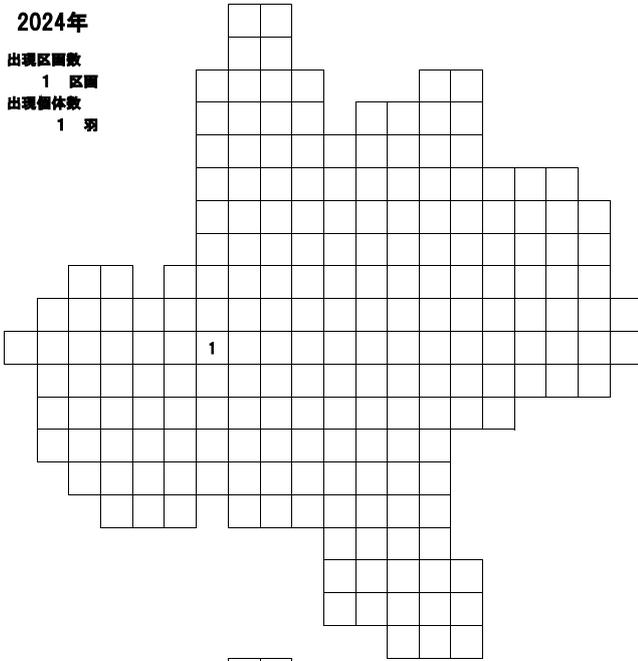
04年から調査対象にした。04年に記録し、その後14年、24年と記録は無い。

1981年頃放鳥したものが1990年代に入間川・霞川などで増加し、霞川沿い道路で人や車を恐れず交通の邪魔するようになった。カルガモとの競合など生態系への影響なども考えられ、2002年に駆除(当時は125羽程)が提案された。この提案に反対も多かったが、市環境課が飼育先を探し、ほとんどの個体を捕獲(2003年3月)でき、現在に至る。市の努力で外来動物の除去に成功した好例である。

移入種系として区分。

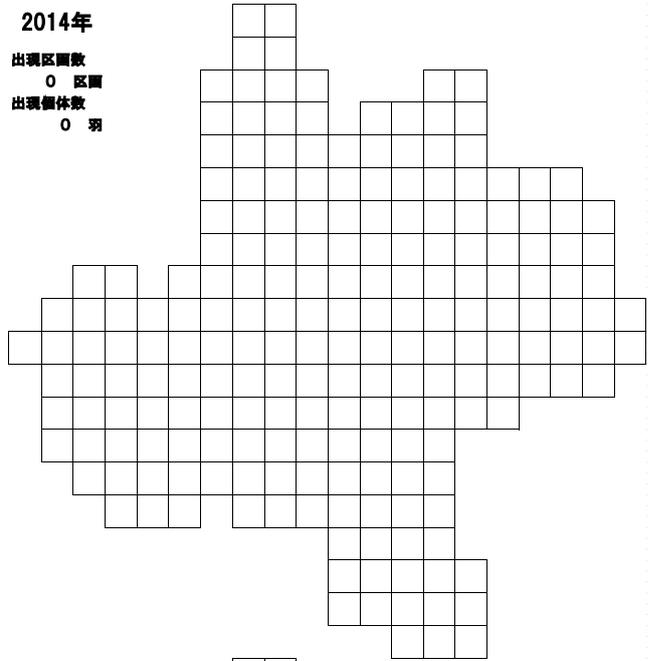
2024年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
1 羽



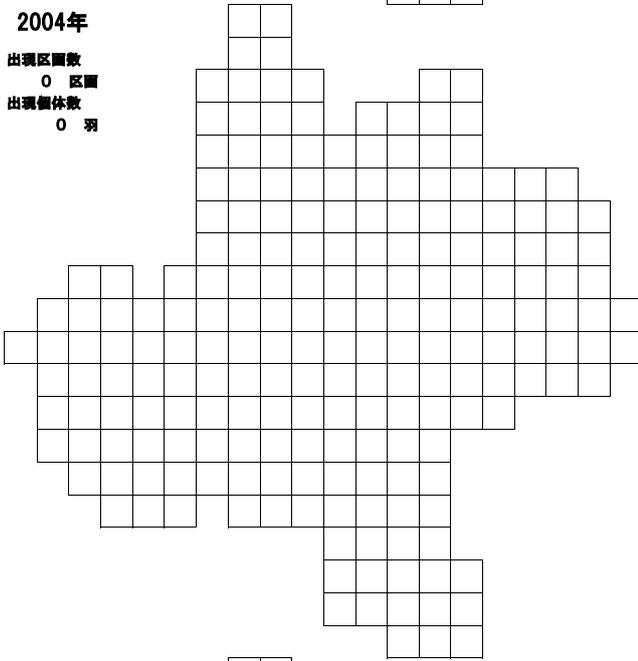
2014年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



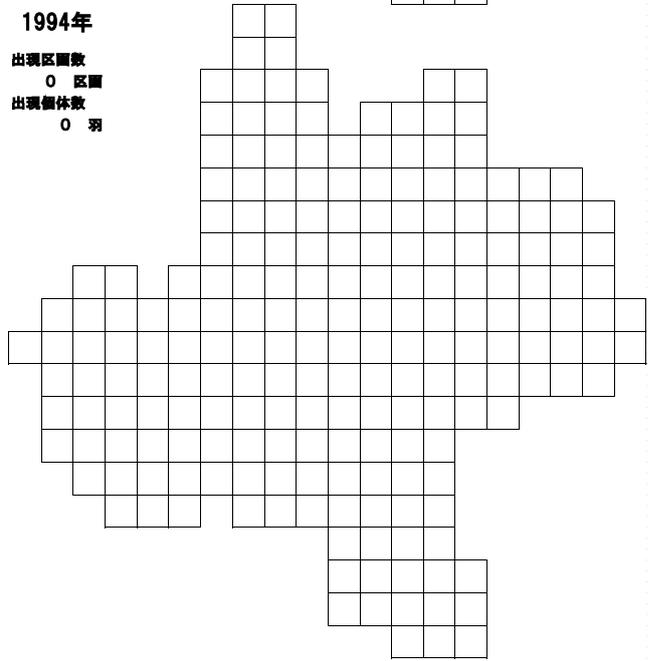
2004年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



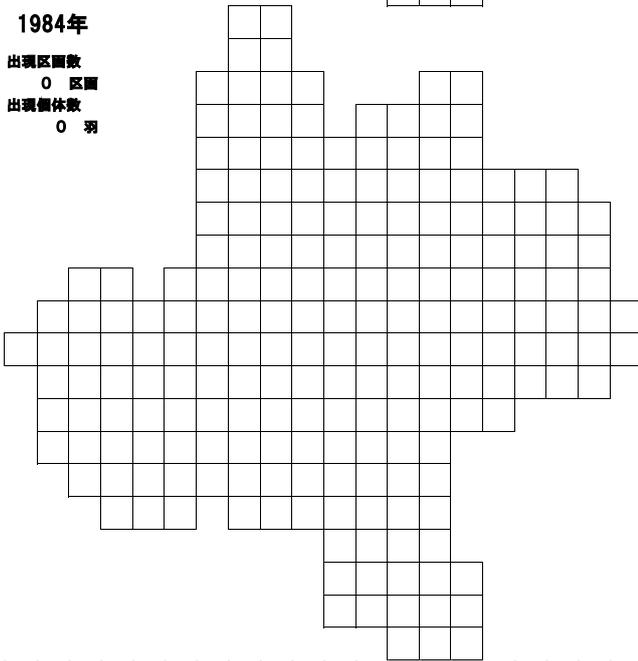
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 90. マルガモ *Anas platyrhynchos* × *Anas zonorhyncha*

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	—	—	—	—	1
出現区画数	—	—	—	—	1
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	—	—	1.0

24年は1区画で1羽、下谷ヶ貫の霞川を飛ぶ個体を記録。

マルガモは、マガモとカルガモの交雑個体を表す造語で、色彩は両種の特徴が表れ雑多である。一方、マガモを改良したアヒルには、白色からマガモそっくりな模様をもつものまで様々で、飛翔するものもある。

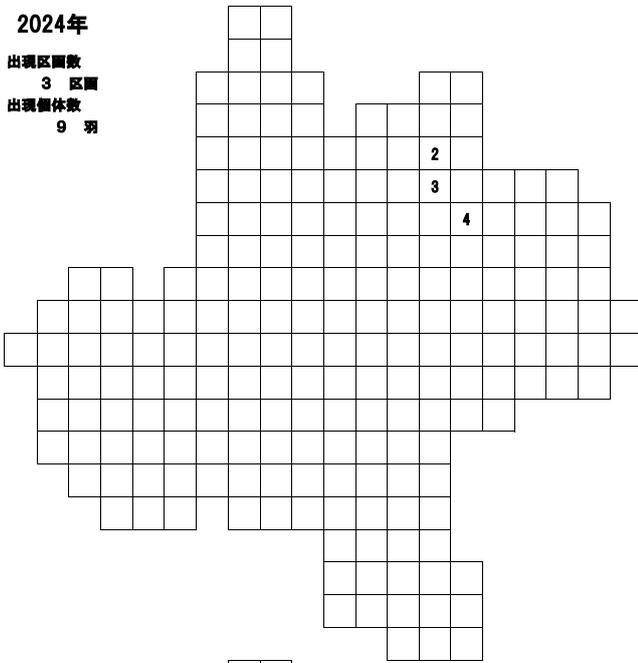
マガモに似たマルガモを見かけることが多くなっている。野生個体の交雑では考えられないほど多く、マガモの色彩特徴をもつアヒルとカルガモの交配が行われているのではないかと考えられている。

移入種系として区分。

※24年からアヒル、マガモとは別にマルガモとして集計した。No.3 マガモ、No.91アヒル参照

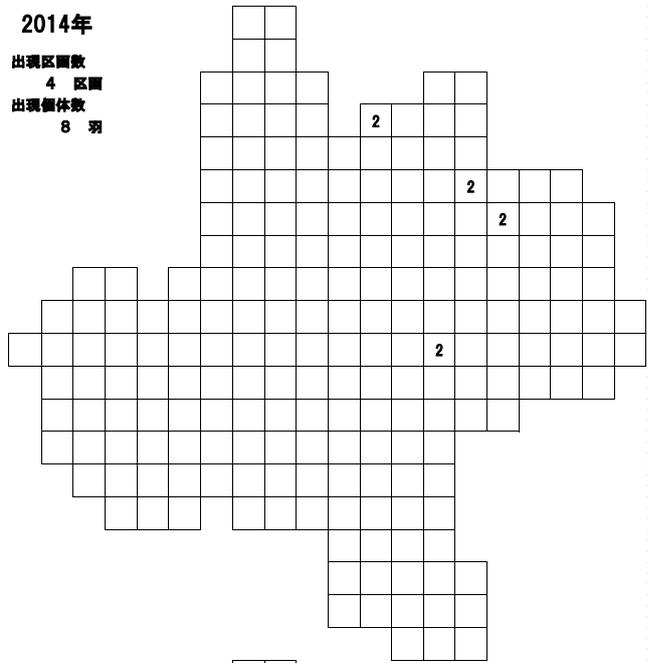
2024年

出現区画数  
3 区画  
出現個体数  
9 羽



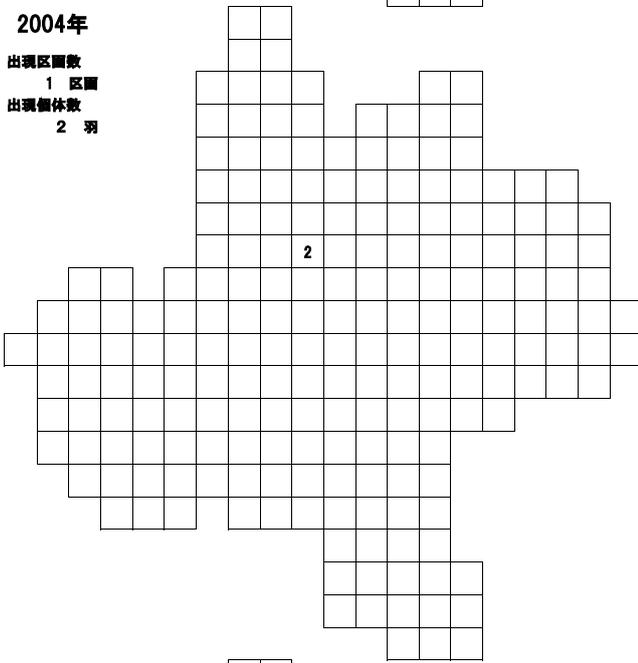
2014年

出現区画数  
4 区画  
出現個体数  
8 羽



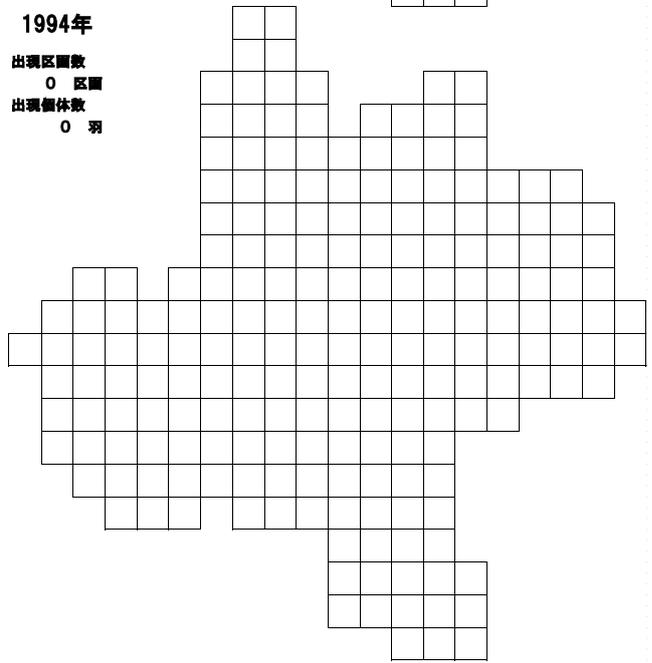
2004年

出現区画数  
1 区画  
出現個体数  
2 羽



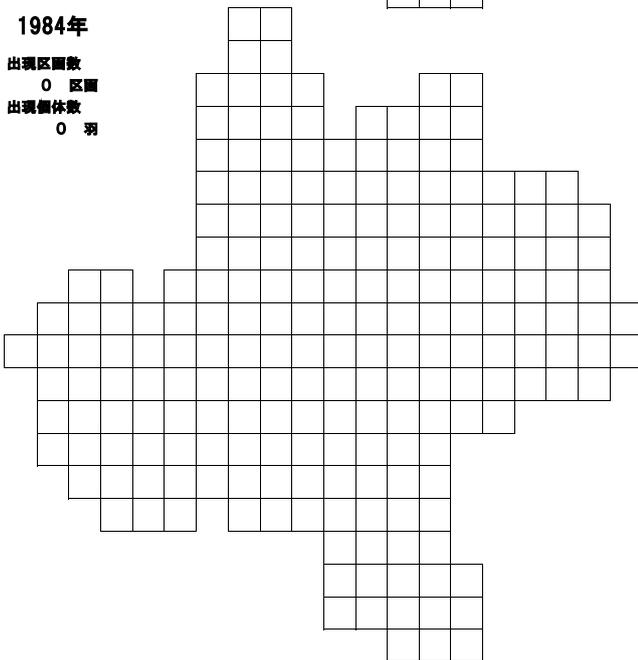
1994年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



1984年

出現区画数  
0 区画  
出現個体数  
0 羽



### 91. アヒル *Anas platyrhynchos* ver. domestica

調査年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年
総個体数	—	—	2	8	9
出現区画数	—	—	1	4	3
出現一区画当たりの平均個体数	—	—	2.0	2.0	3.0

04年から調査対象にした。24年は3区画で9羽、霞川と愛宕公園で記録した。

アヒルはマガモを原種とする家禽。白色からマガモそっくりな模様のものでいて、飛翔するものもいる。アヒルとカルガモの交配と思われる個体が増加しており、マガモの色彩をもつものを河川や公園などで見かけることが多くなっている。

自然の生態系には好ましくないものであり、カルガモの純血を守っていくためにも野外からアヒルを排除し、放し飼いや餌付けは止めてほしいものである。

移入種系として区分。

※No.3マガモ、No.90マルガモ参照

### 3 調査地の環境写真

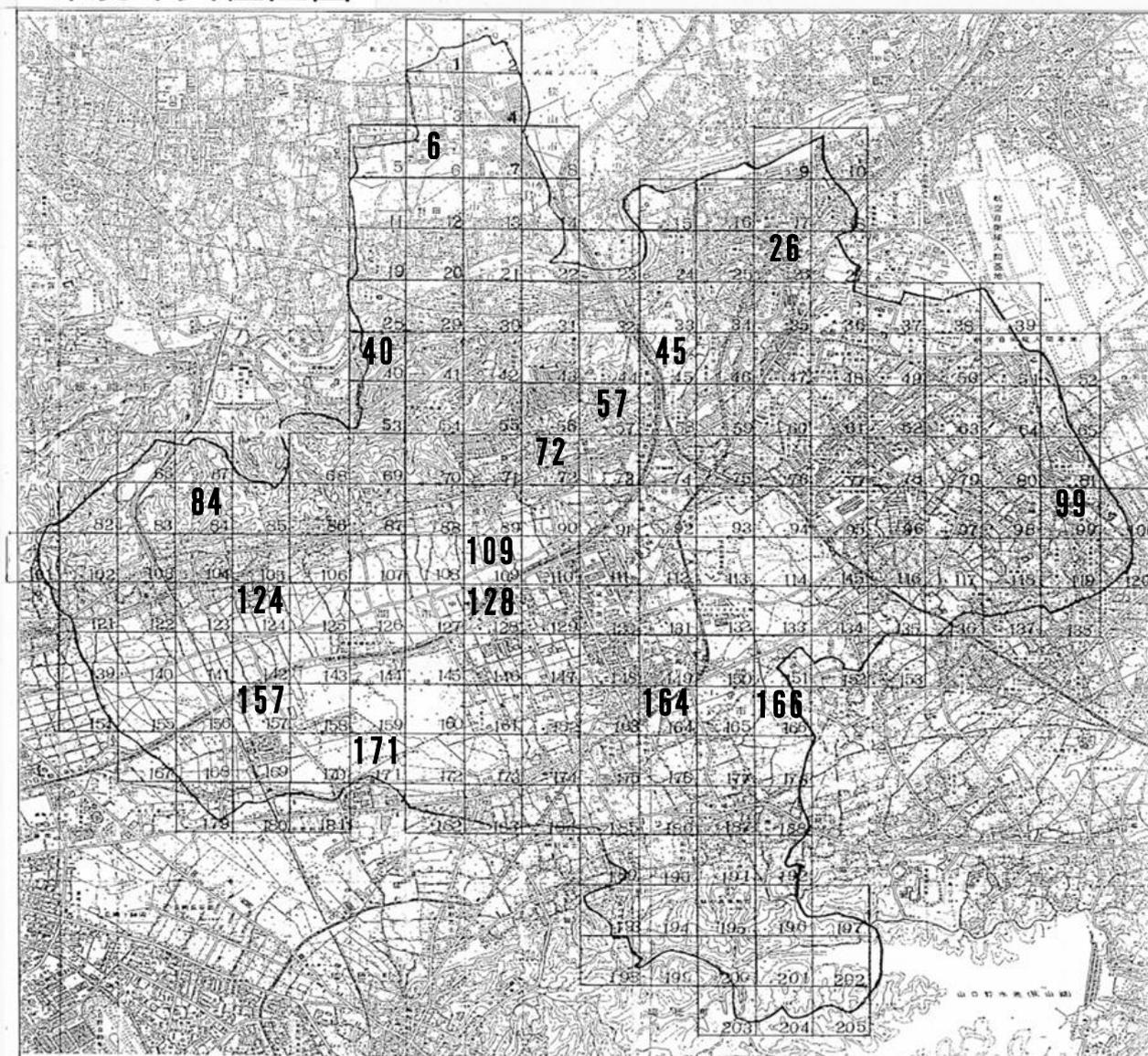
「入間市鳥類分布調査」の第一の目的は、鳥類の現状の把握であるが、市内全体を歩いて調査することから、各調査区を中心点で東・南・西・北の方向に向かい環境写真を撮影してくることを第二の目的とした。その結果1984年、1994年、2004年、2014年、2024年と40年間にわたる入間市内205地点の環境写真が手に入った。

この10年毎の環境の変化を多くの方々に知っていただく絶好の資料が得られたと思う。右図の配置で環境写真の一部(15か所)を紹介する。

環境写真の見方

左頁		右頁	
環境写真撮影区画 No. 6			
1984年 No. 6 東	No. 6 南	No. 6 西	No. 6 北 1984年
写真	写真	写真	写真
1994年 No. 6 東	No. 6 南	No. 6 西	No. 6 北 1994年
写真	写真	写真	写真
2004年 No. 6 東	No. 6 南	No. 6 西	No. 6 北 2004年
写真	写真	写真	写真
2014年 No. 6 東	No. 6 南	No. 6 西	No. 6 北 2014年
写真	写真	写真	写真
2024年 No. 6 東	No. 6 南	No. 6 西	No. 6 北 2024年
写真	写真	写真	写真

環境写真位置図

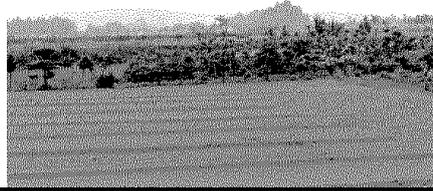


# 環境写真撮影区画 No.6

1984年 No. 6 東



No. 6 南



1994年 No. 6 東



No. 6 南



2004年 No. 6 東



No. 6 南



2014年 No. 6 東



No. 6 南



2024年 No. 6 東



No. 6 南



No. 6 西



No. 6 北



1984年

No. 6 西



No. 6 北



1994年

No. 6 西



No. 6 北



2004年

No. 6 西



No. 6 北



2014年

No. 6 西



No. 6 北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.26

1984年 No. 26 東



No. 26 南



1994年 No. 26 東



No. 26 南



2004年 No. 26 東



No. 26 南



2014年 No. 26 東



No. 26 南



2024年 No. 26 東



No. 26 南



No. 26 西



No. 26 北

1984年



No. 26 西



No. 26 北

1994年



No. 26 西



No. 26 北

2004年



No. 26 西



No. 26 北

2014年



No. 26 西



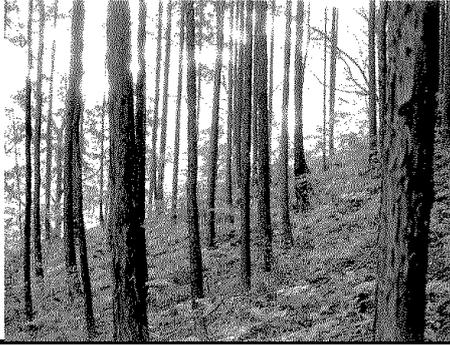
No. 26 北

2024年



# 環境写真撮影区画 No.40

1984年 No. 40 東



No. 40 南



1994年 No. 40 東



No. 40 南



2004年 No. 40 東



No. 40 南



2014年 No. 40 東



No. 40 南



2024年 No. 40 東



No. 40 南



No. 40 西



No. 40 北

1984年



No. 40 西



No. 40 北

1994年



No. 40 西



No. 40 北

2004年



No. 40 西



No. 40 北

2014年



No. 40 西



No. 40 北

2024年



# 環境写真撮影区画 No.45

1984年 No. 45 東



No. 45 南



1994年 No. 45 東



No. 45 南



2004年 No. 45 東



No. 45 南



2014年 No. 45 東



No. 45 南



2024年 No. 45 東



No. 45 南



No. 45 西



No. 45 北



1984年

No. 45 西



No. 45 北



1994年

No. 45 西



No. 45 北



2004年

No. 45 西



No. 45 北



2014年

No. 45 西



No. 45 北



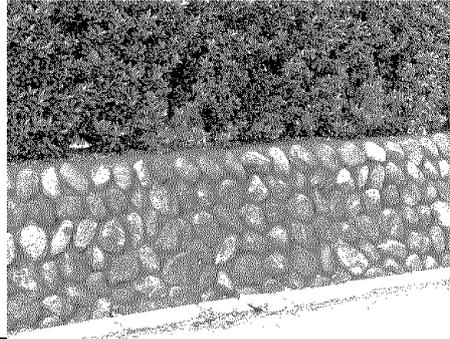
2024年

# 環境写真撮影区画 No.57

1984年 No. 57 東



No. 57 南



1994年 No. 57 東



No. 57 南



2004年 No. 57 東



No. 57 南



2014年 No. 57 東



No. 57 南



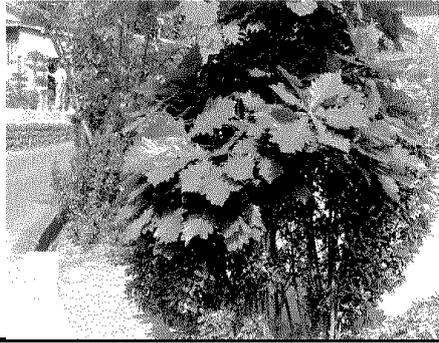
2024年 No. 57 東



No. 57 南



No. 57 西



No. 57 北



1984年

No. 57 西



No. 57 北



1994年

No. 57 西



No. 57 北



2004年

No. 57 西



No. 57 北



2014年

No. 57 西



No. 57 北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.72

1984年 No. 72 東



No. 72 南



1994年 No. 72 東



No. 72 南



2004年 No. 72 東



No. 72 南



2014年 No. 72 東



No. 72 南



2024年 No. 72 東



No. 72 南



No. 72 西



No. 72 北



1984年

No. 72 西



No. 72 北



1994年

No. 72 西



No. 72 北



2004年

No. 72 西



No. 72 北



2014年

No. 72 西



No. 72 北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.84

1984年 No. 84 東



No. 84 南



1994年 No. 84 東



No. 84 南



2004年 No. 84 東



No. 84 南



2014年 No. 84 東



No. 84 南



2024年 No. 84 東



No. 84 南



No. 84 西



No. 84 北



1984年

No. 84 西



No. 84 北



1994年

No. 84 西



No. 84 北



2004年

No. 84 西



No. 84 北



2014年

No. 84 西



No. 84 北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.99

1984年 No. 99 東



No. 99 南



1994年 No. 99 東



No. 99 南



2004年 No. 99 東



No. 99 南



2014年 No. 99 東



No. 99 南



2024年 No. 99 東



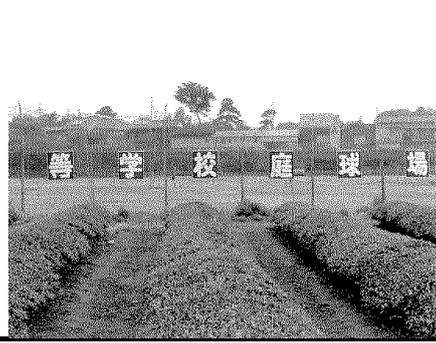
No. 99 南



No. 99 西



No. 99 北



1984年

No. 99 西



No. 99 北



1994年

No. 99 西



No. 99 北



2004年

No. 99 西



No. 99 北



2014年

No. 99 西



No. 99 北



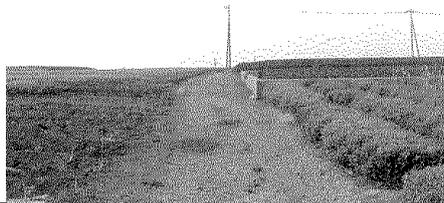
2024年

# 環境写真撮影区画 No.109

1984年 No. 109東



No. 109南



1994年 No. 109東



No. 109南



2004年 No. 109東



No. 109南



2014年 No. 109東



No. 109南



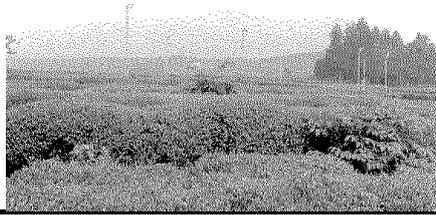
2024年 No. 109東



No. 109南



No. 109西



No. 109北



1984年

No. 109西



No. 109北



1994年

No. 109西



No. 109北



2004年

No. 109西



No. 109北



2014年

No. 109西



No. 109北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.124

1984年 No. 124東



No. 124南



1994年 No. 124東



No. 124南



2004年 No. 124東



No. 124南



2014年 No. 124東



No. 124南



2024年 No. 124東



No. 124南



No. 124西

No. 124北

1984年



No. 124西

No. 124北

1994年



No. 124西

No. 124北

2004年



No. 124西

No. 124北

2014年



No. 124西

No. 124北

2024年



# 環境写真撮影区画 No.128

1984年 No. 128東



No. 128南



1994年 No. 128東



No. 128南



2004年 No. 128東



No. 128南



2014年 No. 128東



No. 128南



2024年 No. 128東



No. 128南



No. 128西



No. 128北



1984年

No. 128西



No. 128北



1994年

No. 128西



No. 128北



2004年

No. 128西



No. 128北



2014年

No. 128西



No. 128北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.157

1984年 No. 157東



No. 157南



1994年 No. 157東



No. 157南



2004年 No. 157東



No. 157南



2014年 No. 157東



No. 157南



2024年 No. 157東



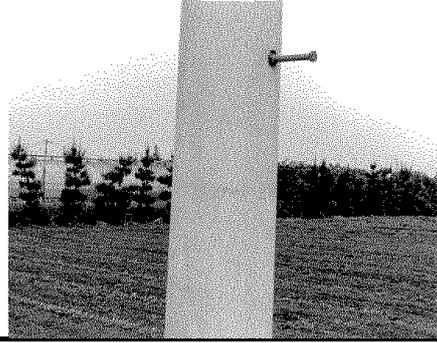
No. 157南



No. 157西



No. 157北



1984年

No. 157西



No. 157北



1994年

No. 157西



No. 157北



2004年

No. 157西



No. 157北



2014年

No. 157西



No. 157北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.164

1984年 No. 164東



No. 164南



1994年 No. 164東



No. 164南



2004年 No. 164東



No. 164南



2014年 No. 164東



No. 164南



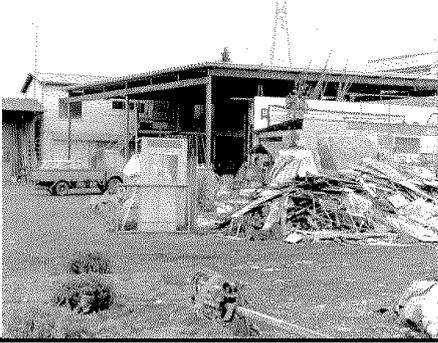
2024年 No. 164東



No. 164南



No. 164西



No. 164北



1984年

No. 164西



No. 164北



1994年

No. 164西



No. 164北



2004年

No. 164西



No. 164北



2014年

No. 164西



No. 164北



2024年

# 環境写真撮影区画 No.166

1984年 No. 166東



No. 166南



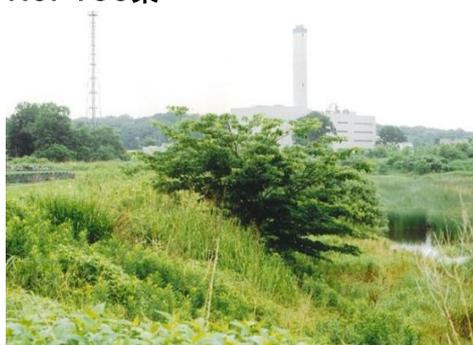
1994年 No. 166東



No. 166南



2004年 No. 166東



No. 166南



2014年 No. 166東



No. 166南



2024年 No. 166東



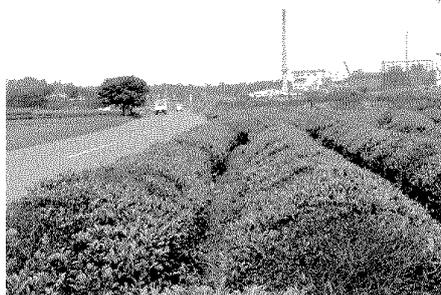
No. 166南



No. 166西

No. 166北

1984年



No. 166西

No. 166北

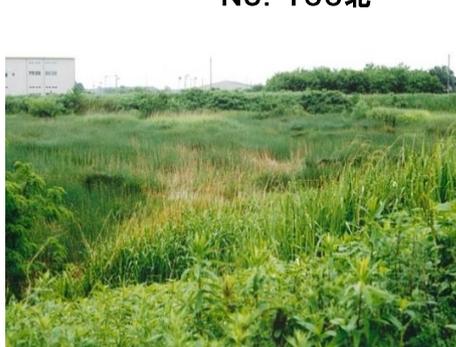
1994年



No. 166西

No. 166北

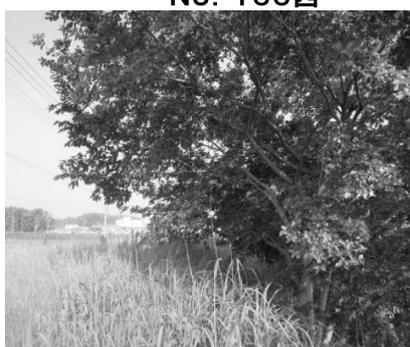
2004年



No. 166西

No. 166北

2014年



No. 166西

No. 166北

2024年



# 環境写真撮影区画 No.171

1984年 No. 171 東



No. 171 南



1994年 No. 171 東



No. 171 南



2004年 No. 171 東



No. 171 南



2014年 No. 171 東



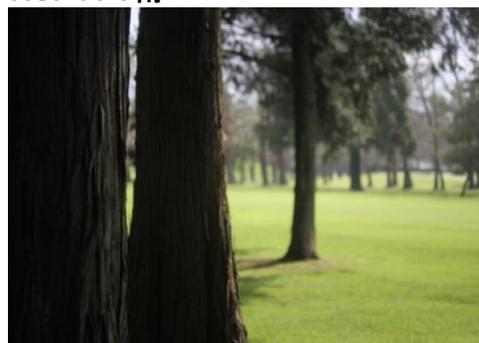
No. 171 南



2024年 No. 171 東



No. 171 南



No. 171 西



No. 171 北



1984年

No. 171 西



No. 171 北

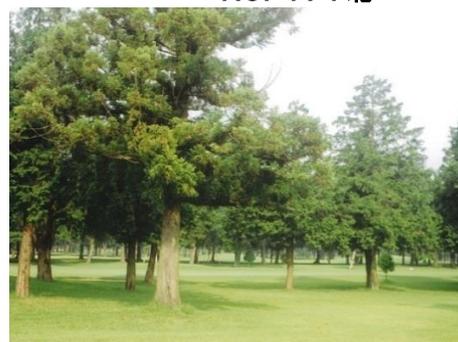


1994年

No. 171 西



No. 171 北



2004年

No. 171 西

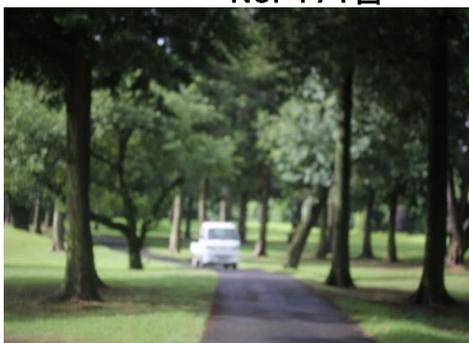


No. 171 北



2014年

No. 171 西



No. 171 北



2024年

まとめにかえて

池 谷 文 夫

入間市の鳥類分布調査は5回目となりました。今回の調査結果のまとめ方は、柳澤紀夫先生が執筆されてきた歴代の『入間市鳥類分布調査報告書』に習ったものですが、新たに加えた部分もあります。総説では、「留鳥系」、「夏鳥系」、「通過鳥系」、「移入種系」の4つの基準を設定し、これまでに出現した種類を分類してみました。分類に当たっては先の柳澤先生執筆の『入間市の野鳥』、『入間市鳥類分布調査報告書』、荻野豊氏の『狭山丘陵の鳥』などを大いに参考させていただきました。また、各説では、鳥種ごとのページに「総羽数」、「出現区画数」、「出現一区画当たりの平均羽数」の記録を合わせた一覧の表を付けました。総個体数の増減にはさまざまな要因が影響していると思いますが、出現区画数は分布の広さ、一区画当たりの平均羽数は棲息密度を表すと考え、分布域の増減と棲息密度の増減によって総個体数が決まることもその一つ考えました。

野鳥観察を続けていると10年単位でもずいぶん変化するものだと感じます。それが本調査のように数字として表されると明確になります。対象となる種数は、2024年だけでも64種、5回の調査では91種でしたので、なかなか頭の中で整理が出来ませんでした。本調査は繁殖期の調査ですから、繁殖の可能性が高い「留鳥系」、「夏鳥系」、「移入種系」を中心にみてきました。種ごとに添えたコメントは、過去の繁殖や希少な観察記録を中心に記載しましたが、10年ごと、5回の調査で蓄積された種ごとの羽数の増減記録も気になったところです。増加から減少までの経過をみられた種は、何となく解った気になってしまうのですが、1984年には既に増加していた種などは、本調査開始以前の状況が知りたくなります。これには1965年から1970年代の貴重な資料が載る荻野豊氏の『狭山丘陵の鳥』がたいへん参考になりました。

個々の種類の個体数増減は本編を見ていただくとして、全体として気になったのは、棲息環境別にみた場合です。種ごとの個体数増減の推移から数が一番多い年を比べた場合、丘陵や平地の「樹林地」を主な生息地としている鳥は、種類によって年に違いがみられたことです。1984年はイカル、コサメビタキ。94年はアオゲラ、クロツグミ。04年はヤマガラ、エナガ、メジロ、コゲラ。14年はホトトギス、オオタカ。24年はウグイス、キビタキでした。

一方で、他の環境に棲息している種類は、1984年(調査初年度)に一番個体数が多かった種類が多かったのです。その後は年を経るに従い数を減らし続け現在に至っています。大雑把な括りですが、平地では疎林性のチゴモズ、モズ、アカモズ、カッコウ、コジュケイ、キジ。畑のヒバリ、ムクドリ。公園のオナガ。工場のイワツバメ、ドバト。住宅のツバメ。水辺では川岸のセグロセキレイ、キセキレイ、セッカ、オオヨシキリ。川のゴイサギ、コサギ、イソシギ。池のカイツブリなどです。(ここでは環境選択の幅が広く広域に棲息していたシジュウカラ、ハクセキレイ、ガビチョウ、キジバト、ヒヨドリなどは除きました。)

「なぜ樹林地では種類によって増えた年に違いがあったのか?」、 「なぜ樹林地以外の環境では減るばかりの種類が多かったのか?」

入間市や近隣の樹林地(雑木林)は、1960年代末頃から萌芽更新やクズ掃き(落葉掃き)など、雑木林に手を加えなくなったと言われていています。その後放置されたため、60年以上の時間をかけ藪化、樹林の巨木化が進み鬱蒼とした森林へと遷移してきました。この間には、1980年代にアカマツの松枯れ、現在はコナラやクヌギのナラ枯れが進行し、枯れ木が目立つ場所もあります。自然度は増したといえますが、二次林としては荒廃してきました。入間市では加治丘陵と狭山丘陵を「市の緑の拠点」として位置づけており、加治丘陵では「加治丘陵さとやま計画」を立て、狭山丘陵は埼玉県の「みどりの森博物館」として保全してきました。平地の樹林地は開発され減少しましたが、市の樹林地全体としては大きな開発を免れたので、樹林地に棲息する鳥の多くは、刻々と変わる植生に合わせ、その時々々の植生を好む種類が個体数を増やしたのではないかと思います。

一方、樹林地を除くほかの環境は、ほとんどが平坦地にあります。首都東京に近い入間市は、高度成長(1955年~1973年)以降も各種の開発が続きました。入間市中央部の農地や樹林地を貫く自動車専用道路(1996年開通)や国道バイパス道路(1996年開通)が開通すると、その周囲には工場や倉庫が建設され、大型商業施設もできました。土地区画整理などで再開発や宅地開発も各所で行われてきました。残された農地にはビニールハウスが建ち、大型機械による近代的な農業に変わっています。現在も市域西部の農地では大規模な土地区画整理が進行し、工業系土地利用が検討されています。また、河川敷もグラウンドの整備や駐車場整備によってアシ原や草地が減少しました。昔ながらの農村的景観が残されていた集落でも、路地の拡幅で屋敷林が減り、墓地の拡大で鎮守の森も消失しました。戸建て住宅も

集合住宅や軒が浅い構造に変わりツバメが営巣しにくくなっています。この様に市域の樹林地以外の場所では鳥が棲みにくい環境が次々と拡大してきたのではないのでしょうか。

本調査ではこれまで市域の鳥の個体数、分布を把握してきましたが、今回5回目の資料をまとめたことでいくつかの種によりやく「増加→減少→増加」あるいは「減少→増加→減少」といった周期がみえてきました。

「なぜ樹林地を生息地とする鳥の種類が増えるのに年に違いがみられたのか?」、「なぜほかの環境を棲息地としていた種類は減るばかりだったのか?」。これは長年の資料が揃ってきたからこそ疑問です。入間市とほぼ同様な調査方法の鳥類分布調査は近隣でも実施されています。1986年に所沢市（繁殖期）、1987年に狭山市（繁殖期と越冬期）、1992年に瑞穂町（繁殖期）、2005年に武蔵村山市（繁殖期）などがありますが、継続されていません。調査方法に違いはありますが、国レベルでは環境省が『全国野鳥繁殖分布調査』として1974年から約20年ごとに3回、東京都も『東京都野鳥繁殖分布調査』として1973年から約20年ごとに3回、埼玉県でも日本野鳥の会埼玉調査部が『埼玉県野鳥分布調査』として1985年から約15年ごとに3回（参考文献を参照）実施しています。

入間市で実施してきた調査は、市域という狭い範囲ではありますが、この種の調査では先駆的な1984年に開始し、10年ごと、500m×500m区画といった他に類をみないきめ細かい調査を継続してきました。調査記録は1:2500地形図に出現した鳥の位置が記録してあるので、地図情報と合わせれば今後様々な解析ができます。このような資料が揃ったのは、柳澤先生が率先垂範して、私たち鳥仲間を集め指導してきたからにほかなりません。

今回の調査で、この40年間に市域の鳥の数が40%も減ったことが判明したのはとても残念ですが、この報告書をもっと人と鳥が共存するための有益な資料として活用していただき、次回2034年の調査には、「半世紀、50年振りに鳥が増えてきた」と報告できることを願っています。

## 参考文献

1. 荻野 豊 狭山丘陵・狭山湖・多摩湖の鳥 1971年 野鳥 日本野鳥の会
2. 環境庁編 日本産鳥類の繁殖分布 1978年 第2回自然環境基礎調査報告書
3. 荻野 豊 狭山丘陵の鳥 1981年
4. 藤巻 祐蔵 北海道十勝地方の鳥類 1981年 山階鳥類研究所研究報告第13巻第3号
5. 入間野鳥の会 入間地方の野鳥 1983年 所沢・入間・狭山3市の野鳥生息調査報告書
6. 柳澤 紀夫 入間市史調査報告書第3集入間市の野鳥 1987年 入間市史編さん室  
入間市の野鳥Ⅱ 1996年 入間市都市整備部みどりの課  
入間市の野鳥ー追加記録ー 2002年 入間市環境経済部みどりの課  
入間市の野鳥Ⅲ 2006年 入間市環境経済部みどりの課
7. 都市鳥研究会 都市に生きる野鳥の生態 1988年
8. 加治丘陵自然環境調査研究会 加治丘陵自然環境調査報告書 1990年 入間市委託
9. 柳澤 紀夫 94年度入間市鳥類分布調査報告書 1995年 入間市都市整備部みどりの課  
入間市鳥類分布調査報告書 2005年 入間市環境経済部みどりの課  
2014入間市鳥類分布調査報告書 2015年 入間市環境経済部みどりの課
10. (財)埼玉県生態系保護協会入間支部 大森調整池の生き物たち 2001年
11. 全国鳥類繁殖分布調査報告 2016-2020 鳥類繁殖分布調査会 2021年
12. 東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021 東京都鳥類繁殖分布調査会事務局 2021年
13. 埼玉県野鳥分布調査報告書 1985~1990年、同左 2005~2010年、同左 2020~2022年  
日本野鳥の会埼玉調査部 1993年、2017年、2023年、
14. 日本鳥学会(鳥類目録編集委員会) 日本鳥類目録改訂第8版 2024年

2024 入間市鳥類分布調査報告書

(2024 年実施)

発 行 令 和 7 年 9 月

入間市環境経済部農業振興課

☎ 04-2964-1111 (内線4232)